

京都府遺跡調査概報

第 65 冊

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

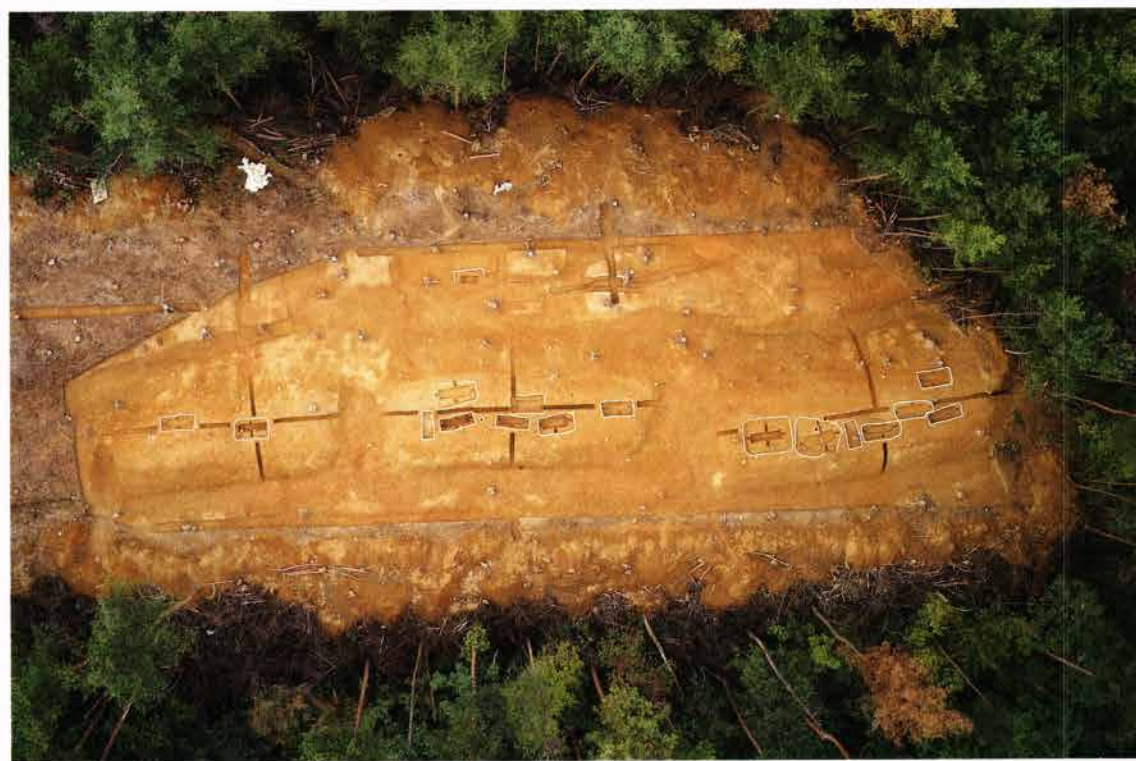
1. 網野遠所古墳群
2. 奈具墳墓群・奈具古墳群
3. 奈具岡南古墳群
4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)
5. 黒部製鉄遺跡(仲谷地区)
6. 糖谷城跡
7. 裾谷横穴・遺跡
8. 左坂古墳群
9. 北谷古墳群

1 9 9 5

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 奈具墳墓群近景（南東から）



(2) 奈具墳丘墓全景（上から）

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、昭和56年4月の設立以来、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

近年、公共事業の増大に伴い、発掘調査も単に件数の増加だけでなく、その内容もとみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織や調査体制の強化を進め調査・研究の充実を図ってまいりました。発掘調査については、『京都府遺跡調査報告書』・『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』などの各種刊行物によってその成果を公表するとともに、毎年、展覧会や埋蔵文化財セミナーを開催し、各遺跡の調査内容や出土遺物などを広く府民に紹介し、普及・啓発活動にも意を注いでいるところであります。

本書は、平成6年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った、丹後国営農地関係遺跡の網野遠所古墳群、奈具墳墓群・奈具古墳群、奈具岡南古墳群、黒部製鉄遺跡(石熊地区)、黒部製鉄遺跡(仲谷地区)、糖谷城跡、裾谷横穴・遺跡、左坂古墳群、北谷古墳群に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、大宮町教育委員会、弥栄町教育委員会、網野町教育委員会、久美浜町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成7年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理事長 福山敏男

凡 例

1. 本書に収めた国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡の概要は、下記のとおりである。

- | | | |
|-----------------|-----------------|------------|
| 1. 網野遠所古墳群 | 2. 奈具墳墓群・奈具古墳群 | 3. 奈具岡南古墳群 |
| 4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区) | 5. 黒部製鉄遺跡(仲谷地区) | 6. 糖谷城跡 |
| 7. 裾谷横穴・遺跡 | 8. 左坂古墳群 | 9. 北谷古墳群 |

2. 各遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

番号	遺跡名	所在地	調査期間	原因者	執筆者
1	網野遠所古墳群	京都府竹野郡網野町島津遠所	平5.8.20 ～平5.9.20	農林水産省 近畿農政局	黒坪一樹
2	奈具墳墓群・奈具古墳群	京都府竹野郡弥栄町溝谷奈具岡	平6.5.13 ～平6.10.13		河野一隆
3	奈具岡南古墳群	京都府竹野郡弥栄町溝谷奈具岡	平6.9.9 ～平6.12.22		河野一隆
4	黒部製鉄遺跡 (石熊地区)	京都府竹野郡弥栄町黒部石熊	平5.11.24 ～平6.2.9		増田孝彦 河野一隆
5	黒部製鉄遺跡 (仲谷地区)	京都府竹野郡弥栄町黒部仲谷	平6.4.18 ～平7.3.3		増田孝彦 河野一隆
6	糖谷城跡	京都府竹野郡弥栄町黒部糖谷	平6.9.13 ～平6.12.22		増田孝彦
7	裾谷横穴・遺跡	京都府中郡大宮町口大野	平6.5.17 ～平6.10.13		筒井崇史
8	左坂古墳群	京都府中郡大宮町周枳左坂	平6.7.25 ～平7.3.3		石崎善久
8	北谷古墳群	京都府熊野郡久美浜町女布北谷	平6.4.25 ～平6.10.21		田代 弘

3. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

目 次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡平成6年度発掘調査概要-----	1
1. 網野遠所古墳群-----	3
2. 奈具墳墓群・奈具古墳群-----	9
3. 奈具岡南古墳群-----	41
4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)平成5年度-----	42
5. 黒部製鉄遺跡(仲谷地区)-----	50
6. 糖谷城跡-----	51
7. 裾谷横穴・遺跡-----	53
8. 左坂古墳群-----	93
9. 北谷古墳群-----	95

插图目次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

1. 網野遠所古墳群

第1図	調査地位置図	3
第2図	調査地周辺地形図	4
第3図	主体部検出状況平面図	4
第4図	土層断面実測図	5
第5図	主体部(17号墳)平・断面図	6
第6図	主体部(18号墳)平・断面図	6
第7図	土師器出土状況図	7
第8図	出土遺物実測図	7

2. 奈具墳墓群・奈具古墳群

第9図	調査地及び周辺遺跡分布図	10
第10図	調査地周辺図及び弥生時代遺構配置図	11
第11図	奈具墳墓群全景	13
第12図	奈具墳墓群調査前測量図	15
第13図	奈具1号墓平面・断面図	17
第14図	奈具1号墓主体部平面・断面図(1)	18
第15図	奈具1号墓主体部平面・断面図(2)	19
第16図	奈具2号墓平面・断面図	20
第17図	奈具2号墓主体部平面・断面図(1)	21
第18図	奈具2号墓主体部平面・断面図(2)	22
第19図	奈具3号墓平面・断面図	23
第20図	奈具4・5号墓平面・断面図	24
第21図	奈具6・7号墓位置図	24
第22図	奈具3・4・6・7号墓主体部平面・断面図	25
第23図	奈具墳墓群出土遺物実測図(1)	27
第24図	奈具墳墓群出土遺物実測図(2)	28

第25図	奈具墳墓群出土遺物実測図(3)	29
第26図	奈具墳墓群出土遺物実測図(4)	30
第27図	奈具古墳群調査前測量図	32
第28図	奈具古墳群調査後測量図	33
第29図	奈具13・15号墳主体部平面・断面図	35
第30図	奈具14号墳主体部平面・断面図	36
第31図	奈具古墳群出土遺物実測図	38
4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)		
第32図	調査地及び周辺遺跡分布図	43
第33図	黒部製鉄遺跡調査地位置図	44
第34図	石熊1・2号製鉄炉周辺測量図	45
第35図	石熊1号製鉄炉平面・断面図	46
第36図	石熊1号炭窯平面・断面図	47
第37図	石熊3号窯平面・断面図	48
第38図	黒部製鉄遺跡出土遺物実測図	49
6. 糖谷城跡		
第39図	糖谷城跡地形図	51
第40図	炭窯実測図	52
7. 裾谷横穴・遺跡		
第41図	調査地及び周辺主要遺跡分布図	53
第42図	調査地周辺地形測量図	55
第43図	B地区(北半)遺構配置図	56
第44図	S H01平面図	57
第45図	S H02平面図	58
第46図	S B01平面図	58
第47図	S B02平面図	59
第48図	B地区出土遺物実測図	61
第49図	C地区遺構配置図	62
第50図	S H03平面図	63
第51図	S H04平面図	64
第52図	S H05・S H06平面図	65
第53図	S B03平面図	66

第54図	1号横穴平面図	68
第55図	2号横穴平面図	69
第56図	C地区上段平坦地遺構出土遺物	70
第57図	S B 04・S H 07平面図	71
第58図	S B 04土器溜まり出土状況図	72
第59図	S B 04出土遺物実測図(1)	73
第60図	S B 04出土遺物実測図(2)	74
第61図	S B 04出土遺物実測図(3)	74
第62図	S B 04出土遺物実測図(4)	75
第63図	S H 07出土遺物実測図	76
第64図	S H 08平面図	77
第65図	S H 09平面図	77
第66図	S H 10平面図	78
第67図	S H 11平面図	79
第68図	S H 12平面図	80
第69図	S H 13平面図	81
第70図	S H 14平面図	82
第71図	S B 05平面図	83
第72図	C地区中段平坦地遺構出土遺物実測図	84
第73図	C地区平坦地包含層出土遺物実測図	84
第74図	S H 15平面図	85
第75図	S H 16平面図	86
第76図	S H 17平面図	86
第77図	C地区弥生・古墳時代遺物実測図	87
第78図	横穴状遺構平面図	88

8. 左坂古墳群

第79図	調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図	93
------	-------------------	----

9. 北谷古墳群

第80図	調査地と周辺の遺跡	95
第81図	北谷古墳群位置図(1～5号墳)	96
第82図	北谷1号墳墳丘測量図(調査前)	99
第83図	北谷1号墳墳丘測量図(調査後)	100

第84図	1号墳主体部完掘状況-----	101
第85図	1号墳木棺痕跡検出状況-----	101
第86図	1号墳主体部断面図-----	102
第87図	1号墳主体部土器出土状況(1)-----	103
第88図	1号墳主体部土器出土状況(2)-----	103
第89図	1号墳主体部土器-----	103
第90図	2・3・4号墳墳丘測量図-----	104
第91図	3号墳主体部実測図-----	104
第92図	4号墳主体部実測図-----	105
第93図	1号墳出土土器-----	106
第94図	1・3号墳出土遺物実測図-----	107
第95図	2号墳墳丘出土須恵器-----	107
第96図	1号墳主体部出土紡錘車実測図-----	107

付 表 目 次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡	
付表1	平成5・6年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表-----2
2. 奈具墳墓群・奈具古墳群	
付表2	奈具墳墓群規模一覧表-----16
付表3	出土土器観察表-----30
付表4	奈具古墳群規模一覧表-----31
4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)	
付表5	黒部製鉄遺跡鉄滓重量表-----49
7. 裾谷横穴・遺跡	
付表6	竪穴式住居跡一覧表-----91
付表7	掘立柱建物跡一覧表-----91
付表8	小横穴一覧表-----91
8. 左坂古墳群	
付表9	平成6年度調査古墳一覧表-----94
9. 北谷古墳群	
付表10	出土遺物観察表-----109

図 版 目 次

国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡

1. 網野遠所古墳群

- 図版第1 (1)調査地全景(北から) (2)17・18号墳全景(上が北)
- 図版第2 (1)17号墳主体部(南から) (2)17号墳主体部(西から)
- 図版第3 (1)18号墳主体部(西から) (2)17・18号墳完掘状況(南から)
- 図版第4 (1)甕棺完掘状況(17号墳) (2)鉄鏃出土状況(18号墳)

2. 奈具墳墓群・奈具古墳群

- 図版第5 (1)奈具墳墓群全景(南東から) (2)奈具墳墓群全景(上が北東)
- 図版第6 (1)奈具1号墓全景(上が南西)
(2)奈具1号墓第4主体部全景(南東から)
- 図版第7 (1)奈具2号墓全景(上が南西) (2)奈具2号墓の主体部
- 図版第8 (1)奈具3号墓全景(上が南西) (2)奈具3号墓遺構・遺物検出状況
- 図版第9 (1)奈具4・5号墓全景(上が南西) (2)奈具6号墓遺構・遺物検出状況
- 図版第10 (1)奈具墳墓群全景(南東から) (2)奈具墳墓群全景(北西から)
- 図版第11 (1)奈具13～15号墳全景(西から) (2)奈具13～15号墳全景(上が北東)
- 図版第12 (1)奈具13号墳主体部検出状況(西から)
(2)奈具14号墳主体部配置状況(南から)
- 図版第13 (1)奈具15号墳主体部検出状況(西から)
(2)奈具13～15号墳全景(南から)
- 図版第14 奈具墳墓群出土弥生土器(1)
- 図版第15 奈具墳墓群出土弥生土器(2)
- 図版第16 奈具墳墓群出土遺物(石製品)及び奈具古墳群出土遺物(土器棺・鉄剣)

4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)

- 図版第17 (1)石熊1号・2号製鉄炉近景(西から) 石熊1号炭窯近景(北西から)
- 図版第18 (1)石熊1号製鉄炉基礎部分断ち割り状況(東から)
(2)石熊1号製鉄炉完掘状況(北から)
- 図版第19 (1)石熊1号製鉄炉完掘状況(南から)

(2)石熊1号製鉄炉基礎部分断ち割り状況(北から)

図版第20 (1)石熊1号炭窯完掘状況(北西から)

(2)石熊3号炭窯埋土堆積状況(北東から)

図版第21 (1)石熊1号炭窯全景(北西から) (2)石熊3号炭窯全景(北東から)

図版第22 黒部製鉄遺跡出土鉄滓

図版第23 黒部製鉄遺跡出土遺物

6. 糖谷城跡

図版第24 (1)調査地全景(北西から) (2)木炭窯近景(南から)

7. 裾谷横穴・遺跡

図版第25 (1)裾谷横穴全景(北東から) (2)A地区全景(東から)

図版第26 (1)SH02全景(南東から) (2)SB01全景(南東から)

図版第27 (1)C地区調査前全景(南東から) (2)C地区遺構検出状況(上空から)

図版第28 (1)C地区遺構検出状況(北から) (2)C地区遺構検出状況(南西から)

図版第29 (1)SH03全景(南東から)

(2)SB04、SH04・07、1号横穴全景(南東から)

図版第30 (1)SB04土器溜まり検出状況(北西から)

(2)SB04土器溜まり下層遺物出土状況(北東から)

図版第31 (1)SB03、2号横穴全景(東から) (2)SH05・06全景(東から)

図版第32 (1)1号横穴全景(南東から) (2)2号横穴全景(東から)

図版第33 (1)SH09全景(南から) (2)SH10全景(南西から)

図版第34 (1)SH11全景(南東から) (2)SH11竈検出状況(北西から)

図版第35 (1)SH12全景(南東から) (2)SH12竈検出状況(北西から)

図版第36 (1)SH13全景(東から) (2)SB05全景(南から)

図版第37 (1)横穴状遺構全景(東から) (2)横穴状遺構後室全景(南から)

図版第38 (1)SH16全景(南東から) (2)SH17全景(南東から)

図版第39 出土遺物(1)

図版第40 出土遺物(2)

8. 左坂古墳群

図版第41 (1)左坂B10～14号墳全景(東から)

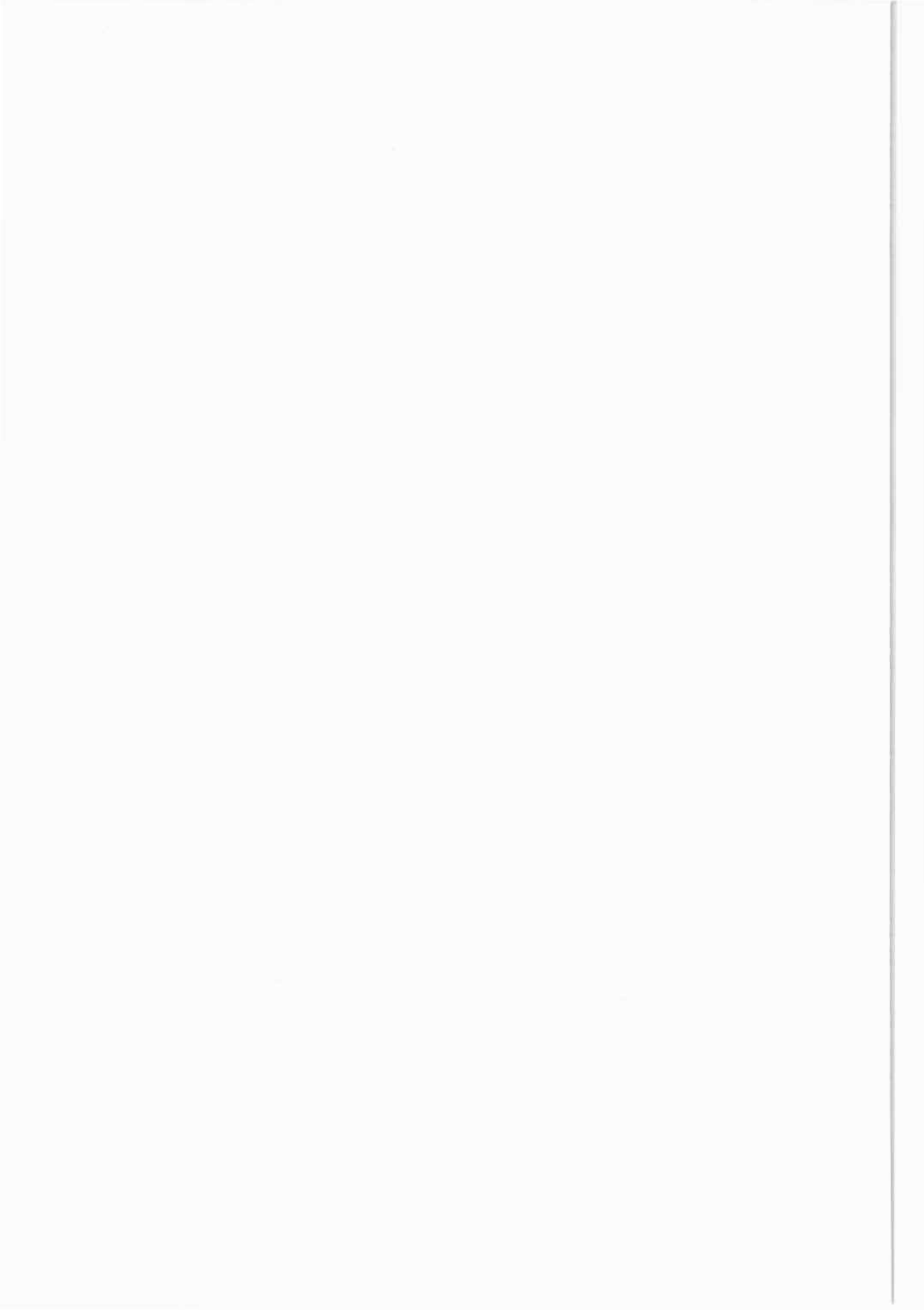
(2)左坂B10・11号墳主体部全景(西から)

図版第42 (1)左坂B12号墳主体部全景(北から)

(2)左坂B13号墳主体部全景(東から)

9. 北谷古墳群

- 図版第43 (1)北谷古墳群全景(南西から) (2)北谷古墳群全景(上から)
- 図版第44 (1)1号墳全景(東から) (2)1号墳全景(上から)
- 図版第45 (1)1号墳木棺痕跡掘削状況 (2)1号墳主体部完掘状況
- 図版第46 1号墳主体部埋土上面出土土器
- 図版第47 (1)1号墳木棺内遺物出土状況(南から)
(2)1号墳木棺内遺物出土状況(東から)
- 図版第48 (1)3号墳主体部検出状況(北から) (2)4号墳主体部検出状況(北から)
- 図版第49 (1)3号墳第1主体部遺物出土状況(北から)
(2)3号墳第1主体部完掘状況(南から)
- 図版第50 1・3号墳出土遺物



国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡 平成6年度発掘調査概要

はじめに

本概要は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)に伴い、平成2年度から継続して調査を実施している中郡大宮町左坂古墳群B支群、一部調査を実施したC支群、平成5年度に調査が終了した竹野郡網野町遠所古墳群、竹野郡弥栄町黒部製鉄遺跡(石熊地区)、平成6年度に調査が終了した中郡大宮町裾谷横穴群・遺跡、竹野郡弥栄町奈具・奈具岡古墳群、弥栄町糖谷城跡、一部調査を実施した弥栄町黒部製鉄遺跡(仲谷地区)、弥栄町奈具岡南古墳群、熊野郡久美浜町北谷古墳群の発掘調査の概要報告である。

調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。国営農地開発事業に伴う調査は、昭和59年度より京都府教育委員会が実施し、昭和60年度以降からは当調査研究センターと分担して行っている。昭和60年度以降、当調査研究センターでは多くの遺跡の調査を実施し、多大な成果があがっている。

現地調査は、平成5年度には、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員石崎善久、河野一隆があたり、平成6年度には、調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、同調査員岡崎研一、田代 弘、石崎善久、河野一隆、筒井崇史が担当した。

概報執筆にあたっては、各担当者ほかに、草野敦子(奈良大学学生)が執筆した。

調査期間中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員及び補助員・整理員として作業に従事していただいた^(注)。また、調査にあたっては、久美浜町教育委員会、網野町教育委員会、弥栄町教育委員会、大宮町教育委員会をはじめとする関係諸機関の御協力を得ることができ、現地でも多くの方々の御協力と御指導を賜った。あらためて感謝の意を表したい。なお、調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

(増田孝彦)

付表1 平成5・6年度国営農地開発事業に伴う発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査期間	担当者
1	網野遠所 古墳群	京都府竹野郡網野町島津 小字遠所	平成5年8月20日 ～平成5年9月20日	調査第1係長 伊野近富 調査員 黒坪一樹
2	奈具・奈具岡 古墳群	京都府竹野郡弥栄町溝谷 小字奈具岡	平成6年5月13日 ～平成6年10月13日	調査第1係長 伊野近富 調査員 河野一隆
3	奈具岡南 古墳群	京都府竹野郡弥栄町溝谷 小字奈具岡	平成6年9月9日 ～平成6年12月22日	調査第1係長 伊野近富 調査員 河野一隆
4	黒部製鉄遺跡	京都府竹野郡弥栄町黒部 小字石熊・仲谷	平成5年11月24日 ～平成6年2月9日 平成6年4月18日 ～平成7年3月3日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 増田孝彦 調査員 河野一隆
5	糖谷城跡	京都府竹野郡弥栄町黒部 小字糖谷	平成6年9月13日 ～平成6年12月22日	調査第1係長 伊野近富 主任調査員 増田孝彦 調査員 河野一隆
6	堀谷横穴・遺跡	京都府中郡大宮町口大野	平成6年5月17日 ～平成6年10月13日	調査第1係長 伊野近富 調査員 筒井崇史
7	左坂古墳群	京都府中郡大宮町周枳 小字左坂	平成6年7月25日 ～平成7年3月3日	調査第1係長 伊野近富 調査員 田代 弘 調査員 石崎善久
8	北谷古墳群	京都府熊野郡久美浜町 女布小字北谷	平成6年4月25日 ～平成6年10月21日	調査第1係長 伊野近富 調査員 田代 弘

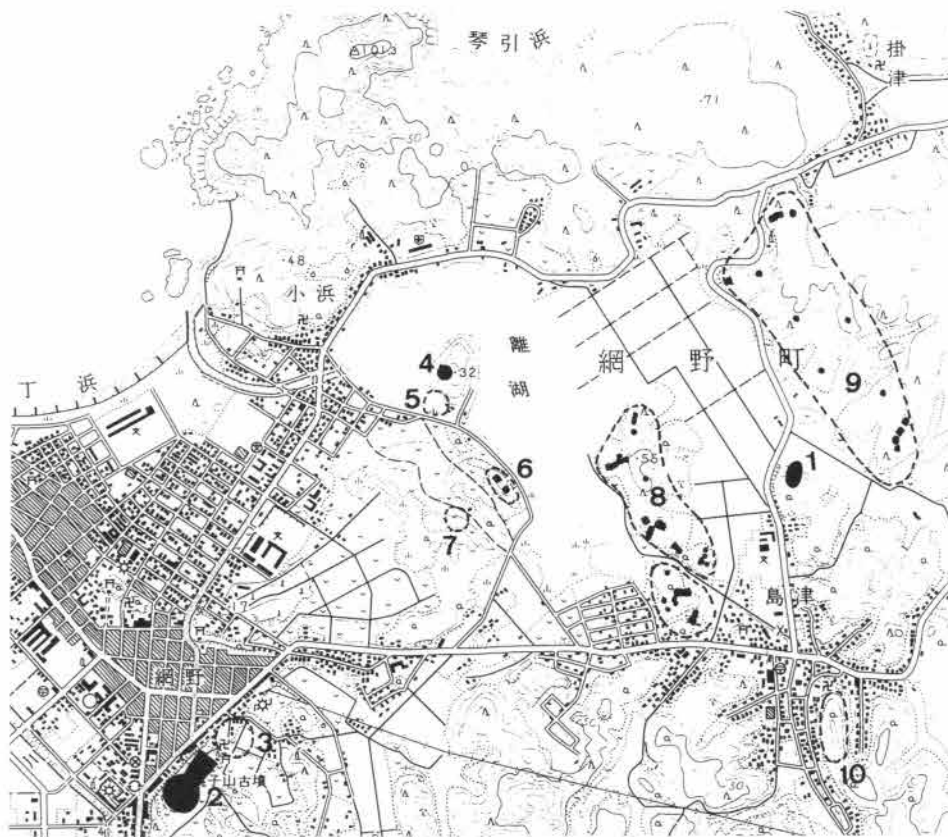
注 調査参加者(順不同、敬称略)

安達定雄・森下則行・嵯峨根治郎・桜井玲子・山添清治・高原与作・平林秀夫・菱川 實・石井 清・米田武志・今西茂満・稲岡徳次・松村 仁・森 秀夫・小國喜市郎・嵯峨根清一・岩佐正一・吉村 保・安達哲也・堀江登喜雄・上田忠志・原 敬治・河戸久夫・森野美智代・藤原多津子・熊谷千代子・由良里枝・沖とみこ・村上五月・坪倉愛子・安達睦枝・大下成子・山副まつ江・藤原敏子・尾崎二三代・藤原ヒサエ・石田寿子・石嶋文恵・谷口勝江・上田照子・金保真由美・松村和美・河崎祐子・金久真弓・谷辻絹代・上田奈智子・伊熊佐知子・谷口圭太・上田英雄・土田昌人・中川 寧・森本雅人・藤原 諭・藤沼孝弘・可児直典・西 智宏・小牧利男・鈴木 豊・野村 功・木成靖夫・糸井文雄・小川 伸・小西定男・永島俊夫・本城義晴・小牧朝男・川村清喜・吉村晴雄・野川 操・田村文代・山添喜代子・西村久枝・堀口百合子・安見ソヨ・川村さと枝・山添幸子・長谷川ハナ・野口美乃・永島広美・永埜ヤス子・鹿島昌也・保坂 亨・高橋あかね・酒井 隆・岡林峰夫・細山田章子・水野聡哉・谷後恒美・草野敦子・近藤奈津子・安田夏子・笠原利恵子・三野晴幹・妹尾活明・久田 亨・福田和浩・松山省一・加藤あい・石田晴彦・菱川優子・井手美幸・稲田望子・斉藤欣延・徳野裕昭・小橋健司・徳本 悟・丹新千晶・小田栄子・山中道代・山下敦子・溝井麗子・田中照夫・岡田桂子・山口五郎・岡田正吉・岡所文之・小森トミ枝・小野久一・早田睦子・足立恵美子・野村悦朗・西垣隆男・山本沢枝・吉岡むつ恵・小谷みちゑ・山本芳野・梅田美代子・辻村節子・佐々木理・田中美恵子・小国サダメ・野村純子

1. 網野遠所古墳群

1. はじめに

網野遠所古墳群は、京都府竹野郡網野町島津小字遠所に所在し、離湖の東約300mの丘陵上に展開する古墳群である(第1図)。今回、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の島津第3団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。造成予定地内には多くの古墳及び古墳状隆起、遠所城跡が確認されている(第2図)。このうち、調査対象となったのは、工食用道路開削にかかる北端に位置する1・6・7号



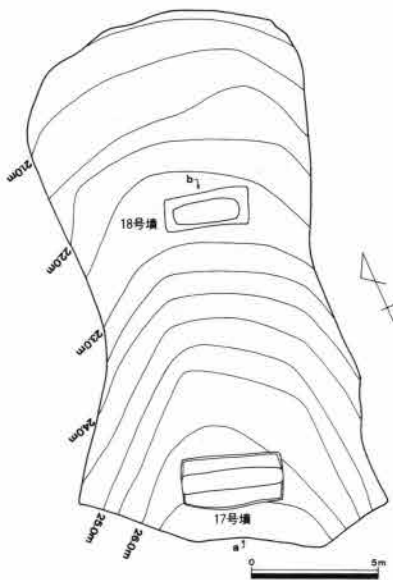
第1図 調査地位置図(1/25,000)

- | | | | | | |
|---------|----------|----------|----------|--------|----------|
| 1. 調査地 | 2. 銚子山古墳 | 3. 林遺跡 | 4. 離古墳 | 5. 離遺跡 | 6. 待谷古墳群 |
| 7. 河口遺跡 | 8. 谷崎古墳群 | 9. 大谷古墳群 | 10. 遠所城跡 | | |



第2図 調査地周辺地形図

墳、中央付近の17・18号墳及び古墳状隆起を呈する22～25号墳までがその対象となった。また、中央付近の16・19～21号墳及び稜線上に位置する遠所城跡は、次年度以降の調査のため伐採、航空写真撮影、地形測量などの調査を行った。調査期間は、平成5年8月20日～平成5年9月20日までである。調査面積は約1,000㎡である。



第3図 主体部検出状況平面図

調査の結果、古墳状隆起を呈していた4基は古墳として認められなかった。また、北端に位置する3基については、今年度調査を行わないこととなり、古墳として調査を実施したのは2基(17・18号墳)のみである。

人力による掘削の結果、17・18号墳は木棺直葬の主体部をもつ方墳であることが明らかとなった(第3図)。以下、17・18号墳について報告する。調査期間中は、地元の網野町教育委員会及び作業員の方々のご協力を得た。記して感謝の意を表したい。

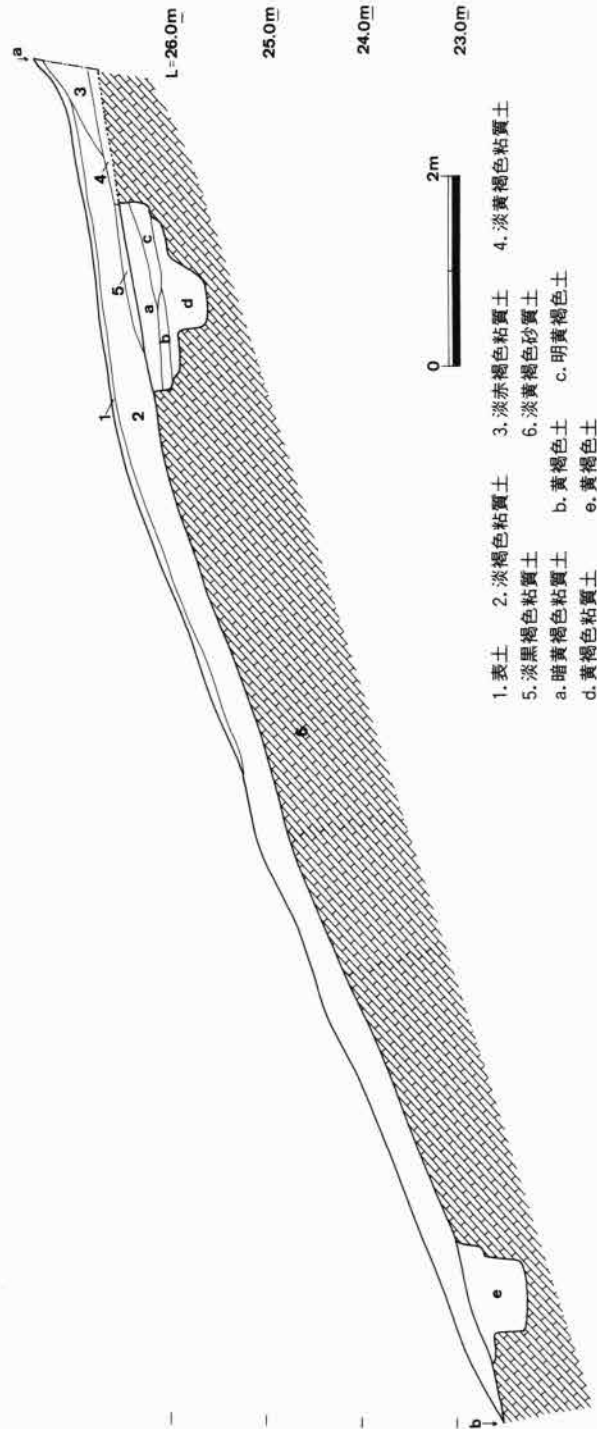
2. 調査概要

(1) 層位(第4図)

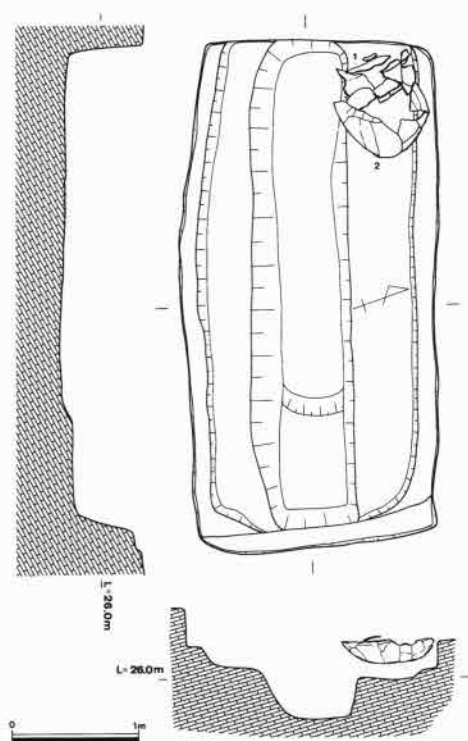
基本的に2基の主体部の掘形は、第2層直下で検出された。薄い表土の下の第2層は淡褐色粘質土で、厚さは約35cmを測る。丘陵上位から第3層(淡褐色粘質土)、第4層(淡黄褐色粘質土)が覆い、17号墳の主体部の上に第5層(淡黒褐色粘質土)の薄い層が堆積していた。なお、地山は第6層(黄褐色粘質土)で比較的固くしまっている。また、どの層からも焼けた痕跡や炭化物は認められなかった。

(2) 遺構

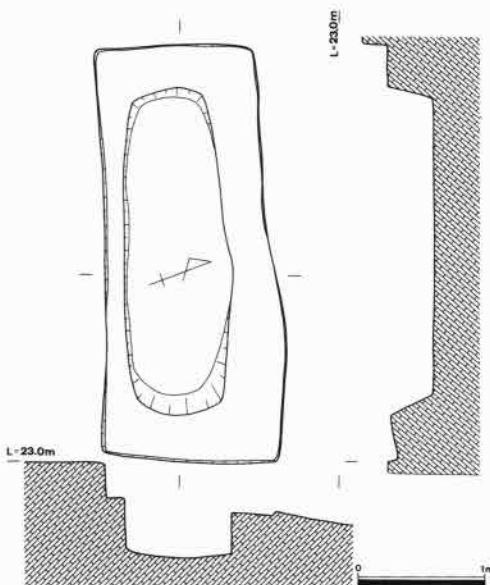
17・18号墳は、南北にのびる丘陵主尾根より、東側に派生した支尾根先端付近に位置し、2基が墳丘裾を接するかのように、近接して築造されている。いずれも、丘陵高位側を削り出し平坦部を設けて埋葬施設を穿ち、盛り土はほとんど見られず地山整形により墳丘を削り出したもので、弥生時代からの系譜を引く台状墓とよばれるものである。



第4図 土層断面実測図



第5図 主体部(17号墳)平・断面図



第6図 主体部(18号墳)平・断面図

①17号墳(第5図、図版第2)

丘陵高位側に位置する一辺約9.5mの方墳である。墓壙平面形は、隅丸長方形を呈し、二段掘形を有する。検出面での規模は、長辺約4m×短辺約2mを測り、木棺部は、長辺約3.5m×短辺約0.5m、検出面からの深さ約55cmを測る。棺の形態は不明である。埋土は、4層(a暗黄褐色粘質土、b黄褐色土、c明黄褐色土、d黄褐色粘質土)に分かれる。出土遺物は、主体部の埋葬のごく初期段階で掘り込まれたと考えられる土坑中から、甕棺が出土している。土坑の形は、ほぼ円形で、大きさは径約70cm、残存の深さは約30cmを測る。甕棺は、土師器の二段口縁の甕と蓋のセットで、土圧でつぶれていたが、おそらくは口を合わせて埋納されたものであろう。

②18号墳(第6図、図版第3)

17号墳の低位側に位置するもので、墓壙平面形は、隅丸長方形を呈する。検出面での規模は、長辺約3.4m×短辺約1.4mを測り、木棺部分は長辺約2.4m×短辺約0.8m、検出面からの深さ約35cmを測る。棺形態は不明である。埋土は、黄褐色系の粘質土である。出土遺物は、墓壙底面北端から出土した柳葉形の鉄鏃2点がある。

(3)遺物(第8図)

全部で4点ある。17号墳からの土師器の蓋と甕のセット(第8図1・2)、18号墳からの鉄鏃(第8図3・4)である。

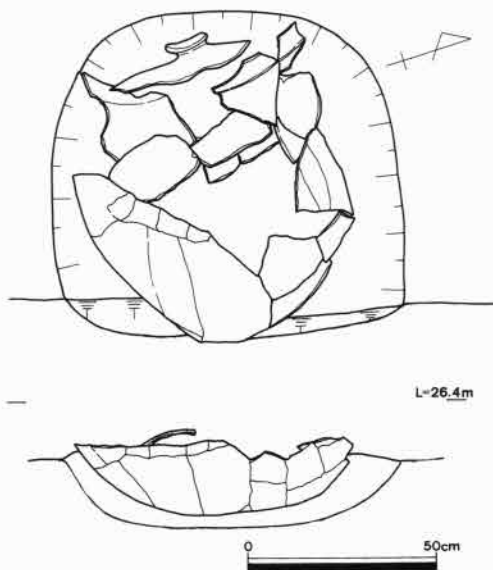
1は、中央部が凹むつまみを有する土師器の蓋である。内外面の調整は不明瞭ながら、口縁部付近に細かなミガキ痕を留めている。口径16.7cm・器高4cmを測る。赤っぽい胎土を持つ。

2は、土師器の二段口縁の甕である。体部外面の調整は細かなハケ目、内面は口縁部との境からケズリの調整が入るものである。暗赤褐色で、石英などの鉱物の細粒を多少含む胎土を持ち、黒斑が口縁部及び体部中～下端の一部に認められる。口径20.7cm・体部最大径25.2cm・器高24.8cmを測る。

3は、弥生時代からの系譜をひく柳葉形鉄鏃で、ふくらを持った後、ほぼ直線的に垂下して斜め関を形成するものである。

4も柳葉形に属するもので、3に比べて鏃身部が長身化し、関部は斜め関を形成しているものである。

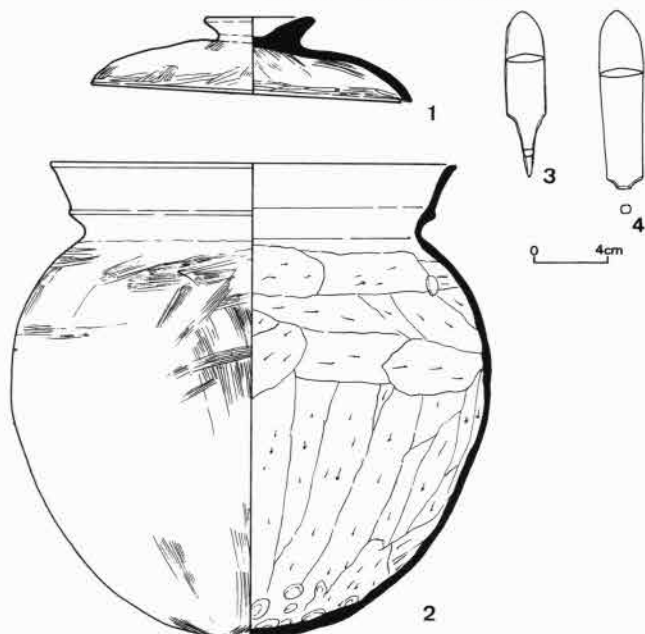
3は長さ8.6cm・幅2cm・厚さ4mm、4は残存長9.2cm・幅2.2cm・厚さ4mmを測る。



第7図 土師器出土状況図

4. まとめ

今回の調査では、17・18号墳の2基の古墳が検出されたのみで、21～23号墳は古墳ではないことが明らかとなった。しかし、さらに尾根の上位には、16・19号墳などが残りのよさそうな隆起をもって存在している。今後の調査によって、さらに古墳の増加する可能性はきわめて高いものといえる。



第8図 出土遺物実測図

調査した2基の古墳は、出土した遺物から推定すると3世紀末～4世紀初頭という、古墳時代前期初頭の築造年代が与えられる。この時期に相当する古墳は、この地域にはまだ検出例がない。このことから、弥生時代から古墳時代にかけての墓制を考えていく上で重要な資料を提供した。

(黒坪一樹)

2. 奈具墳墓群・奈具古墳群

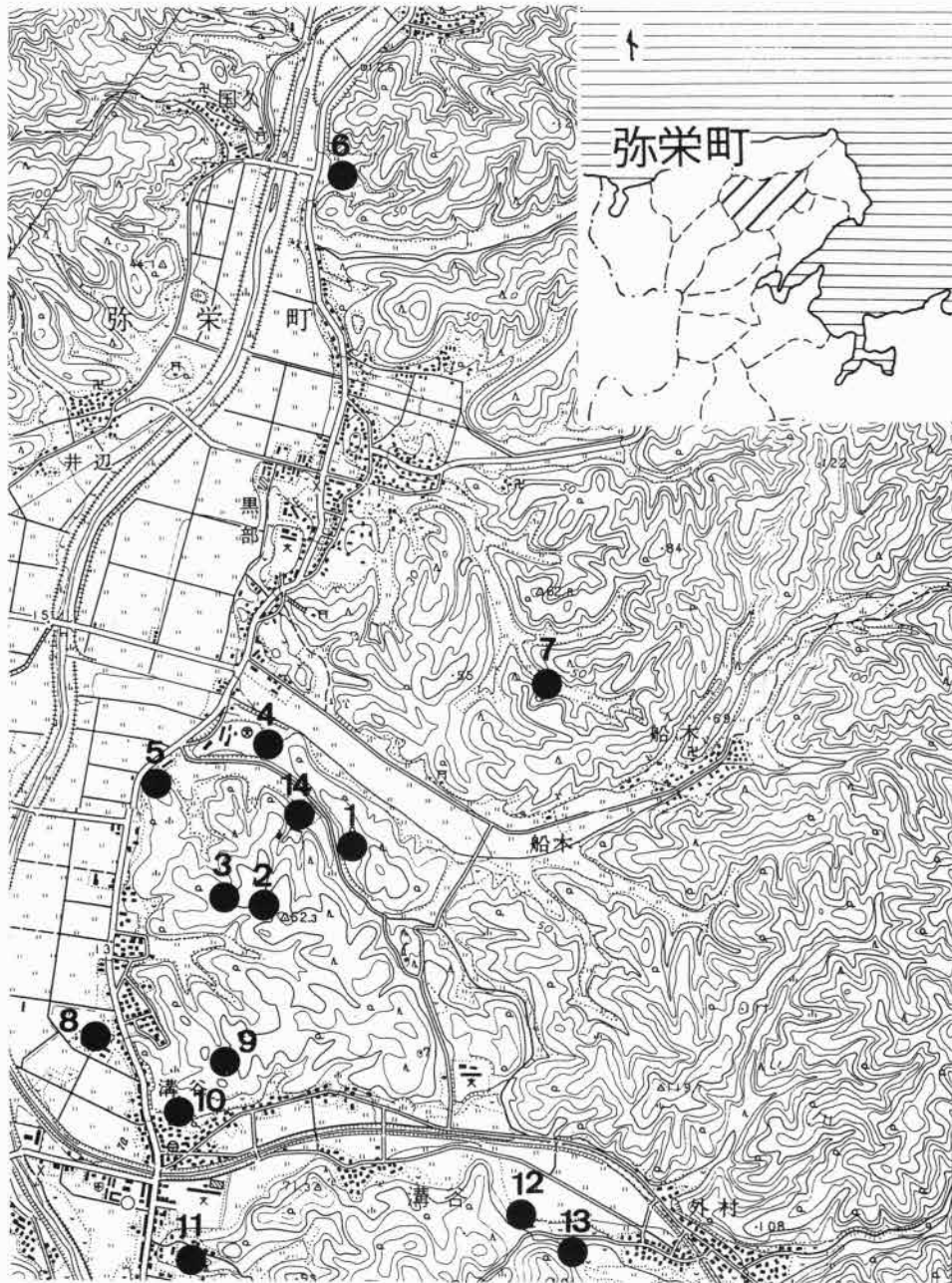
1. はじめに

奈具墳墓群・奈具古墳群は、京都府竹野郡弥栄町字黒部小字奈具、字溝谷小字奈具岡に所在する。当調査研究センターでは、平成2年度の試掘調査以来、この地区の国営農地造成その他の開発事業に先立つ発掘調査を実施してきた^(注1)。今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の奈具岡団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。期間は、平成6年5月13日～10月14日であり、面積は3,030㎡である。調査第2課調査第1係長伊野近富と同調査員河野一隆が担当した。記録的な酷暑の調査期間中と、その後も関係諸機関及び調査参加者に多大な労苦をかけたことに深謝したい^(注2)。

調査地は、遺跡地図には載っていない。着手前にはマウンドや階段状地形が認められたので古墳と考えられたが、一部は弥生墓であることが判明した。したがって、弥生墓の地点を奈具墳墓群、古墳の地点を奈具古墳群と名付けた。ただし、奈具古墳群は、別に1～12号墳があって、本遺跡の西方500mに位置するため、この地区の古墳は奈具13～15号墳とすることにした。

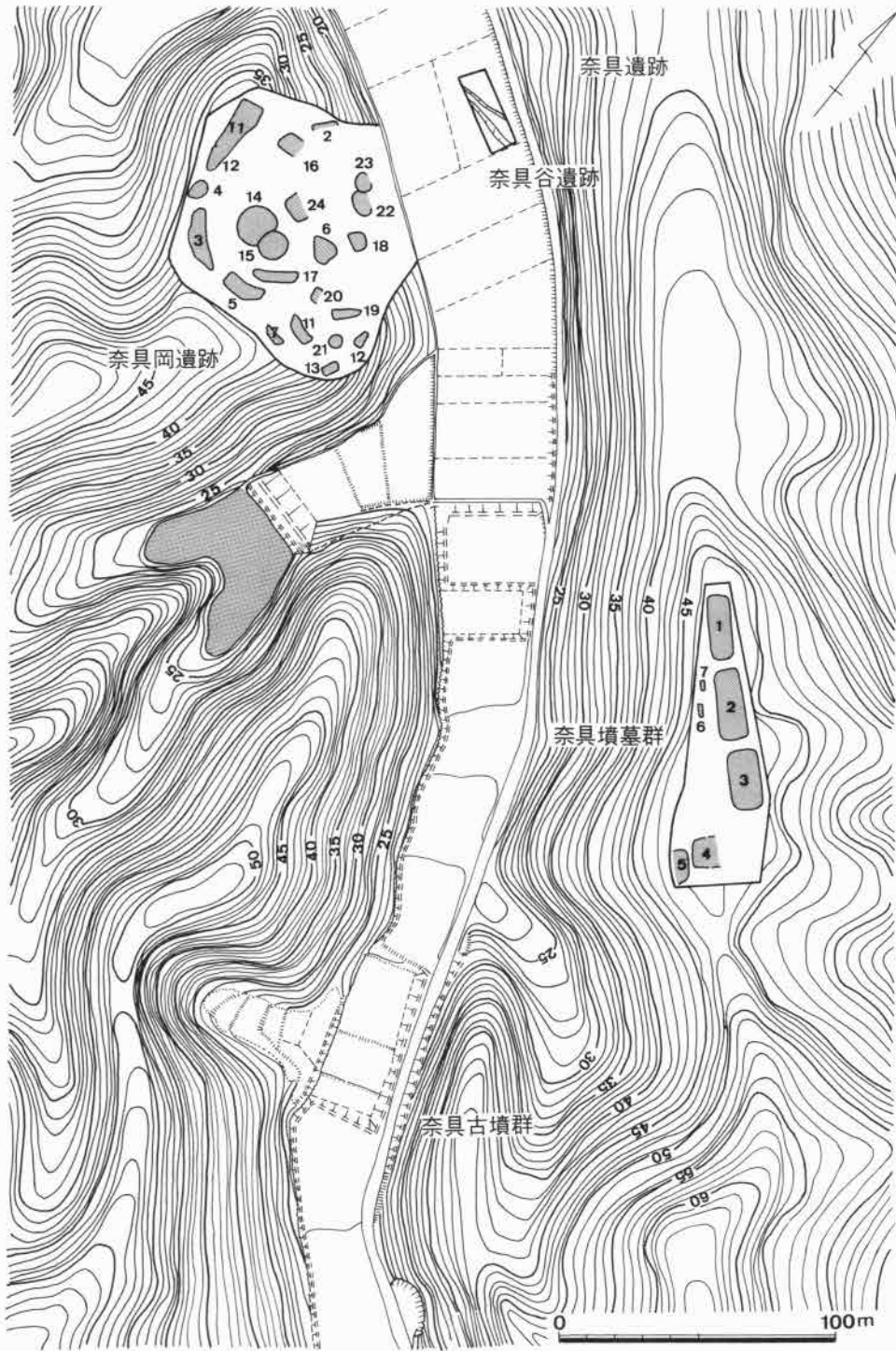
2. 位置と環境(第9図)

奈具墳墓群・奈具古墳群は、竹野川右岸の沖積地に張り出した、舌状の台地上にある。調査地周辺、特に奈具の集落から黒部にかけてはゆるやかな台地となっている。このため、古来、集落として利用されたようで、各所で弥生時代以降の土器片の散布が認められる。奈具地区の最初の発掘調査は、昭和57年度に弥栄町教育委員会によって行われた^(注3)。続いて、昭和60年の弥栄町教育委員会の第3次調査では、丹後地域の弥生墓を特徴づける貼り石墓の一部が検出された^(注4)。平成2年度の当調査研究センターの調査では、今年の調査地の向かい側の丘陵斜面(奈具岡遺跡)と水田部(奈具谷遺跡)で注目すべき成果があった(第10図)。奈具岡遺跡では、緑色凝灰岩と水晶を原料とする一貫した玉作り工房が確認され、弥生Ⅲ期後半の竪穴式住居跡22基が検出された^(注5)。奈具谷遺跡では、矢板と杭で護岸された導水路とトチの実の灰汁抜き場が見つかり、丁字頭勾玉をはじめ、大量の土器・木製品が出土した^(注6)。これらの成果は、丹後地域の他の弥生集落としても破格であり、この地区が弥生時



第9図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|----------------|---------------|------------|-----------|
| 1. 奈具墳墓群・奈具古墳群 | 2. 奈具岡南古墳群試掘地 | 3. 奈具岡南古墳群 | 4. 奈具遺跡 |
| 5. 奈具谷1～3号墳 | 6. 黒部銚子山古墳 | 7. 黒部製鉄遺跡 | 8. 丸山古墳 |
| 9. 溝谷古墳群 | 10. 龍淵寺古墳 | 11. いもじや古墳 | 12. フキ岡遺跡 |
| 13. 城楽寺遺跡 | 14. 奈具谷・奈具岡遺跡 | | |



第10図 調査地周辺図及び弥生時代遺構配置図(1/2,500)

代中期の竹野川流域の拠点集落の一つであったことが確実となった。

弥生時代後期は、中期と比較して遺構が希薄となる。古墳時代に入ると、丘陵頂部や斜面に古墳が築かれるが、集落の状況は不明である。飛鳥時代以降は、不明な点が多いが、奈具岡遺跡では奈良時代後半の鍛冶炉と建物跡が検出された。この時期には、隣接する黒部地区で大規模な鉄生産が稼働しており、竹野川右岸の各所に鉄生産関連の遺構が散在している。

3. 奈具墳墓群

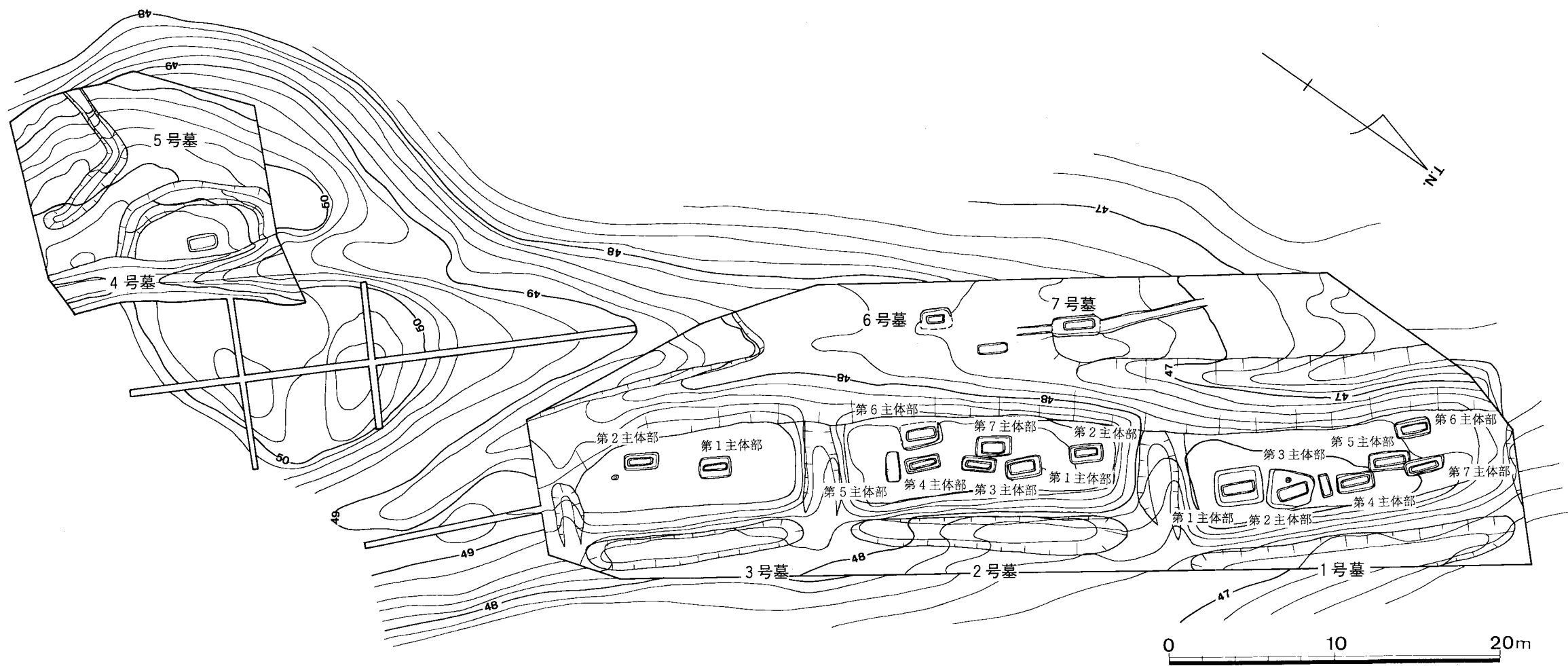
(1)遺構の概要

奈具墳墓群は、丘陵頂の平坦面に築かれた墳墓群であり、7基の弥生墓を調査した(第11・12図)。調査方法は、1～3号墓を通る軸とその直交方向に試掘坑を設定し、遺構の確認された部分を面的に拡張した。それぞれの弥生墓ならびに主体部の規模を付表2に示した。

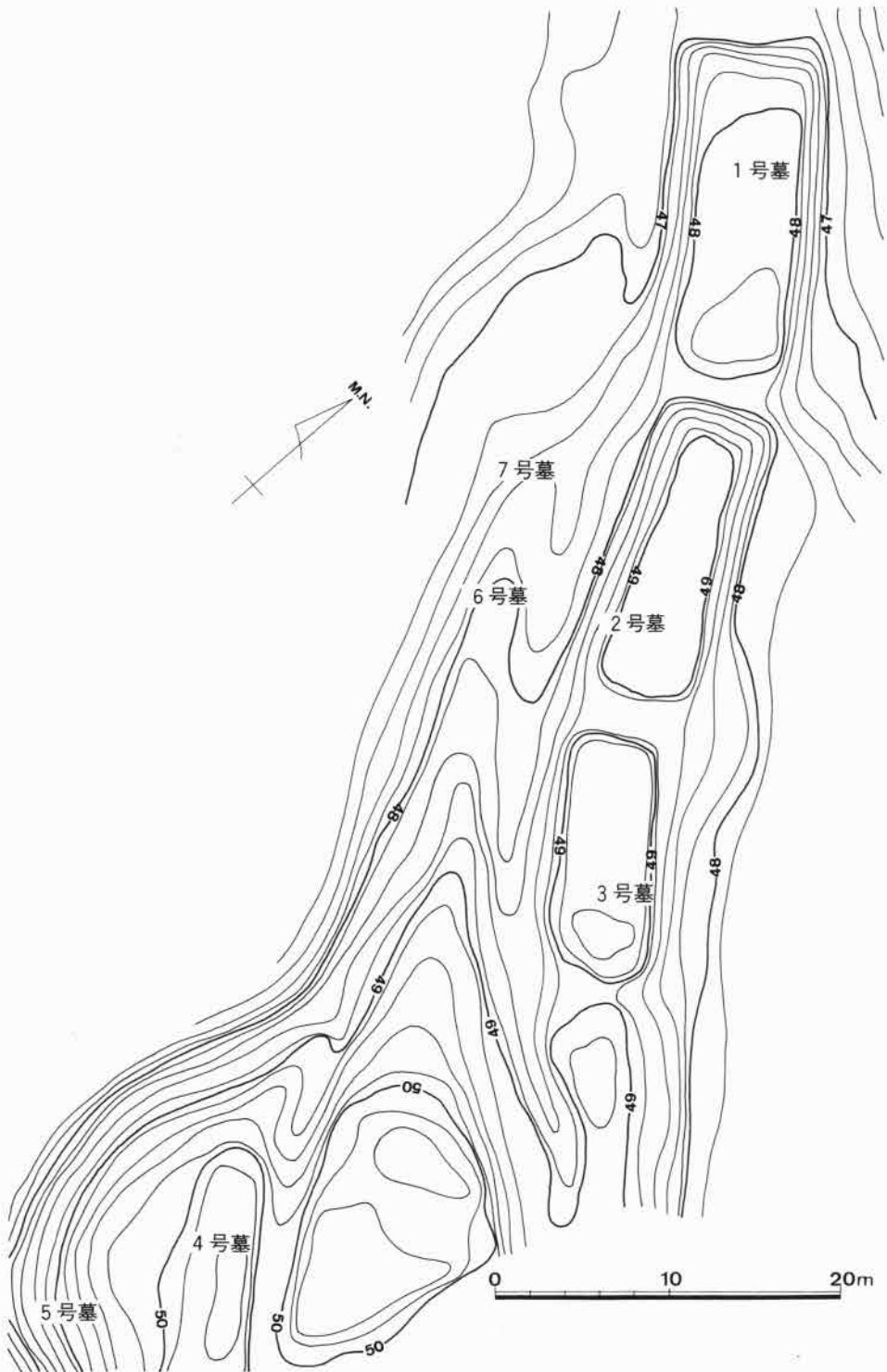
1号墓(第13図・図版第6-(1))は、南西側の一辺を山道によって削られ、残る3方には断面「U」字形の浅い溝がめぐる。北西にのびる尾根の先端部側には、小マウンドがあり、同様の弥生墓が接続すると考えられる。盛り土の手順は、標高47.2m付近に赤褐色ローム質の地山があり、その上に周溝掘削時の排土と思われる黄褐色粘質土を盛り上げている。この時、周囲を堤状にした後、内部を充填していくようである。南東溝は、淡黒褐色の砂質土で埋まり、下層ほど土器を含んでいる。墳丘の北東斜面から広口壺(2・3)、北東周溝内から無頸壺(4)、甕(31)が検出され、出土位置から第2または第4主体部に置かれた土器が転落したものと推定される。

主体部は、盛り土の切り合いによる細かな前後関係の検討ができなかったが、台状の墳丘を築いた後に掘り込まれ、棺底は地山を若干掘り込んで据えられている(第14・15図)。配置は、南東側に偏るものの、北西側は削られているから、本来の主体部数はもっと増えるであろう。第1主体部は、奈具墳墓群最大の墓壙であり、箱形木棺を納める。棺陥没に伴う旧表土の落ち込みを明瞭に観察することができた。第2主体部は、棺小口部分と棺側の棺蓋上面に甕(14・15)が置かれていた。また、棺の北西側には径15cm・深さ20cmのピットがあり、暗黄褐色の粘質土が埋まっていた。

第4主体部(第14図4・図版第6-(2))は、狭長な墓壙に箱形木棺を納めたもので、棺北東側小口部分に甕(11)、棺側のほぼ中央部に竹管文を持つ広口壺片(1)が置かれていた。また、埋土中から石英片(図版第16-1)を検出している。これらの主体部内の土器は、土圧で割れたというよりも、納める以前に意図的に粉碎(破碎供献)されて、細片化したもの



第11图 奈具墳墓群全景(1/300)



第12図 奈具墳墓群調査前測量図(1/400)

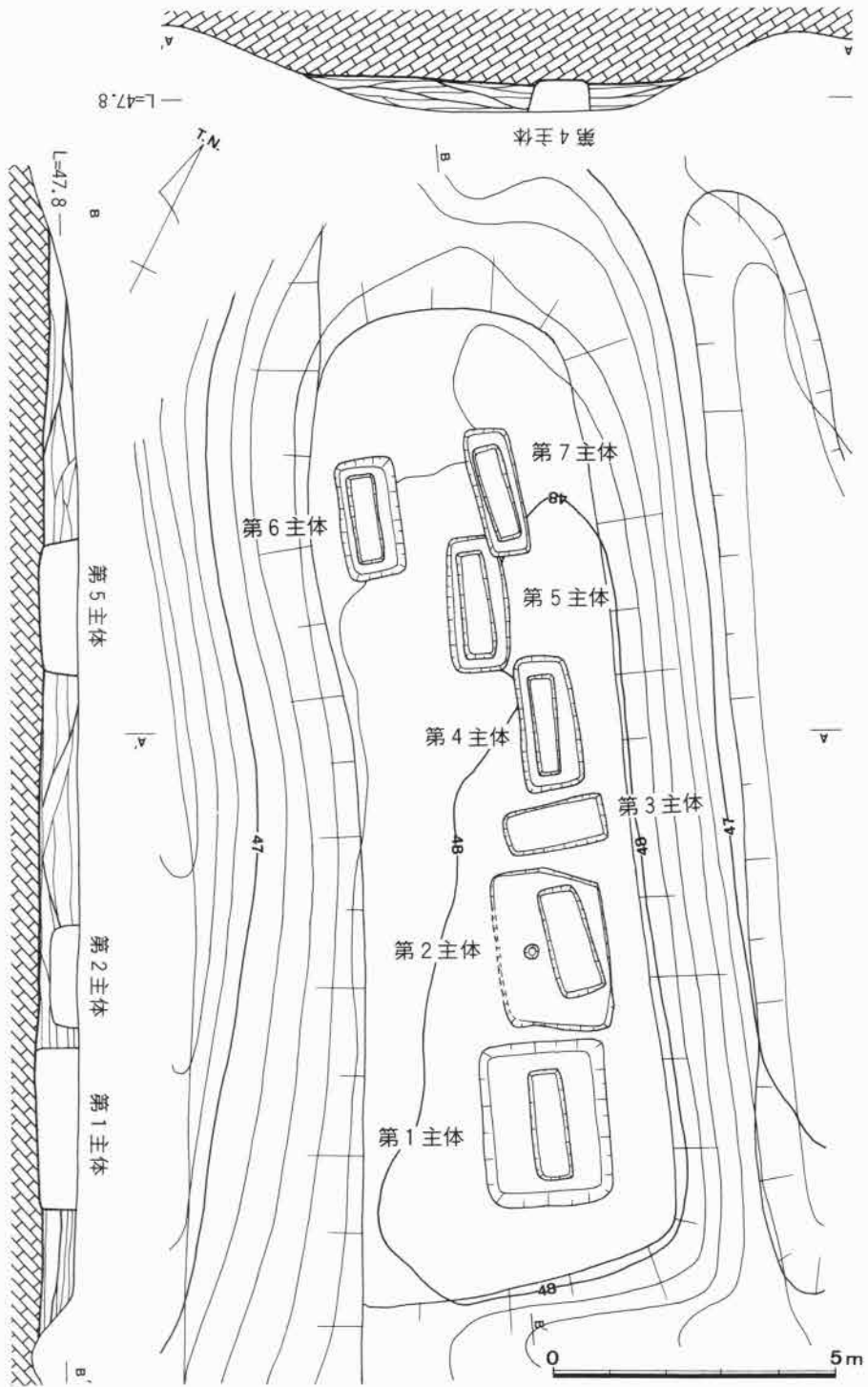
付表2 奈具墳墓群規模一覧表()内は木棺規模)

	長さ	幅	高さ	棺形式		長さ	幅	高さ	棺形式
1号墓	21.2	10.7	1.5		2号墓	20.0	9.7	1.5	
溝	22.0	3.0	0.4		溝	15.0	1.5	0.2	
第1主体	2.9(2.0)	2.2(0.5)	1.3(0.6)	箱形	第1主体	2.2(1.6)	1.1(0.7)	0.5(0.4)	箱形
第2主体	2.5(1.8)	0.6	0.3(0.2)	箱形	第2主体	2.0(1.6)	0.7(0.6)	0.6(0.3)	箱形
第3主体	2.8	2.0	0.3	土壙	第3主体	2.0(1.7)	0.8(0.5)	0.4(0.2)	箱形
第4主体	2.3(1.0)	1.0(0.5)	0.3(0.2)	箱形	第4主体	2.0(1.3)	0.9(0.5)	0.4(0.2)	箱形
第5主体	2.4(2.0)	1.0(0.6)	0.3(0.2)	箱形	第5主体	1.7	0.6	0.2	土壙
第6主体	2.2(0.8)	0.8(0.5)	0.3(0.2)	箱形	第6主体	2.5(1.8)	1.3(0.7)	0.4(0.2)	箱形
第7主体	2.0(1.6)	1.0(0.5)	0.3(0.1)	箱形	第7主体	2.2(1.4)	1.2(0.6)	0.5(0.2)	箱形
3号墓	15.8	9.3	1.1		5号墓	5.0	6.0		箱形
溝	15.5	1.1	0.3		6号墓	1.7(1.2)	0.8(0.6)	0.5(0.3)	箱形
第1主体	2.0(0.7)	1.2(0.5)	0.5(0.3)	箱形	7号墓	2.3(1.6)	0.7(0.3)	0.3	箱形
第2主体	2.0(1.4)	0.8(0.5)	0.5(0.2)	箱形					
4号墓	9.5	5.0							
主体部	1.7	0.8	0.2	箱形					

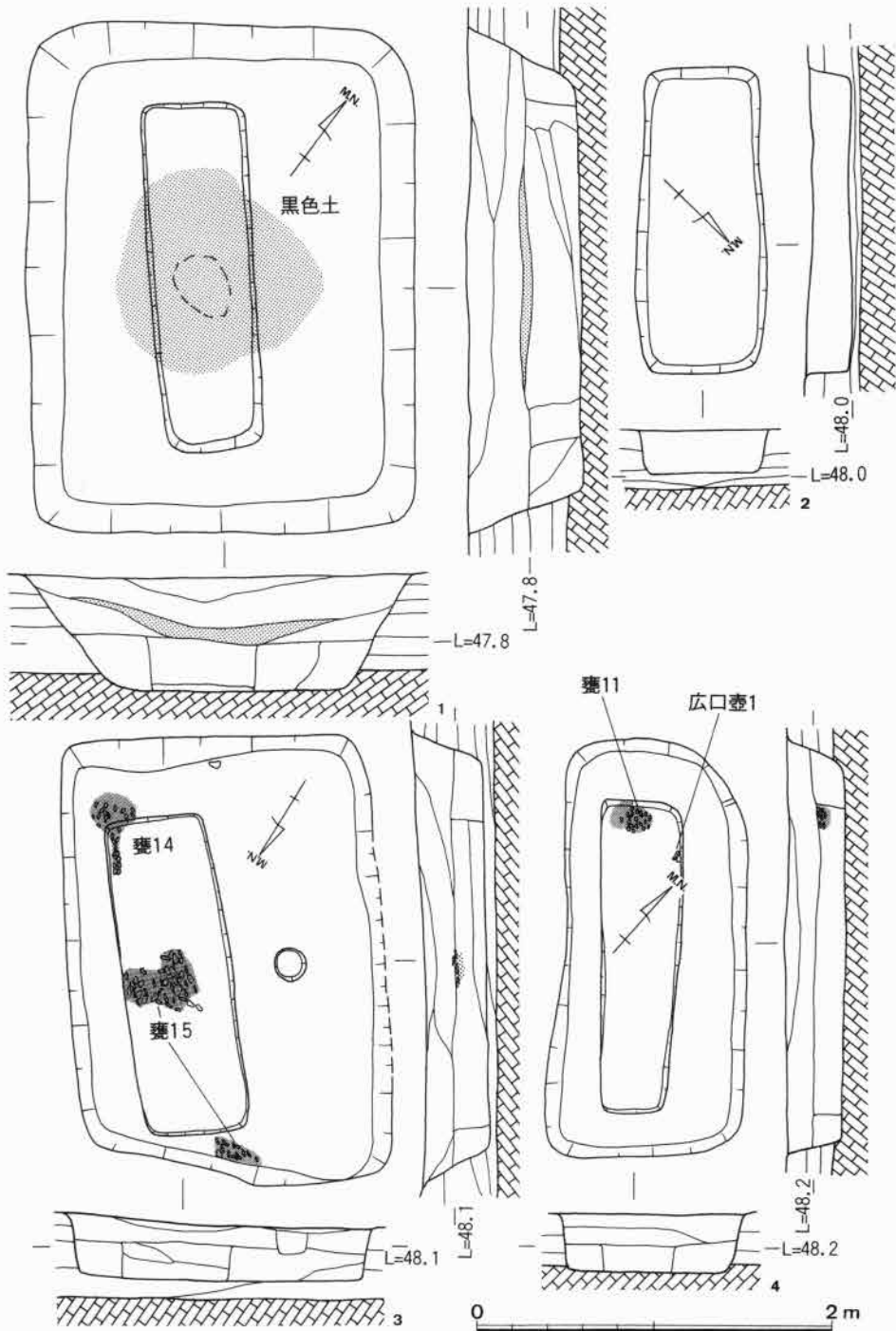
であった。第5主体部は、墓壙の北側コーナー部分を第6主体部に切られており、奈具墳墓群中で切り合いを持つ唯一の例である。

2号墓(第16図・図版第7-1))は、1号墓とはほぼ共通する形態であるが、盛り土の手順に若干の差がある。これは、1号墓のように周囲から造るのではなく、平坦面を意識しつつ、ブロック状に盛り土を行うものである。周溝掘削土を盛るために、四周が先に築かれるのは当然であるが、盛り土はおおむね北西から南東へと進行するようである。周溝内からは土器が検出されているが、1号墓のように、斜面から出土するものは少ない。

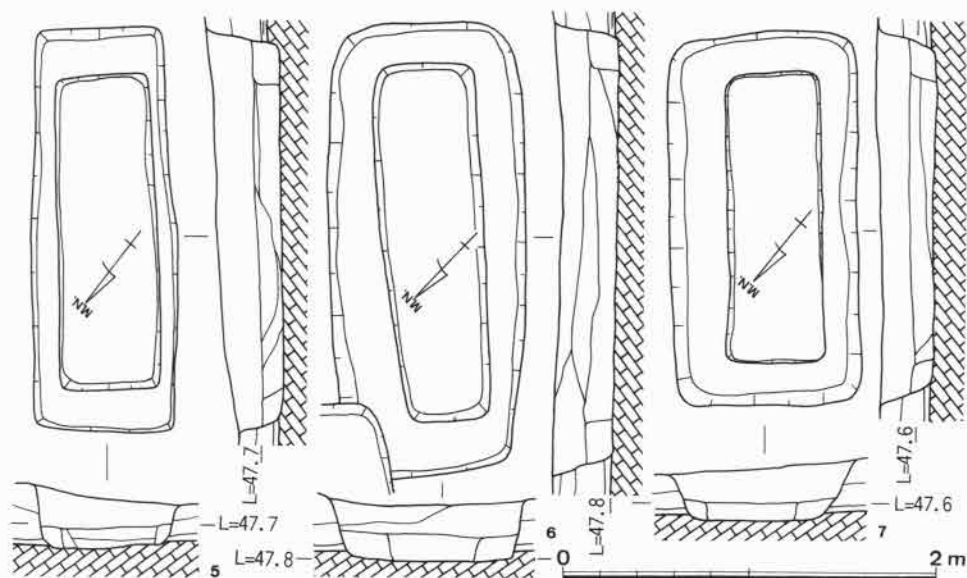
主体部は7基あり、ほぼ墳丘主軸に並行して営まれている(第16図)。第1主体部は、2号墓最大の主体部であり、中央には棺陥没に伴う旧表土の堆積が認められた(図版第7-2)-1)。この黒褐色土の直下から甕口縁(32)が検出されている。第3主体部は、土器の破碎供献が良好な状況で検出できた。これは、土器が棺主軸に沿って落ち込んでおり、棺蓋の腐朽によって土器が滑り落ちた結果であると推定される。なお、床面も南東から北西にゆるやかに傾斜しているから、この土器は頭部付近の棺蓋上に置かれたものであると考えられる。第4主体部でも、甕(13)が底から浮いた状態で検出されたが、第3主体のようにまとまりのあるものではなかった。しかし、甕付近には小塊の炭や灰が検出され、墓前祭祀をうかがうことができる。なお、埋土中からは水晶片(図版第16-2)が検出された。墓壙の北西側小口に接して、1号墓第2主体と同じくピットが検出された。第6主体部は、南西側が削平のために流れているが、土器(12)が破碎されて、棺側に置かれていた。



第13図 奈具1号墓平面・断面図(1/80)



第14図 奈具1号墓主体部平面・断面図(1) (1/40)

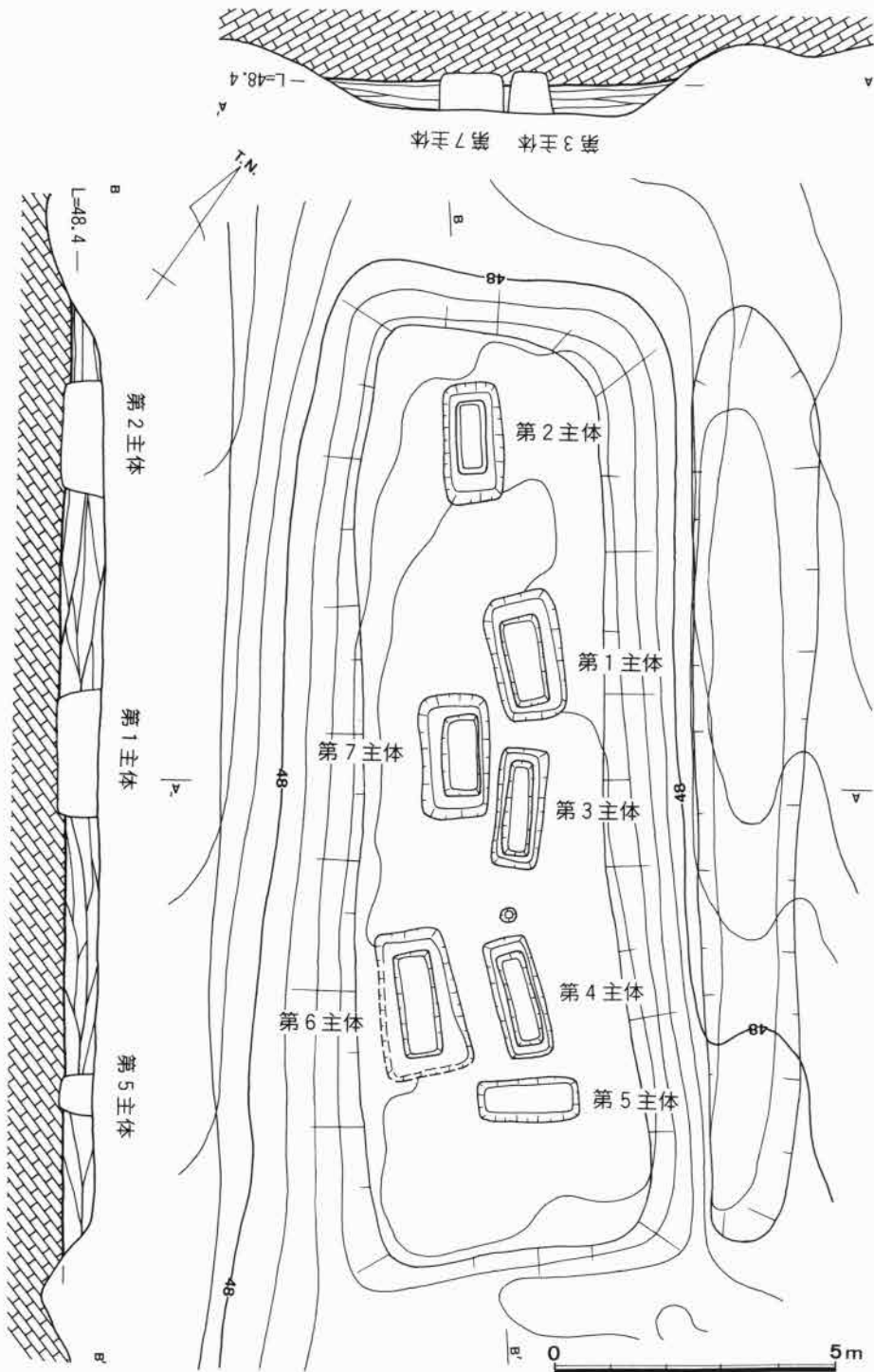


第15図 奈具1号墓主体部平面・断面図(2) (1/40)

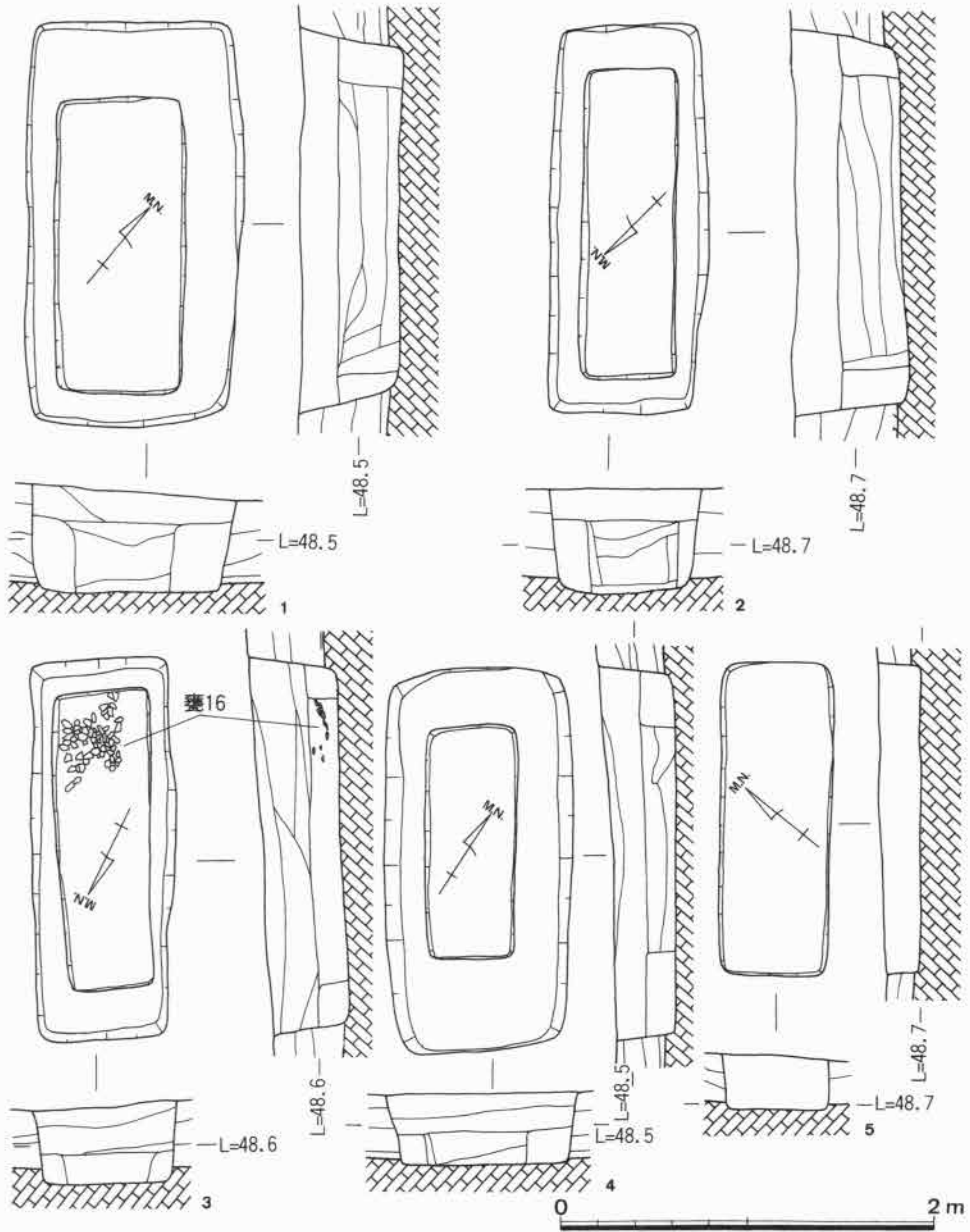
1. 第1主体部 2. 第3主体部 3. 第2主体部 4. 第4主体部 5. 第6主体部
6. 第5主体部 7. 第7主体部

3号墓(第19図・図版第8-(1))は、墳丘を持つ弥生墓で最も尾根の高位に位置する。区画溝を北東側から切り込んで、自然丘陵と区別する。南西側を山道で削られ、3方には浅い溝が掘り込まれている。また、この弥生墓は1・2号墓に比べて盛り土が厚く、北西側の最も厚い部分で約60cmを測る。盛り土の手順もほぼこれに対応し、北西側からマウンドを拡張・整形しつつ南東側へと進んだことが、層位から推定できる。これは、いわば1号墓と2号墓の折衷の方法といえよう。^(注9)墳丘出土の土器として、北東側周溝中から水差(8)、甕底部(20・25)、甕口縁(34)が出土した。これらは、出土した位置から、第1主体部に供献されたものが転落した可能性がある。主体部は、2基ある。第1主体部(第22図1)は、3号墓の中心主体部というべきもので、棺陥没に伴う旧表土の落ち込みが検出された。特に、棺の南東側小口には、この旧表土上に長径20cm程度の石材が置かれていた(図版第8-(2)-1)。これは、いわゆる川原石で、奈具墳墓群の丘陵からは産出しない。しかも、旧表土上には15cm程度の堆積があることから、現位置ではないものの、棺の位置を示す用途で置かれた石材、つまり標石であったと考えられる。この主体部からは、緑色凝灰岩と広口壺(5)が出土した。いずれも旧表土の埋土中から出土している。第2主体部(第22図2)は、層位的には第1主体部の後に築かれており、甕底部(26)が埋土中から出土した。

4・5号墓(第20図)は、3号墓から約30m南東側に位置する方形周溝墓群である。これらは、周溝を持って1基ずつ独立するが、盛り土の有無は明確ではない。4号墓は、一辺9.5mの隅丸方形であるが、北東側を山道によって削平されている。主体部は、1基確認

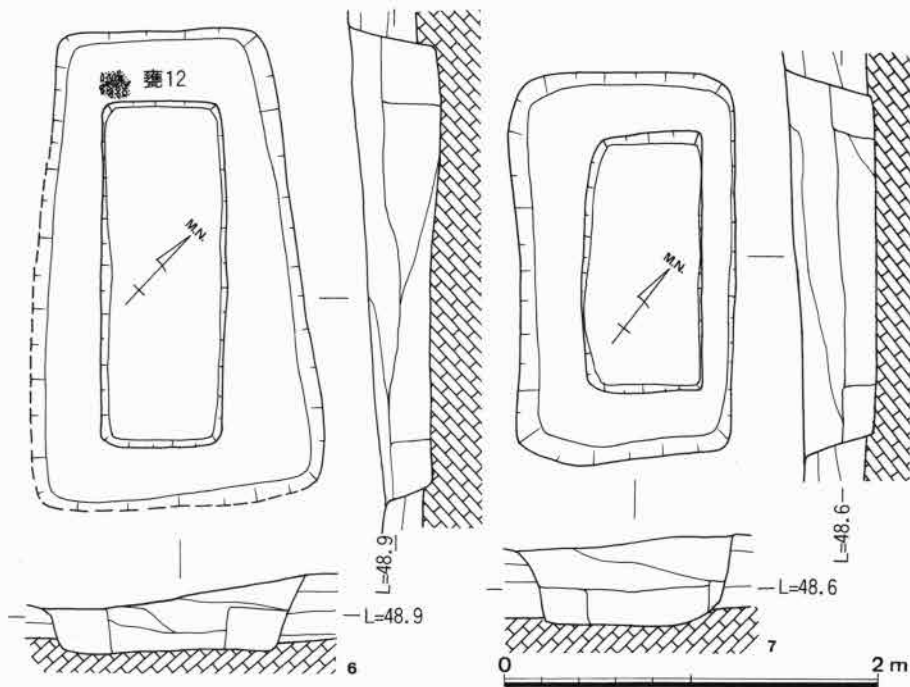


第16図 奈具2号墓平面・断面図(1/80)



第17図 奈具2号墓主体部平面・断面図(1) (1/40)

されたが、埋土内からも遺物は全く検出できなかった。だが、周溝の底に接して、甕(17)と短頸壺(7)が検出された。特に、甕には煤などの使用痕が全くなく、逆に、短頸壺には体部に煤が付着する。おそらく、短頸壺は正立の状態での煮沸といった用途が考えられる。5号墓は斜面に立地するが、主体部と周溝の大半を失っている。この周溝からは、甕(21)



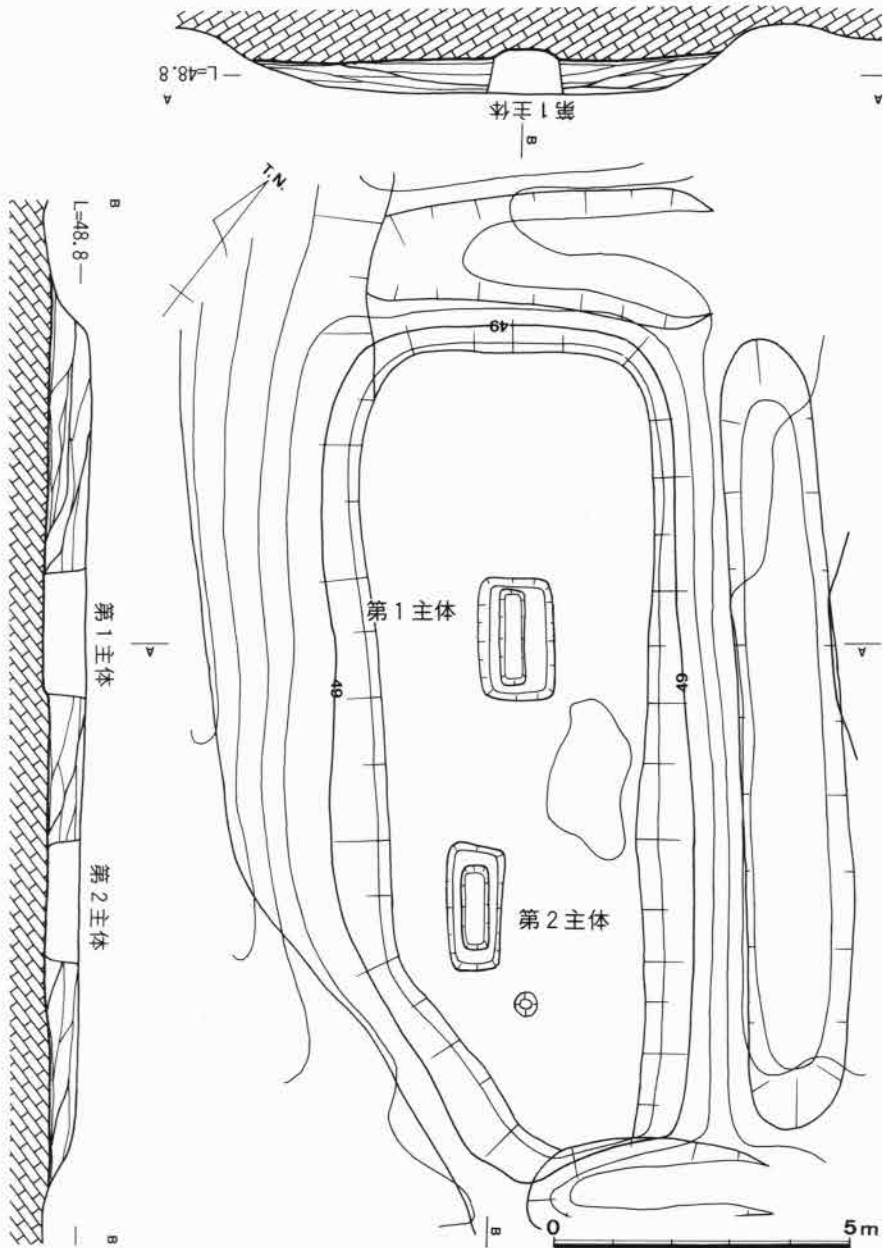
第18図 奈具2号墓主体部平面・断面図(2) (1/40)

1. 第1主体部 2. 第4主体部 3. 第3主体部 4. 第2主体部 5. 第5主体部
6. 第6主体部 7. 第7主体部

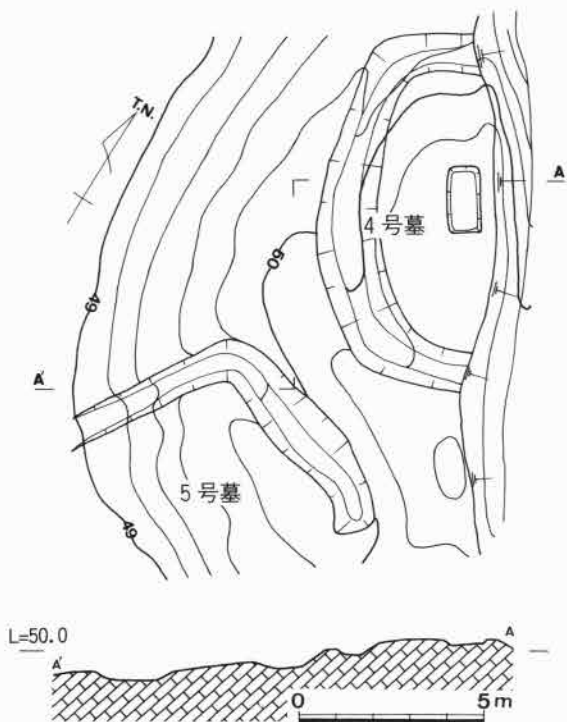
が出土した。

6・7号墓は、2号墓の南西側にあり、墳丘や溝が全く確認できず、2号墓の陪葬墓^(注10)と考えられる(第21図)。6号墓(第22図4・図版第9-(2)-1)は、山道のために墓壙の北東側が全く削平されていた。棺蓋上面には、標石と思われる径30cm前後の川原石が置かれ、高杯(35・36)、穿孔された壺底部(6・22)、甕(28)、石鏃(37)が検出された。石鏃は、切っ先を棺内方向に向けており、墓壙斜面に立てかけて副葬されたものか(図版第9-(2)-2)。7号墓も2号墓の陪葬墓で、主体部埋土内から甕底部(27)を検出した。

ここで、奈具墳墓群の埋葬法をまとめておく。墓域の構成は、墳丘のある墓(1～3号墓)、方形周溝墓(4・5号墓)、陪葬墓(6・7号墓)の3類に大別される。墳丘のある墓は、長幅比がほぼ1:2となり、通有の長方形弥生墓と共通する。主体部には、箱形木棺と土壙墓とがあり、土器の破碎供献行為と標石があげられる。破碎供献行為は、近畿北部で弥生後期以降に盛行するが^(注11)、奈具墳墓例はその先駆例と見なすことができよう。また、兵庫県駄坂墳墓^(注12)、久美浜町豊谷1号墓^(注13)では石鏃の打割供献が報告されている。標石は、大阪府巨摩遺跡の方形周溝墓^(注14)に類例があるが、普遍的な風習と思われる。土器の出土位置については、墳丘のある墓では、使用された甕が棺蓋上に置かれ、広口壺、無頸壺、水差な



第19図 奈具3号墓平面・断面図(1/80)



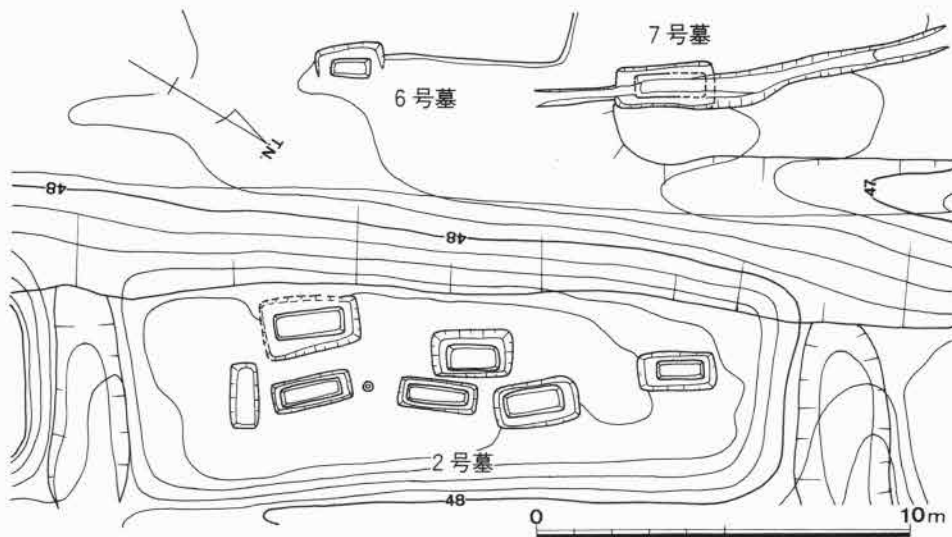
第20図 奈具4・5号墓平面・断面図(1/200)

どの壺類が墳頂・斜面あるいは周溝中に転落して検出された。一方、方形周溝墓では、火を受けない甕と火を受けた短頸壺が周溝内から出土し、主体部内は無遺物である。この点も、埋葬様式の違いを際立たせている。

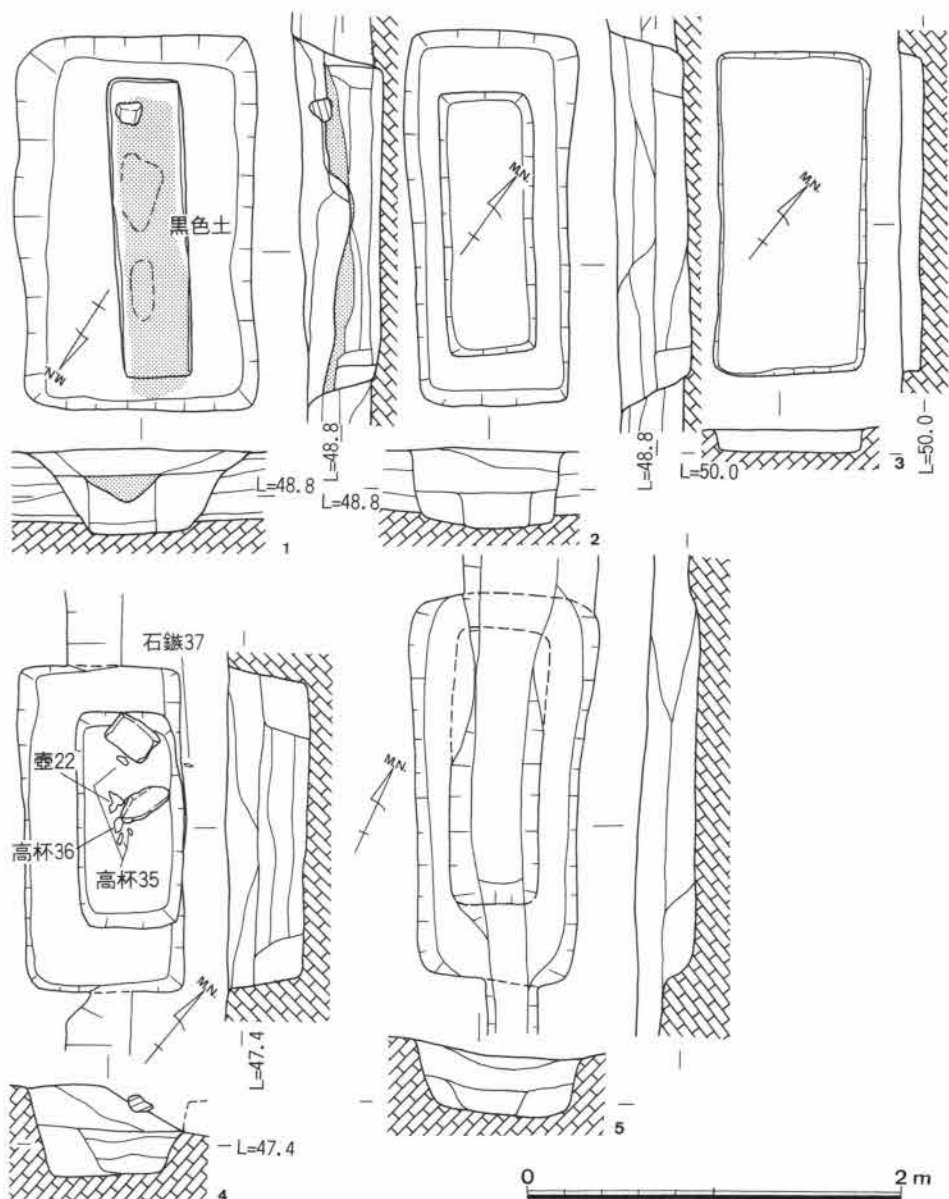
(2) 出土遺物

① 弥生土器(第23～25図・図版第14・15)

遺物は、弥生土器が大半だが、他に須恵器平瓶1点と石鏃1点がある。須恵器については、遺構に伴わないために図化していない。また、復原が遅れたために挿図と図版が食い違うが、これは次年度以降に報告したい。



第21図 奈具6・7号墓位置図(1/200)



第22図 奈具3・4・6・7号墓主体部平面・断面図(1/40)

1. 3号墓第1主体部 2. 3号墓第2主体部 3. 4号墓主体部 4. 6号墓主体部
5. 7号墓主体部

奈具地区の弥生土器は研究の蓄積がある。まず、奈具遺跡の第1次調査では、弥生第Ⅲ・Ⅳ期をそれぞれ新古に二大別し、後期までの器種の変遷を示した^(E15)。これは、『京都府弥生土器集成』にも継承された。次いで、奈具谷遺跡の調査では、溝SD01の多量の土器を分析し、時期・製作技法・搬入土器の問題が議論された。ここでは、壺が8類、甕が4類、高杯が2類と鉢・台形土器・蓋に細分されている^(E16)。この奈具谷分類を奈具墳墓群の土

器に適用すれば、壺Aが1・2・3・5、壺Bが7、壺Eが8・9・10、甕Aが13・16・28・31・34、甕Bが11・13~15、高杯Aが35・36となる。今回の調査では、体系的な分類はできないので、広口壺、無頸壺、短頸壺、水差、甕、高杯に5分類し、製作技法は奈具谷報告に準拠した^(注17)。今後、奈具地区の弥生土器を見据えた分類・整理作業が不可欠となるだろう。なお、観察表を付表3に示した。

広口壺(1~3・5) 口縁端部に竹管文(図版第15-(1))、頸部に貼付凸帯をもつもの(1・2)と端部に凹線Aをめぐらせるもの(5)があるが、いずれも水平のびるもので垂下しない。貼付凸帯は、1がb(図版第15-(1))、2がa(図版第15-(2))である。

無頸壺(4) 口縁端部を肥厚させる無頸壺で、2条の刻み目凸帯aをめぐらす。

水差(8~10) 口縁端部に凹線B-1をめぐらすもの(8・9)と、棒状工具を用いた凹線文をめぐらすもの(10)がある。ただ、端部と頸部は工具が異なり、頸部の方が太い。

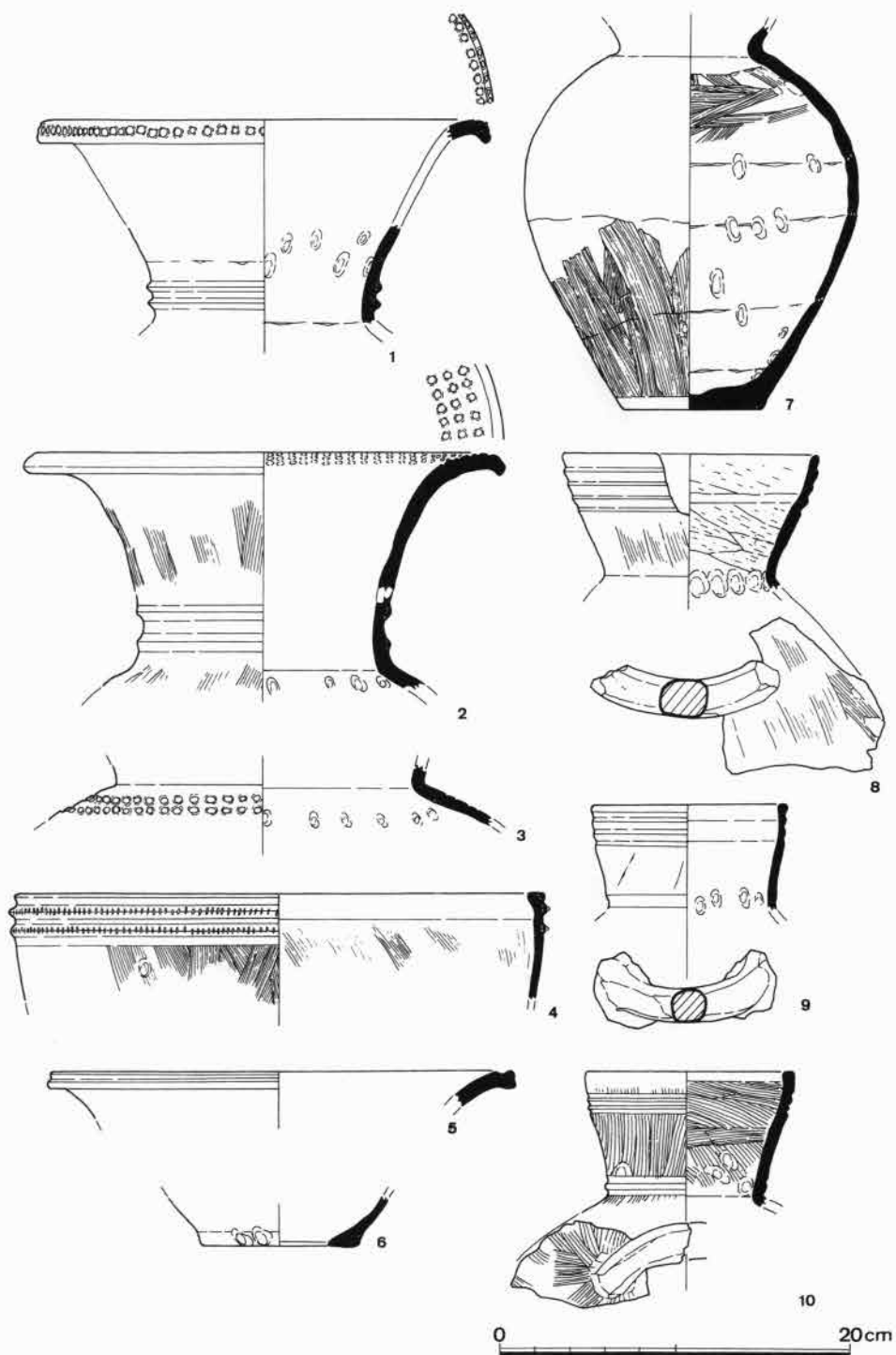
甕(11~34) 外面上半をハケ(12~16・30・34)、下半をハケ(14・16・18・19・25)、またはミガキ(11~13・15・17・20・23・27・28)で仕上げ、内面はケズリ(12・13・15~17・25・27)またはハケ(14・28)を施す。また、ミガキや削りで仕上げるものでも、あらかじめハケで調整するものがある(11・15・17・20)。端部の形状は、丸く終わるもの(11~13・30)、面を持つもの(31~33)、はね上げ気味のもの(15・17・29)、肥厚するもの(14・16・28・34)がある。底部には下端部に横ナデを回すもの(11~16・18・19・23)がある。底部外面は、20が削り、27がハケで仕上げる以外は、ナデで調整する。なお、15・17・18・27は底部充填手法によるものである。

高杯(35・36) 杯部をミガキで仕上げる大型のもの(36)と、凹線を多条施すもの(35)があり、いずれも筒状の脚部に漏斗状の裾部が付く。

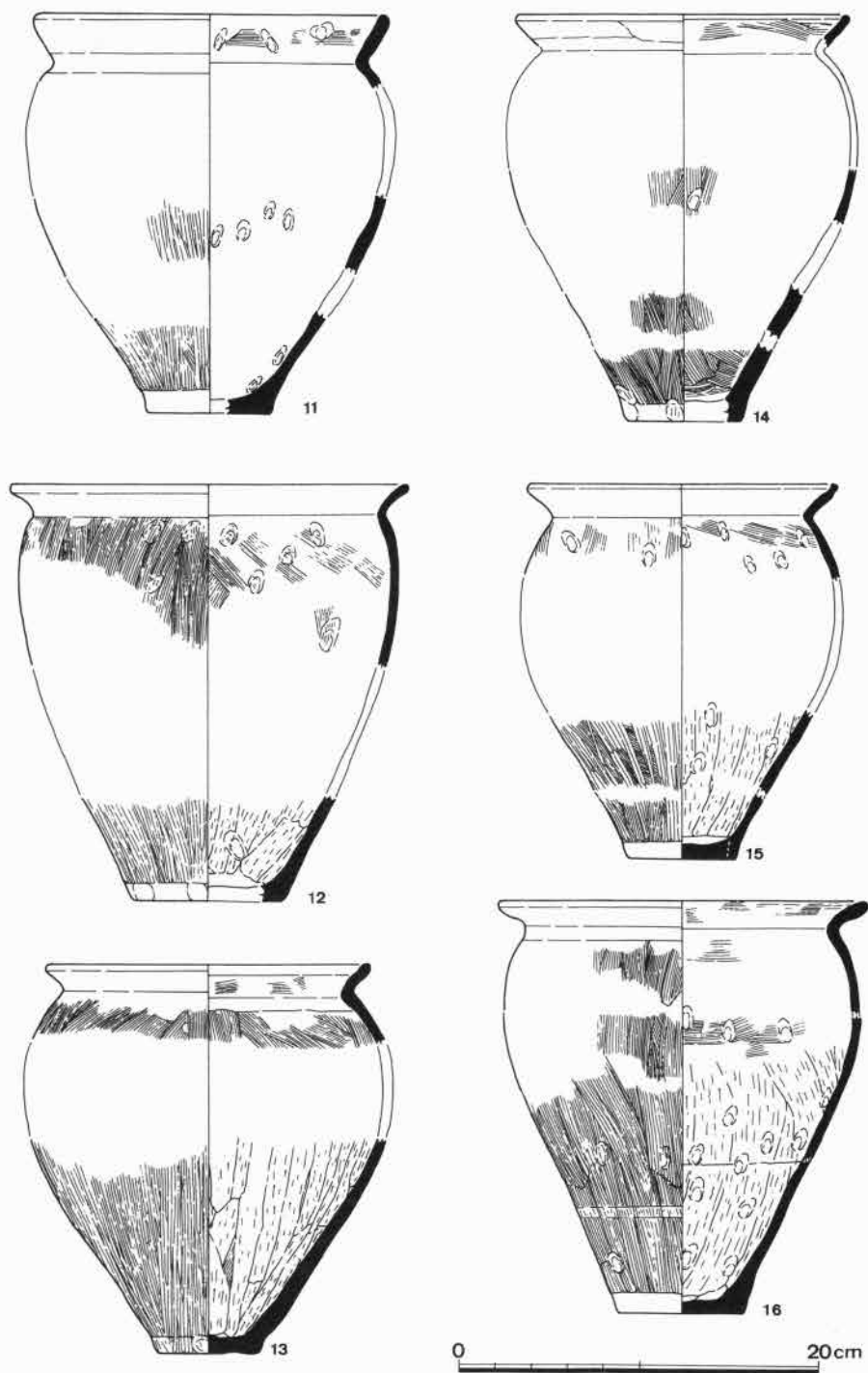
奈具谷遺跡と比較すると、奈具谷S D01が広口壺(壺A)の口縁が垂下するものがあるのに対して、奈具墳墓群ではそれがない。また、櫛描き文は奈具墳墓群では1点もなく、年代の上限に限られる。むしろ、平成2年度調査の奈具岡遺跡の土器様式に近い。ここでは仮に、弥生第Ⅲ期新段階の奈具岡遺跡(平成2年)併行で、奈具谷S D01の下限よりは古い様式であると考え。もっとも、水差や高杯など、一部に弥生Ⅳ期に下るものもある。将来的に、詳細な議論が必要であろう。

②石鏃その他(第26図・図版第16)

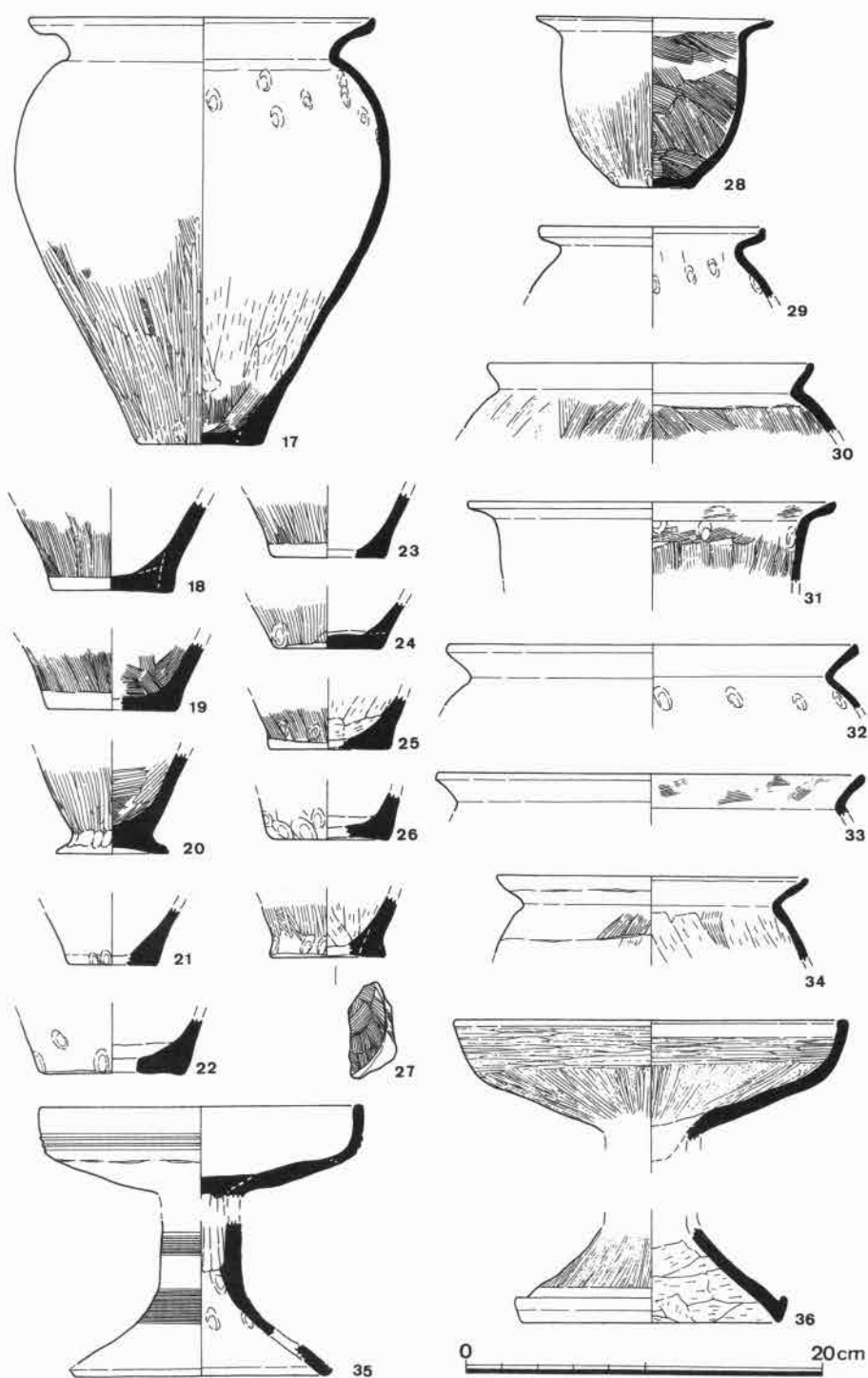
サヌカイト製の凸基式石鏃が1点がある(第26図)。先端を欠失し、非常に薄い。重さは4gである。これ以外に石英片(図版第16-1・2)、緑色凝灰岩片があり、玉の原材である可能性があるが、亀裂が多く質のやや劣るものである。



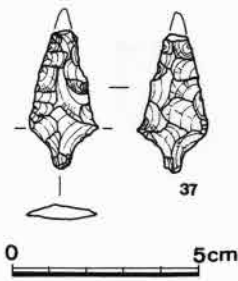
第23図 奈具墳墓群出土遺物実測図(1) (1/4)



第24図 奈具墳墓群出土遺物実測図(2) (1/4)



第25図 奈具墳墓群出土遺物実測図(3) (1/4)



第26図 奈具墳墓群出土遺物
実測図(4) (1/2)

(3)まとめ

奈具墳墓群の調査では、墳丘墓、方形周溝墓、陪葬墓という3つの様式の異なる弥生墓群が確認された。また、土器の破碎供献と標石など、埋葬法の詳細がある程度、判明した。丹後地域では、弥生前期末に峰山町七尾遺跡^(注18)で墳丘をもった弥生墓が報告されているが、奈具墳墓群のように、群集した例はあまり知られていない。唯一、峰山町に所在するカジヤ遺跡^(注19)が奈具墳墓群より若干新しいものの、近似する例といえ

付表3 出土土器観察表

番号	器種	底・口径	外面調整	内面調整	色調	胎土	出土位置	備考
1	広口壺	25.5		指頭圧痕	灰白	石	1号墓第4主体	竹管文・貼付突帯
2	広口壺	26.0	ハケ	指頭圧痕	灰褐	石・長	1号墓北東斜面	竹管文・貼付突帯
3	壺肩部	24.5		指頭圧痕	灰褐	石・長	1号墓北東斜面	肩部
4	無頸壺	30.0	ハケ	ハケ	灰褐	石	1号墓北東周溝	黒斑あり
5	広口壺	26.5			黄褐	長	3号墓第1主体	端部に凹線
6	壺底部	8.8	下端ナデ		灰白	長	6号墓棺蓋上	底部穿孔
7	短頸壺	7.8	ハケ	上部ハケ	灰褐	石・長	4号墓周溝内	黒斑あり・スス付着
8	水差	14.5	ハケ	口縁ケズリ	灰褐	石・長	3号墓北東周溝	口縁抉り
9	水差	11.0	ハケ	指頭圧痕	灰褐	石・長	1号墓北西斜面	口頸部に凹線
10	水差	11.5	ハケ	ハケ	赤褐	石	1号墓南西斜面	粗いハケ
11	甕	20.0	ハケ後ミガキ	ナデ	灰褐	長・雲	1号墓第4主体	下端部にナデ
12	甕	21.5	上ハケ下ミガキ	上ハケ下ケズリ	黄褐	石・長	2号墓第6主体	下端部にナデ
13	甕	17.5	上ハケ下ミガキ	ハケ後ケズリ	黄褐	石	2号墓第4主体	長いミガキ
14	甕	18.5	ハケ	ハケ	黄褐	雲	1号墓第2主体	口縁ケズリ
15	甕	16.5	ハケ後ミガキ	上ハケ下ケズリ	灰褐	石	1号墓第2主体	使用痕なし
16	甕	19.0	ハケ	ケズリ後ハケ	灰褐	石・長	2号墓第3主体	下端部にナデ
17	甕	7.0	ハケ後ミガキ	ケズリ後ハケ	黄灰	雲	4号墓周溝	使用痕なし
18	甕底部	7.0	ハケ	風化	黄灰	長	2号墓第1主体	底部円盤充填
19	底部	7.0	ハケ	ハケ	黄褐	石	2号墓第3主体	底面にもハケ
20	甕底部	6.0	ミガキ	ハケ後ミガキ	黄灰	雲	3号墓北東周溝	底部ケズリ
21	甕底部	4.9			黄灰	長	5号墓周溝内	
22	壺底部	8.3	指頭圧痕	風化	灰褐	長	6号墓棺蓋上	底部穿孔
23	甕底部	6.2	ミガキ		黄褐	長	1号墓北東周溝	下端ナデ
24	甕底部	6.0	ミガキ		黄灰	石	3号墓北東周溝	板状底部
25	甕底部	7.0	ハケ	ケズリ	黄灰	長	3号墓北東周溝	

26	甕底部	7.0	指頭圧痕		黄灰	石・長	3号墓第2主体	
27	甕底部	6.5	ミガキ	ケズリ	黄灰	長・雲	7号墓主体部中	底部ハケ
28	甕	3.9	ハケ	ハケ	赤褐	石	6号墓棺蓋上	くぼみ底
29	甕口縁	12.5	風化	指頭圧痕	灰白	石・長	1号墓南東斜面	端部つまみ上げ
30	甕口縁	18.0	ハケ	ハケ	黄灰	石・長	1号墓南東斜面	
31	甕口縁	20.5	風化	ハケ	灰褐	雲・長	1号墓北東周溝	面を持つ
32	甕口縁	22.5		指頭圧痕	黄灰	雲	2号墓第1主体	面を持つ
33	甕口縁	23.5	ハケ		黄灰	石	2号墓北東周溝	面を持つ
34	甕口縁	17.5	ハケ?	ハケ後ケズリ	黄褐	石・長	3号墓北側周溝	接合痕あり
35	高杯	18.0	櫛描き文	脚シボリ痕	赤褐	石	6号墓棺蓋上	円盤充填
36	高杯	21.5	ミガキ	ミガキ	黄褐	石	6号墓棺蓋上	円盤充填

る。この一方で、奈良地区では、丹後の弥生中期後半以後に特徴的な貼り石墓が調査されている。^(注20)これが、奈良墳墓群のように、貼り石を持たない弥生墓と階層的な差が認められるのか、類例の増加を待って判断されるべきである。さらに、後期初頭になると、大宮町三坂神社墳墓群例のように、豊富な副葬品を納めたものが出現する。弥生中期の「墳丘墓」がいかなる系譜で出現し、後期以降の墓に継続するのか、丹後の地域性と弥生社会の構造を見据えた議論が待たれている。

4. 奈良古墳群

(1)はじめに

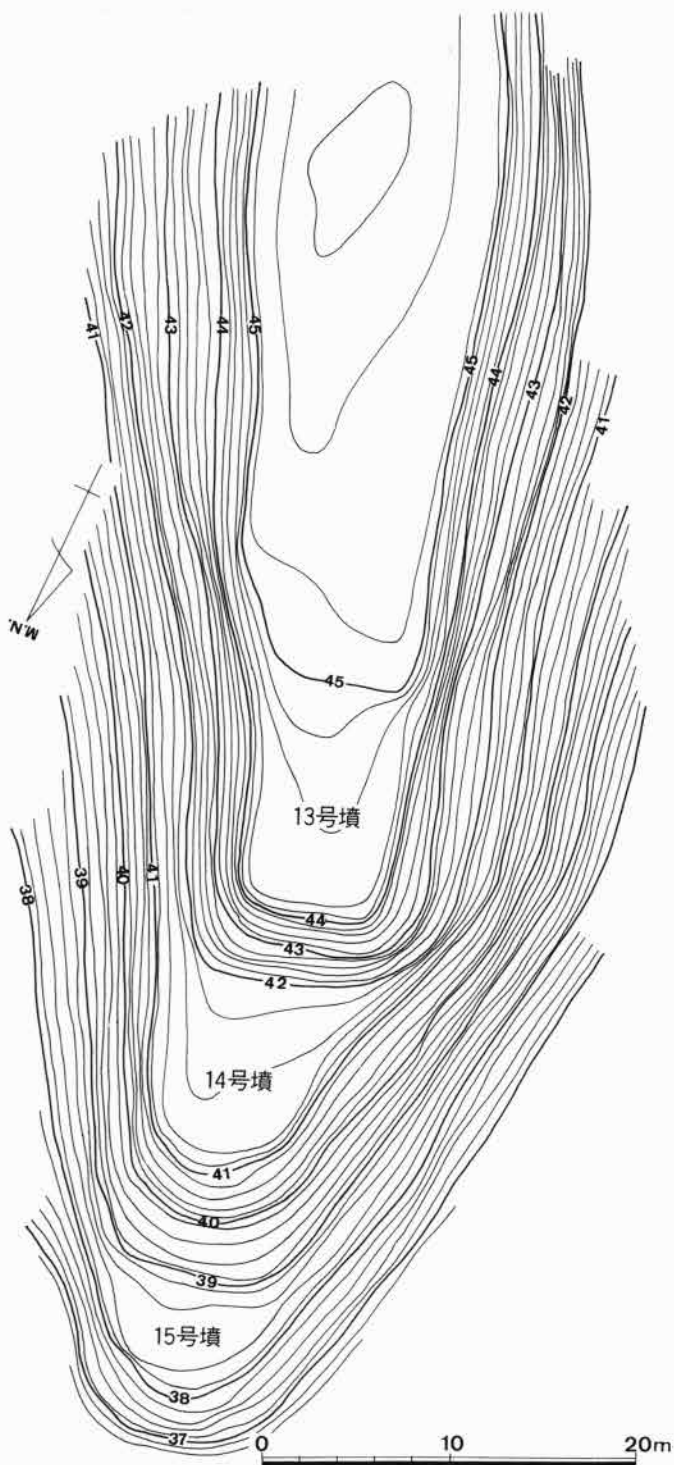
奈良13～15号墳群は、奈良墳墓群の南西100mの丘陵端部に築かれた古墳群である。奈良地区の古墳の調査では、昭和60年度に奈良谷1～3号墳(木棺直葬墳)が発掘調査され、今年度には奈良岡南5号墳で終末期の横穴式石室が判明し、^(注22)中期～後期の古墳は知られている。しかし、奈良岡遺跡の第5次調査では、弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土しており、^(注23)前期古墳の存在が予測されていた。今回、発掘調査を実施した13～15号墳は、奈良地区で初めて確認された前期古墳である。奈良地区の古墳は、竹野川の沖積地に臨むものが新しく、谷奥のものほど古い傾向がある。これらの古墳と同時期の集落の存在は、まだわかっていない。

(2)調査概要

古墳群は、地山を階段状に整形して築かれている(第27・28図)。墳形は、こ

付表4 奈良古墳群規模一覧表()内は木棺規模

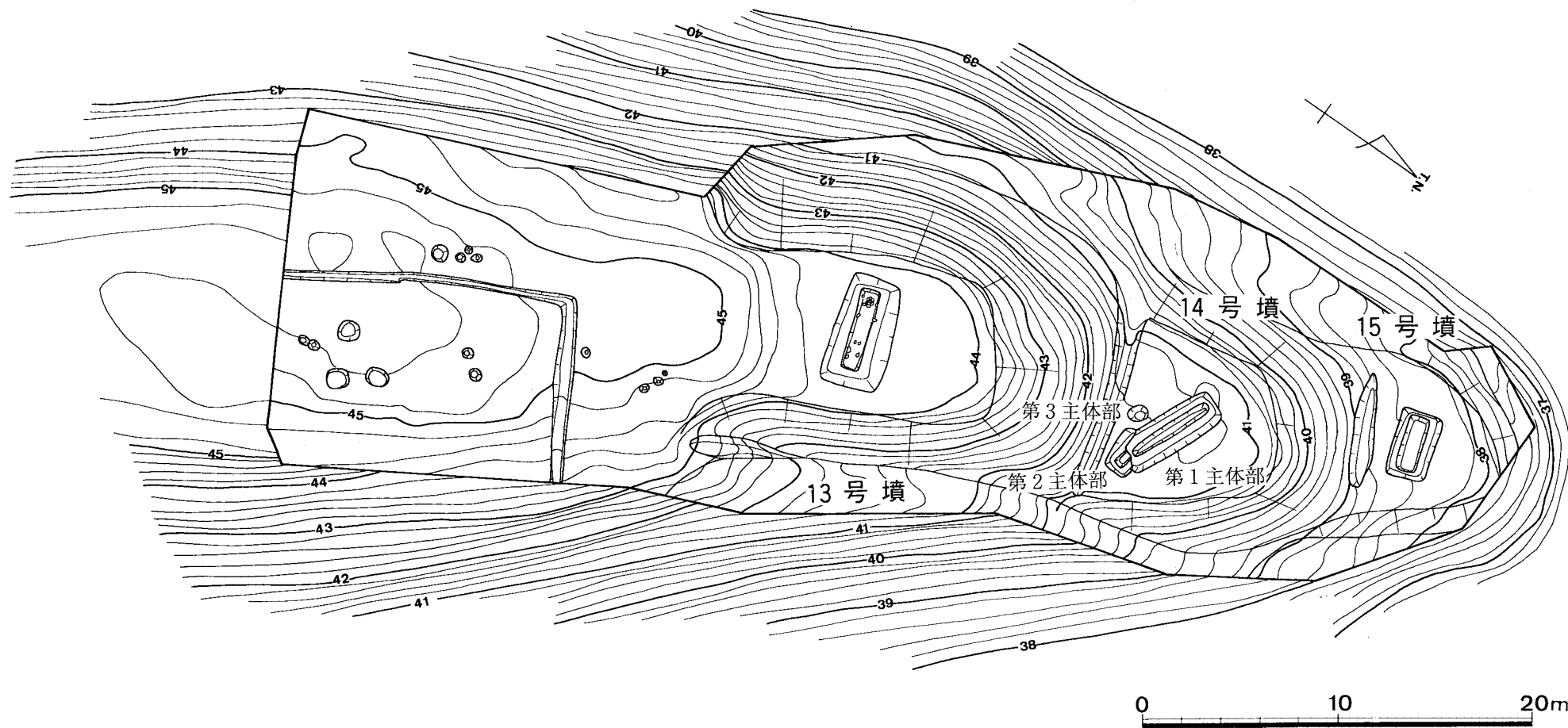
	長さ	幅	高さ	棺形式
13号墳	20.0	15.5	3.0	
主体部	5.6(4)	2.8(0.8)	0.6(0.3)	箱形
14号墳	13.0	12.5	2.0	
第1主体	5.5(4.6)	2.0	0.4	割竹形
第2主体	2.3(0.7)	1.2(0.6)	0.3(0.2)	箱形
第3主体	径1.6		0.5	甕棺
15号墳	8.0	8.5	1.0	
主体部	3.5(2.8)	1.9(1.2)	0.3	箱形



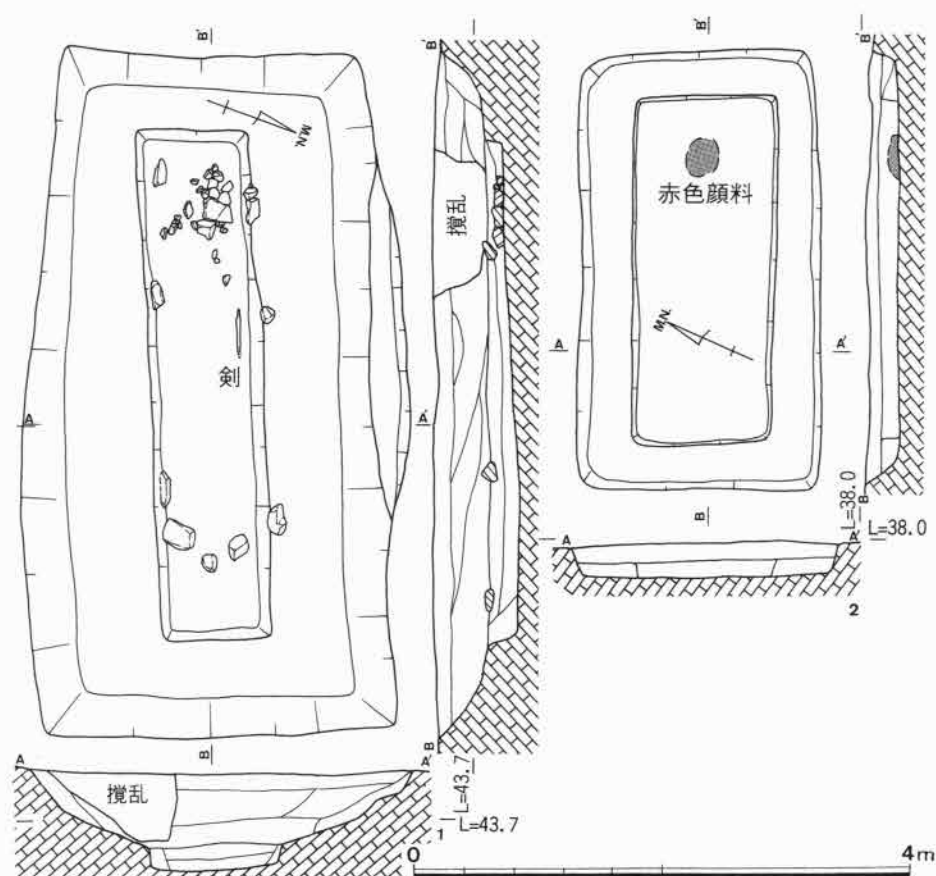
第27図 奈具古墳群調査前測量図(1/400)

では便宜的に方墳と呼ぶが、このような階段状の古墳は弥生後期以来の丹後に特徴的な古墳である。なお、付表4に古墳と主体部の規模を示した。

13号墳(第29図)最高所に位置する古墳で1基の主体部がある。南側には自然丘陵が続くが、尾根上方との区画溝は掘られない。礫を多く含む地山を削り出して、長方形の墳丘を造る。主体部は二段墓壇に箱形木棺を直葬する。主体部の主軸はN111°Wである。木棺は、側板や蓋を地山の礫で押さえたようで、拳大の礫が対称的に、あるいは底に転落した状況で検出された。これは、木棺が現地で組み立てられた可能性を示すと考えられる。兵庫県入佐山3号墳に類例がある。



第28図 奈具古墳群調査後測量図(1/300)

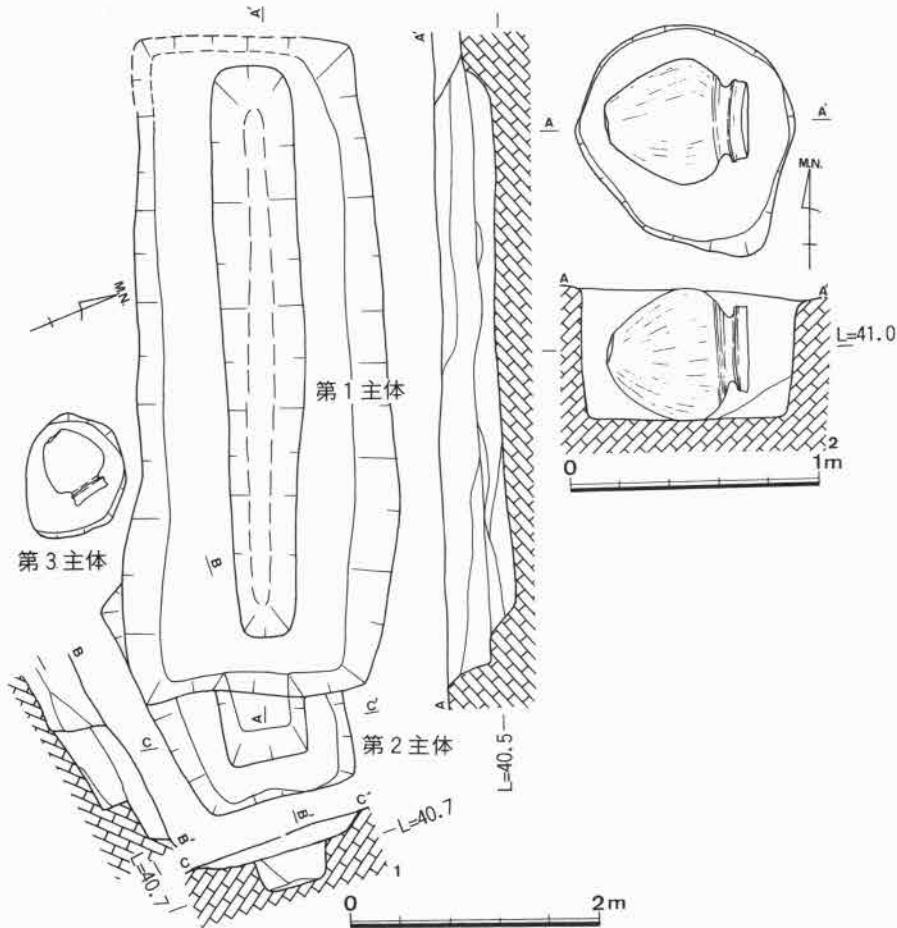


第29図 奈具13・15号墳主体部平面・断面図(1/60)

1. 13号墳 2. 15号墳

また、頭部と推測される付近には、人為的な集石があり、頭を受ける枕としての用途が考えられる。したがって、この木棺は底板を持たない型式であった可能性がある。遺体は西頭位で納められ、腰部付近に剣(3)が佩用状態で副葬されていた。これ以外に副葬品はない。

14号墳(第30図) 13号墳とは幅1m程度の溝で区画された方墳で、3基の主体部がある。花崗岩の岩盤を削り出して、13号墳よりも方形の墳丘を造っている。また、区画溝は東側では閉じている。この溝内から、壺と推定される土器片(1)が出土しているが、極めて小片であって、確実に14号墳に伴うものかどうかは不明である。第1・2主体部は、木棺を納めたものであり、第3主体部は甕棺墓である。第1主体部は、2段墓壇に割竹形木棺を直葬するもので、主軸はN67°Wである。木棺部分は、淡橙褐色のきめの細かな土に置き換わっていた。木棺は、西側幅が0.6m、東側幅が0.4mと差があり、頭を西に向けて遺体



第30図 奈具14号墳主体部平面・断面図

1. 第1・2主体部(1/60) 2. 第3主体部(1/30)

を埋葬したと考えられる。また、墓壙1段目のレベルでは、ごく薄い炭層が検出されており、おそらく、棺蓋を閉めた時点で、火を使用した儀礼行為の存在が推測される。副葬品はない。第2主体部は、第1主体部の東側で小口部のみが検出されたが、大半を第1主体部によって切られており、第1主体に先行して築かれたことがわかる。ただし、3方のコーナーが確認できるので、大型の主体部ではないことがわかる。2段の墓壙に箱形木棺を直葬しているが、副葬品は出土していない。第3主体部は、径1.6mの円形土壙に甕棺(2)を納めたものである。地山を掘り込んだ土坑で、置き土は認められなかった。底部は焼成後に破碎されているが、ほぼ完形で検出された。口縁部を東に向けている。甕棺内には肩部付近まで、地山の花崗岩バイラン土が詰まっていたが、その中には人骨や副葬品は検出されなかった。

15号墳(第29図) 14号墳とは幅1mほどの溝で区画された方墳であり、1基の主体部を

持っている。墳丘北側は流れていて、不整形な形状を呈している。地山を削り出して造られている。これより下方は急斜面となり、古墳の可能性のある平坦面はない。区画溝は両側が閉じられて、無遺物であった。主体部は2段墓壇であり、13・14号墳と比べて幅広で短い。箱形木棺を直葬するが、かなり上面が削平されている。主軸はN66°Wである。棺底の東寄りには径20cmの範囲にわたって赤色顔料の集積^(J24)があり、東頭位で埋葬されたことが推測される。

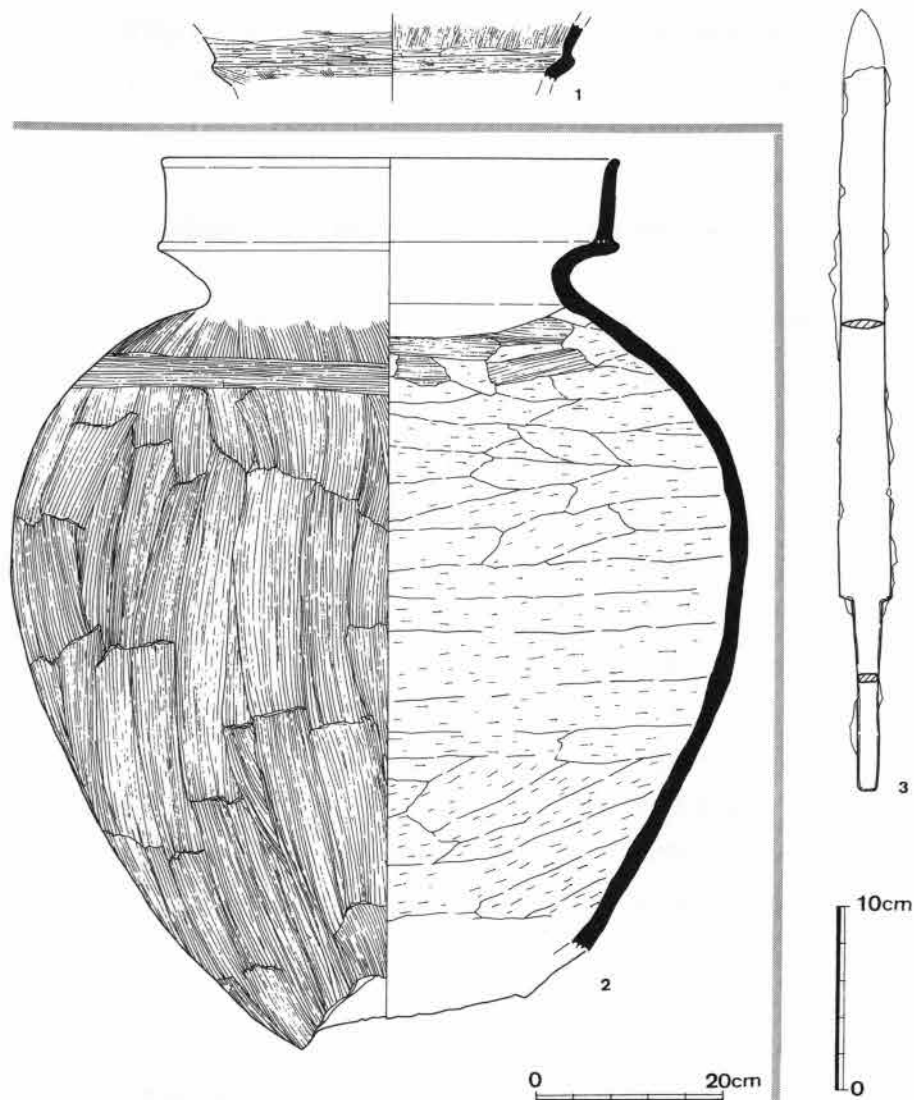
(3) 出土遺物(第31図)

1は、ハケで調整し、横方向のミガキで仕上げている。石英粒を含む暗褐色の胎土で、肌理が細かい。精製の土器である。器形は小片のため不明であるが、壺の可能性はある。2は、甕棺に用いられた甕で、口縁部径48cm・高さ95cm・胴部最大径78cmを測る。底部は、焼成後に外側から穿孔されたようである。明橙褐色の粗い胎土で、少量の石英・長石粒を交える。埴質に近い印象を与える。外面は、8本/cmの細かい縦ハケで調整し、肩部に1条の横ハケをめぐらせる。内面は、底部付近を上方に削り上げ、体部上半は向かって右回りのケズリを行う。肩部内面は横ハケによって仕上げている。3は、鉄剣で剣身長38cm・剣身幅3cm・茎長10cm・茎幅1cmを測る。鞘あるいは布巻きの痕跡がなく、抜き身のまま副葬されたと思われる。

2の土器は、体部最大径が上半にあり、端部をシャープに作り出している点に古相を指摘できるが、横ハケを持ち、ケズリも口頸部から若干下がっていることを考えると、前期中頃を前後する時期と考えられる^(J25)。また、鉄剣は茎部が剣身に対して細長い特徴^(J25)があって、これは、前期前半の古墳に副葬された剣とは異なっている。

(4) まとめ

奈良13～15号墳は、前期中頃に築かれた古墳群である。この調査では奈良地区の古墳時代前期の墳墓の一端を、はじめて知ることができた。ここでは、奈良墳墓群との墓制の比較によって、同一集団内の弥生時代と古墳時代の埋葬法の特徴が明らかになった。墳墓の規模は、弥生時代の方が大型であるが、墓壇や棺の規模は古墳時代の方がまさっている。図式的にいうならば、弥生時代は格差のない埋葬法が集まった結果、大型の墳丘が築かれるのに対して、古墳時代では一古墳への埋葬が限定され、むしろ木棺周辺の儀礼が重視されるように変わるようだ。ただ、木棺の規模が大きくなる時期がいつからか、今後の調査で明らかになっていくであろう。もっとも、副葬品自体は、きわめて少なく、階層的には低い集団の墓域と見ざるを得ない。奈良墳墓群を築いた単位集団が、奈良古墳群の築造主体へとつながるのか否か、奈良地区における発掘調査の進展にしたがって、明らかにされるべき問題であろう。ほぼ、同一地域における2つの墓域の調査によって、弥生・古墳時



第31図 奈具古墳群出土遺物実測図

代の埋葬法の変遷について興味ある事例を提示したといえよう。

(河野一隆)

注1 田代 弘・増田孝彦ほか「(1)奈具岡遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注2 調査にあたっては、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所、京都府教育委員会、弥栄町教育委員会など、関係諸機関にご協力いただいた。また、都出比呂志氏、石野博信氏、萩原儀征氏、赤沢徳明氏、松川雅弘氏、中川 寧氏には、現地並びに本報告作成時にご指導いただいた。

注3 釋 龍雄・林 和廣「奈具遺跡発掘調査報告書」(『弥栄町文化財発掘調査報告書』第1集

- 弥栄町教育委員会) 1972
- 注4 奥村清一郎・林日佐子「奈具遺跡第3次発掘調査報告書」(『弥栄町文化財調査報告』第4集 弥栄町教育委員会) 1986
- 注5 注1と同じ。
- 注6 田代 弘「(4)奈具谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注7 注1文献 29～31頁
- 注8 北西側の削平は山道の造成によるものだが、この中から須恵器平瓶が出土した。だが、この時期の遺構はなく、調査地外の存在を示唆している。
- 注9 弥生時代の墳丘の盛り土方法は、一瀬和夫氏が論じている。
一瀬和夫「方形周溝墓・方形台状墓・そして古墳—方形周溝墓の墳丘立面性を中心として」(『末永先生米壽記念 獻呈論文集』乾 末永先生米壽記念会) 1985
一瀬和夫「第4節 墳丘墓」『原始・古代日本の墓制』 1991
- 注10 弥生時代の陪葬墓の定義は難しい。しかし、兵庫県玉津田中遺跡などに類例があり、溝内埋葬として注意され始めている(岩松 保「溝内埋葬と方形周溝墓」『究班 埋蔵文化財研究会15周年記念論集』 1992)。奈具墳墓群では削平のために墳裾と周溝が不明なため、厳密な陪葬墓とはいえないが、6・7号墓は区画施設がなく、大型墓(2号墓)に近接する点から陪葬墓としたい。
- 注11 土器破砕供献は、松井敬代氏が注意し、丹後では肥後弘幸氏が整理している。
松井敬代「破砕土器の埋納について—豊岡市神美地域を中心として—」(『但馬考古学』第6集 但馬考古学研究会) 1991
肥後弘幸「墓壙内破砕土器供献—近畿北部弥生墳墓土器供献の一樣相—」(上)・(下)(『みずほ』第12・13号 大和弥生文化の会) 1994
- 注12 瀬戸谷皓・宮村良雄・松井敬代・大澤由美『駄坂・舟隠遺跡群』 豊岡市教育委員会 1989
- 注13 肥後弘幸「豊谷墳墓群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992
- 注14 玉井 功・小野久隆「第1節 遺構」(『巨摩・瓜生堂』—本文編— (財)大阪文化財センター) 1981 293頁
- 注15 注3と同じ 47～48頁 第31図
- 注16 注6と同じ 143～161頁
- 注17 注6と同じ 184～187頁
- 注18 田中光浩「扇谷遺跡発掘調査報告書」(『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』第12集 峰山町教育委員会) 1988 第7章第4節
- 注19 増田信武・田中光浩・林 和廣「カジヤ遺跡発掘調査報告書」 峰山町教育委員会) 1978
- 注20 野島 永「京都府北部における貼り石方形墳丘墓について」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 注21 大宮町教育委員会「有明古墳群・三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群 現地説明会資料」

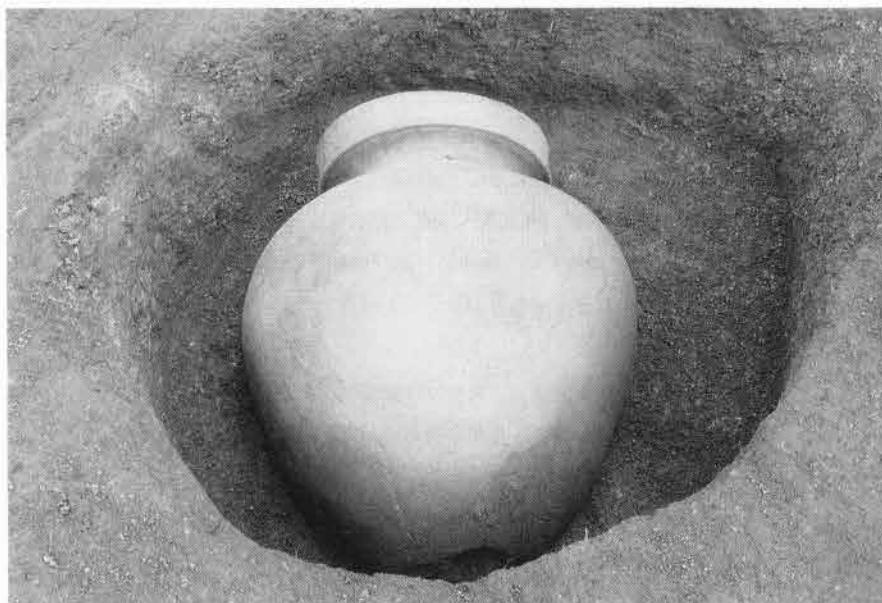
(『北部マスタービレッジ用地造成に伴う埋蔵文化財調査第2回現地説明会資料』) 1993

注22 奈具岡南古墳群は、平成6年9月9日～12月22日に試掘調査を実施した。この内、5号墳は7世紀前半の横穴式石室であることがわかった。成果については来年度の本調査をまって、正式に報告したい。

注23 田代 弘「奈具岡遺跡第5次調査地点試掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第59冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注24 肉眼ではベンガラと推測される。

注25 丹後での土器編年は確立していないが、あえて畿内の型式名で言えば、定型布留段階と考えている。



奈具14号墳第3主体部土器棺出土状況(西から)

3. 奈具岡南古墳群

1. はじめに

奈具岡南古墳群は、奈具岡団地造成工事に先立ち、実施したものである。

奈具岡団地造成工事に伴う発掘調査は、平成4年度に奈具谷・奈具岡遺跡の調査を実施しているが、今回の調査地は、奈具岡遺跡の南西側の丘陵地にあたり、5基(5・11～14号墳)の古墳と1か所の試掘地が対象となった。調査は、年の瀬も押し詰まった天候不順の中、試掘対象地を奈具岡古墳群として着手し、遺構の有無の確認を行った。その後、西側の5号墳の調査を実施し、北側の11号墳の試掘を行い主体部を確認した後、表土を除去するという方法を採用した。その結果、試掘対象地は自然地形であり、5号墳は横穴式石室を内部主体とし、11号墳は木棺直葬墳であることが明らかとなった。

2. 調査概要

ここでは、主体部の調査が終了した5号墳についてのみ概要を記す。

調査前の状況は、採石によるためか南西側が大きく削平され、古墳周辺に少量の石材が散乱していた。一辺約13mを測る方墳で、墳丘東・西側に浅い溝を設けている。埋葬施設は、南側に開口するが石室西側壁、奥壁の一部、羨門付近が削平され存在しないため石室の型式は不明であるが、残存状況からすると無袖式の横穴式石室であると考えられる。石室は、残存長2.5m・同幅約0.9m・高さ0.6mの規模を測る。閉塞石は残存しない。使用されている石材は、付近一帯に産出している花崗岩・安山岩の比較的表面の整った大きめの石材を用いている。側壁では、基底石5石が残存し一部2段残る。奥壁では、基底石の目地に詰めていたと思われる石材が残っていた。

出土した遺物は、装身具としては金環1、土器類では須恵器(杯身2・杯蓋1・甕1)・土師器(杯3・高杯1)など総数9点が出土した。

5号墳は、出土した遺物から7世紀前半に築造されたと推定される。だが、単次葬であったかどうかは不明と言わざるを得ない。

弥栄町内においては、横穴式石室を内部主体とする古墳はほとんど認められず、このような中で、終末期の古墳と考えられる調査例は少ないが、奈具岡南5号墳の調査は横穴式石室の変遷をうかがう上で、重要な成果と言えよう。(増田孝彦)

4. 黒部製鉄遺跡(石熊地区)平成5年度

1. はじめに

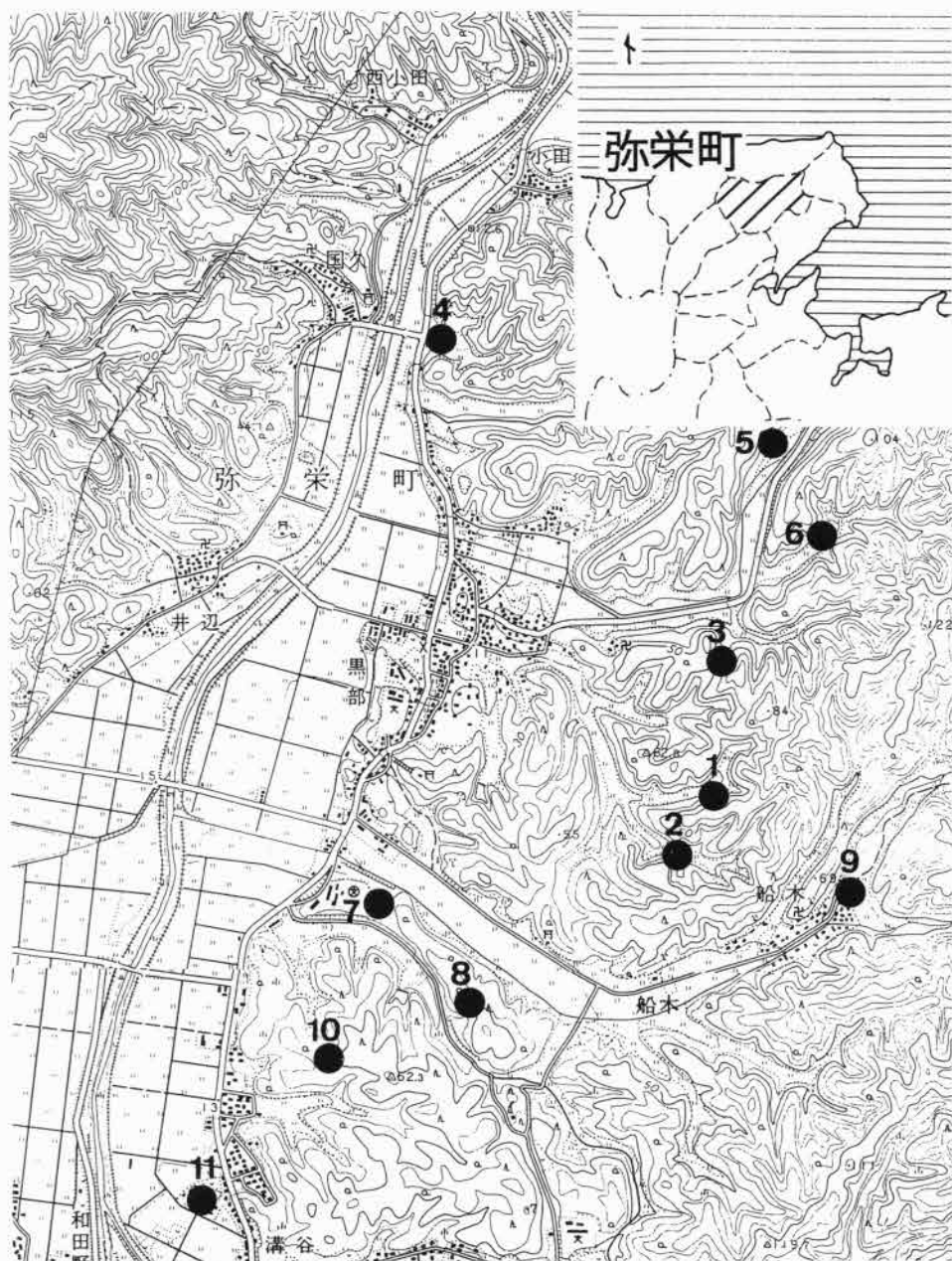
黒部製鉄遺跡は、京都府竹野郡弥栄町黒部に所在する。遺跡は、竹野川右岸の狭長な谷奥部にあり、現在の集落より1kmほど谷奥に入り込んだところである(第32図)。発掘調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の黒部団地造成工事に先立って実施した。この遺跡は、『京都府遺跡地図』には記載されていないが、周辺で鉄滓が表採されたことなどから、製鉄遺跡の存在が予測されていた。平成5年度に、京都府教育委員会によって対象地の試掘が行われ、炭窯や製鉄炉の存在が明らかとなり、当調査研究センターが平面的な発掘を実施することになった(第33図)。平成5年度は、石熊地区の谷奥に位置する製鉄炉と谷口部の炭窯を中心に調査区を設定し、3基の登り窯状炭窯と2基の製鉄炉を検出した。期間は平成5年11月24日～平成6年2月9日に及び、調査面積は約1,000m²である。平成6年度は、石熊地区の南東側に位置する仲谷地区の内、A・B・E・Fの4地点を調査し、8基の製鉄炉と28基の炭窯を検出した。期間は平成6年4月18日～平成7年3月3日に及び、調査面積は約8,000m²である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員増田孝彦、調査員岡崎研一、河野一隆が行った。関係諸機関並びに調査参加者には多大な労苦をかけたことに深謝したい。

2. 調査概要

(1) 製鉄炉

製鉄炉は、丘陵の張り出し部に盛り土を加え、平坦部を設けて築かれている(第34図・図版第17-(1))。ここは、かなりの削平を受け、残りのよい製鉄炉でも基礎部分の深さが20cm程度しか遺存しておらず、もう一方は完全に削平されて焼土面しか確認できなかった。前者を1号製鉄炉、後者を2号製鉄炉と呼ぶ。いずれも横置き(等高線に平行)されている。廃滓場は、製鉄炉の下方にあるが、十字方向の断ち割りのみの調査に留めた。廃滓場の基本層位は、最上層が水田ならびに床土、次に鉄滓層があって、その下層に有機質の湿地層がある。鉄滓層は、2か所の鉄滓の集積が認められ、1号炉の下方を集積1、2号炉の下方を集積2と呼ぶことにした。これは、ほぼ2つの製鉄炉に対応するものと考えられる。

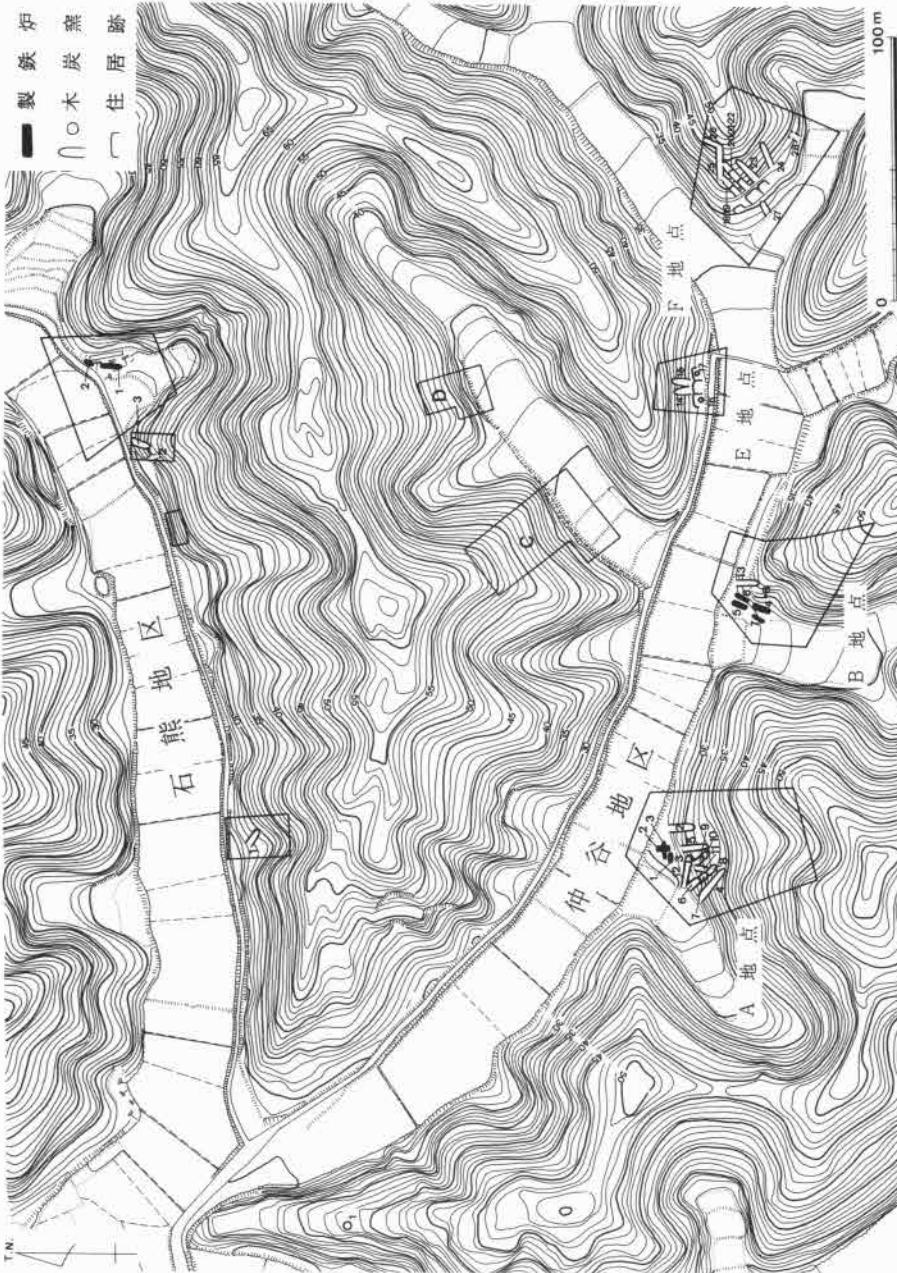
1号製鉄炉(第35図・図版第18・19)は、本体である基礎部分と排滓溝から構成される。



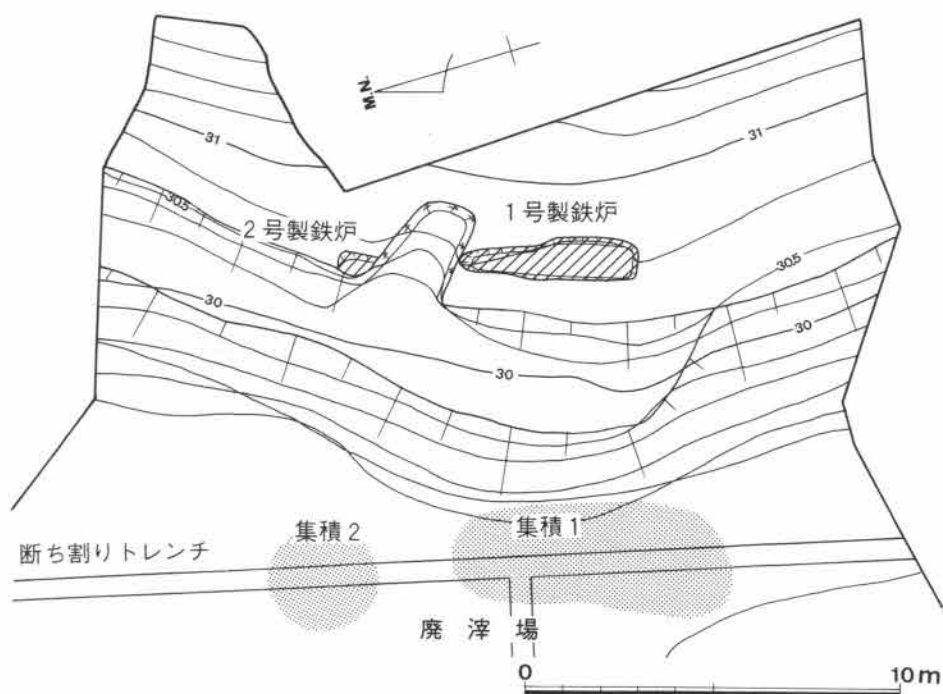
第32図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|-----------------|-----------------|----------|----------------|
| 1. 黒部製鉄遺跡(石熊地区) | 2. 黒部製鉄遺跡(仲谷地区) | 3. 糠谷城跡 | 4. 黒部銚子山古墳 |
| 5. 金谷遺跡 | 6. かせ谷遺跡 | 7. 奈具遺跡 | 8. 奈具墳墓群・奈具古墳群 |
| 9. 船木A遺跡 | 10. 奈具岡南古墳群 | 11. 丸山古墳 | |

全長3.5m・最大幅0.8mを測り、残存する深さは約20cmである。平面形は、片方だけに排滓溝が付く長方形箱形炉と考えられる。製鉄炉の築造方法は、まず花崗岩の岩盤である地山を「L」字形にカットして平坦部を設け、次に浅く断面「U」字形に窪ませた部分を中心として、基礎を造っている。この窪んだ部分が製鉄炉の上部構造の炉床部分に対応する



第33図 黒部製鉄遺跡調査地位位置図

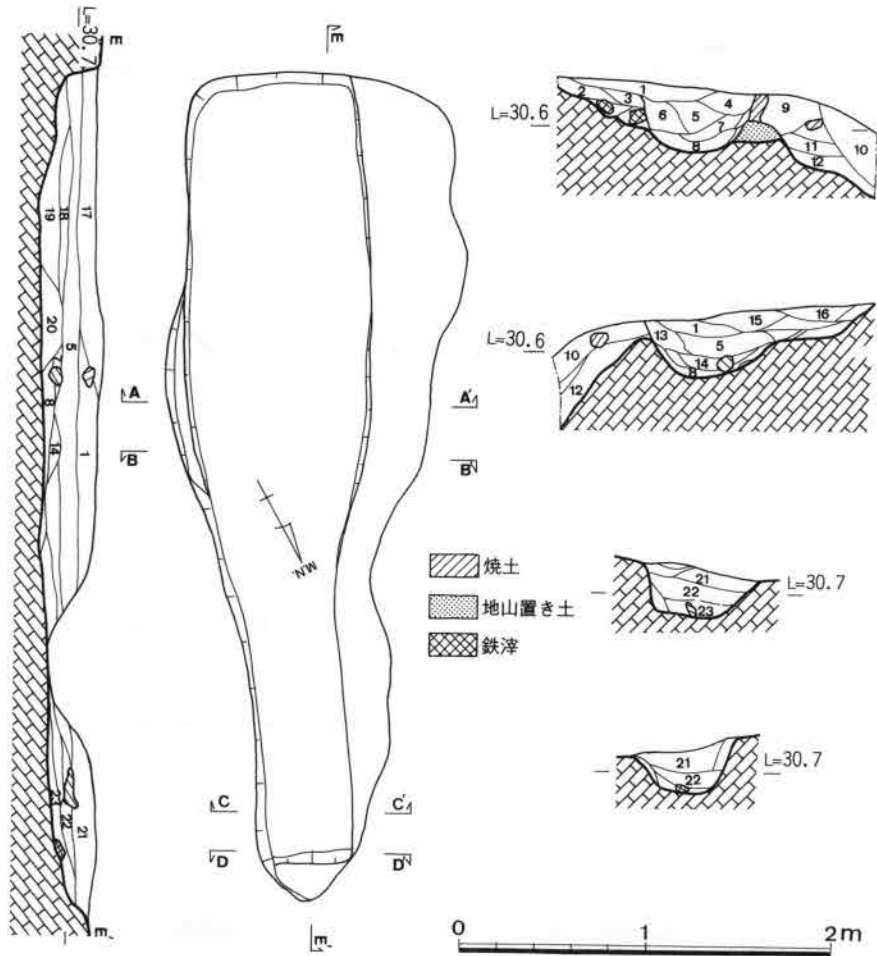


第34図 石熊1・2号製鉄炉周辺測量図(1/200)

と考えられる。ここは、木炭粉・鉄滓・砂・砂鉄などを充填し、突き固めて防湿施設を造る。また、斜面下方は盛り土によって補強を行うが、ここにも炭や鉄滓が含まれている。これらは、1号炉の操業に先行するものだから、2号製鉄炉の廃滓や廃炭を利用したと考えられる。この平坦面が炉操業時の作業面と考えられるが、送風施設や建物の痕跡は認めることができなかった。炉の本体の上部構造は不明な点が多いが、廃滓場の炉底滓から判断すると、内法が長さ1.0m以上、幅0.4mの規模が復原できる。炉壁は、スサ入りの粘土で造られ、約20cmを測るものが多い。ただし、スサとともに木炭を混入している点は、石熊地区の製鉄炉の特徴である。なお、ガラス材が人頭大の花崗岩に付着したものがあって、炉の基礎に石材を用いた可能性がある。この類例は、大宮町芋谷遺跡などで検出され、製鉄炉の防湿ならびに炉壁の心材と考えられている。

2号製鉄炉は、焼土面が長さ0.5m・幅0.3mの範囲にわたって確認されたのみで、下部構造まではほぼ完全に削平されている。ただ、1号製鉄炉とは主軸を異にする上に、1号製鉄炉の基礎部及び盛り土内の鉄滓や炭を考慮すると、1号製鉄炉に先行して築かれたと想定される。

廃滓場の調査では、炉壁を中心とした鉄滓を、コンテナ200箱程度、回収した。なお、



第35図 石熊1号製鉄炉平面・断面図(1/40)

- | | | | | |
|-------------|-------------|-------------|-----------|----------|
| 1. 淡黒褐色土 | 2. 淡黒褐色粘質土 | 3. 黒褐色炭層 | 4. 濁褐色粘質土 | 5. 暗褐色土 |
| 6. 淡黒褐色土 | 7. 暗褐色砂質土 | 8. 濁灰色砂質土 | 9. 明褐色砂質土 | |
| 10. 淡灰褐色砂質土 | 11. 暗茶褐色砂質土 | 12. 淡黒褐色粘質土 | 13. 暗褐色土 | 14. 淡黒色土 |
| 15. 淡褐色粘質土 | 16. 暗灰褐色粘質土 | 17. 淡黒褐色粘質土 | 18. 茶褐色土 | 19. 暗灰色土 |
| 20. 暗灰褐色粘質土 | 21. 淡褐色粘質土 | 22. 褐色粘質土 | 23. 黒色炭層 | |

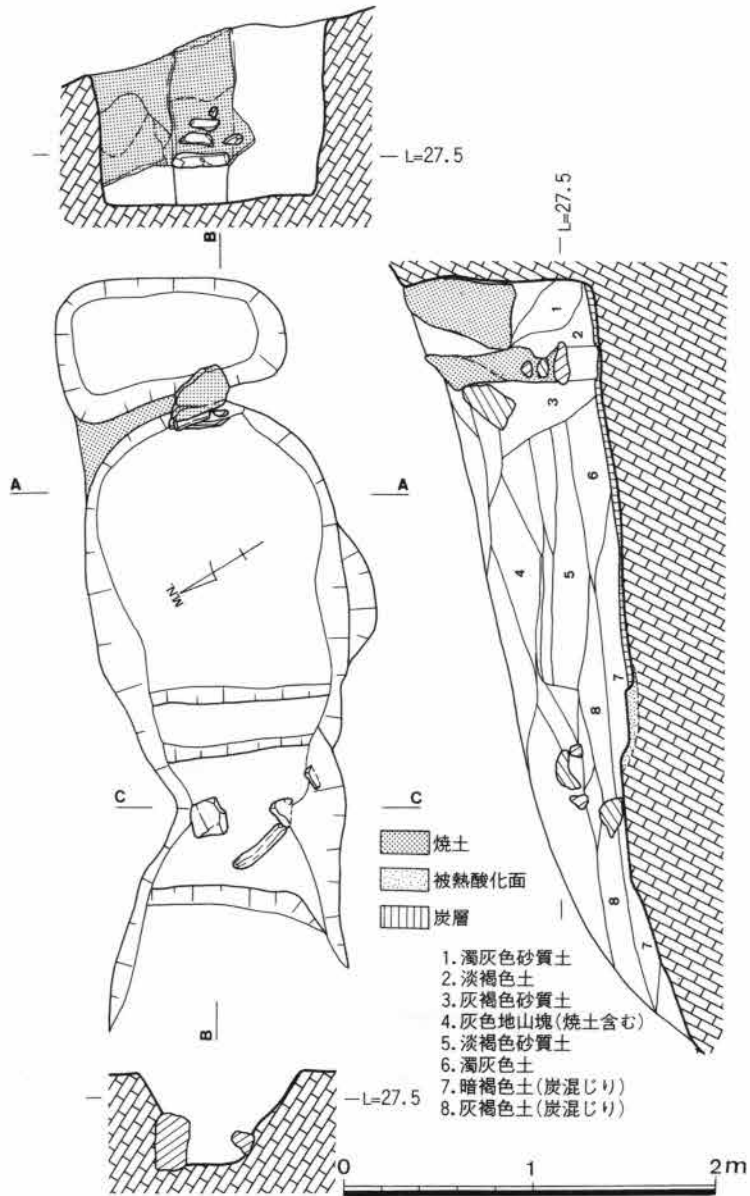
集石1から敲石(1)が、集積2の最下層から敲石(2)と土器(3・4)が出土した。この土器は、後述のように9世紀前半のものであり、2号製鉄炉の操業年代の1点をここに求めることができる。石熊地区の2基の製鉄炉は、9世紀前半を中心として、2号炉→1号炉と連続操業したと推定される。

(2) 炭窯(図版第17-(2)・図版第20・21)

今回は、3基の炭窯の調査を実施した。これらは、すべて床面傾斜をもつ登り窯状の炭窯で、このうち1基は窯体が対象地外に出ていたため、灰原のみの調査にとどめた。谷口

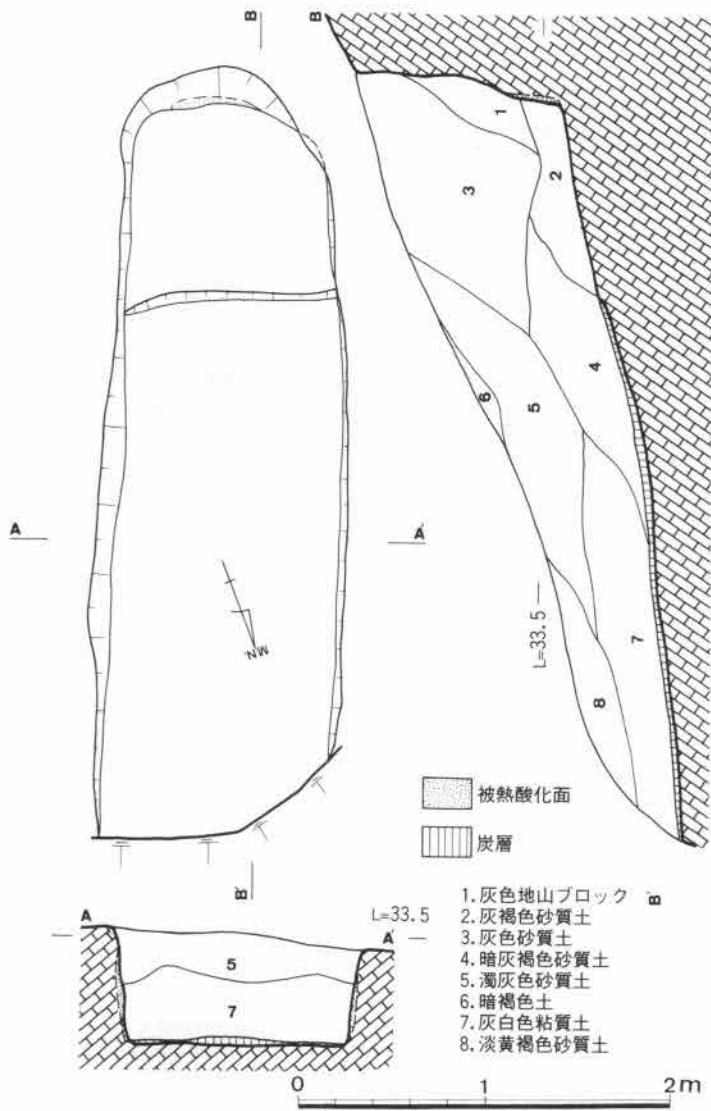
の炭窯から、
1～3号窯と
順に番号を付
けた(第33図)。

1号窯(第
36図・図版第
20-(1)・
21-(1))は、
全長4.2m・
最大幅1.5
m・残存高
1.0mを測り、
衝立状の隔壁
によって、長
さ0.7m・幅
1.25mの煙道
部が取り付く
地下式の炭窯
である。傾斜
角は約10°で
ある。床面
には厚さ5cm程
度の炭層が確
認されたが、
その下部の地
山は被熱して
いない。また、



第36図 石熊1号炭窯平面・断面図(1/40)

壁体は地山を掘り抜いたのみで、特に粘土を貼った痕跡は認められず、検出時にはほとんどが崩落していた。焚き口は、閉塞に使用されたとされる花崗岩が両側に配置され、閉塞時の粘土が遺存している。また、隔壁の最下部には石や鉄滓を用いて、煙道口が造られる。この炭窯では隔壁の半分が粘土、もう半分が地山の掘り抜きで築かれており、炭窯が改築または拡張されたことを示している。なお、焚き口や煙道から鉄滓が少量ではあるが



第37図 石熊3号窯平面・断面図(1/40)

平されている。残存部長4.0m・幅1.4m・残存高1.1mを測る地下式の登り窯状炭窯である。傾斜角は8°である。床面は被熱しておらず、厚さ5cm程度の炭層が確認された。煙道部は、天井崩落時に完全に壊れたようで、検出できなかった。また、奥壁を除き、炭窯側壁にも顕著な被熱の痕跡がなく、操業後の早い段階で崩落したことが考えられる。

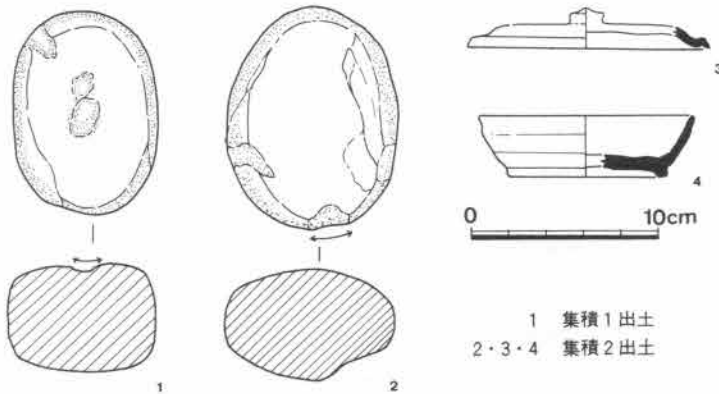
2. 出土遺物 (第38図)

鉄滓を2761.3kgを回収し、遺物は、須恵器2点、敲石2点が出土した。鉄滓の内訳と出

検出されており、木炭の製造とは直接には関連しないので、製鉄に伴う祭祀的な意味合いを持つものではなかろうか。

2号窯は、窯体が対象地外に出ているために灰原のみの掘削を行った。炉内から掻き出された木炭をコンテナ5箱程度回収したが、顕著な遺物は見られなかった。

3号窯(第37図・図版第20-(2)・21-(2))は、焚き口から炭化部の大半を農道によって削



第38図 黒部製鉄遺跡出土遺物実測図(1/4)

土位置は付表5に示した。大部分が流出滓だが、図版第23-(1)~(4)のような棒状の鉄滓が注意される。これは、棒で保土穴を刺突したために生じたものと推測される。須恵器は、杯蓋と杯身の破片だが、焼成は堅緻であり、高台が外側に踏ん張る形態で、9世紀前半のものと考えられる。敲石はいずれも1か所の叩き面を確認することができるが、用途は不明である。遠所遺跡でも敲石が出土しており、製鉄に関連した用途を推定したい。

3. まとめ

黒部製鉄遺跡(石熊地区)の調査は、竹野川右岸にも大規模な製鉄遺跡の存在を予測させるものであった。これは、左岸に位置する遠所遺跡群やニゴレ遺跡と比較すると、(1)登り窯状炭窯が多く、円形炭窯が少ない(左岸はこの比率が逆転する)、(2)炭窯と製鉄炉がごく近接して営まれていること、(3)製鉄・製炭に関する祭祀的遺構ならびに遺物が希薄なことなどの特徴がある。こ

付表5 黒部製鉄遺跡鉄滓重量表

れらが鉄生産の技術系譜の相違を示すものか、時期差かは調査の蓄積を待ちたいが、古墳時代以降、この地域では平安時代に至るまで連続と製鉄が行われたことが確認された点は、この発掘調査の成果の一つといえよう。

(河野一隆)

炉壁	561.15kg		流出滓	1594.1kg
廃滓場北側	298.35kg	集積1	218.7kg	1号炉床面 13.8kg
廃滓場南側	6.95kg	集積2	31.45kg	廃滓場北側 519.75kg
廃滓場中央	1.2kg	その他	4.35kg	廃滓場中央 27.25kg
廃滓場断割	0.15kg			廃滓場断割 18.85kg
炉底滓	606.05kg		最下層	14.35kg
廃滓場北側	289.75kg	集積1	275.45kg	集積1 564.0kg
廃滓場中央	2.9kg	集積2	32.8kg	集積2 335.95kg
廃滓場断割	0.75kg	その他	4.3kg	その他 100.15kg
鉄塊系遺物	19.4kg			
炉床面	17.4kg			
磁石ツキ	2.0kg			

5. 黒部製鉄遺跡(仲谷地区)

1. はじめに

黒部製鉄遺跡は、竹野郡弥栄町黒部小字仲谷に所在する。調査地は、石熊地区より山一つ越えた南側の狭長な谷部にあたり、遺構はA～F地点の6地点に認められた。調査は、平成6年4月18日からA・B地点から開始し、平成6年9月27日まで実施した。平成6年9月28日以降はC～F地点の調査へと移行した。調査地全体の掘削面積は、遺構周辺まで行ったため約8,000㎡に及ぶ。なお、C・D地点の本格的な調査は、平成7年度に実施することとなった。

2. 調査概要

検出した遺構は、A地点で製鉄炉3基・登り窯状炭窯12基、B地点で製鉄炉5基・登り窯状炭窯1基、E地点で登り窯状炭窯2基・伏焼式小型円形炭窯2基・竪穴式住居跡3基、F地点で登り窯状炭窯11基・竪穴式住居跡3基、合計製鉄炉8基、登り窯状炭窯26基、伏焼式小型円形炭窯2基、竪穴式住居跡6基である。この製鉄炉と登り窯状炭窯の調査数は、丹後で製鉄遺跡の調査が平成元年度より開始されてから検出した数を上回るものである。

製鉄炉は、A・B地点とも丘陵裾近くの張り出し部を削平し、平坦部を設けて築炉している。いずれも長方形箱形炉である。通常の下部構造が確認されるものと、下部構造を有していないものがあり、このような製鉄炉は珍しく、黒部製鉄遺跡以外では、竹野川左岸にあるニゴレ遺跡群で、ほぼ炉底付近の完存するものが4基ほど検出されている。

廃滓場や製鉄炉周辺からは須恵器、土師器が出土した。時期的には8世紀中頃～8世紀後半にかけてのもので、製鉄炉の操業時期を示すと思われる。

登り窯状炭窯は、大半が切り合い関係を有し、地山をトンネル状に掘り抜いたもので、登り窯状炭窯で切り合い関係を持つものは、先に操業された炭窯本体に煙道が通じる。

検出した炭窯の操業年代については、それぞれの製鉄炉に伴うものと考えられるが、灰原などから土器が出土していないので、時期を限定することはできなかった。

黒部製鉄遺跡は、竹野川右岸では最初の製鉄遺跡の調査となった。左岸に位置する遠所遺跡群や過去に調査を実施した製鉄遺跡と比較すると、さまざまな特徴が浮かび上がってくるが、後日詳しくまとめることとする。(増田孝彦)

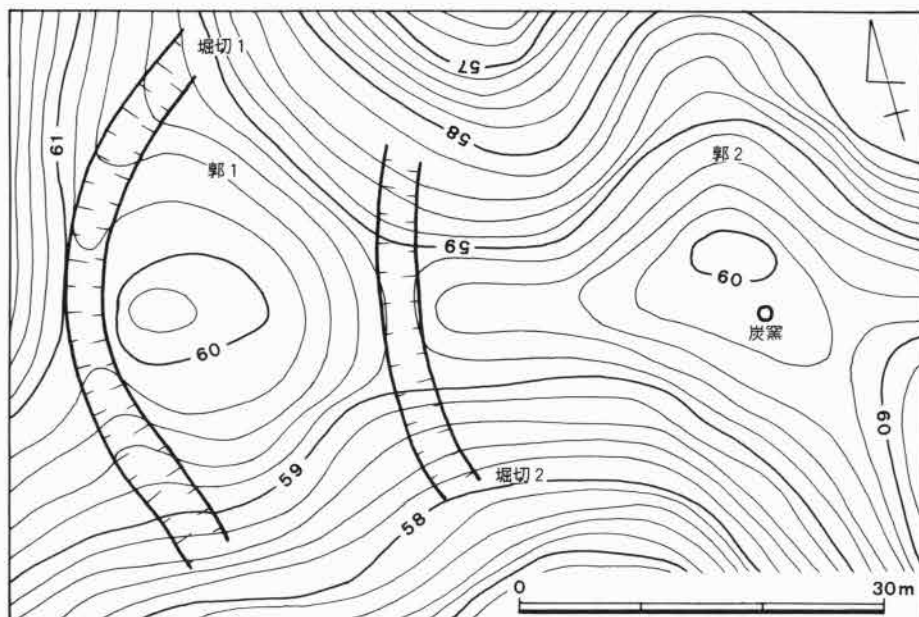
6. 糖谷城跡

1. はじめに

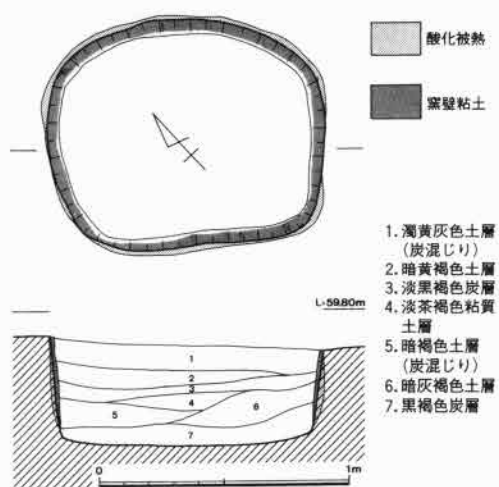
糖谷城跡は、京都府竹野郡弥栄町黒部小字糖谷に所在する。1988年度版『京都府遺跡地図』によると、本丸・郭・堀切が存在する広大な山城として記載されている。ここは、黒部団地造成に伴う幹線道路部分にあたる。ここから南側の黒部団地内では、8世紀中頃～9世紀前半にかけての大規模な製鉄遺跡の調査が行われており、造成予定地外となる北側でも、弥生時代～中世までの遺物散布地や製鉄遺跡が確認されており、調査地は遺跡の密集する中央部分でもある。幹線道路は、糖谷城跡の東端を通ることとなり、郭状の平坦部分2か所、丘陵下方までのびる堀切2か所が調査の対象となった。このうち西端に位置する堀切1に関しては、道路境界付近のため調査は実施しなかった。調査は、平成6年9月13日～12月21日まで実施した。調査面積は、約200㎡である。

2. 調査概要

調査は、当初試掘調査を行い、遺構の有無を確認し終了する予定であったが、平坦部全



第39図 糖谷城跡地形図



第40図 炭窯実測図

東限と考えられる。

郭2とした部分からは、製鉄に伴うと考えられる小型方形伏焼式炭窯1基を検出した。炭窯は、長辺約1m・短辺0.8m・深さ0.4mを測り、底面は熱を受けた痕跡が認められない。掘り込み側壁には厚さ2cm程度の粘土を貼り付けて窯壁とするが、床面までは貼られず床面より5cm上方で終わる。この粘土は、熱により赤褐色に酸化被熱を受けている。炭窯は、南側に展開する黒部製鉄遺跡とは距離がかなり離れることや、検出されている炭窯の大半が大型の登り窯状炭窯であることなどから、これに伴うものではなく北側に位置するかせ谷遺跡、金谷遺跡といった製鉄遺跡に伴う木炭窯であると考えられる。小型の伏焼式炭窯については、竹野川左岸に展開する丹後の一大製鉄遺跡として話題を呼んだ遠所遺跡群、ニゴレ遺跡に多く見られるものである。また、炭窯周辺で8世紀後半に比定される須恵器杯身の小片が1点出土し、この炭窯の時期を考える資料となった。

3. まとめ

糖谷城跡の調査では、建物跡などは検出することができなかったが、人工的な改変を受けた堀切と郭状の平坦部1か所を確認し、城の東限を押さえることができた。また、8世紀後半の可能性のある伏焼式小型円形炭窯1基を検出し、距離的にも黒部製鉄遺跡に伴うものではないと考えられることから、北側に展開する製鉄遺跡との関連が注目される。したがって、これに伴う製鉄遺跡は、8世紀後半に操業した可能性がある。

(増田孝彦)

7. 裾谷横穴・遺跡

1. 位置と環境

裾谷横穴は、京都府中郡大宮町字口大野小字裾谷に所在する。裾谷横穴・遺跡は、丹後地域最大の河川である竹野川によって形成された比較的広い沖積平野に、丘陵が最も竹野川に突出するところに所在する。周辺部は、西から東へのびる細長い丘陵が多数形成されており、これらの丘陵に挟まれた谷部分を耕作地として利用している。

次に、大宮町の歴史的環境について簡単に述べる。縄文時代の遺跡としては、縄文時代早期の押型文土器が出土した裏陰遺跡や、正垣遺跡などが知られる。弥生時代では、集落遺跡である谷内遺跡・裏陰遺跡・正垣遺跡がある。一方、墳墓としては、帯城墳墓群・左坂墳墓群・三坂神社墳墓群などがある。

古墳時代の竹野川流域では、前期末から中期中頃にかけて、丹後町の神明山古墳や弥栄



第41図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | |
|--------------|--------------|-----------------|
| 1. 裾谷横穴 | 2. 左坂古墳群・横穴群 | 3. 帯城墳墓群・大田鼻横穴群 |
| 4. 有明古墳群・横穴群 | 5. 大谷古墳 | 6. 新戸1号墳 |
| A. 枯木谷遺跡 | B. 谷内遺跡 | C. 裏陰遺跡 |
| | | D. 正垣遺跡 |

町の黒部銚子山古墳などの著名な大型前方後円墳が築造されるが、大宮町内にはこのような大型前方後円墳は存在しない。大宮町内では、古墳時代中期から後期にかけて築造される首長墓と思われる古墳には、大谷古墳(中期)や新戸古墳(後期)があるにすぎない。むしろ、この時期には、左坂古墳群にみられるような木棺直葬を主体とする小規模な古墳が多数築かれる。

6世紀末以降、横穴の築造が開始される。著名な横穴群としては、総数30基を数え、7世紀に築造の最盛期を迎え、8世紀まで造営が続けられる大田鼻横穴群をはじめ、有明横穴群・里ヶ谷横穴群・左坂横穴群(A・B支群)などがある。左坂横穴群(B支群)では、焼骨を埋納する小規模な横穴の存在が知られるが、今回調査を行った裾谷横穴でも確認されている。

このように、古墳時代から奈良時代にかけての墓については多くの調査成果があるのに対して、同時期の集落については不明な点が多い。古墳時代後期では、竪穴式住居跡8基が確認された正垣遺跡をはじめ、アバタ遺跡・幾坂遺跡などがある。また、飛鳥時代から奈良時代にかけては、竪穴式住居跡4基を確認した上野遺跡がある。さらに、多少時代が下るものとしては、奈良時代から鎌倉時代の掘立柱建物跡20棟を数え、地方官衙跡である可能性が高いとされる正垣遺跡や、奈良時代から平安時代初頭の墨書土器が発見された谷内遺跡があげられる。

(草野敦子)

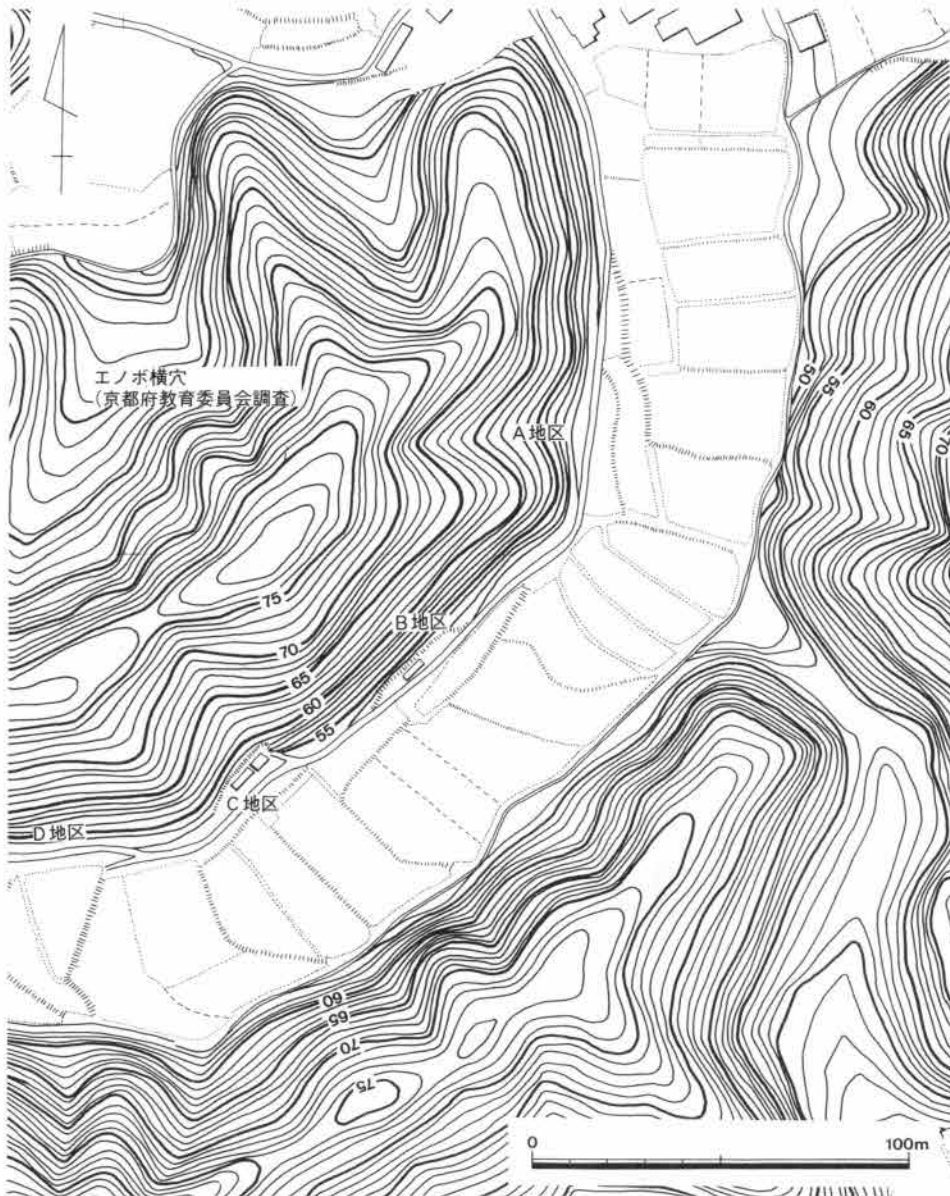
2. 調査経過

裾谷横穴・遺跡は、丹後国営農地開発事業の中の大野団地造成予定地内において、平成5年度に京都府教育委員会が行った立会調査によって不時発見された遺跡である。このときの調査で、裾谷横穴の所在する丘陵南斜面の裾付近では、4か所の平坦面または緩斜面が確認されており、横穴など遺構の存在が予想された。そこで北から順にA～D地区とし、このうちD地区については、平成5年10月12日～11月18日に京都府教育委員会が発掘調査を行った。調査の結果、全長20m・奥行4mの三日月状の平坦面を中心に、古墳時代後期から奈良時代にかけての竪穴式住居跡5基・掘立柱建物跡3棟以上、鎌倉時代の土坑などが発見された。^(注1)

今回の調査は、裾谷横穴のA～C地区の3地区を対象に、当調査研究センターが平成6年5月17日から発掘調査を行ったものである。A地区についてはトレンチ調査を、B・C地区については当初から重機による面的な調査を行った。調査の結果、A地区では顕著な遺構・遺物は確認されなかったが、B・C地区で合わせて竪穴式住居跡17基、掘立柱建物

跡と思われるテラス状遺構7基、小規模な横穴2基などを検出した。遺構の大半は、飛鳥・奈良時代に属するものである。また、少数ではあるが、縄文時代早期、弥生時代後期、古墳時代前期・後期の遺構・遺物も認められた。調査終了直前の10月12日に現地説明会を行い、10月13日にはすべての現地作業を終了した。

なお、最終的な調査面積は約3,800㎡となった。



第42図 調査地周辺地形測量図

遺物は、整理箱で約40箱出土しており、そのほとんどが飛鳥・奈良時代に属するものである。

なお、調査中及び現地説明会で、竪穴式住居跡としていた遺構のうち、他地域の調査例に接して一部をテラス状遺構(掘立柱建物跡)と改めたものがある。また、各遺構は、検

出・確認した順に番号を付し、現地説明会でもその番号を使用した^(注2)が、報告にあたっては、それらを再整理の上、新たに番号を付した。旧番号との対象並びに遺構の規模などについては、付表6～8を参照されたい。

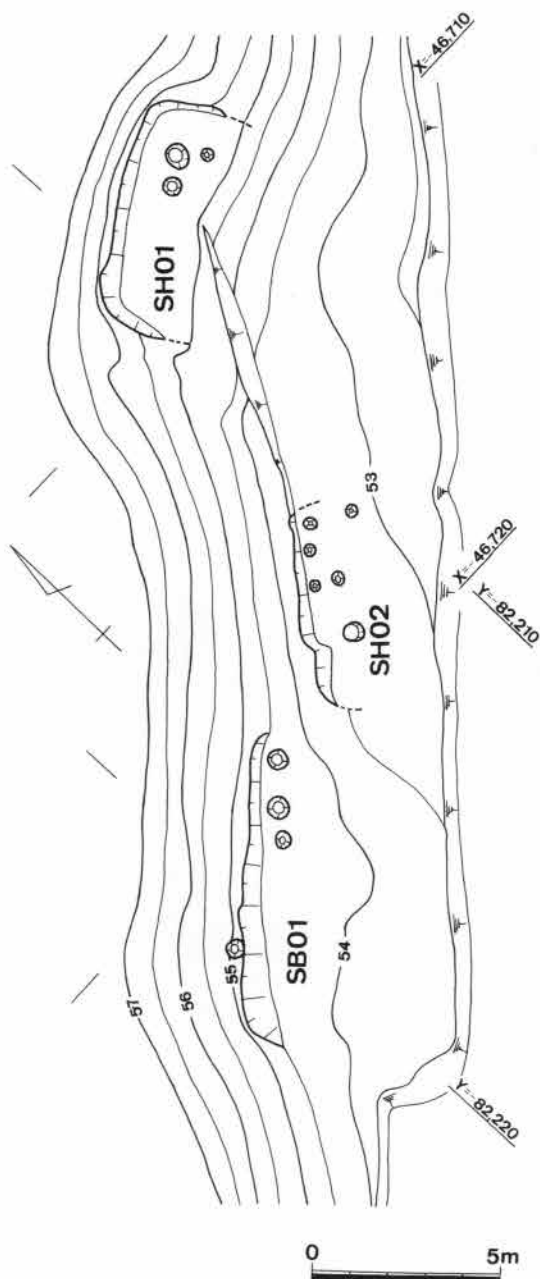
挿図の方位は、いずれも座標北^(注3)を示す。出土遺物は、現在も整理中であるため、今回の報告では各遺構の年代を示す資料を中心に提示することにした。

3. 調査概要

(1) 飛鳥・奈良時代

① A地区

A地区は、幅30m・奥行30mの小さな谷状地形を呈する緩斜面地で、顕著な平坦面はみられなかった。A地区では、まず遺構・遺物の有無を確認するために、重機によって試掘調査を行った。この試掘調査では、斜面部に4本のトレンチを入れたほか、テラス状を呈する平坦地でも面的に掘削した。しかし、遺構・遺物は、検出されなかった。



第43図 B地区(北半)遺構配置図

②B地区

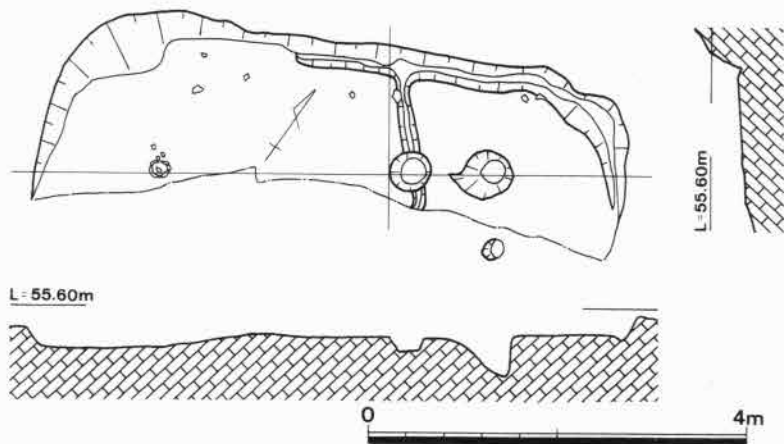
B地区は、延長90mを測る直線的な丘陵斜面で、顕著な平坦面は確認されなかった。丘陵斜面の主軸は、ほぼ北東-南西を測り、検出されたテラス状遺構の主軸と一致する。B地区については、重機による表土掘削開始直後に遺物の出土をみたため、全面的な掘削を行った。その結果、丘陵斜面の裾付近から竪穴式住居跡2基とテラス状遺構2基を検出した。このうち、テラス状遺構1基は、C地区寄りで検出し、他の3基はB地区でも北寄りで検出された。ここでテラス状遺構と竪穴式住居跡を区別したのは以下の理由による。

すなわち、両者は、いずれも斜面の上位側を掘削し、下位側に盛り土を行うことによってテラス面を造り出しているが、次の点で異なる。一つは、丘陵斜面の傾斜方向に平行する側壁を有するもので、今一つは丘陵斜面の傾斜方向に平行する側壁を持たないものである。この側壁の有無は、両者を区別する上で重要な指標になると考えられる。また前者は、斜面上位側の一辺が4～6mを測るのに対して、後者は6～8mと、前者に比べると、規模が大きいという点が注意される。このため、前者を竪穴式住居跡とし、後者をテラス状遺構と区別する。さらにこうしたテラス状遺構は、他地域の調査例によると、掘立柱建物跡である可能性が高く、以下の報告ではこれらを掘立柱建物跡として扱うことにしたい。^(注4)

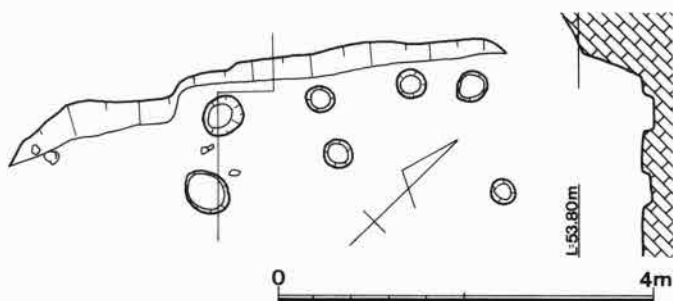
なお、C地区も含めて、竪穴式住居跡・テラス状遺構の床面のうち、盛り土で形成された部分はほとんどが流失しており、残存していたのは、地山を掘削した部分だけであった。

竪穴式住居跡SH01(第44図、第48図10)

今回調査した遺構の中で、最も北に位置する竪穴式住居跡である。周壁溝は、竪穴式住居跡の北半部にみられる。床面のやや北東寄りのところに区画溝がみられる。排水溝または区画溝と考えられる。主柱穴は、北東寄りの床面上で1個のみ確認した。



第44図 SH01平面図



第45図 SH02平面図

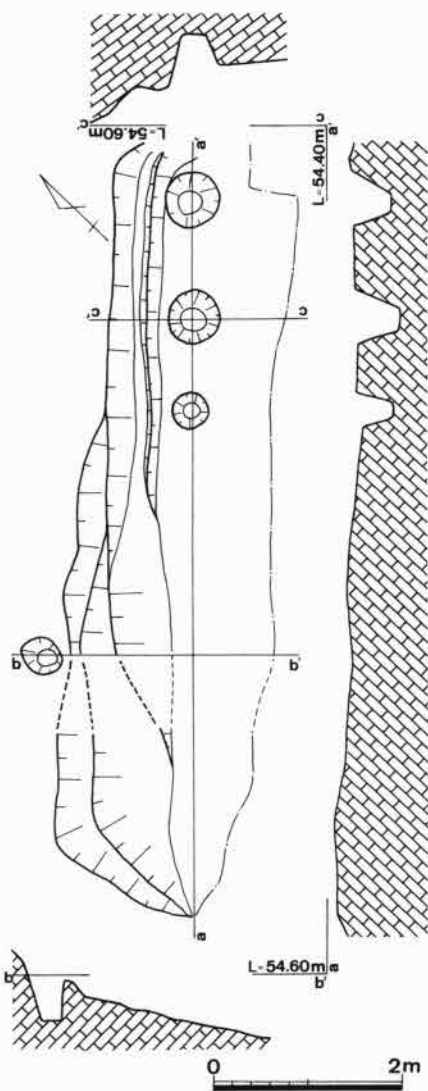
遺物は、埋土中及び床面直上で細片化した須恵器・土師器が出土している。このうち図示できたのは、土師器甕(10) 1点のみである。10は、短く外反する口縁部をもつ。外面

は磨滅が激しいが、内面はヘラケズリを確認できる。口径20.6cm・残存高7.0cmを測る。

竪穴式住居跡SH02(第45図・第48図4・7・8)

SH01の南西約8mに位置する。SH02は、北東側の一部を京都府教育委員会による試掘調査時に削平されているため、丘陵側を掘り込んだ断面「L」字形のカット面を確認したにとどまる。平面形は不明であるが、カット面の上端のラインは、途中で屈曲しており、竪穴式住居跡の建て替え、もしくは拡張が行われた可能性がある。柱穴を多数確認したが、復原できるものはなかった。なお、側壁は未確認なので、SH02が掘立柱建物跡である可能性も否定できない。

遺物は、床面上を中心に須恵器・土師器、鉄滓などが出土している。図示したのは須恵器杯^(注5)B(4)、土師器杯(8)・皿(9)である。4は、直線的にのびる体部とやや内傾する高台を有する杯Bである。口径17.2cm・器高4.5cmを測る。8は、口縁端部がわずかに外反する杯である。体部下半にハケを施す。上半はナデできれいに仕上げる。口径13.4cm・器高4.7cmを測る。9は、復原口径17.8cmを



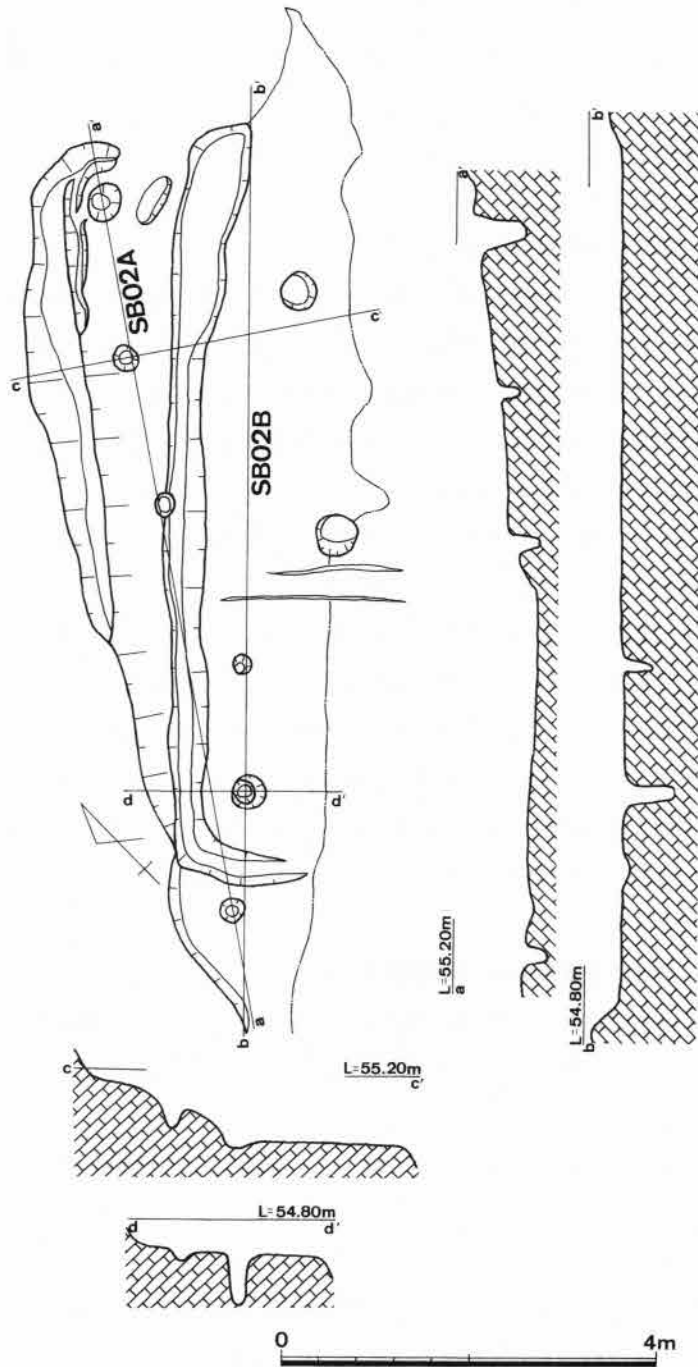
第46図 SB01平面図

測る皿である。

鉄滓は、床面上からかなりまとまって出土している。また、鍛造剥片や湯玉なども確認されており、鍛冶生産が行われていた可能性を示唆する。SH02の床面上で鍛冶炉を確認することはできなかったが、仮にSH02において鍛冶生産が行われていたとすれば、鍛冶炉はすでに流失した部分に存在していたと考えられる。

掘立柱建物跡SB01
(第46図・第48図2・3)

SH02の南西側に接して位置するテラス状遺構である。テラス面上に建てられたと思われる掘立柱建物跡の柱穴を北東側で3個確認した。テラス状遺構の北西側には、排水溝と思われる溝がみられる。ただし、柱列同様、南西方向にはのびない。カット面の主軸と柱列の主軸は、ほぼ一致してい



第47図 SB02平面図

る。テラス面の主軸は、ほぼ北東-南西を測る。なお、南西側に続く柱列を確認することはできなかったが、テラス面が南西側にも広がっていることから、大規模な建物跡の存在が推定される。

遺物は、埋土及びS B 01前面の流土中から須恵器・土師器の破片が出土している。図示できたのは、須恵器杯B蓋(2・3)の2点のみである。2は、口径14.5cm・器高2.1cmを測るやや厚手で扁平な杯B蓋である。3は、やや笠形に近い杯B蓋である。復原口径16.8cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 02(第47図)

S B 01の南西約25mに位置する。他のB地区の遺構とは距離的に離れており、またC地区とも小さな尾根状の張り出しによって隔てられており、単独で位置する。テラス状遺構はほぼ北東-南西に主軸を持つ。柱列及び溝の主軸をみると、重複する2つの掘立柱建物跡が存在したと考えられる。上位に位置するもの(第47図 a - a'ライン)をS B 02A、下位に位置するもの(第47図 b - b'ライン)をS B 02Bとする。

S B 02Aは、南北2間(3.3m)の柱列を確認したが、東西の柱列を確認することはできなかった。S B 02Aに伴うと思われるテラス面がわずかに残存する。なお、S B 02Bの南側にある柱穴は、柱間寸法では一致しないものの、S B 02Aの柱列と主軸が一致する。

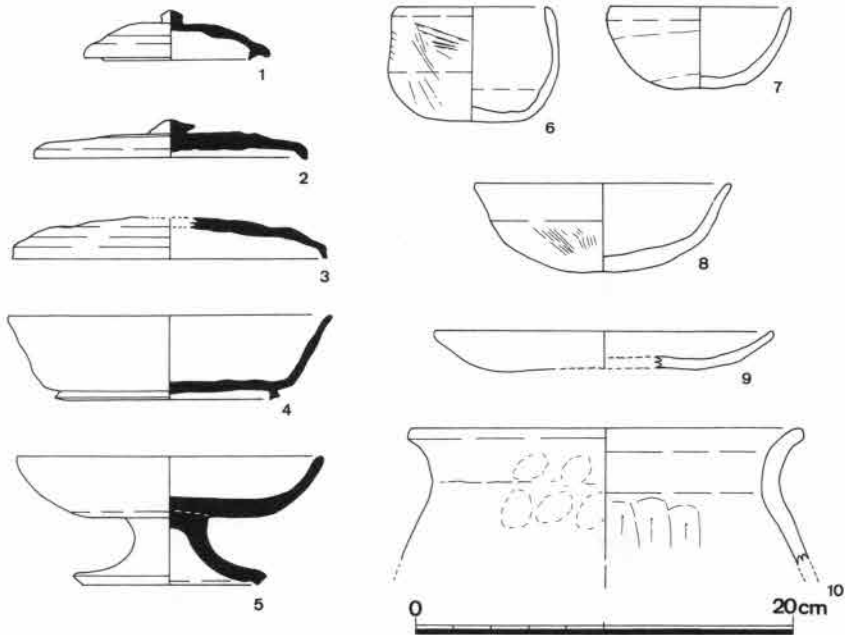
S B 02Bでは、4個の柱穴が確認されたが、主軸の一致するものはみられず、建物跡を復原することはできなかった。丘陵側に全長8.8m・幅0.3~0.6mの「L」字にめぐる溝を有する。本来は、北東側にも溝があったと考えられ、少なくとも「コ」字状にめぐっていたものと推定される。機能としては排水溝が考えられる。

遺物は、S B 02Aに伴うと思われる土器の細片が出土しているものの、図示することはできなかった。

B地区丘陵斜面出土の遺物(第48図1・5~7)

S B 02上方の丘陵斜面(標高63.0~64.0m付近)から比較的多数の土器がまとまって出土した。周辺部では、これに関連するような遺構を確認することはできなかった。ここでは実測のできたものを報告する。

図示したのは、須恵器杯G蓋(1)・高杯(5)、土師器碗(6・7)の4点である。1は、完形個体である。口径7.8cm・器高2.8cmを測る。法量としては最小の部類にはいる。5は、低脚の高杯である。口径16.4cm・器高6.8cmを測る。脚部と杯部を別々に製作した後、接合している。6は、やや深手の碗である。外面に非常に粗いハケ痕がみられる。口縁部がわずかに内湾する。外面には赤色顔料を塗布している。口径7.7cm・器高6.2cmを測る。7は、丸底の碗である。接合痕がみられる。口径9.6cm・器高4.4cmを測る。



第48図 B地区出土遺物実測図

10. SH01 4・7・8. SH02 2・3. SB01 1・5・6・9. 丘陵斜面

これらの土器群は一括性に乏しいが、1・5などは、C地区で検出されている竪穴式住居跡群でも新しいグループに対応するものと考えられる。

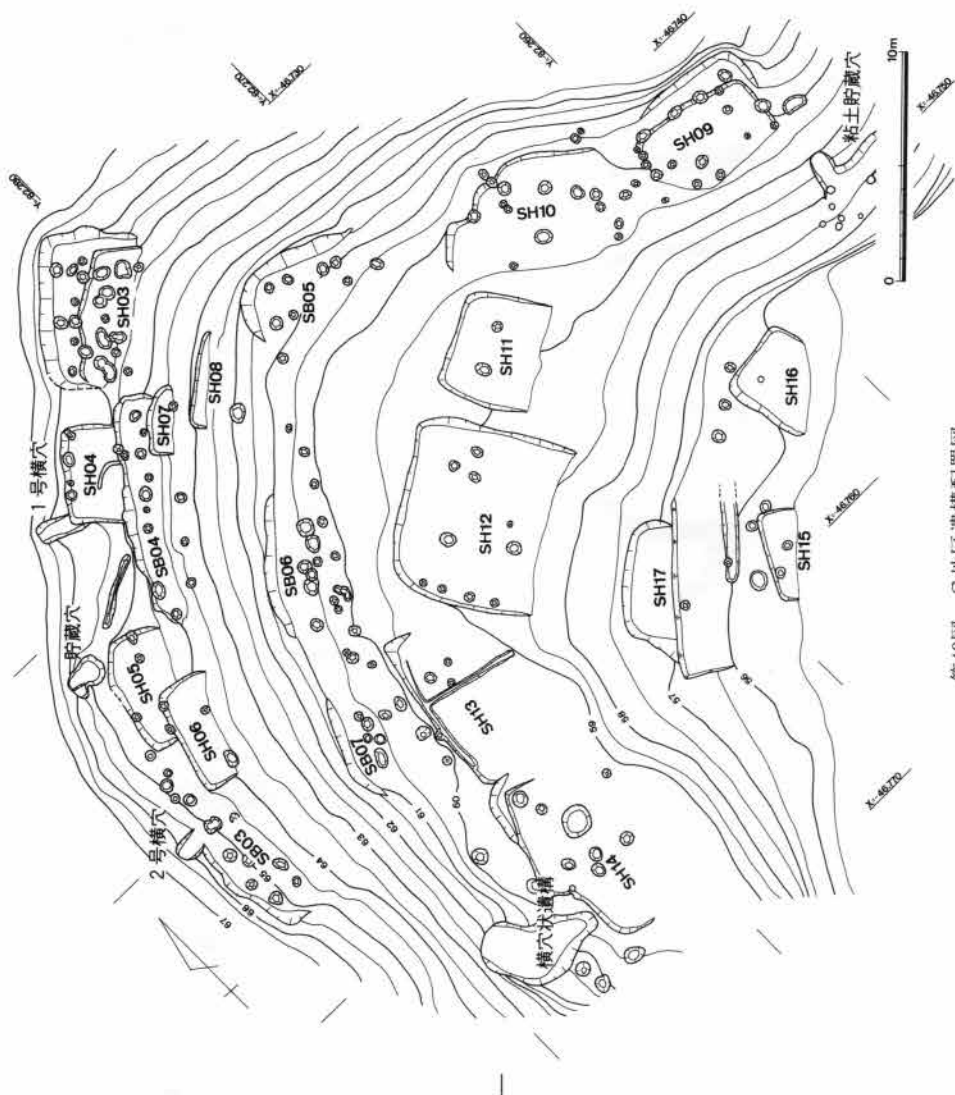
③C地区

C地区では、全長40m・奥行15mの三日月状の平坦面が調査前から確認されており、横穴の陥没痕と思われる落ち込みも認められた。また、その上方にも小規模な平坦面が存在しており、遺構の存在が予想された。さらに調査の結果、裾付近にも小規模な平坦面が認められた。C地区では、都合3か所の平坦面を確認することができた。これらの平坦面を上から、上段平坦地、中段平坦地、下段平坦地と呼ぶ。

C地区では、横穴の存在が予想されたため、当初から全面的な掘削を実施した。上段平坦地においては、小規模な横穴2基を検出したほかは、竪穴式住居跡・テラス状遺構が検出された。中段平坦地でも、横穴状遺構を除いて、多数の竪穴式住居跡・テラス状遺構が確認された。下段平坦地は、削平を受けていたが、竪穴式住居跡3基を検出できた。3基のうち2基は、古墳時代前期及び後期のものである。

このほか、弥生時代後期の遺物や、縄文時代早期の押型文土器の破片などが出土したが、この時期の遺構は確認されなかった。

以下、各平坦面ごとに遺構・遺物の報告をしていく。



第49図 C地区遺構配置図

a. C地区上段平坦地

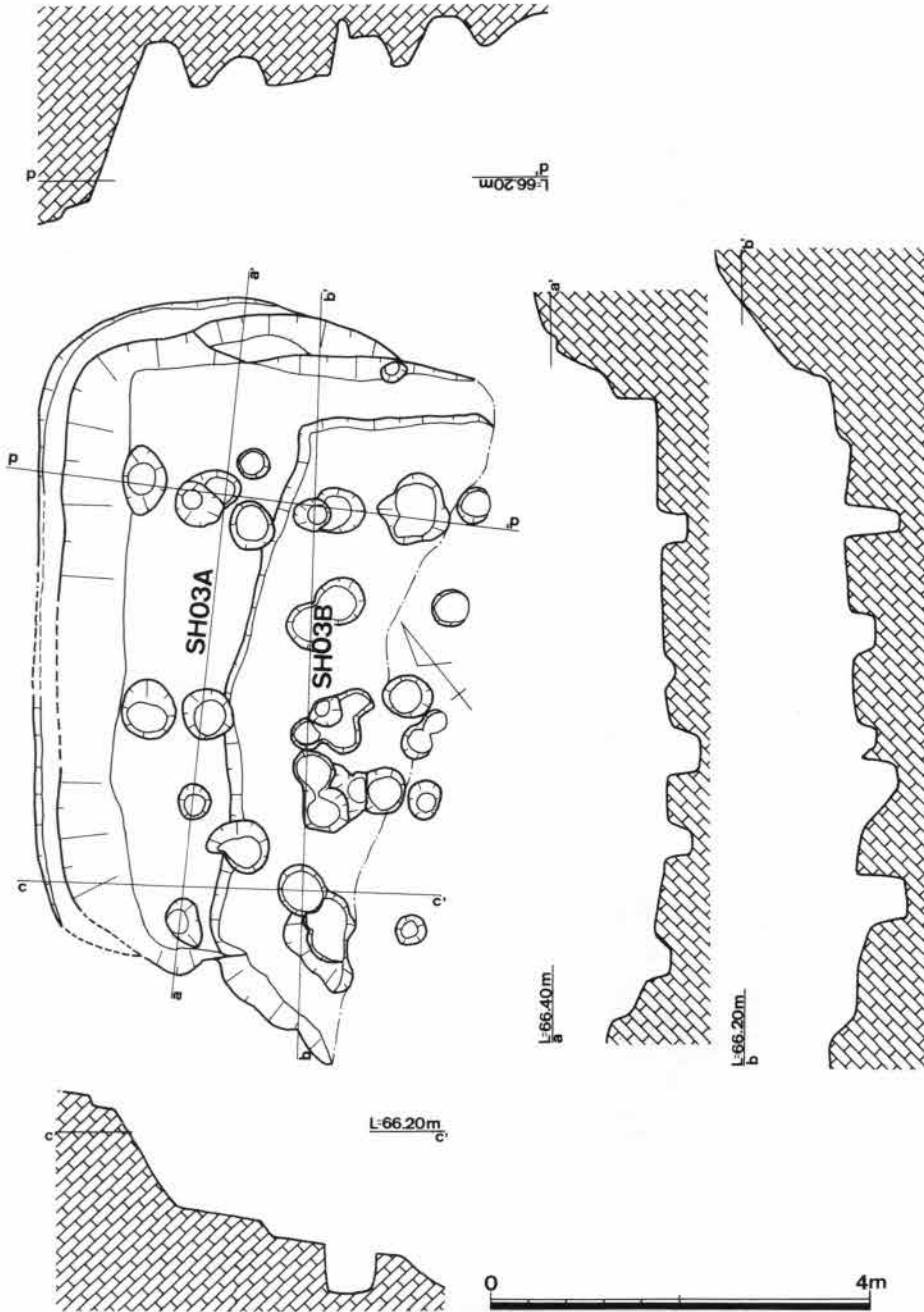
上段平坦地は、長さ30m・幅4mの細長い三日月状を呈する。ここでは竪穴式住居跡4基(SH03～SH06)、テラス状遺構1基(SB03)、小規模な横穴2基(1・2号横穴)を検出した。上段平坦地で検出された竪穴式住居跡・テラス状遺構についても斜面下位側の床面が流失しており、完存しているものは皆無であった。

竪穴式住居跡SH03(第50図・第56図12～14)

上段平坦地の北端に位置し、C地区で最も高所に位置する竪穴式住居跡である。上段平坦地で検出された竪穴式住居跡の中では卓越した規模を誇る。床面に多数の柱穴がみられ、数回にわたって上部構造の建て替えが行われたものと考えられる。このうち、復原

可能なのは2棟である。大きいもの(第50図a-a'ライン)をSH03A、小さいもの(第50図b-b'ライン)をSH03Bとする。

SH03Aは、南北2間(4.5m)・東西1間(1.6m)を測る。SH03Aの周壁の掘り込みの外



第50図 SH03平面図

側には、幅0.2～0.3mの小さな段が認められる。この段から床面までの深さは約1.2mである。

S H03Bは、南北3間(4.0m)を測るが、東西の柱列を確認することはできなかった。完掘後、床面にわずかな段差が認められた。S H03Bの床面と思われ、S H03Aの床面とは約0.1mの比高差を測る。

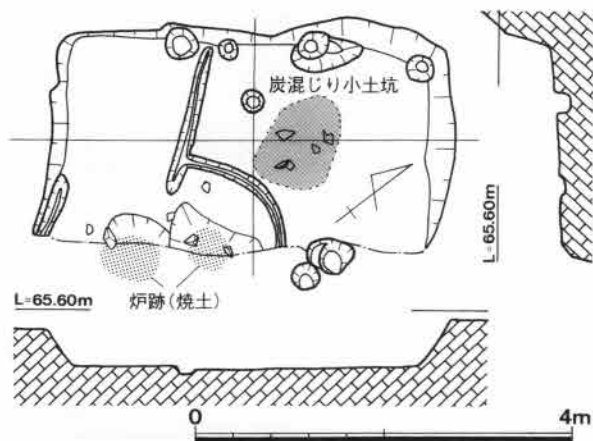
遺物は、床面上・柱穴内からの出土は見られず、埋土中からの出土に限られる。図示し得たのは、土師器椀2点(12・13)、土師器杯1点(14)である。12・13は、丸底を呈する椀である。12は、口径9.5cm・残存高4.6cmを測る。13は、外面に指頭圧痕が認められる。口径12.2cm・器高4.5cmを測る。14は、杯である。口縁端部をナデで仕上げる。内外面にハケを施す。口径14.2cm・器高3.8cmを測る。

竪穴式住居跡 S H04(第51図・第56図21)

S H03の南西に近接する竪穴式住居跡である。周壁溝は持たない。丘陵上位側の周壁には、柱穴3個が重複する。これは、竪穴式住居跡の壁を構成する柱を建てるためのものであったと思われるが、周壁が湾曲しているため、直線的に柱穴が並ぶわけではない。床面上には直線と弧状を呈する2条の溝が見られ、住居跡内の区画溝または排水溝と思われる。支柱穴は確認されなかったが、S B04のカット面においてS H04から掘り込まれたと思われる柱穴1個を確認しており、支柱穴の1つである可能性はある。

床面上において炉跡と思われる焼土と炭の入った小土坑2基を確認した。2基とも北東-南西方向の断面形は逆台形状を呈するが、これに直交する方向は皿状を呈する。どちらも長さ15～20cm・幅10cm前後の石を炉の台として使用している。なお、この小土坑はS H04に伴うものであるが、検出状況からS B04の埋土上に一部造られている。

S H04の埋没後、長軸1.0m・短軸0.8m・深さ0.3mの小土坑が掘削されている。この



第51図 S H04平面図

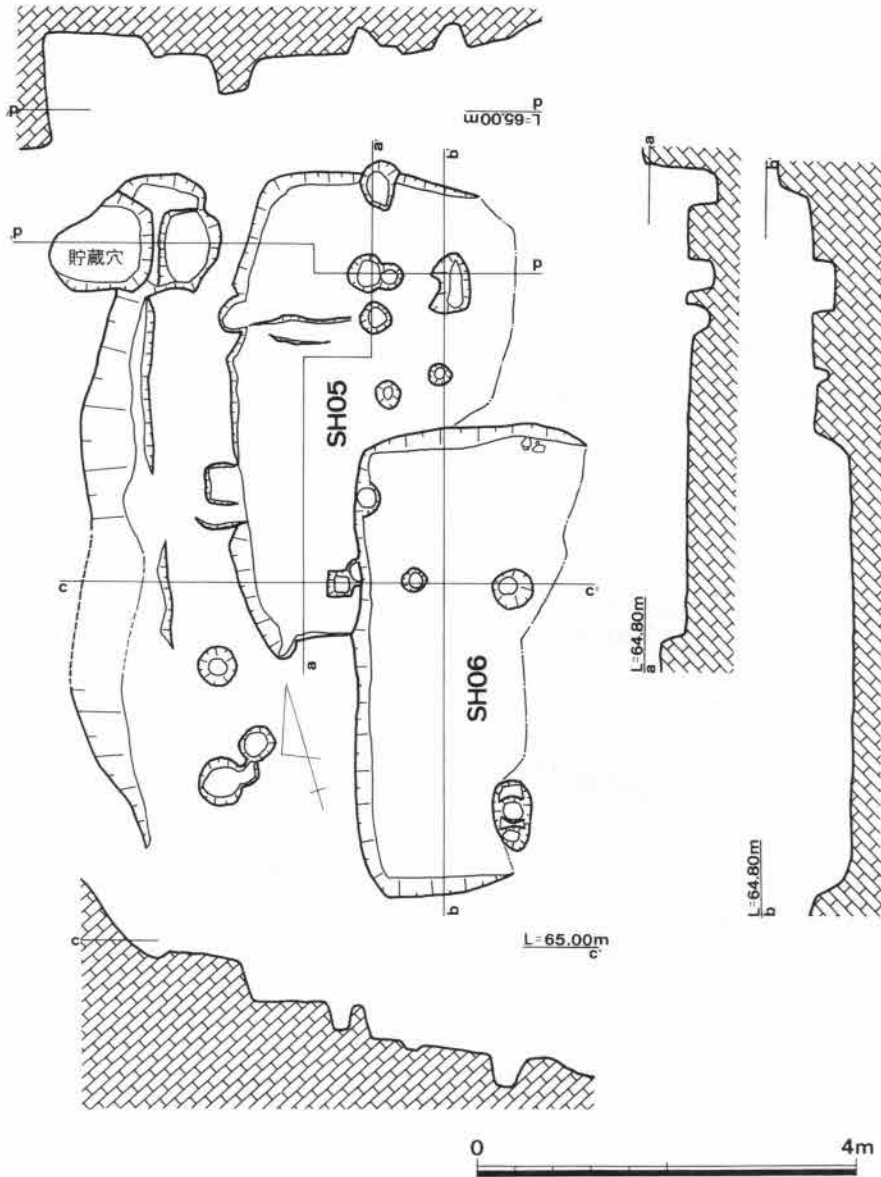
小土坑は、1号横穴の前庭部床面と同じ層から掘り込まれており、大量の炭とともに大型の土師器鍋が出土している。

遺物は、須恵器・土師器が出土したが、大半は細片化していたため図示できるものはない。そこで、S H04に伴うものではないが、埋没後に形成された小土坑から出土した土師器鍋を報告する。21は、口縁部が大きく

外反する厚手で、丸底を呈する鍋である。外面にはハケを施す。また、黒斑がみられる。
口径35.4cm・器高46.6cmを測る。

竪穴式住居跡 S H05(第52図)

S H04の南西約5mに位置する竪穴式住居跡である。周壁溝は持たない。S H04同様、周壁と重複する柱穴がみられる。この柱穴は、丘陵上位側に2個、北東壁に1個確認できる。また、北東壁から南西1.6mのところわずかな段差がみられる。段差部分でも柱穴



第52図 S H05・S H06平面図

がみられるが、これは北東壁上の柱穴と位置的に対応しており、この部分を北東側に拡張したのではないかとと思われる。

S H05の北西側には貯蔵穴と思われる長さ1.8m・幅1.1m・高さ1.1mで、階段状を呈する横穴状の土坑がある。S H05との間にわずかながらも周壁を掘り残していることや、上段の標高がS H05の床面とほぼ一致することから、この貯蔵穴はS H05に伴うものと考えられる。貯蔵穴付近から南西へのびる溝は、S H05の後背溝と考えられる。

遺物は、砥石・ミニチュア土器などがあるが、細片が多く図示するには至らなかった。

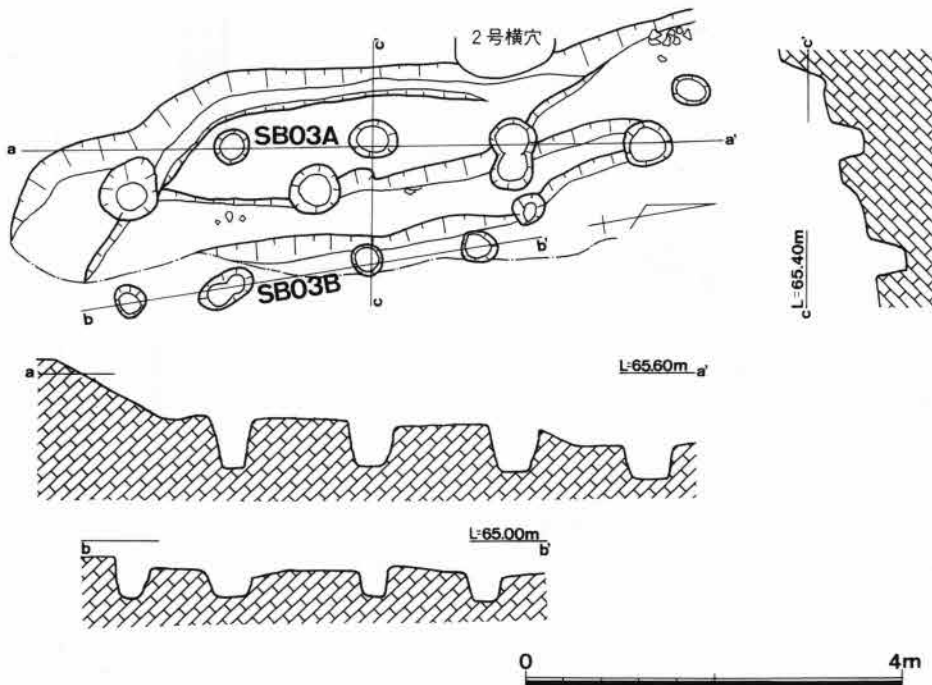
竪穴式住居跡 S H06(第52図)

S H05に重複する竪穴式住居跡である。S H06も周壁溝を有さない。周壁と重複する柱穴は、S H05と接する部分で1個確認できるのみであるが、これは柱穴の配列からS H05に伴うものと考えられる。したがって、S H06は周壁と重複する柱穴を伴わない竪穴式住居跡であると考えられる。支柱穴は、2個確認することができたが、住居跡内でもかなり南南西に寄っている。

遺物は、北東壁近くの床面上で土師器甕がややまとまった状態で出土した。

掘立柱建物跡 S B03(第53図・第56図16・17・19・20)

S H06の南西に接して位置する。テラス状遺構の主軸はほぼ南北である。テラス状遺構



第53図 S B03平面図

上には多数の柱穴がみられ、またテラス面も3段確認できるが、復原可能なのは、2棟の建物跡である。上位のものをSB03A(第53図a-a'ライン)、下位のものをSB03B(同b-b'ライン)とする。SB03Aは、南北3間(4.4m)の柱列を確認した。柱間寸法は、1.47m等間である。東西にのびる柱列は確認できなかった。

SB03Bは、南北3間(3.72m)の柱列を確認した。柱間寸法は、1.2~1.36mでややばらつきがある。SB03Bでも東西方向の柱列は確認できなかった。

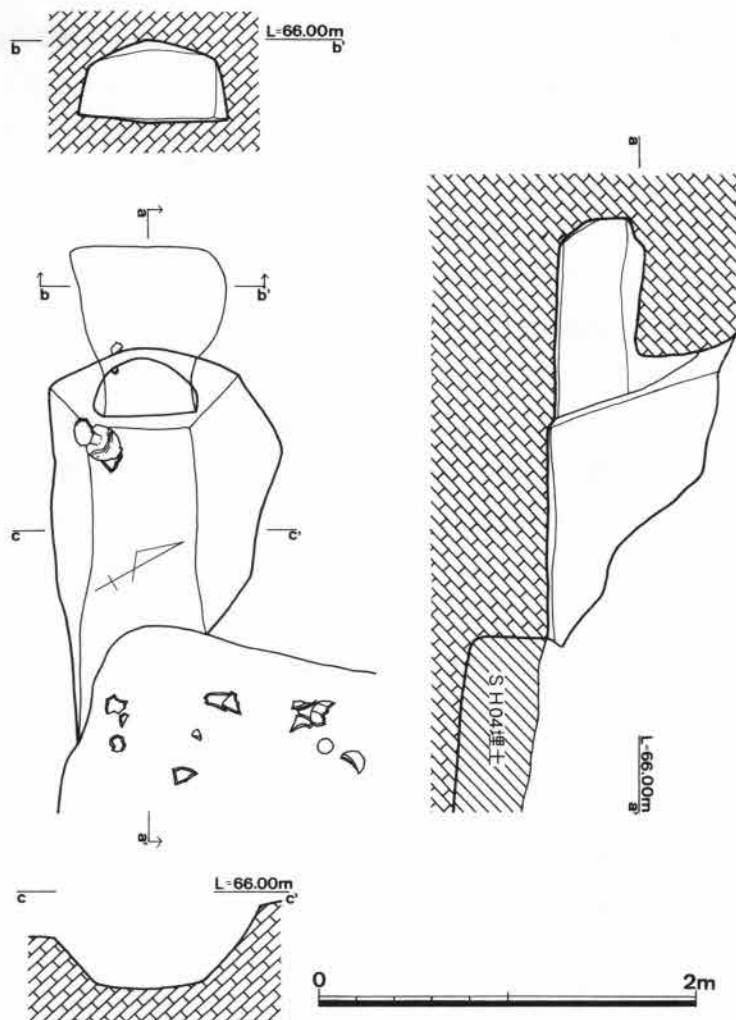
出土遺物は、猪形土製品(16)、須恵器長頸壺(17)・高杯(19)、土師器甕(20)などがある。16は、柱穴内から出土した猪形の土製品である。背中にたてがみと思われる表現がなされている。残存長9.8cm・高さ9.1cmを測る。17は、長頸壺の体部で、2号横穴の前面から出土しているので、2号横穴の遺物である可能性もある。やや丸味のある肩部に、2条の沈線を施す。復原底径10.4cm・残存高13.7cm・体部最大径17.0cmを測る。19は、低脚の高杯である。杯部上半を失う。底径9.3cm・残存高5.0cmを測る。20は、口縁部が短く外反する甕である。かなり厚手の作りである。口縁端部内面を強くなでる。また、口縁部内面に横方向のハケを施す。体部外面に縦方向のハケを施す。内面には横方向のケズリを施す。口径13.3cm・器高11.8cmを測る。

1号横穴(第54図・第56図11・18)

SH04の埋没後に、SH04の西隅を壊して造られた小規模な横穴である。前庭部と玄室から構成され、両者の間にはわずかな段差が認められる。玄室の平面形は、奥壁北側がやや丸味を帯びるが、台形状を呈する。床面はほぼ平坦である。玄室内は、消し炭を大量に含む暗茶褐色土でほぼ完全に埋められていた。これは除湿などのために、玄室内に充填したものと考えられる。これに関連して火葬骨を収納したような容器の存在が想定され、検出に努めたが、確認できなかった。また、焼骨も確認されなかった。

前庭部の平面形は、いわゆる「コ」字形を呈する。断面形は、逆台形の墓道状を呈する。前庭部の床面も平坦である。

出土遺物には、須恵器長頸壺・横瓶、土師器碗などがあるが、長頸壺を除いて原位置を保つものはなかった。他の遺物は、埋没の過程で2次的に移動したものと考えられる。また、1号横穴に伴うのかどうかかわからないが、前庭部の前面、SH04の南西壁付近で牛形土製品も出土している。このうち図示したのは、土師器碗(11)、牛形土製品(15)、須恵器長頸壺(18)である。11は、平底気味の小型の碗である。完形個体である。口径8.0cm・器高3.5cmを測る。15は、牛を模した土製品と思われる。背中に鞍を乗せる。体部下半は欠損する。残存長7.7cm・幅5.1cmを測る。18は、玄門部の脇に正位で据えられていた長頸壺である。高台を有する。完形個体である。口径12.2cm・体部最大径17.4cm・底径11.2cm・



第54図 1号横穴平面図

器高23.1cmを測る。

2号横穴(第55図)

S B03のテラス面に向かって開口する小規模な横穴である。玄室と前庭部から構成される。玄室の平面形は、玄門部幅が奥壁幅よりもわずかに小さい正方形に近い形状を呈する。床面にはわずかに凹凸が認められる。

玄室内は、丘陵斜面流土と同じ橙褐色土で埋まっており、玄室が当初は開口していたことをうかがわせる。玄室内からは焼骨1点が出土しており、この横穴は焼骨を埋納するために造られた横穴であることが明らかとなった。同様の横穴は、対岸の周積地区に所在する左坂横穴群(B支群)でも確認されている^(註6)。

前底部は、1号横穴ほどは整っていないものの、一応「コ」字形の平面形を呈している。

断面形は、床面の幅が広いめの逆台形の墓道状を呈している。前庭部は、SB03のテラス面に向かってスロープ状になっている。

遺物は、SB03の埋土内出土のものと同様に区別することがむずかしく、また2号横穴前庭部の床面上や玄室内からの出土遺物がないため、確実に2号横穴に伴う遺物はみられない。

b. C地区上～中段斜面

C地区上～中段斜面にかけては、竪穴式住居跡

2基(SH07・08)、テラス状遺構1基(SB04)を確認した。斜面部に形成されていることもあり、遺構の残存度は低かったが、遺構や流土中からまとまって遺物が出土した。

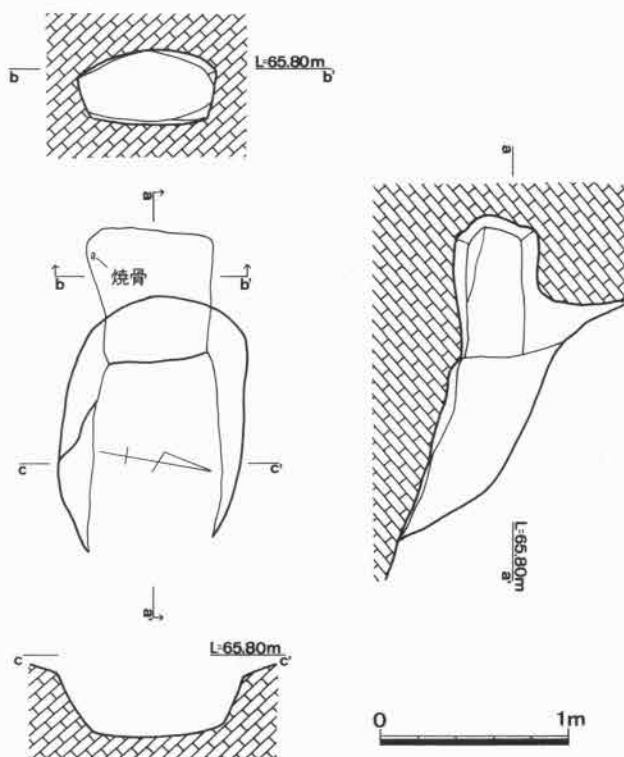
掘立柱建物跡SB04(第57～62図)

SH04の南東側に接するテラス状遺構である。SB04のテラス面はSH04の床面から約1.0m低所にある。テラス面の主軸はほぼ北北東-西南西を測る。テラス面上では、多数の柱穴が検出されたが、柱列の主軸からとりあえず1棟の建物跡を復原できる。SB04は、南北3間(4.8m)分を検出したが、東西方向の柱列を確認することはできなかった。

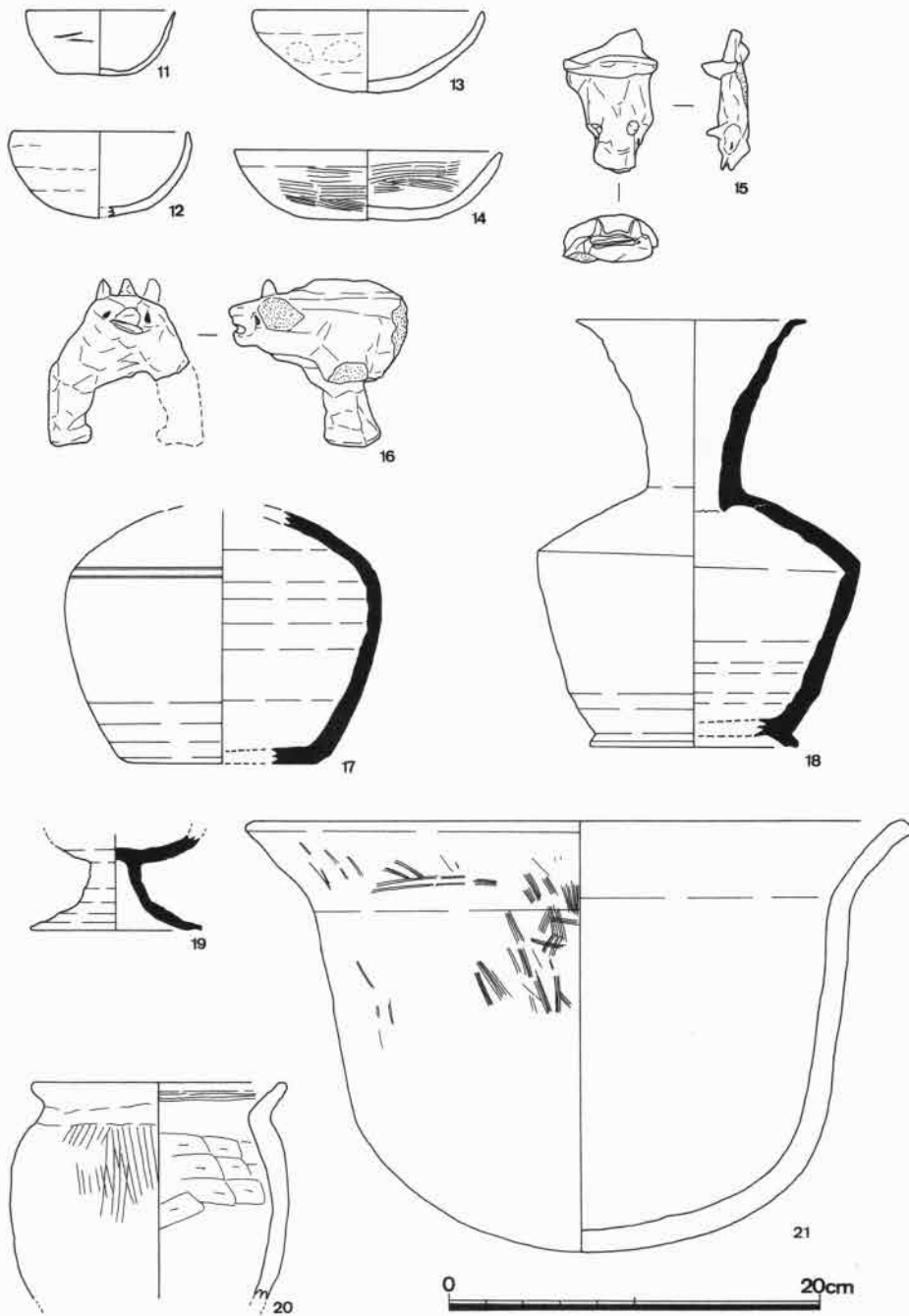
SB04出土遺物は、須恵器杯H蓋・杯H・杯G・甕・把手付椀、土師器椀・甕・甌・竈などがある。これらの出土地点は大きく3地点に分けられる。すなわち、SB04の埋土中、テラス上で検出された土器溜まり、柱穴内である。以下では、各出土地点ごとについて出土遺物の説明をしていく。

SB04の埋土中からは須恵器、土師器が多数出土した。ここでは、須恵器杯H蓋(22～24)・杯H(25～27)・杯G(30)・甕(28)、土師器甕(32・34)を図示した。

22～24は、ほぼ同形同大の杯H蓋である。3点とも底部にヘラケズリを施す。口径14.4



第55図 2号横穴平面図



第56図 C地区上段平地遺構出土遺物

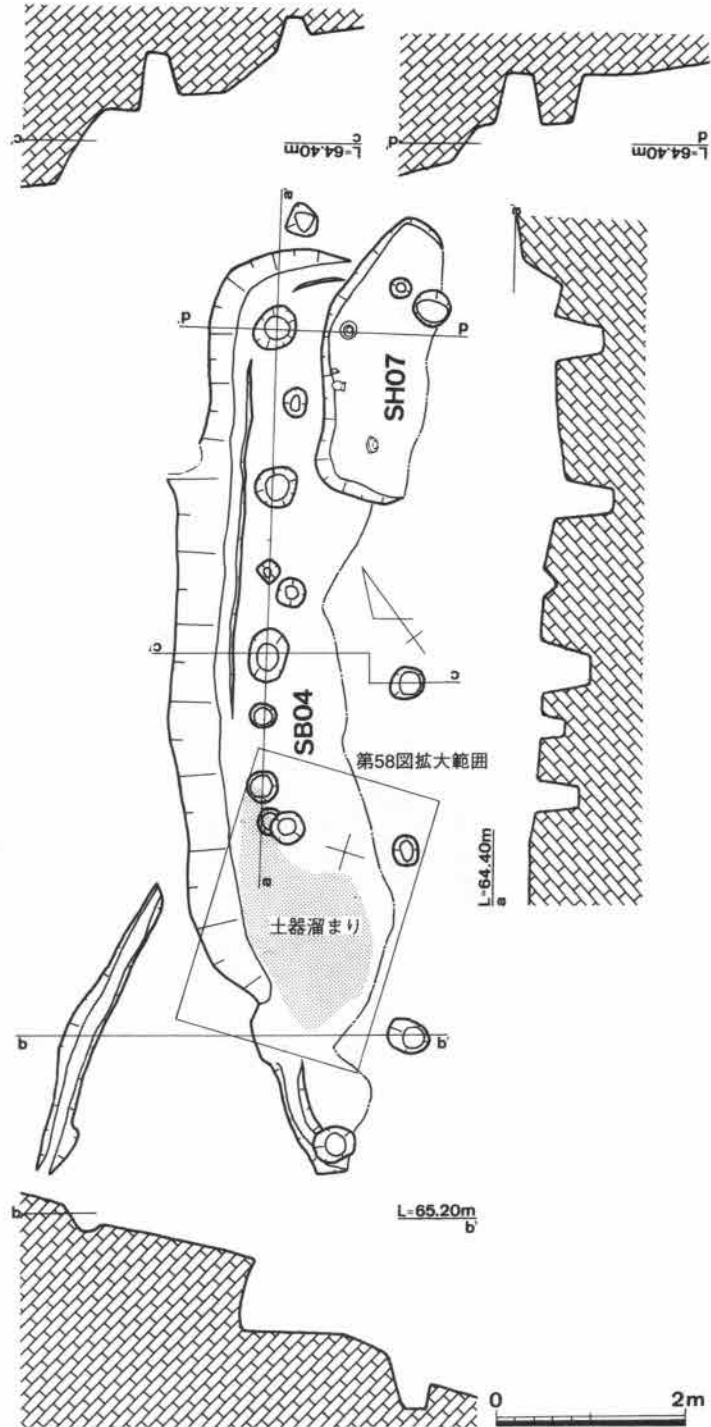
12~14. S H03

21. S H04

16・17・19・20. S B03

11・15・18. 1号横穴

～15.5cm・器高
 3.7～4.2cmを測
 る。25～26は、須
 恵器杯Hである。
 26は、底部ヘラ切
 り後ナデ調整を施
 す。口径11.6cm・
 器高3.8cmを測る。
 27は、やや扁平な
 杯Hである。復原
 口径12.6cm・器高
 3.2cmを測る。28
 は甕の口縁と思わ
 れる。口径
 13.2cm・残存高
 4.3cmを測る。30
 は、受け部を有さ
 ない須恵器杯Gで
 ある。焼成はよく
 ない。口径
 10.4cm・器高
 5.1cmを測る。32
 は、甕である。体
 部外面に粗いハ
 ケ、体部内面に横
 方向のケズリを施
 す。口径12.4cm・
 体部最大径13.8
 m・器高12.8cmを
 測る。34は、口縁
 部内面に強い横ナ
 デにより生じた段



第57図 SB04・SH07平面図

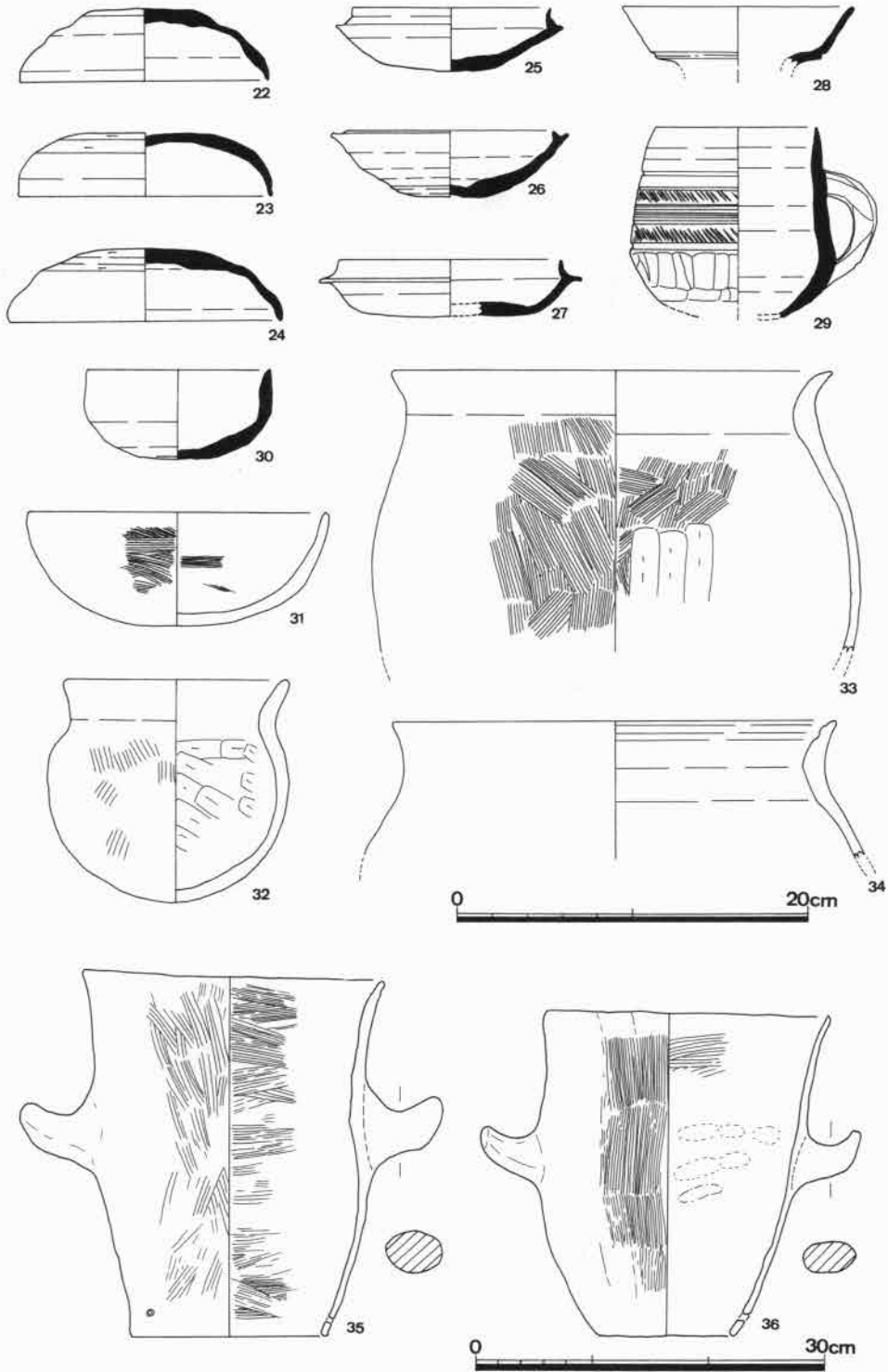
をもつ甕である。体部内外面とも磨滅が著しい。口径25.1cm・器高7.7cmを測る。なお、石崎善久氏は、この種の甕が、甌・竈などとともに煮沸用具のセットとして導入されたとみている。^(注7)SB04の土器溜まりから甌・竈が出土しており、セット関係をみることができる。

SB04のテラス部分の南よりで検出された土器溜まりからは、須恵器・土師器が多量に出土した。この中には須恵器の甕や竈などの大型品も含まれている。今回図示したのは、須恵器甕(37・41)、土師器椀(31)・甕(33)・甌(35・36)・竈(38~40)である。

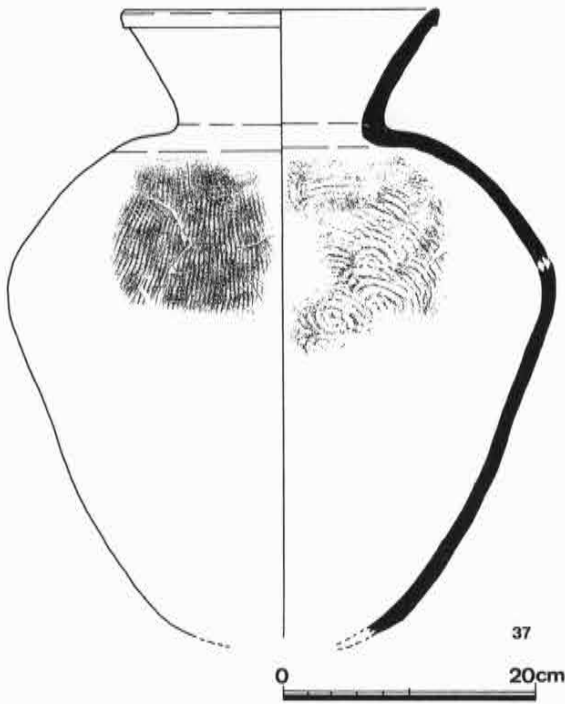
31は、丸底を呈する大型の椀である。内外面ともハケを施し、赤色顔料が塗布される。口径17.1cm・器高6.4cmを測る。33は、口縁部が短く外反する甕である。体部外面を縦方向のハケ、体部内面を縦方向のケズリを施す。口径25.0cm・残存高16.0cmを測る。35・36



第58図 SB04土器溜まり出土状況図



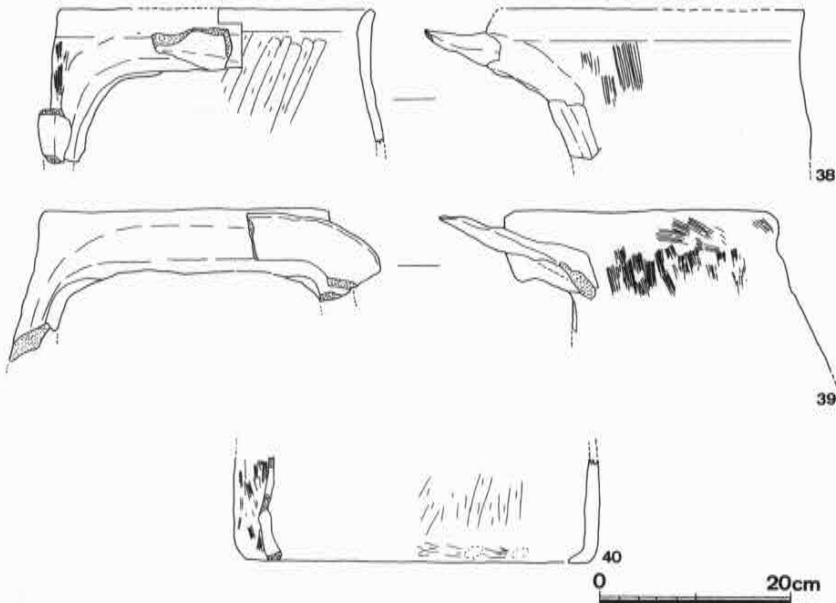
第59図 S B04出土遺物実測図(1)



第60図 S B 04出土遺物実測図(2)

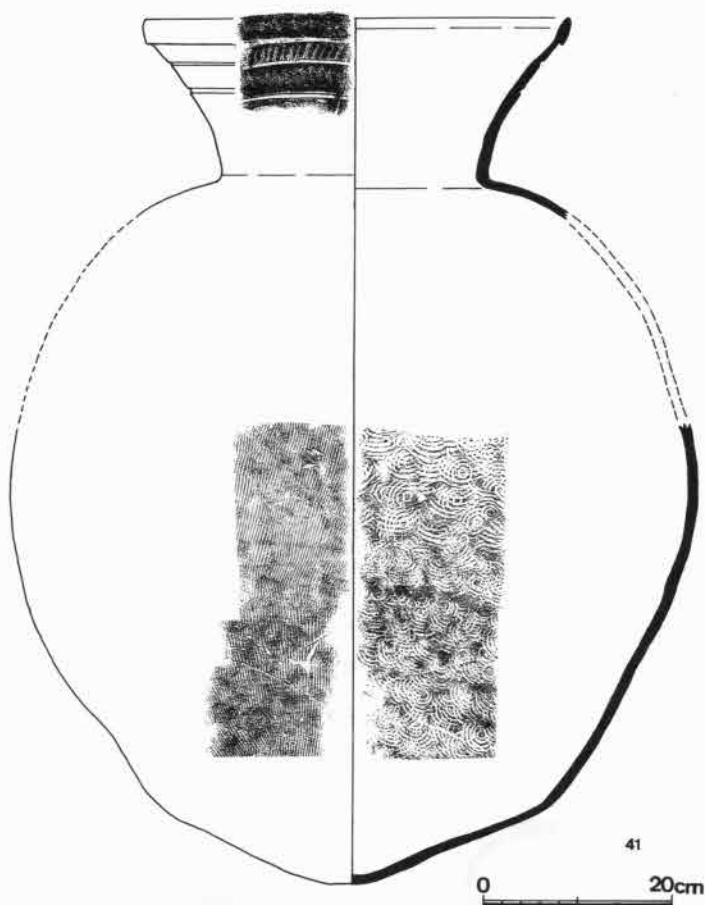
は、甌である。35は、外面
タテハケ、内面ヨコハケを
施す。口縁部がわずかに外
反する。底部に直径0.7cm
の穿孔が2か所なされる。
口径25.5cm・器高31.3cm・
底径16.8cmを測る。36は、
外面に細かいタテハケ、内
面にヨコハケを施す。体部
中位内面には指頭圧痕や布
目圧痕がみられる。35同様、
底部付近に直径0.7cmほど
の穿孔が2か所に施され
る。口径23.9cm・器高
28.0cm・底径11.2cmを測
る。両者とも底部は円孔を
なす。

38~40は、竈である。残



第61図 S B 04出土遺物実測図(3)

存状況は悪く完形個体に復原できるものはない。38は、甕の上半部のみである。釜口の内外面をナデで仕上げる。端部は丸く仕上げる。外面はタテハケ、内面は縦または斜め方向のケズリを施す。口径32.0cm・残存高17.0cmを測る。39も、38と同様甕の上半部のみである。作りなどは38に類似する。ただし、内面はハケであ



第62図 S B04出土遺物実測図(4)

る。口径30.0cm・残存高17.0cmを測る。40は、甕の底部である。体部外面をタテハケ、体部内面に縦方向のケズリを施す。底径35.6cm・残存高13.0cmを測る。

37・41は、須恵器大型甕である。37は、玉縁状の口縁と体部内外面にタタキ痕がみられる。口径24.8cm・体部最大径43.6cm・残存高49.5cmを測る。41も、玉縁状の口縁と体部内外面にタタキ痕がみられる。口縁部外面に上から波状文、刺突文、波状文を施す。最下段の波状文の上下には沈線を1条ずつ施して文様帯を区画する。口径は45.2cm、復原高は92.0cmを測る。

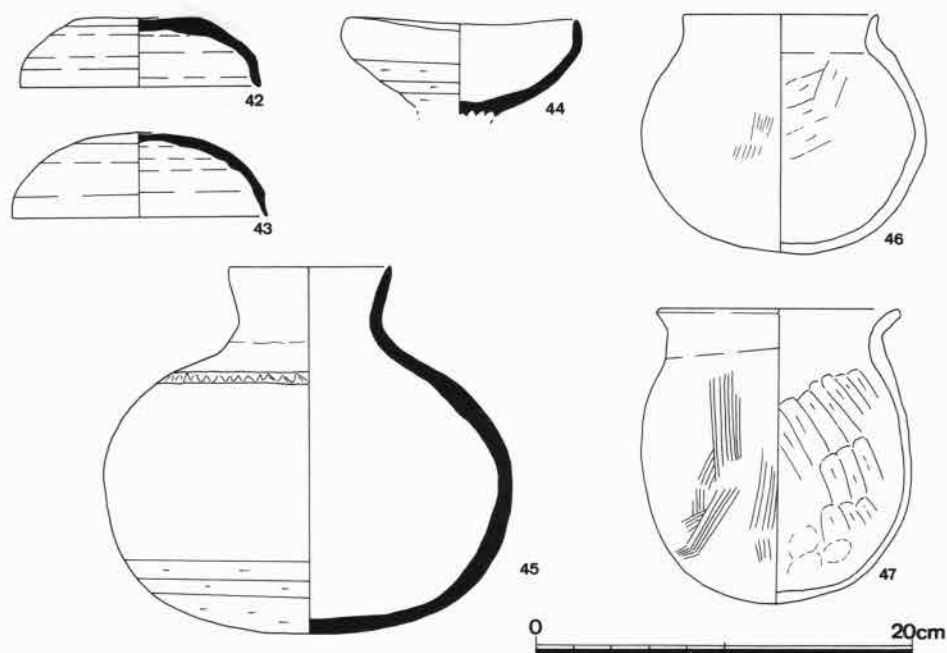
柱穴出土の遺物としては、29の須恵器把手付椀がある。29は、S B04最南端の柱穴内から出土しており、体部外面中位には、上から刺突文、カキメ、刺突文を施す。内面及び口縁部外面はナデで仕上げる。体部外面下半は2段のヘラケズリが認められる。底部を欠損する。口径9.3cm・残存高10.9cmを測る。

以上の土器群は、須恵器杯Hの調整技法や竈・甑などの煮沸用具の存在からTK209～TK217(古)に位置づけられるものと考えられる。

竪穴式住居跡SH07(第57・63図)

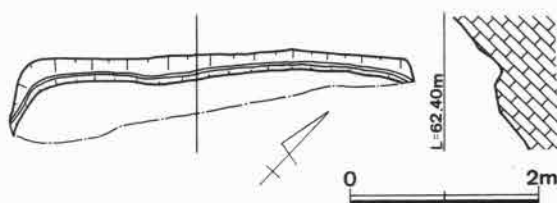
SB04のテラス部分に重複する竪穴式住居跡である。周壁溝は、はじめからなかったと思われる。住居跡のやや北寄りで、支柱穴と思われる柱穴を確認したが、南側の柱穴は確認できなかった。住居跡の大半は、炭混じりの茶褐色土で覆われており、ここに遺物が包含されていた。

出土遺物は、須恵器杯H蓋(42・43)・高杯(44)・壺(45)、土師器甕(46・47)がある。いずれも炭混じり茶褐色土中から出土している。42・43は、杯H蓋である。口径12.6～13.4cm・器高3.7～4.5cmを測る。44は高杯の杯部である。脚部を失う。口径12.2cm・残存高5.0cmを測る。45は、壺である。非常に焼きが甘く、器面の磨滅が著しい。体部下半にケズリを施す。肩部に非常に拙い波状文を施す。口径8.4cm・体部最大径21.7cm・器高19.6cmを測る。46は、短くほぼ真上に立ち上がる口縁部と球形の体部を有する。口径10.2cm・体部最大径16.1cm・器高12.7cmを測る。この形態の甕は、これまで横穴からの出土例は知られるが、集落での出土例は初めてである。^(注8)47は、口縁部がやや外反する長胴気味の甕である。口径12.6cm・体部最大径12.3cm・器高15.8cmを測る。46・47とも、体部外面にタテハケ、体部内面にケズリを施す。



第63図 SH07出土遺物実測図

S H07出土の遺物は、裾谷横穴
 の中では、最も一括性の高いもの
 である。須恵器杯H蓋の型式から
 T K209～T K217(古相)と考えら
 れる。S B04とはほぼ同時期と考え
 られる。



第64図 S H08平面図

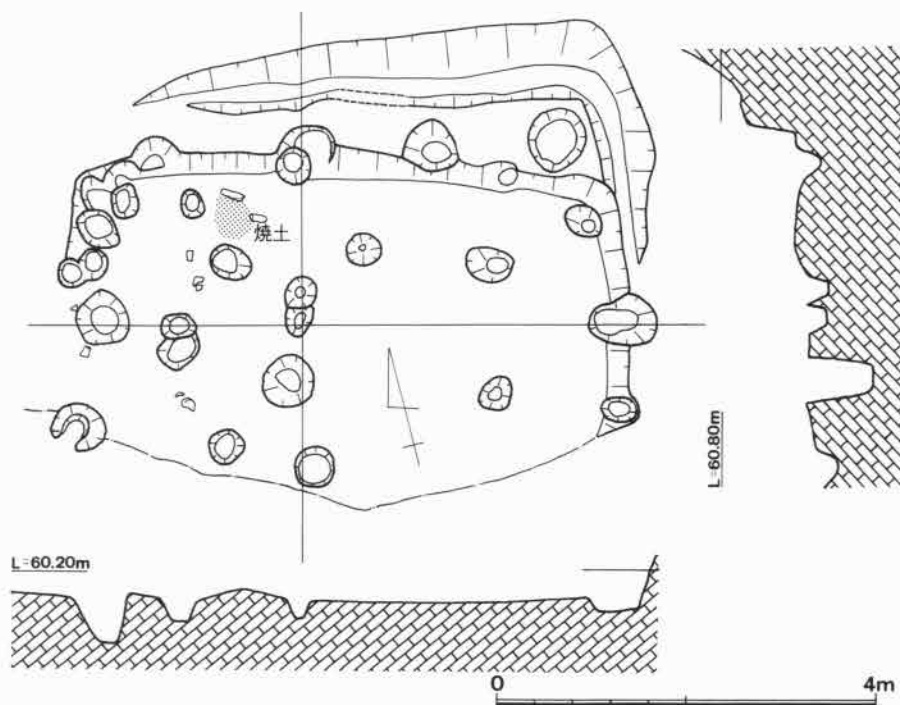
竪穴式住居跡S H08(第64図) S H07の東側、0.6m低所に位置する。丘陵側で周壁溝を確認できたが、支柱穴・遺物などは確認できなかった。

c. C地区中段平坦地

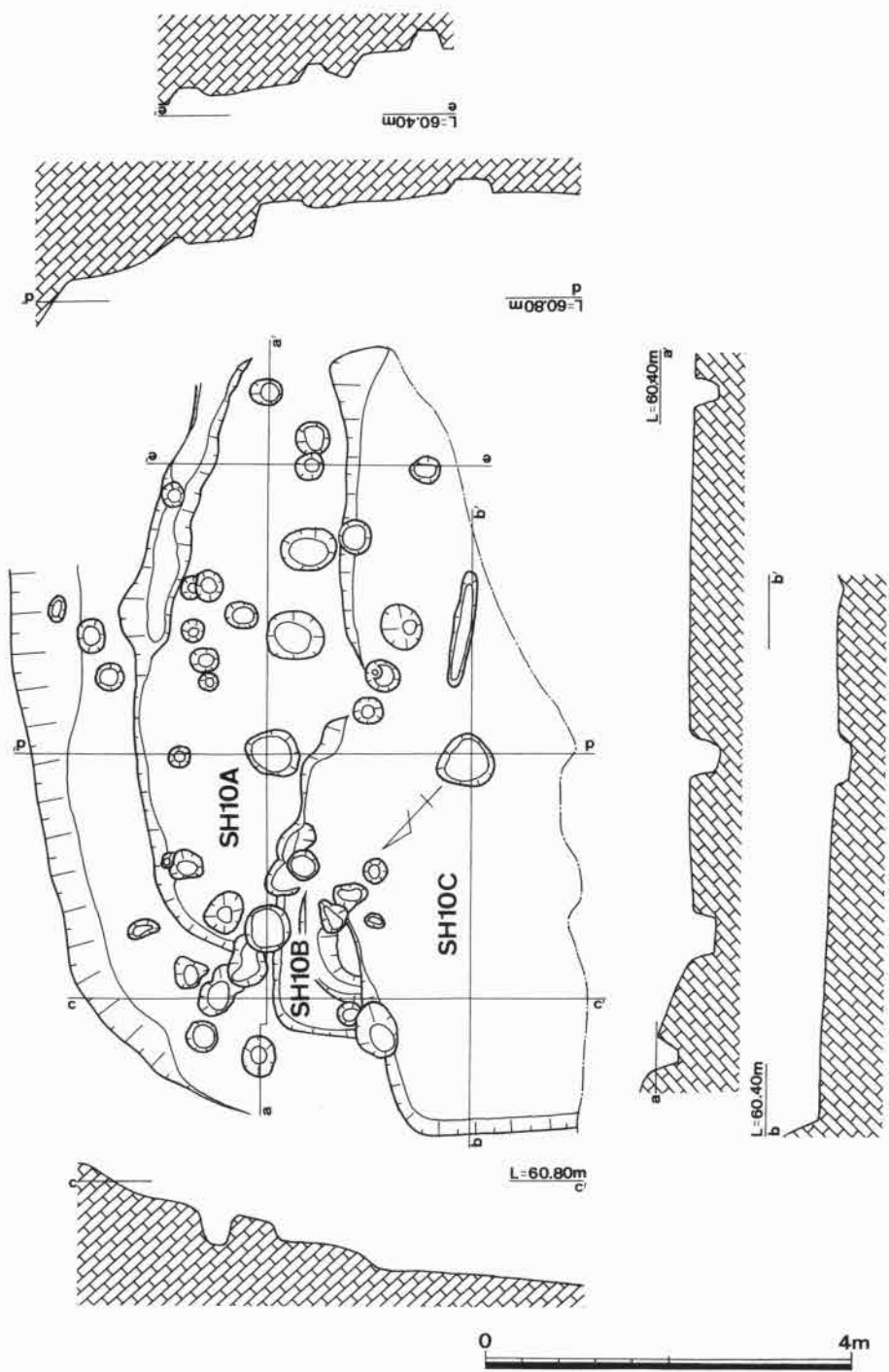
中段平坦地は、裾谷横穴C地区で最も広い全長40m・奥行き15mを測る三日月状を呈する平坦地である。竪穴式住居跡6基(S H09～14)、テラス状遺構3基(S B03～05)などを確認した。竪穴式住居跡は、ほぼ平坦地に造られているが、テラス状遺構はいずれも、丘陵の傾斜変換点付近に位置する。

竪穴式住居跡S H09(第65図・第72図51・55・56)

三日月状の平坦地の北東端に位置する竪穴式住居跡である。周壁溝を持たないが、周壁と重複する柱穴が確認できる。柱穴は、北壁に5個(コーナー部分の柱穴を含む)、東壁に



第65図 S H09平面図



第66図 SH10平面図

2個確認できる。SH09の周壁にみられる柱穴は、周壁そのもの沿っているため直線的に並ぶわけではない。周壁の背後には排水溝または雨落ち溝と思われる溝が「L」字形に検出されたが、東壁に位置する柱穴と重複する。この溝は、周壁の主軸とは異なるため、SH09と重複する遺構に伴う溝である可能性が高い。なお、SH09は、構造的にSH04・05に類似する。

遺物は、埋土中及び床面上から多数出土したが、今回図示し得たのは、須恵器杯(51)、土師器碗(55・56)である。51は、口径9.4cm・器高3.1cmを測る小型の杯である。55・56は、丸底気味の碗である。口縁部内外面をナデで仕上げる。55は、口径9.6cm・器高4.3cmを測る。56は、口径10.4cm・器高4.3cmを測る。

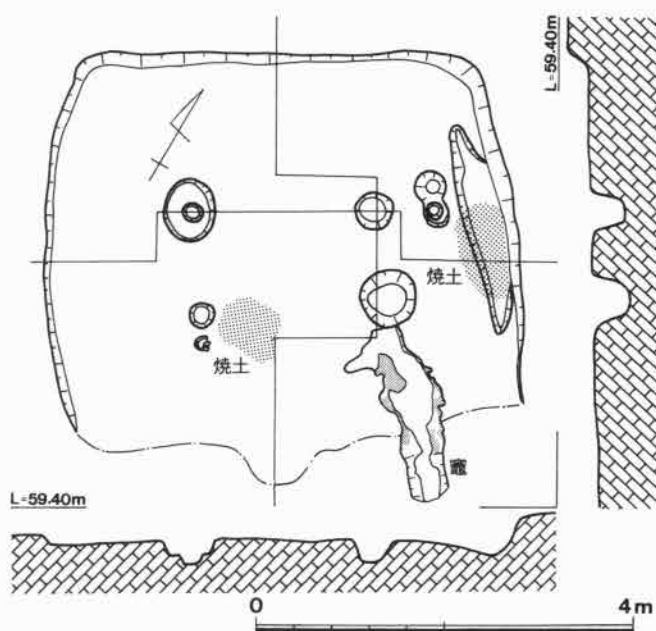
竪穴式住居跡SH10(第66図・第72図54)

SH09の西側に接する竪穴式住居跡である。東半部は削平されたらしく、竪穴式住居跡の西北隅の部分を確認した。少なくとも3基程度が重複しているものと考えられる。床面標高の高い方からSH10A、SH10B、SH10Cとする。各床面には多数の柱穴がみられ、どの柱穴がどの竪穴式住居跡に伴うものであるかは十分に検討できていない。

遺物は、須恵器甕(54)がSH10Cの西壁近くから出土している。54は、ほぼ完形の甕である。体部下半にケズリを施す。頸部に2条の沈線を施す。口径11.0cm・器高14.4cmを測る。

竪穴式住居跡SH11(第67図・第72図48)

SH10の南西側にはほぼ隣接して位置する住居跡である。周壁溝はみられないが、北東側の周壁に沿って浅い溝状の落ち込みを確認した。ここには、焼土の堆積がみられたが、その性格は不明である。主柱穴は4個確認できた。ただし、南東の柱穴は、竈に近接しており、主柱として機能し得たかどうか疑問である。



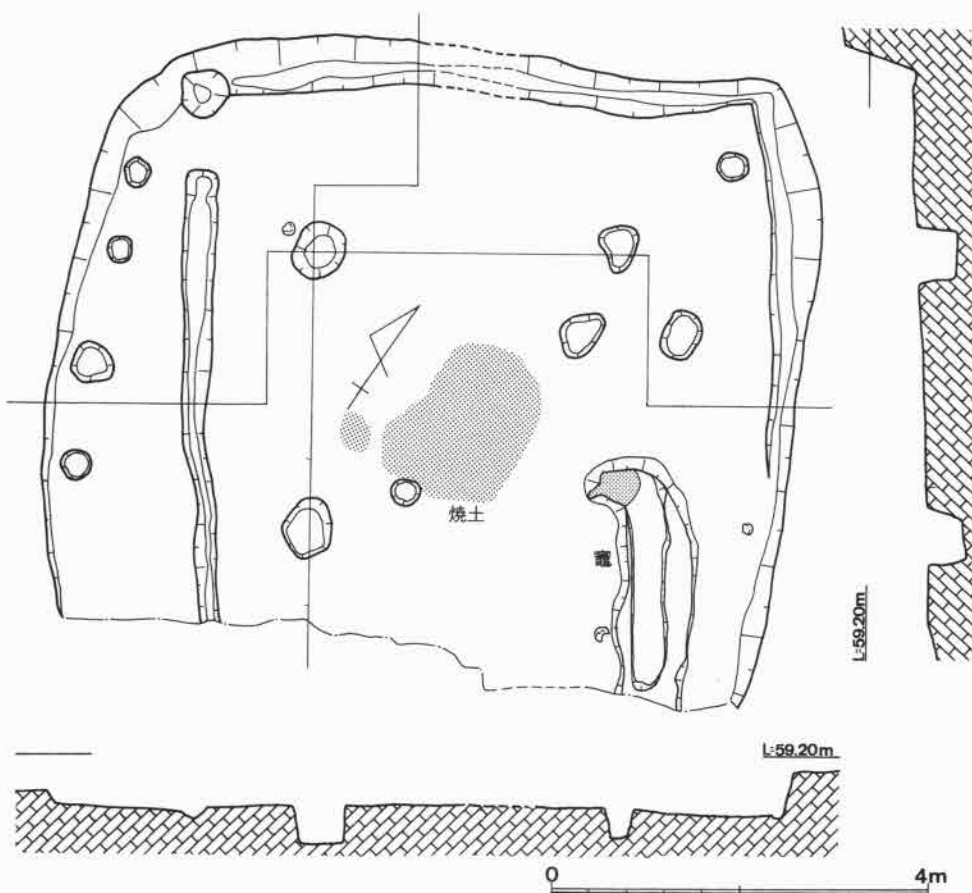
第67図 SH11平面図

S H11の床面は粘土を堅く敷きつめた張り床である。南西の柱穴に近接したところで焼土の広がりや、また南東壁に向かってのびる造り付けの竈を確認した。竈は、全体に浅い掘り込みを設けて焼成部と煙道部を造り、その周囲に黄褐色粘土を積み上げることにより構築されていた。竈は、煙道部の先端が試掘トレンチによって破壊されており、残存長1.9mを測る。かなり煙道部の長い竈である。

出土遺物は、須恵器杯H(48)、滑石製紡錘車などがある。48は、南西の柱穴付近の床面上で出土した。口径11.5cm・受け部径14.1cm・器高4.2cmを測る。底部は、ヘラ切り後未調整である。TK217(古相)に属すると思われる。滑石製紡錘車は、焼土が堆積していた落ち込みから出土した。直径4.2cm・高さ2.3cmを測る。

竪穴式住居跡 S H12(第68図・第72図49・50)

S H11の西側に接する竪穴式住居跡である。中段平坦地のほぼ中央に位置する。S H12は、榎谷横穴で検出された竪穴式住居跡の中では最大規模を誇る。遺存状態は、非常によ



第68図 S H12平面図

く、丘陵側の壁高は最大で0.7mを測る。周壁溝を有するが、全周はしない。南西壁からやや離れたところに溝がのびる。住居跡内の区画溝と思われる。この溝よりも南西側で土玉2個が出土している。

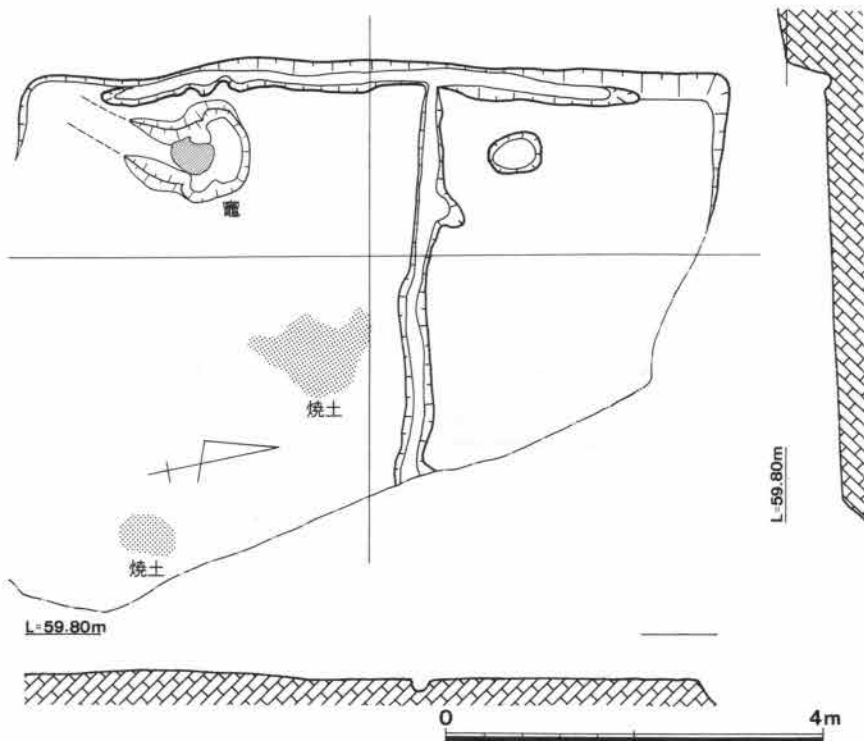
主柱穴は、3個確認できたが、当然、東側にも柱穴の存在が予想される。しかし、その位置に主柱穴を復原すると、それは竈上となる。このため、SH12の上部構造がどのようにして建てられていたのか一考を要する。

床面は、粘土を敷きつめた張り床で、中央付近では焼土の広がりを確認した。住居跡の東隅には、造り付けの竈が構築されている。全長2.5mを測る。竈の構造は、SH11とは同じで、煙道部の長い構造である。

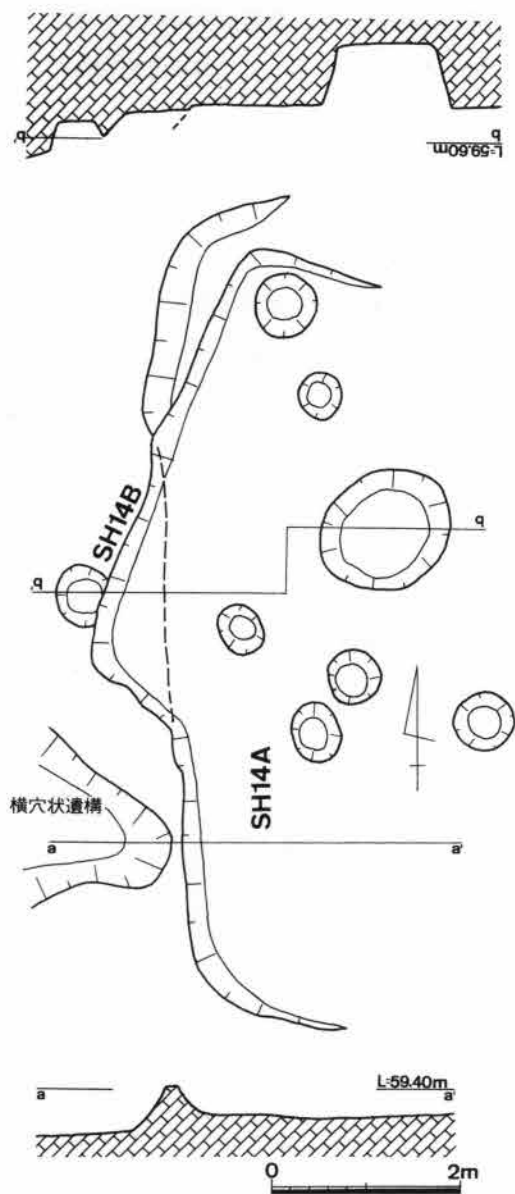
遺物は、須恵器杯H(49・50)などが少量出土している。49・50は、ともに磨滅の著しい杯Hである。どちらも、底部の調整はヘラ切り後ナデしていると思われる。49は、口径13.4cm・受け部径14.8cm・器高4.8cmを測る。

竪穴式住居跡SH13(第69図・第72図57)

SH12の南西に位置する竪穴式住居跡である。周壁溝は、西壁に沿ってみられる。周壁溝から東へ1条の溝がのびる。住居内の区画溝と思われる。主柱穴に相当する柱穴は確認



第69図 SH13平面図



第70図 SH14平面図

大半はSH14Aに伴うものと思われる。52は、体部がやや内湾気味の平底の杯である。口径12.8cm・器高3.9cmを測る。53は、高杯脚部の破片である。底径10.7cm・残存高6.4cmを測る。58は、体部下半を欠損する。体部内面に横方向のケズリを施す。口径13.4cm・残存高6.9cmを測る。

されなかった。南西隅には、かなり削平を受けていたが、竈の焼成部を確認した。

遺物は、周壁溝から土師器碗(57)が出土した。57は、丸底の碗である。SH09出土の55・56と同形の碗とみてよかろう。口径10.7cm・器高4.4cmを測る。

竪穴式住居跡SH14(第70図・第72図52・53・58)

SH13の南側に接して位置する竪穴式住居跡である。少なくとも2基の竪穴式住居跡が重複する。主軸を南北にとるものをSH14A、北東-南西にとるものをSH14Bとする。SH14Aは、SH12・13同様、比較的大型の竪穴式住居跡である。床面上には多数の柱穴が認められるが、主柱穴となるものを特定することはできなかった。SH14Bは、SH14Aに比べるとやや小型の竪穴式住居跡である。SH14Aで検出された柱穴の中にはSH14Bに伴うものもあると考えられる。

出土遺物には須恵器・土師器がある。今回図示し得たのは、須恵器杯(52)・高杯(53)、土師器甕(58)で、

掘立柱建物跡 S B 05(第71図・第72図59・60)

斜面から中段平坦地へと変化する傾斜変換点付近に造られている。テラス状遺構の主軸は西北西-東南東である。S B 05のテラス状遺構は、丘陵側を「L」字形にカットして形成されている。床面上には、多数の柱穴がみられ、数回の建て替えが行われたことを示唆するが、復原できるものはなかった。

遺物は、埋土中から多量に出土したが、今回報告するのは土師器鉢(59)・甕(60)のみである。このほかにも、須恵器杯・甕、土師器ミニチュア土器などがある。59は、口縁端部をつまむように外反させる体部球形の鉢である。口径10.1cm・器高7.5cmを

測る。60は、口縁部がやや外反する長胴気味の甕である。同種のものにS H 07出土の甕(47)がある。口径13.3cm・器高15.6cm・体部最大径14.1cmを測る。

掘立柱建物跡 S B 06

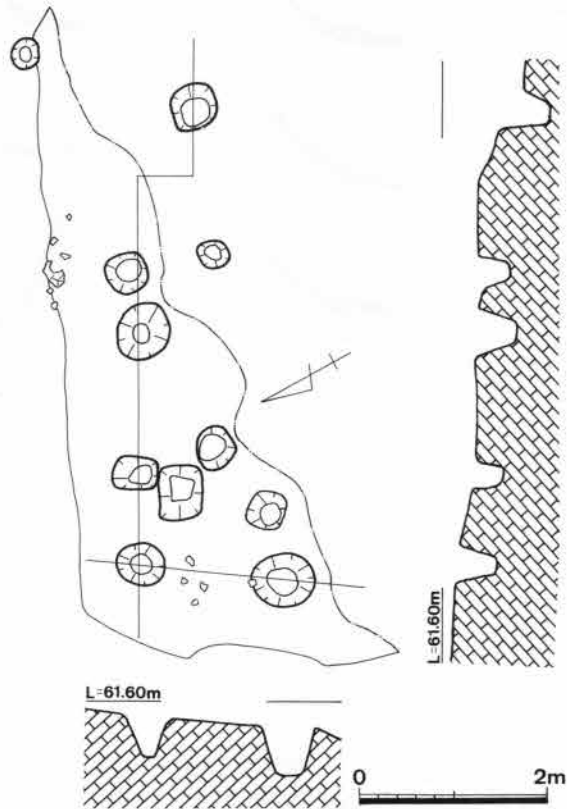
S B 05同様、傾斜変換点付近に造られたテラス状遺構である。テラス面の前面に多くの柱穴がみられたが、建物跡を復原することはできなかった。

掘立柱建物跡 S B 07

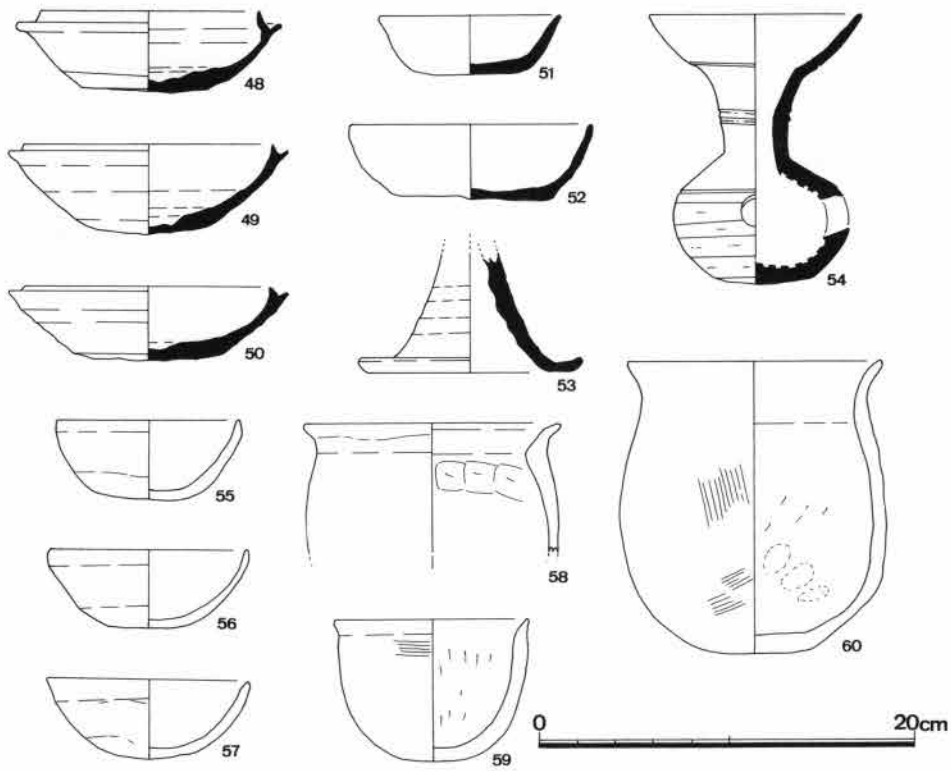
S B 05・06同様、傾斜変換点付近に造られたテラス状遺構である。S B 06と同じくテラス面前面には多数の柱穴を確認したが、建物跡として復原することはできなかった。

中段平坦地包含層出土遺物(第73図)

中段平坦地包含層出土遺物は大量にのぼるが、ここでは、器形のわかりやすいものを中心に5点のみ図示した。須恵器杯G蓋(61・62)・杯B蓋(63)・杯H(64)・脚杯碗(65)がある。61・62は、どちらもつまみを欠損するが、杯G蓋である。口径10.8~11.2cmを測る。

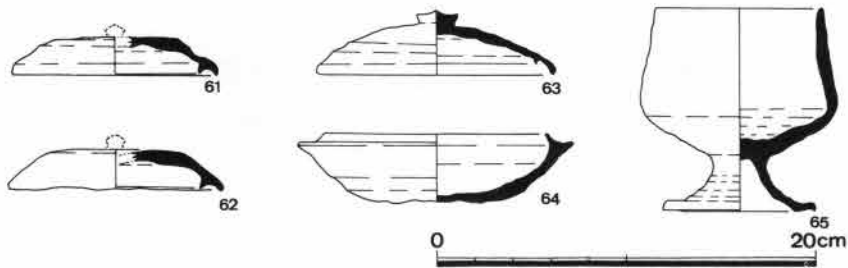


第71図 S B 05平面図



第72図 C地区中段平坦地遺構出土遺物実測図

48. S H11 49・50. S H12 51・55・56. S H09 52・53・58. S H14
 54. S H10 57. S H13 59・60. S B04



第73図 C地区平坦地包含層出土遺物実測図

63は、杯B蓋である。かえりが非常に退化し、形態が笠状を呈する。口径12.5cm・器高3.4cmを測る。完形個体である。64は、杯Hである。底部はヘラ切り後未調整である。口径11.8cm・器高3.7cmを測る。65は、脚付碗である。口縁部が内傾してプランデーグラス形を呈する。口径8.8cm・底部径8.0cm・器高10.8cmを測る。

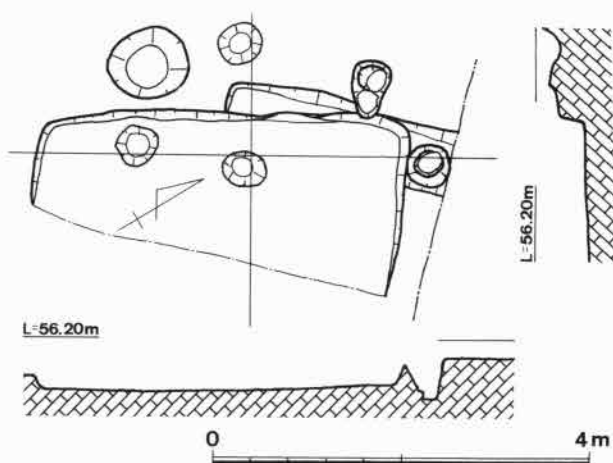
d. C地区下段平坦地

C地区下段平坦地は、著しく削平されていたが、竪穴式住居跡3基(S H15~17)を検出

することができた。このうちSH15は、奈良時代前半と思われるが、SH16・17はそれぞれ古墳時代前期及び後期に属するものである。

竪穴式住居跡SH15(第74図)

SH12の南東約9mに位置する竪穴式住居跡である。周壁溝は有さない。床面で、支柱穴と思われる柱穴2個を確認できた。竪穴式住居跡の周



第74図 SH15平面図

辺にも柱穴がみられるが、SH15に伴うものかどうかは明らかではない。

出土遺物には、須恵器・土師器があるが、いずれも細片で図示しうるものはない。ただ、埋土中から須恵器杯Bの高台部分の破片が出土しており、SH02・SB01と同時期と考えられる。

(2) その他の遺構・遺物

① 縄文・弥生時代

縄文時代の遺物には、削平を受けた下段平坦地の遺構検出面よりもさらに下層から出土した縄文時代早期の押型土器がある。縄文時代の遺物についてはこれ以外には発見されず、また遺構も確認されなかった。

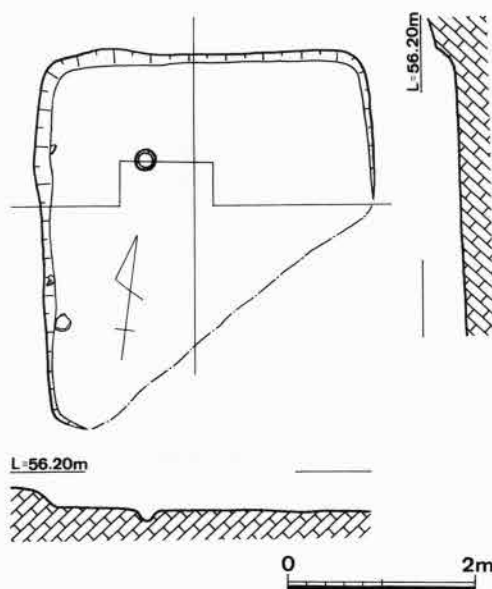
弥生時代の遺物は、下段平坦地の包含層中から数点が出土したが、やはり遺構は検出されなかった。出土した遺物は、いずれも弥生時代後期に属すると考えられる。図示し得たのは、甕の口縁部の破片1点(第77図66)のみである。66は、口径17.1cm・残存高4.0cmを測る。口縁部外面には3条の擬凹線がめぐる。

② 古墳時代

古墳時代の遺構としては、2基の住居跡を確認できたが、遺物は非常に少ない。2基の住居跡は時間的に大きく隔たっており、また後出するSH17は古墳時代後期と推定されるものの、遺物が少ないためSH11・12との間にどの程度の時間差があるのか明らかではない。

竪穴式住居跡SH16(第75図・第77図67～69)

SH11の南東約9mに位置する。床面は張り床であるが、周壁溝は有さない。支柱穴の



第75図 SH16平面図

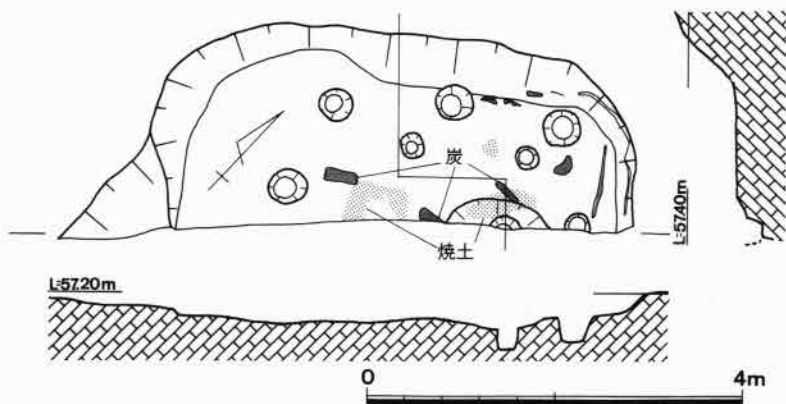
確認にもつとめたが、検出されなかった。

出土遺物は、土師器甕(67・68)・鉢(69)がある。67は、ほぼ完形の甕である。口縁部を床面に接するように逆位で出土した。口径13.2cm・器高20.1cm・体部最大径16.2cmを測る。68は、畿内布留式甕の影響を受けた甕の口縁部である。口縁部が内湾する。口縁端部内面は肥厚しない。復原口径18.6cm・残存高4.4cmを測る。69は、小さな脚台を持つ土師器鉢である。復原口径12.8cm・器高5.9cmを測る。

竪穴式住居跡SH17(第76図・第77図70)

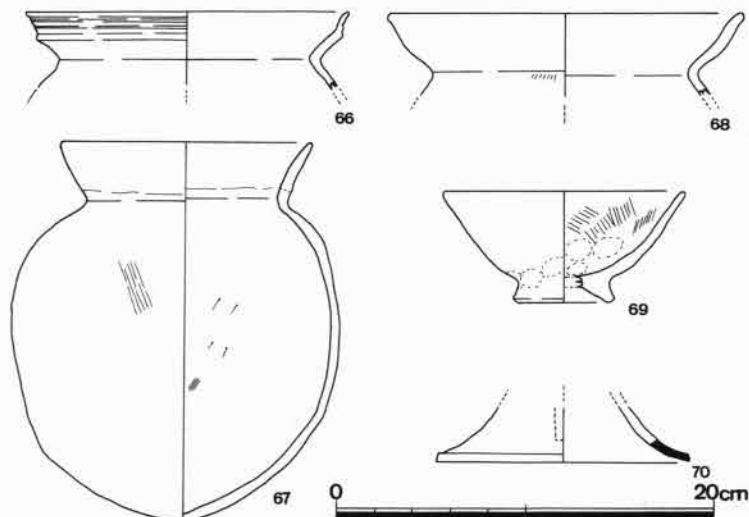
SH12の南東約4mに位置する竪穴式住居跡である。下段平坦地の削平によって住居跡の南東側半分が完全に削り取られていた。このため、住居跡内の堆積状況を確認しやすかったのであるが、厚さ2～3cmの炭層とその下に焼土のあることが確認できた。調査の結果、この炭層は、建築部材が火災によって炭化したものが住居跡に倒れ込んだものと推定された。焼土も張り床状のものが火を受けたものであると考えられた。以上のことから、SH17はいわゆる焼失住居跡であると考えられる。

遺物は、須恵器・土師器片が少量出土したのみである。図示し得たのは、須恵器高杯の



第76図 SH17平面図

脚部破片(70)のみである。70は、長脚二段スカシの高杯の脚部と考えられる。復原底径13.4cm・残存高3.5cmを測る。裾谷横穴で出土している須恵器高杯



第77図 C地区弥生・古墳時代遺物実測図

は、いずれも低脚の高杯であり、長脚二段スカシの高杯はSH17出土のものに限られる。70は、炭層の上から出土しており、SH17の焼失時期を示しているといえる。

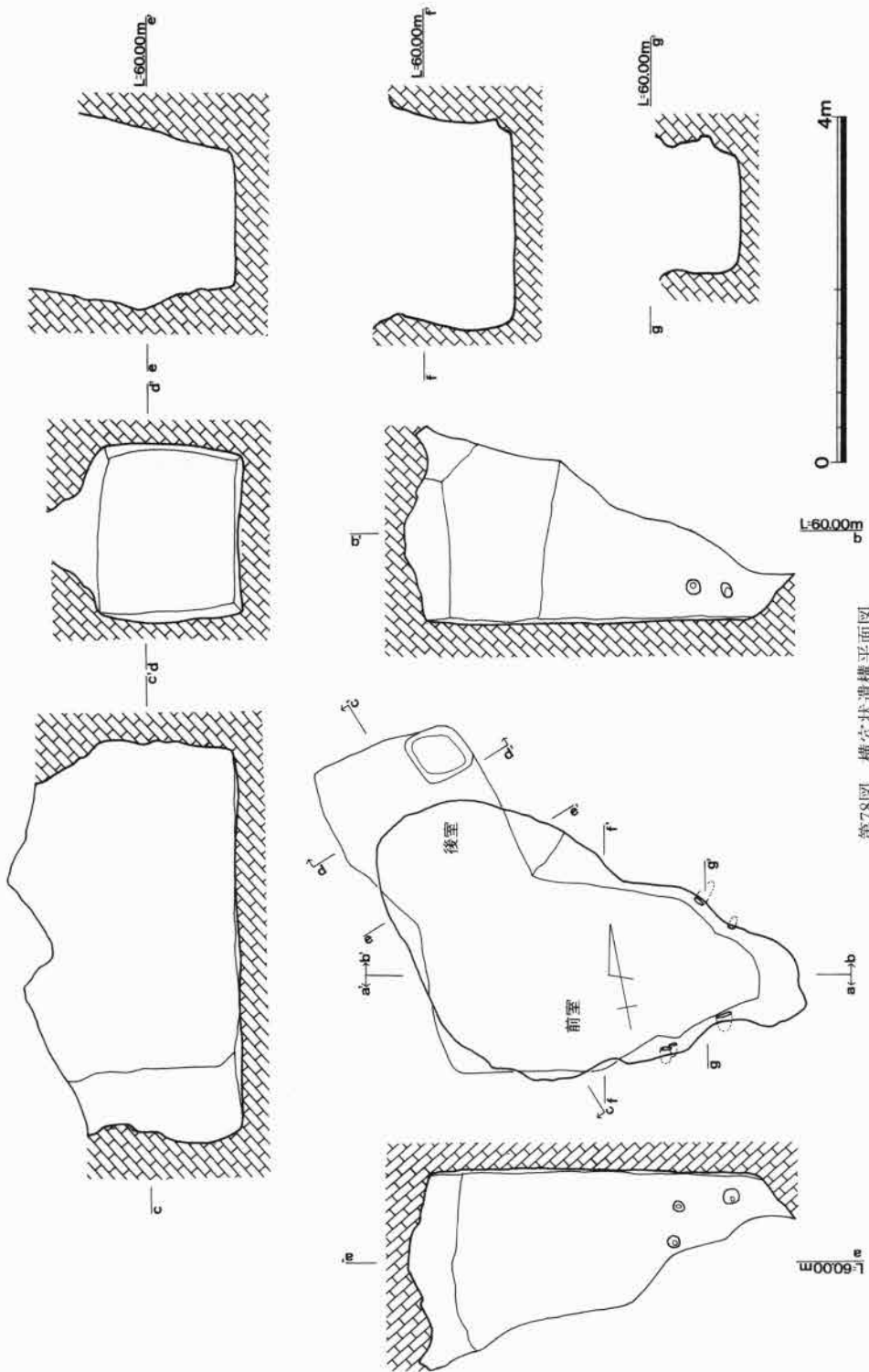
③奈良時代以降

奈良時代以降の遺構としては、時期を決定しがたい横穴状遺構がある。このほかにも、漆と思われる黒色物質の付着した土師器碗が包含層中から多数出土している。この土師器碗は、底部に糸切り痕がみられ、時期的には奈良時代以降と思われるが、これに関連するような遺構は検出されなかった。

横穴状遺構(第78図)

入り口部分が地下へ垂直におりる地下式横穴に近い形態をとる。平面形は、フラスコ状を呈する2つの空間が、入り口からみて右手におれる「L」字状に結合したような形態をとる。したがって、間仕切り部分を残さないものの、それぞれの空間を区別できるものとし、ここでは、入り口側の空間を前室、右側におれた空間を後室と呼ぶことにしたい。

前室は、全長4.4m・幅2.2mを測る。天井部は、完全転落していたので高さを知ることはできない。前室の平面形は、フラスコ状を呈し、この部分だけであれば、一般的な横穴に類似した平面形を示す。後室は、全長2.9m(前室と重なる部分は含まない)・幅1.9mを測る。後室の一部で天井部が残存しており、空間の高さは1.9m程度はあったと思われる。後室の平面形は、前室の平面形の奥壁側に類似した形である。前室と後室の結合部分の床面の形状は直線的にならず、やや不自然に屈曲している。これは、当初からこのような「L」字状の空間を造ろうとしたのではなく、一旦前室を造った後、何らかの理由により、後室を造って空間を拡張したのではないだろうか。



第78図 横穴状遺構平面図

出土遺物は、横穴状遺構の埋土中から須恵器杯Bや白磁碗の破片など、わずかな土器片が比較的浮いた状態で出土したのみで、築造時期を決定することはできなかった。出土遺物からではやや時間幅は広がるが、8～11世紀と考えられる。横穴状遺構の用途についても、床面出土の遺物が皆無であったことから明らかにすることはできなかった。墓、あるいは貯蔵穴としての機能を考えることができる。

なお、この種の地下式の横穴状遺構は、裾谷横穴と丘陵を隔てた北側の斜面に位置するエノボ横穴で2基確認されている^(注9)。

3. ま と め

今回の調査では、特に7世紀前半を中心とする集落の実態について明らかにすることができた。これまで丹後地域において、この時期の集落については、十分明らかにされておらず、大きな成果が得られた。以下では、注目される個別の問題点について検討し、遺跡の変遷を明らかにすることによってまとめとしたい。

① 竪穴式住居跡の構造について

裾谷遺跡では、多数の竪穴式住居跡が確認された。これらは、構造や立地の点から大きく3つに分類することができる。

a類 丘陵斜面部に造られ、周壁に柱穴が重複するもの。相対的に小規模である(SH04・05・09・10)。

b類 丘陵斜面部に造られるが、周壁に柱穴が重複しないもの。SH03を除いて相対的に小規模である(SH01・02・03・06・07・08)。

c類 平坦地に造られる住居跡で相対的に規模が大きい。張り床を施しているものが多い(SH11・12・13・14)。

各竪穴式住居跡に形態差がみられるのは、機能差あるいは時期差の違いによるものと考えられる。機能差という点については、SH02において鍛冶炉の存在が想定されるが、他の竪穴式住居跡やテラス状遺構においても同様に存在する可能性がある。したがって、これらの中には鍛冶工房的な機能を有するものも存在したと考えられる。

時期差という点からみると、c類としたSH11・12が裾谷遺跡で検出された飛鳥～奈良時代にかけての竪穴式住居跡群では、最も古く位置づけられる。これに続く住居跡群としては、SH11・12と同時期と考えられるSB04の埋没後に築造されたSH04、すなわちa類の住居跡と考えられる。a類の竪穴式住居跡群からは良好な土器資料が出土していないが、SH11・12、SB04とそれほど時間的には隔っていないと考えられる。そして、これらに続くのが須恵器杯Bが出土したSH02・17など、b類の竪穴式住居跡群と考えられる。

先に大きく3分類した住居跡の形態は、c類→a類→b類と変遷していくと考えられる。

②小規模な横穴について

2号横穴からは焼骨が出土した。焼骨が出土する小規模な横穴は、全国的にみてもその存在が珍しく、竹野川の対岸に位置する大宮町周枳地区に所在する左坂横穴群(B支群)で発見されたものが京都府内では唯一の例であった。今回は、2例目となるものである。焼骨を埋納する小規模な横穴の時期については、すでに検討を行っており、2号横穴に伴う遺物はみられなかったものの、ほぼ8世紀前半のうちに収まるのではないかと考える^(註10)。

1号横穴は、2号横穴と近似した規模を有するが、一方では大型横穴に類似した整った形態をしていることから、2号横穴よりも若干先行するものと思われる。ただし、玄室内を炭混じりの暗茶褐色土で充填するなど、これまでの焼骨を埋納するような小規模な横穴とはやや異なった性格を有するものと考えられる。

③各遺構の変遷

裾谷遺跡では、縄文時代早期の押型文土器の破片や弥生時代後期の甕破片などがあるが、この時期に所属する遺構は確認されていない。遺構が確認されるのは古墳時代前期に属する竪穴式住居跡SH16である。SH16からは、畿内布留甕の影響を受けたと考えられる甕口縁破片が出土している。SH16に続く竪穴式住居跡はSH17である。SH17は、焼失住居と考えられ、埋土上層から長脚二段スカシの高杯の脚部破片が出土しており、他の竪穴式住居跡・テラス状遺構に先行するものと考えられる。

裾谷遺跡の遺構の大半は、飛鳥時代前半から奈良時代に属するものである。この時期で最も古い住居跡は、すでに述べたように中段平坦地で検出されたSH11・12、上～中段斜面で検出されたSB04・SH07である。これらの住居跡からは須恵器杯Hの蓋杯が出土している。杯Hの底部は、ヘラ切り後ナデで仕上げるか、あるいはヘラ切り後未調整のままである。既存の編年観では、ほぼTK209またはTK217(古相)に位置づけられる^(註11)。この時期を裾谷遺跡における第1段階としておく。

これらの住居跡群に続くのは、①においてa類とした住居跡群やSB03などが該当するものとする。この段階の住居跡群は、第1段階のものと比較検討するほどの資料がないため、層位及び住居の形態によって第1段階と一応分離して第2段階としておく。なお、包含層から杯G蓋や杯B蓋などが出土しているため、第2段階の時期を知る上で参考になるものと思われる。

第三段階に相当する住居跡群は、SH01・02・15、SB01・02が該当すると思われる。この段階では集落の中心がB地区に移り、丘陵裾に近いところに住居跡を営んだと思われる。これは、C地区の上段平坦地に2基の小規模な横穴が造られたために、居住域と墓域

付表6 竪穴式住居跡一覧表

遺構名	旧遺構名	平面形	長辺	短辺	床面標高	主 軸	備 考
S H01	S H21	隅丸方形	5.8	1.8	55.2	東北東-西南西	
S H02	S H22	不明	5.4	—	53.2	北東-南西	
S H03	S H06	方形	6.4	4.5	65.2	北東-南西	掘立柱建物跡か
S H04	S H01	方形	4.1	2.4	65.0	北東-南西	
S H05	S H02	方形	5.1	2.9	64.3	北北東-南南西	規模を拡張か
S H06	S H12	方形	4.8	2.4	63.9	北北東-南南西	
S H07	S H14	隅丸方形	3.1	1.2	63.4	北東-南西	
S H08	S H15	方形?	4.1	0.9	62.8	北東-南西	周壁と床面の一部のみ残存
S H09	S H08	方形	5.7	2.7	59.9	東-西	
S H10	S H20	方形?	8.6	2.0	59.8	北西-南東	
S H11	S H17	方形	4.3	4.2	59.0	北東-南西	
S H12	S H16	方形	7.4	6.7	58.6	北東-南西	
S H13	S H07	方形	7.4	4.4	59.4	北-南	
S H14	S H09	方形	8.1	1.6	59.1	北-南	
S H15	S H26	隅丸方形	3.8	1.9	55.7	北北東-南南西	
S H16	S H27	方形	3.9	3.5	55.8	東-西	
S H17	S H18	隅丸方形	5.0	2.2	57.0	北東-南西	焼失家屋?

付表7 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	旧遺構名	テラス状遺構			主 軸	備 考
		長 辺	短 辺	床面標高		
S B01	S H23	8.2	2.2	54.1	N-46° -E	
S B02	S H24	8.0	1.9	54.4	N-45° -E	主軸はS B02B
S B03	S H11	7.6以上	2.2	65.1	N-8° -W	主軸はS B03A
S B04	S H13	9.8	2.0	64.0	N-38° -E	
S B05	S H05	6.4	3.4	61.4	N-64° -W	
S B06	S H04	6.2	1.2	60.9	—	テラス状遺構のみ
S B07	S H03	4.9	0.9	61.0	—	テラス状遺構のみ

付表8 小横穴一覧表

遺構名	旧遺構名	全長	女室		前庭部		主 軸	備 考
			長さ	幅	長さ	幅		
1号横穴	4号横穴	2.0	0.9	0.8	1.1	0.5	N-70° -W	
2号横穴	3号横穴	1.7	0.7	0.6	1.0	0.7	N-100° -W	焼骨出土

を分離するという行為の結果と考えられる。S H02・15、S B01から平城Ⅱ～Ⅲ段階に併行すると思われる杯Bの蓋杯類が出土しており、ほぼ奈良時代前半期に位置づけられる。

(筒井崇史)

注1 肥後弘幸「[5] 裾谷横穴・エノボ横穴」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』 京都府教育委

員会) 1994

注2 今回の報告にあたって参考とした主な文献は以下の通りである。

『境ヶ谷遺跡群－庄原養鶏団地造成に係る埋蔵文化財の調査－』 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財センター 1983

『一般国道9号(安来道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－越峠遺跡・宮内遺跡－』 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1993

『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書ⅩⅠ－オノ峠遺跡－』 建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1993

注3 遺構の主軸は、竪穴式住居跡・テラス状遺構の場合、概略方位を示し、柱列の場合は座標北からの方位角を示す。

注4 注2の各文献。なお、報告書によっては段状遺構としているものがみられる。

注5 須恵器の杯身・杯蓋の型式は、奈良国立文化財研究所で使用されている型式名を用いる。なお、型式分類できないものについては単に杯として報告する。

注6 筒井崇史「(2)左坂横穴群」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注7 石崎善久「定山遺跡第3次」(『京都府遺跡調査概報』第54冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993 111～112頁

注8 左坂横穴B13号横穴、里ヶ谷6号横穴、大田鼻15号横穴などからの出土例が知られる。

注9 平成6年度に京都府教育委員会によって調査が行われている。

注10 注6文献参照。

注11 山田邦和「飛鳥・白鳳時代須恵器研究の展望」(『古代文化』40-6 (財)古代学協会) 1988

8. 左坂古墳群

1. 調査経過

左坂古墳群は、京都府中郡大宮町字周枳小字左坂に所在する。左坂古墳群は、丹後半島を南北に貫流する竹野川によって形成された沖積平野に、東から西へ派生する丘陵の稜線上に古墳群が分布している。この丘陵では、弥生時代中期から後期の墳墓である左坂墳墓群や、140基以上の古墳が確認され、横穴群も里ヶ谷横穴群6基・左坂横穴群18基以上と、弥生から奈良時代にかけて墓域として利用されてきたことが明らかになりつつある。

当センターでは、丹後国営農地開発事業周枳団地造成工事に先立ち、平成2年度以降、この丘陵に所在する古墳群・横穴群の調査を実施してきた。平成2年度には左坂古墳群E支群3基・D支群1基・C支群7基、平成4年度には里ヶ谷横穴群、左坂古墳群C支群8基の表土掘削、平成5年度には左坂古墳群B支群8基・C支群3基・G支群4基、左坂横



第79図 調査地位置図及び周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | | |
|--------------|---------|-----------|--------------|----------|
| 1. 左坂古墳群・横穴群 | 2. 大谷古墳 | 3. 十二社山古墳 | 4. 新戸1号墳 | 5. 通り古墳群 |
| A. 大谷遺跡 | B. 菅外遺跡 | C. 裏陰遺跡 | D. 大宮売神社周辺遺跡 | |

付表9 平成6年度調査古墳一覧表

古墳番号	墳形	埋葬施設	出土遺物
B10・11号墳	台	木棺；箱	鉄剣1
B12号墳	台	木棺；箱	
B13号墳	台	土器棺	竪櫛2
B14号墳	円	第1主体部；土壙墓	
		第2主体部；木棺・箱	
		第3主体部；木棺・箱	
		第4主体部；木棺・舟？	
B17号墳	円	第1主体部；木棺・箱	ヤリガンナ1・ガラス小玉1
		第2主体部；木棺・箱	
		周辺第1主体部；土壙墓	
		周辺第2主体部；土器棺	

穴群B支群の調査を実施してきた。このうちの一部についてはすでに報告を行っている。

今年度は、左坂古墳群B支群の残る6基と平成4年度に表土掘削のみ実施したC支群が調査対象となった。左坂古墳群B支群は、平成6年7月25日に表土掘削を開始し、木棺直葬を中心とする前期の古墳群であることが明らかとなった。また、古墳の基数については当初分布調査では6基と考えられていたが、実際に調査を実施すると5基であることが明らかとなった。C支群は、平成6年10月18日から調査を実施し、埋葬施設の検出・掘削を中心に作業を実施したが、造成計画その他諸般の事情により、大部分の作業を次年度以降に持ち越すこととなった。B支群は、平成7年3月3日に現地説明会を実施し、同日、すべての発掘器財を撤収し現地作業を終了した。

なお、B支群での調査面積は約1,200㎡である。

2. 調査概要

今回、調査を実施した古墳は5基である。出土遺物については現在整理中のため、詳細については次年度以降報告を行う予定である。また、各古墳の概略については付表に示すとおりである。

なお、古墳番号については暫定的なものであり、今後再整理を行いたいと思う。

3. まとめ

今回、調査を実施した5基の古墳は、木棺・土器棺を埋葬施設に用いる前期古墳であることが明らかとなった。古墳出土土器の編年的位置づけ、B支群の群構造の分析など解明すべき問題点が多い。今後の整理作業を通じてこれらの問題点を明らかにしていきたい。

(石崎善久)

9. 北谷古墳群

1. はじめに

今回の調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の女布団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受けて実施した。北谷古墳群は、京都府熊野郡久美浜町字女布小字北谷・南谷に所在する10基からなる古墳群で、このうち造成地内にかかる4基を対象として発掘調査を実施した。調査は、京都府教育委員会が試掘調査を平成5年度に実施し、その成果を受けて当センターが平成6年4月25日から10月21日にかけて発掘調査を実施した。調査は、調査第2課調査第1係調査員田代 弘が担当した。



第80図 調査地と周辺の遺跡(1/10,000)

- | | | | |
|---------------|------------|----------------|-------------|
| 1. 調査地(北谷古墳群) | 185. 南谷古墳群 | 29・240. 塚ヶ谷古墳群 | 32. 薬師古墳群 |
| 158. 女布北遺跡 | 31. 女布遺跡 | 187. 女布神社遺跡 | 170. 大谷古墳群 |
| 171. 谷垣B古墳群 | 27. 谷垣古墳群 | 173. サトB古墳群 | 172. サトA古墳群 |

2. 遺跡の位置と環境

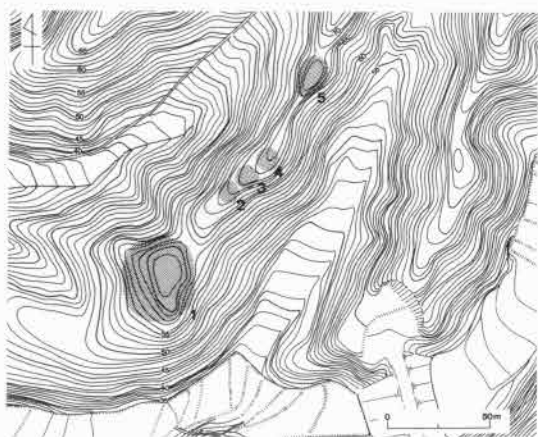
北谷古墳群は、久美浜町東部を北流して日本海に注ぐ佐濃谷川中流域に位置し、佐濃谷川の東岸に派生する丘陵上に立地している。佐濃谷川とその支流には狭長な沖積地が形成されており、沖積地とこれを望む丘陵上には数多くの遺跡が分布している。なかでも、河口の砂丘に立地する函石浜遺跡^(注1)は、弥生時代前期以降長期にわたって営まれた集落遺跡で、貨泉出土地としてよく知られている。

北谷古墳群周辺には、女布遺跡・女布北遺跡・竹藤遺跡などの集落遺跡や、南谷古墳群・塚ヶ谷古墳群・薬師古墳群などの古墳群があり、左岸にも大谷古墳群・谷垣古墳群・サト古墳群・堤谷古墳群・豊谷墳墓群などの古墳群をはじめ、須恵器・瓦生産遺跡である堤谷窯跡や、墳墓群とみられる豊谷遺跡^(注2)などがある。

北谷古墳群周辺では、国営農地造成に伴い、このうちいくつかの遺跡が調査されている。集落遺跡では女布北遺跡、墳墓では豊谷墳墓群・堤谷古墳群・薬師古墳群・塚ヶ谷古墳・鶏塚古墳、生産遺跡として堤谷窯跡などである。

女布北遺跡は、弥生時代末期から古墳時代初頭の住居跡が検出された^(注3)。今回調査した北谷1・5号墳と位置、時期ともに近接するものである。女布遺跡は、女布北遺跡と同じ時期から古墳時代後期にかけての散布地である。これらの集落遺跡は、周辺の古墳の造墓集団の居住地の候補地として、注目されるところである。豊谷墳墓群は、弥生時代中期初頭(第Ⅱ様式)に営まれた台状墓で、墓壙内から石剣1点と打製石鏃22点が検出されている^(注4)。

堤谷古墳群は、古墳時代前期^(注5)～中期、鶏塚古墳^(注6)、薬師古墳群^(注7)・塚ヶ谷古墳群^(注8)では後期古墳がそれぞれ調査された。堤谷古墳群A1号墳は中期の方墳、B支群は前期から中期にかけて営まれた11基の木棺直葬墳である。堤谷古墳群は、今回調査した北谷古墳群とほぼ同



第81図 北谷古墳群位置図(1～5号墳)

じ時期の古墳を含んでおり、両者の関連を検討する必要がある。鶏塚古墳・塚ヶ谷古墳は、横穴式石室をもつ後期後半の古墳である。塚ヶ谷古墳は、丘陵高所に単独立地する外護列石をもつ円墳で、この時期の佐濃谷川流域の最有力者の墳墓である。堤谷窯跡は、古墳時代末から奈良時代初期にかけて営まれた須恵器と瓦の窯跡で、3基の窯跡がみつっている。瓦は、白鳳末期様式であ

り、豊岡市薬琳寺出土瓦との類似性が指摘されている。豊谷遺跡では、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて営まれた土製筒形容器を埋納した土坑群が調査された。素掘りの土坑に副室があり、多くは副室に土製筒形容器が納められていた^(注9)。これらの遺構を墳墓群と見るむきもあるが、福知山市大道寺経塚や、福知山市高田山経塚などと構造上類似点が認められ、経塚と考えられる。

3. 調査の経過と概要

(1)調査経過

北谷古墳群は、『京都府遺跡地図』では6基からなる古墳として周知されてきたが、発掘調査に先立つ分布調査の結果、造成対象地内で新たに4基の古墳が発見され、10基以上からなる古墳群であることが明らかになった。『京都府遺跡地図』に示された古墳群の範囲がやや拡大するとともに、南北2群のまとまりが明確となった。南群は、尾根稜上に5基の円墳が連珠状に造られ、北群は丘陵頂部にまとまって築造されていることから、南群と北群は異なる2つの古墳群として捉えるべきだろう。

調査は、南群を対象とした。丘陵先端側の古墳から順に1～5号墳と名付けた。1号墳は、南北に主軸をもつ楕円形の古墳で、長軸約40mの規模をもつ大型の古墳である。2～4号墳は、裾を接して造られた直径10m前後の小円墳である。5号墳は、長軸約20mの長楕円形墳である。いずれも丘陵の起伏を利用して、削り出して造った古墳である。

1～4号墳を当センターが、5号墳を京都府教育委員会が担当して調査を実施した。

調査は、丘陵先端側に位置する1号墳から順に着手した。まず、立木伐採を行い、前年度試掘トレンチを清掃し、排土を除去した。基準杭を設け、畦を残して表土を除去した。表土は、墳頂部から順に4分の1ずつ除去し精査を行った。精査の結果、主体部は墳頂部平坦面の南よりの地点に、東西に主軸をもち、墳丘主軸に直交して配置されていることがわかった。主体部が1基のみであることを確認した段階で墳丘平坦部の精査を終え、墳丘斜面の表土除去作業に主眼を移した。墳丘表土除去作業も墳頂部と同じく、4分の1を単位として進めた。これと平行して、2・3・4号墳の表土除去作業と主体部検出のための精査を行った。3・4号墳の主体部を検出した段階で、墳丘表土除去作業と主体部精査の2班にわけ、調査を進めた。主体部の調査は、1号墳では主体部中軸線を基準として8分割し、対角線上にある各区を層位ごとに順に掘り進めた。主体部埋土上面とみられる層が陥没しており、陥没面上で供献土器群を検出した。写真撮影・実測図を作成した後、さらに掘り進めたところ、2段墓壇であることが確認された。棺痕跡の確認を主眼として墓壇2段目を精査したところ、墓壇底面で組合式木棺の痕跡を検出した。木棺痕跡を記録した

後に木棺内を精査し、鉄剣・のみ、碧玉製紡錘形石製品を検出した。3号墳では2基、4号墳では1基の主体部を検出した。3号墳第1主体で鉄剣・鉄鏃・刀子、第2主体部で刀子が出土している。各古墳の掘削、記録完了後、9月29日に関係者と一般の方々を対象として現地説明会を実施した。10月12日にラジコンヘリによる空中撮影を行った。10月21日に調査を終了し、現地を撤収した。

(2)調査概要

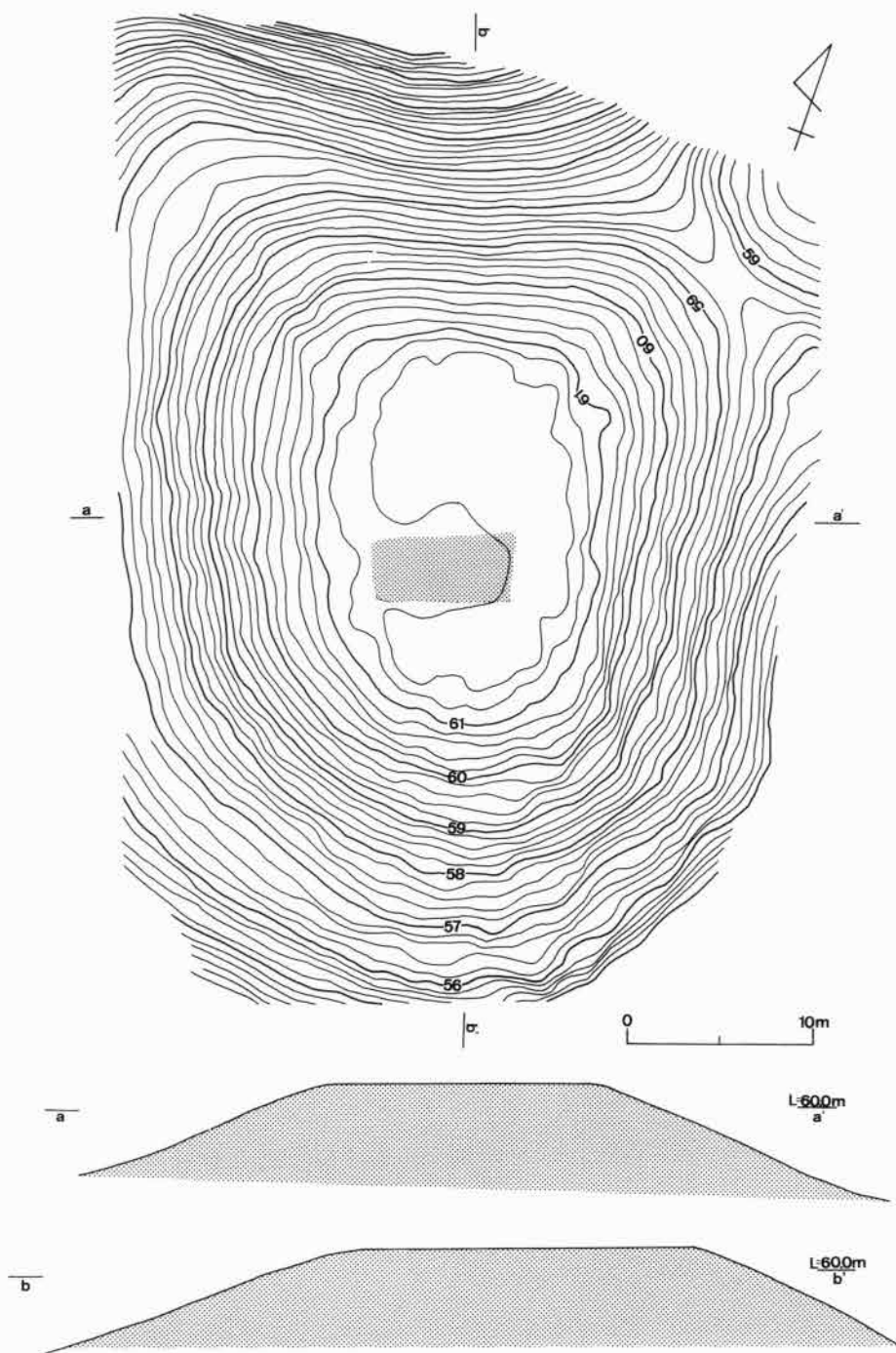
①1号墳 丘陵稜上に位置する。標高約61m・東西長約36m・南北長約40m・高さ5mの規模をもつ。南北に主軸をもつ長楕円形の古墳である。丘陵の自然地形を墳丘として利用し、主に地山を削り出して造った古墳である。墳頂部には東西約15m・南北約21mの平坦面がある。この平坦面の表土と黄色褐色土を約40cm除去したところ、平坦面南寄りの地点で墓壙を1基検出した。墓壙の平面形は長方形を呈し、東西に主軸を持つ。墓壙は、素掘りの2段墓壙である。上段墓壙は長さ約7.8m・幅約3.8m、下段墓壙は長さ約6.5m・幅約2mを測る。墓壙検出面から墓壙底までの深さは1.2m、二段目の墓壙上面から墓壙底までは65cmを測る。墓壙底の横断面は、ゆるやかな弧状を呈する(第86図)。

下段墓壙底面から10cmほど上で木棺痕跡とみられる土色変化を確認した。腐蝕痕跡からみて、木棺は、第85図のように厚さ8cmから10cmほどの板を平行に配置して側板とし、木口板を設置して自立させた組合式木棺であろう。側板全長約6m、木棺の幅は約70cmと推定される。側板の高さは、2段目の墓壙の高さに対応しているようである。検出状況からは天井板の有無は明らかでない。木口板は、西側のみを確認している。木口板は、側板の西端から約60cm内側に設置されていた。木口板の厚さは約10cmである。東木口板は検出できなかった。破線はおよその位置である。底板の有無、形状は検出状況からは明らかでない。

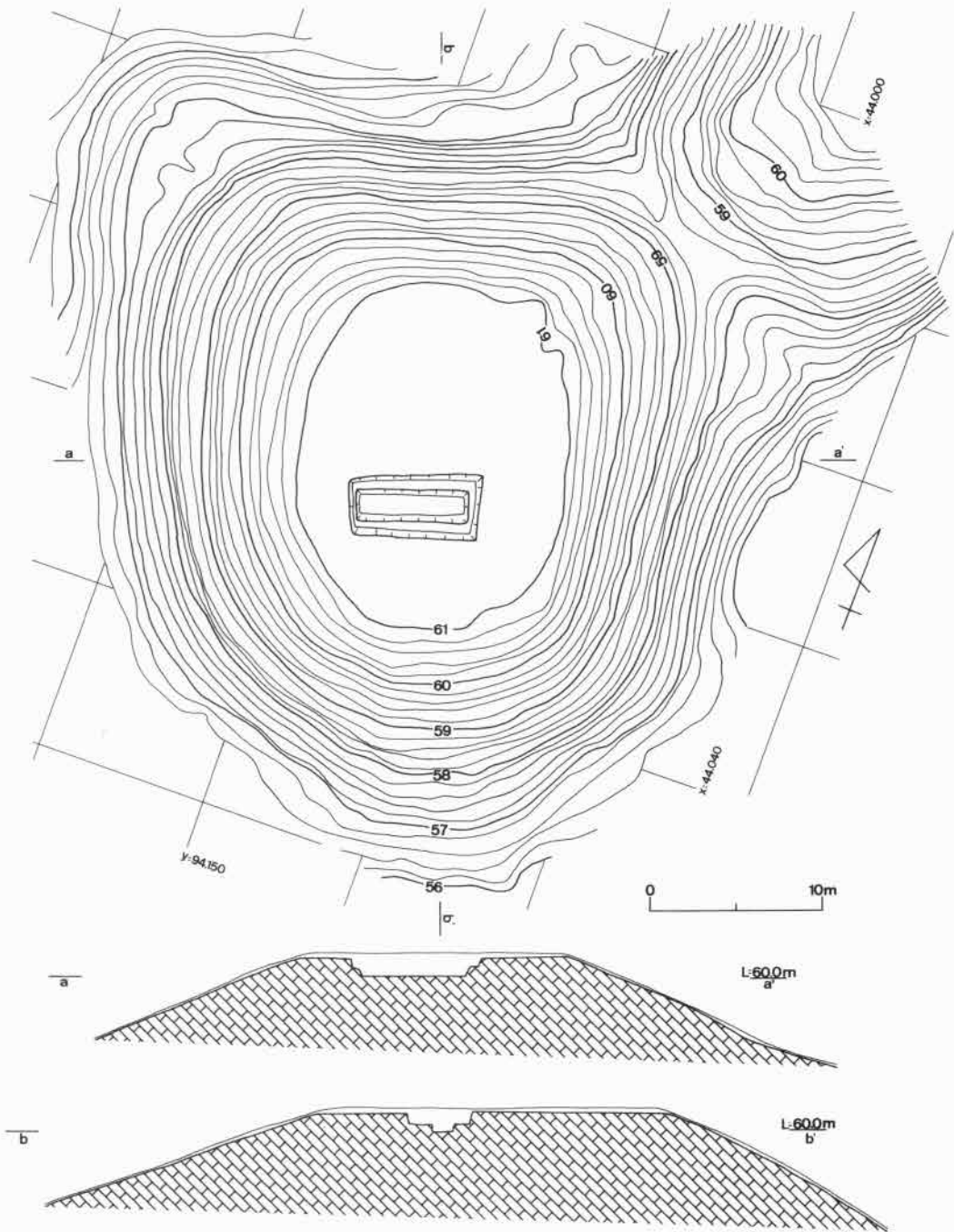
出土遺物には、土坑上面で検出した土器と、棺内で検出した碧玉製紡錘車形石製品、鉄剣、鉄製鏃がある。碧玉製紡錘車形石製品、鉄剣、鉄製鏃は西木口付近で一括して出土したものである。出土状況は次のようである。碧玉製紡錘車形石製品は、西木口板から南に約50cm、北側板から約20cm内側の地点に、段のある面を上にして置かれていた。これに接して鉄製鏃があった。鏃は、切っ先を西に向け、側板に平行して置かれていた。鉄剣は、南側板に接して、鉄製鏃とほぼ同じ位置に、切っ先を南に向けて置かれていた。棺内副葬遺物は、この3点のみである。

土器は、墓壙埋土上面と推定される地点に列状に配置された供献土器群と、墳丘上出土土器とがある。

墓壙上面出土遺物群には、壺、甕、高杯、器台などの土師器がある。墓壙埋土は、木棺腐蝕に伴い陥没しており、土器はこの陥没面に沿って中心にむかって傾いた状態で出土し



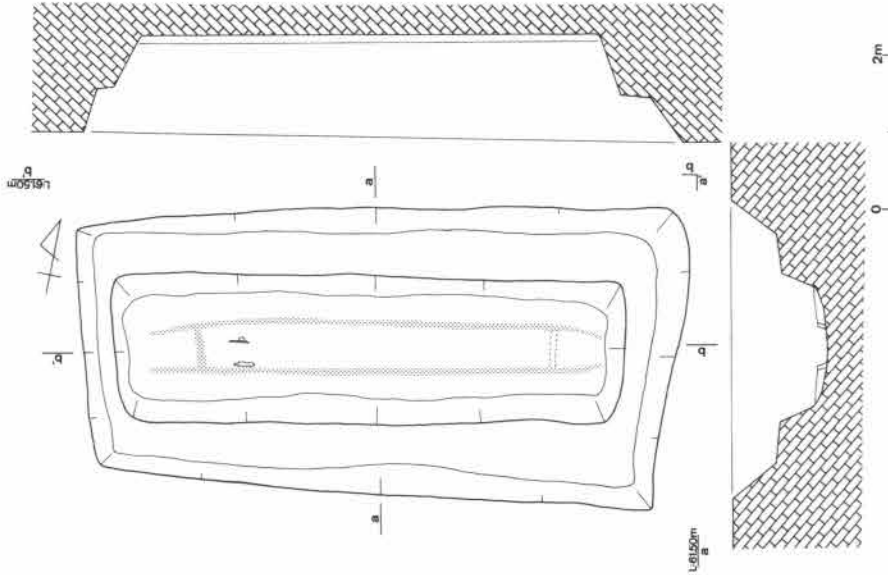
第82図 北谷1号墳墳丘測量図(調査前)



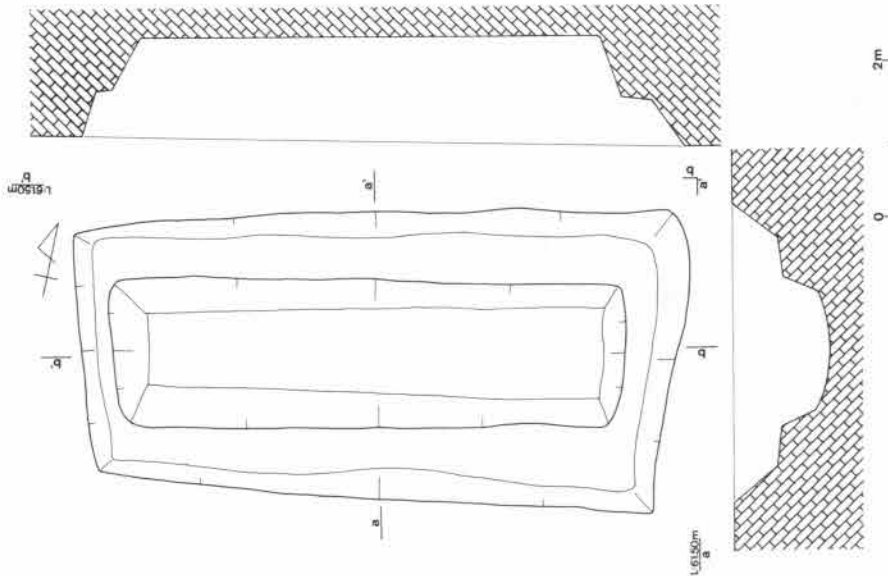
第83図 北谷1号墳墳丘測量図(調査後)

た。土器は、墓壙の中ほどに集中していて、土坑中軸ライン状に整然と配置された状態で出土した(第87図)。土圧や風化により、破片となって出土したが、高杯や器台の一部はほぼ完形に復原できるものもある。各器種の出土状況は以下のとおりである。

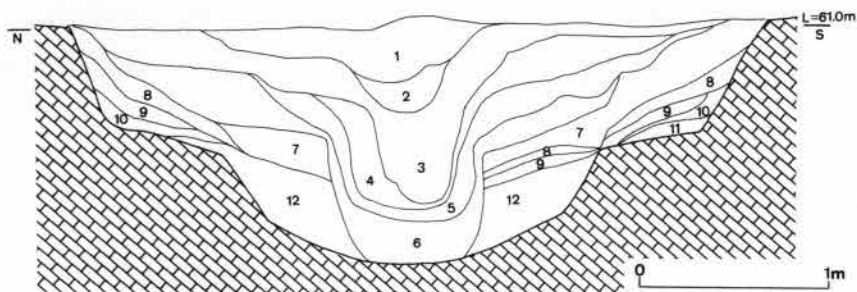
主体部中央やや東寄りに、他の土器群と離れて甕(3)が一個体置かれていた。主体部西寄りの地点に広口壺(1)、丸底壺(2)、高杯(7~15)、器台(4~6)があった。高杯・器



第85図 1号墳木棺痕跡検出状況



第84図 1号墳主体部完掘状況



第86図 1号墳主体部断面図

- | | | | |
|------------|------------|-------------------------|-----------|
| 1. 暗茶褐色土 | 2. 暗褐色土 | 3. 褐色土 | 4. 暗褐色砂質土 |
| 5. 黄褐色砂質土 | 6. 暗赤褐色砂質土 | 7. 暗褐色砂質土(茶褐色粘土ブロック混じり) | |
| 8. 明褐色砂質土 | 9. 褐色砂質土 | 10. 暗褐色砂質土 | 11. 褐色砂質土 |
| 12. 黄灰色砂質土 | | | |

台などの供献形態は、木棺木口痕跡から東へ1mまでの地点に集中している。丸底壺(2)はこれらとともに出土し、広口壺(1)はその西側に置かれていた。

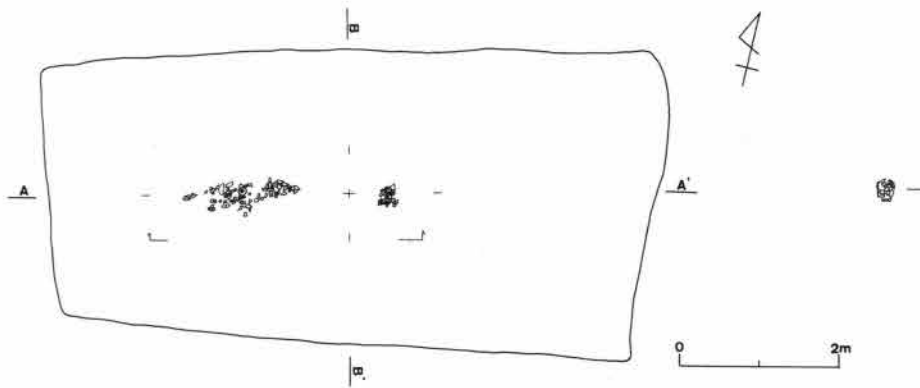
これらの土器は、主体部主軸上に位置しており、おおむね木棺痕跡の内法におさまる。墓壙を埋め戻した後に行われた儀礼的行為に伴う供献土器であろう。

墳丘出土のものは、表土中で検出した出土位置が明確でないもの(16・17・19)と、据えられた状況で出土したものがある。据えられた土器には、広口壺のものとみられる体部・底部と小型丸底壺(第93図18)とがある。これらは、墓壙の東端から東へ4mの地点で検出したものである。墓壙中軸ラインの延長上に位置しており、墓壙埋土上面で検出した供献土器群との関連が考えられる。広口壺のものとみられる体部～底部は、約10cmの黄褐色土を挟んで底部が地山に密着した状態で出土した。体部～口頸部は失われていた。18は、これに伴って出土した。

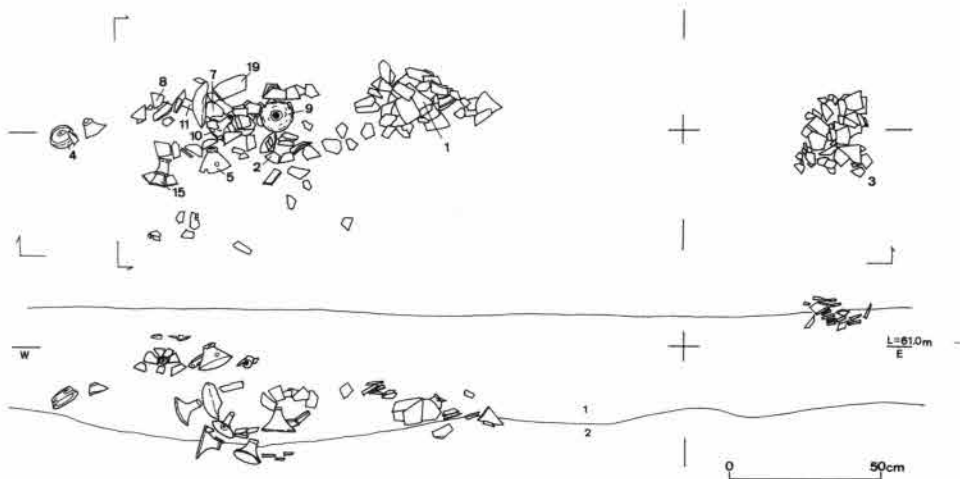
②2号墳 長軸10m・短軸7mの楕円形古墳である。丘陵を削り出して墳丘を造る。主体部は検出できなかった。3号墳第2主体部や4号墳主体部は、表土直下で検出し、深さが10cm前後であったことを考えると、削平されて失われた可能性が高い。表土中で、須恵器甕口縁部破片が出土した。この須恵器はI期に属するものである。

③3号墳 長軸10m・短軸8mの楕円形古墳である。墳頂部において、南北に主軸を持つ主体部を2基検出した。東側のものを第1主体部、南側のものを第2主体部と呼ぶ。第1主体部は、長軸約2m・幅約60cm・深さ約50cmの長方形土坑である。底部に幅25cm・深さ10cmほどの長楕円形の掘り込みがある。土坑底で鉄鏃(第91図1)・鉄剣(第91図2)・刀子(第91図3)を検出した。鉄鏃と鉄剣は東長辺に沿って置かれていた。いずれも切っ先を北にむけていた。刀子は、墓壙南より中央で検出した。南頭位であろう。

第2主体部は、長さ約2.5m・幅0.7m・深さ15cmの長楕円形の土坑である。断面形は船



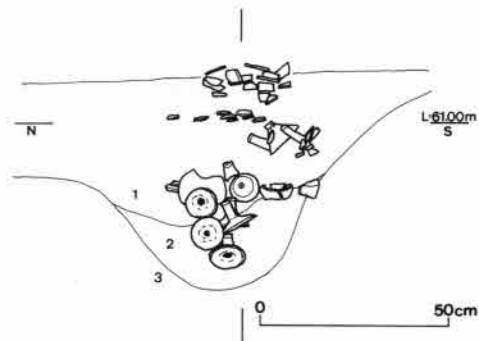
第87図 1号墳主体部土器出土状況(1)



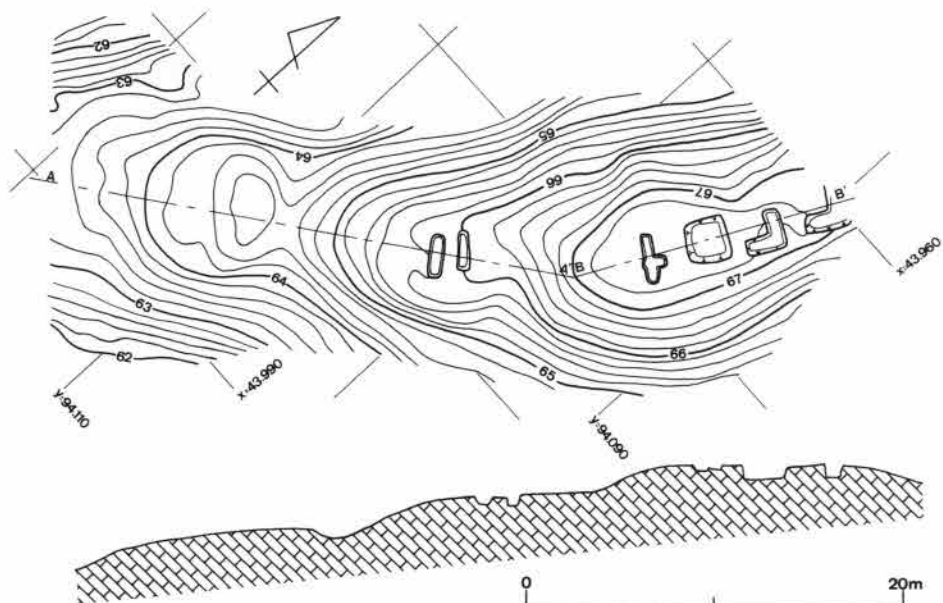
第88図 1号墳主体部土器出土状況(2)

底状である。土坑中央南よりの地点に赤色顔料が認められ、その付近に刀子が1点置かれていた。南頭位であろう。

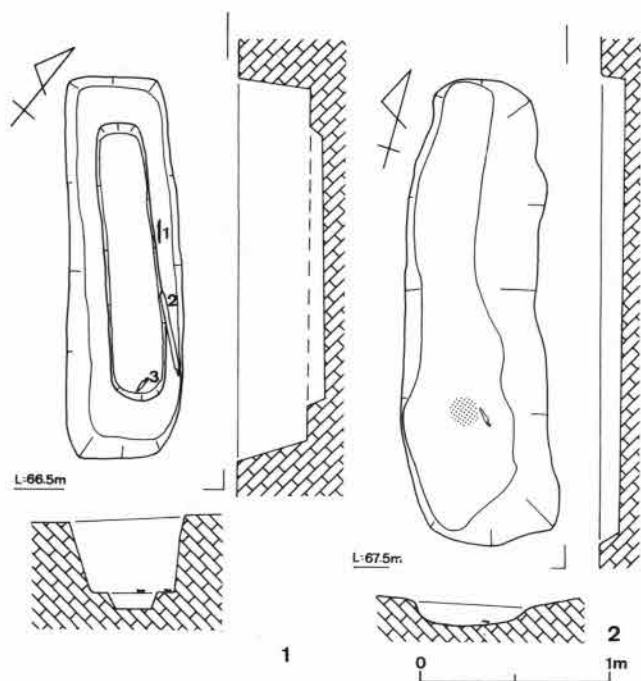
④4号墳 長軸13m・幅7mの長楕円形の古墳である。墳丘東側に攪乱坑があり、墳丘の形が明確でない。主体部は南北主軸で、長さ3m・幅60cm・深さ15cmの規模である。主体部の中央部が一部攪乱を受けている。主体部中央南よりの地点に赤色顔料が認められ



第89図 1号墳主体部土器



第90図 2・3・4号墳丘測量図



第91図 3号墳主体部実測図(アミは赤色顔料)

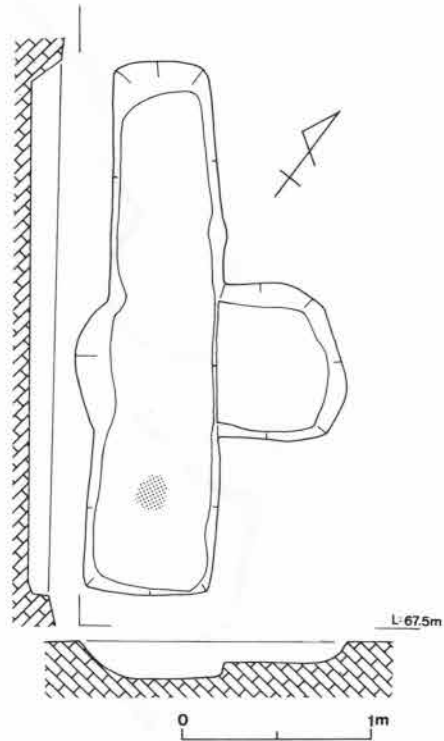
た。南頭位であろう。出土遺物はない。

⑤5号墳 京都府教育委員会が調査したものであるが、以上の古墳と関連があるので簡単に概要を記す。長軸20m・短軸12mの長楕円形の古墳である。長さ5m・幅60cmの掘形をもつ主体部を1基検出した。主体部の主軸は東西である。主体部内から鉄製ヤリガンナ1点と碧玉製管玉、琥珀製勾玉などの玉類が出土した。墳丘東裾部において供献土器とみられる広口

壺、丸底壺などが出土している。古墳時代前期の古墳である。

(3)出土遺物

1号墳 主体部内出土遺物 第96図は、碧玉製紡錘車形石製品である。上面に三段の匙面取りがある。直径約6.1cm・厚さ約1.3cmを測る。中心に孔がある。孔径は、上面側で約3mm、底面側で約2mmを測る。淡緑色の軟質の碧玉を素材としている。型式は、岩崎分類によるⅢB類である。第94図1は、鉄鑿である。全長22.3cm・幅約0.6cmを測る。下半に木質が残る。第94図2は、鉄剣である。全長26.8cm・最大幅3.7cm・茎長8.8cm・茎幅1.5cmを測る。関の上方には径2mm前後の関孔がある。茎には目釘孔が1孔ある。



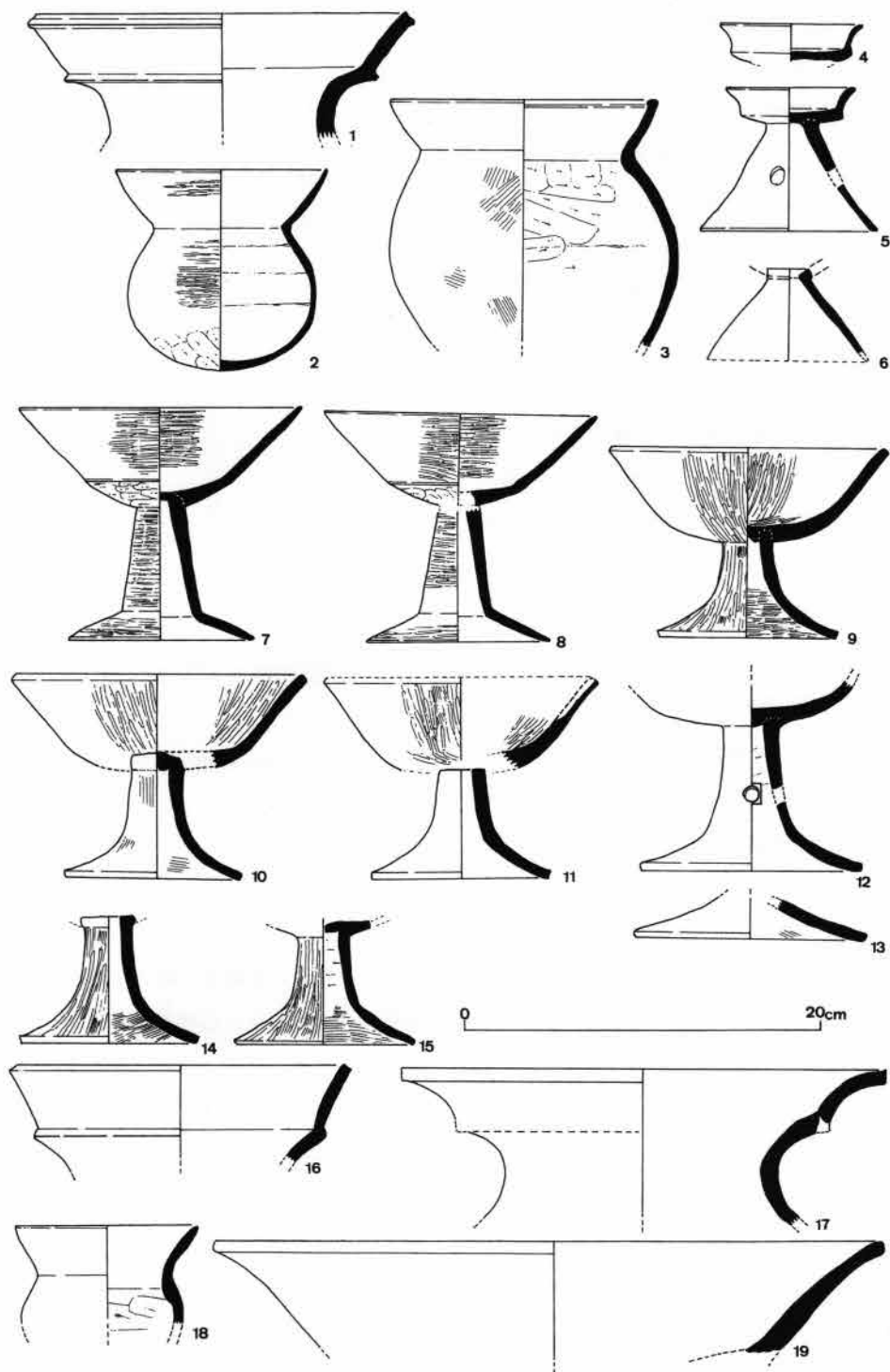
第92図 4号墳主体部実測図(アミは赤色顔料)

主体部埋土上面出土遺物(第93図1～15)

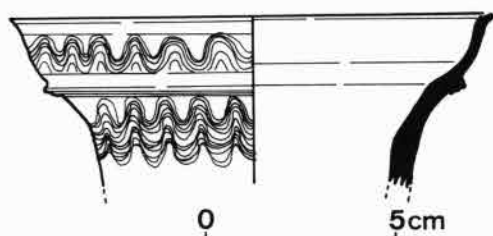
主体部埋土上面において一括検出した遺物

である。被葬者を埋めた後に墓壙上に供献されたものであろう。広口壺、丸底壺、甕、器台、高杯などの土器がある。内訳は、広口壺1、丸底壺1、布留式甕1、高杯9、器台3である。

1は、複合口縁をもつ広口壺である。2は、丸底壺である。赤褐色の緻密な胎土をもつ。底部外面にヘラ削りがみられる。内面は、ナデ調整。体部外面は、器壁が荒れてよくわからないが、ていねいな横方向のヘラ磨き調整が部分的に認められる。3は、布留式甕である。口縁端部を肥厚させる。体部外面は、ハケ調整後、ナデ調整。体部内面をヘラ削り調整。4～6は、小型器台である。器台には、「く」の字状の直線的な器体で受け部の底面を欠くもの(器台A；6)と皿状の受け部をもつもの(器台B；4・5)とがある。器台Aは、赤褐色の緻密な胎土をもつ。7～15は、高杯である。やや屈曲して直線的に立ち上がる杯部と屈曲して大きく開く脚部をもつもの(高杯A；7・8)、椀状の杯部とゆるやかに開く脚部をもつもの(高杯B；9～15)がある。高杯Aは、赤褐色の緻密な胎土をもち、杯部内外面と脚部外面に横方向の緻密なヘラ磨き、杯底部外面にヘラ削りを施すのが特徴である。高杯Bには、杯部底がやや平たく、器高が11cm前後のもの(高杯B 1；10・11・14・15)と



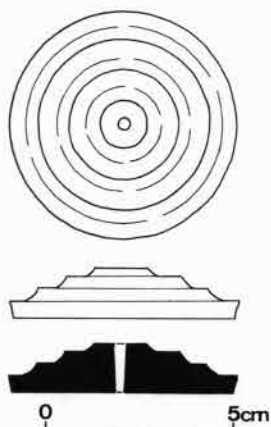
第93図 1号墳出土土器
 1~15. 主体部上面 16~19. 墳丘出土



第95図 2号墳墳丘出土須恵器

杯部が浅く脚の長いもの(高杯B2;12)がある。

2号墳 墳丘埋土から、須恵器甕の破片が1点出土している。口縁部である。口径12.8cm・残存高4.5cmを測る。口縁部はやや内湾して立ち上がる。端部に水平に近い面をつくる。



第96図 1号墳主体部出土紡錘車実測図

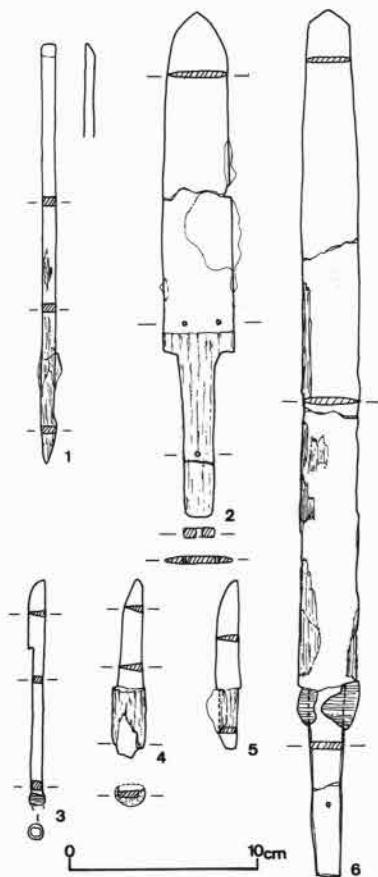
口縁部と頸部外面に波状文を施す。端部の稜は鋭く、しっかりとしたつくりである。焼成堅緻、暗青灰色である。I期に属するものである。

3号墳 第1主体部出土遺物(第94図3・4・6) 3は、鉄鏃である。片剪式の長頸鏃である。残存長約12cmである。4は、鉄製刀子である。全長9.6cm。把部に木質が残る。6は、鉄剣である。切っ先の平面形が山形を呈する剣である。前長約46cm・剣身幅約3cm・茎長約10.2cm・茎幅約1.8cmを測る。鑄は、明確でない。剣身の断面形は平らである。剣身には鞘とみられる木質、茎には把とみられる木質がわずかに遺存する。

第2主体部出土遺物(第94図5) 5は、鉄製刀子である。全長9cmを測る。両関の刀子である。茎に木質が残る。

3. まとめ

今回の調査では、北谷古墳群のうち南群の5基の古墳を対象として調査を実施した。そ



第94図 1・3号墳出土遺物実測図
1・2. 1号墳 3・4・6. 3号墳
5. 3号墳第2主体部

の結果、1号墳は碧玉製紡錘車を有する径約40mの大型円墳であることが確認され、佐濃谷川流域の古墳時代前期における首長墓である可能性が強まった。久美浜町域では、隣りの川上谷川流域で古墳時代前期の大型方墳である権現山古墳が知られているが、以下に記すように、北谷1号墳はこれにやや先だつて築造された可能性が高く、古墳時代のこの地域における最初の首長墓とみなすことができる。

以下、二、三の問題点を指摘してまとめとしたい。

(1)古墳の築造時期

1号墳は、墓壙埋土上面に布留式甕を含む前期土器群、主体部から碧玉製紡錘車形石製品など、前期古墳に特徴的な遺物が出土している。搬入土器とみられる赤褐色の胎土を有する高杯は、器体内外面に密な横方向のヘラ磨きを施すことや形態的特徴から、布留Ⅰ式段階の資料とみておきたい。したがって、1号墳は、前期中頃までに築造された古墳とみることができる。5号墳出土供献土器もこの地域の前期の壺形土器であり、1号墳と近い時期に築造された古墳と考えられる。5号墳出土土器は、壺の破片のみであり、1号墳出土土器と直接比較できる型式が認められないため、両古墳の先後関係については明らかでない。

2号墳では、表土中から出土した須恵器から築造時期を推定することができる。この須恵器は、TK208型式の特徴を持つ甕の口縁部であり、中期後半に位置づけることができよう。3号墳は、第1主体部から鉄剣、鉄鏃、刀子が出土している。鉄鏃は、長頸の片剪式であることから、中期後半以降の古墳とみられる。4号墳の築造時期は不明である。2・3・4号墳は、出土遺物が少ないため築造時期を限定することはできないが、3基は裾を接して築造されており、同様の規模を有すること、南北方向の主体部を持つなどの共通性からみて、いずれも古墳時代中期後半頃に築造されたものであろう。

以上のように、本古墳群は、2基の前期古墳と3基の中期古墳からなる古墳群であることが明らかとなった。

(2)遺物について

ア)墓壙埋土上面出土土器 墓壙埋土上面から一括して出土した土器群は、先に記したように出土状況からみて、墓壙埋め戻し後に一括して置かれた土器群である。広口壺、丸底壺、甕、高杯、器台の各器種があり、各土器は墓壙主軸上に整然と配置されている。墓壙陥没に伴う若干の移動はあるものの、ほぼ原位置を保っていると判断され、資料的価値は高い。高杯・器台などの供献土器が頭位のほぼ直上に集中して置かれ、その東に接して広口壺、やや離れて甕が配置されるなど、葬送の場での土器の組成・各器種の位置を明確に示すものとしても注目されよう。被葬者埋葬の後、墓壙上で行われた飲食儀礼などの祭祀に伴う土器群であらう。^(註12)

付表10 出土遺物観察表

図番号	器種	法量(cm)	胎土 焼成 色調	形態及び製作上の特徴	備考	取り 上げ 番号
1	広口壺	口径 21.8 残高 6.5	○0.1~0.2 良好 淡黄灰色	二重口縁の壺。口縁端部にしっかりした面をもつ。口縁下端の稜は鋭く、突帯状を呈する。	1号墳主体部埋土	6
2	丸底壺	口径 12.0 器高 11.2	◎ 良好 赤褐色	内湾して立ち上がる口縁。球形の体部。丸底。口縁部ヨコナデ。体部上半に横方向の細かいヘラ磨き。底部外面にヘラ削り痕。体部内面に接合痕。	1号墳主体部埋土	5
3	甕	口径 14.0 残高 13.8	○0.1~0.3 やや粗 暗灰褐色	布留式甕。内湾して立ち上がる口縁。口縁端部内面が肥厚。球形の体部。体部外面をハケ後ナデ。体部内面をヘラ削り。	1号墳主体部埋土	
4	器台	口径 8.2 残高 2.4	◎ 良好 淡黄褐色	外反する薄い口縁部。	1号墳主体部埋土脚部欠損	10
5	器台	口径 7.6 残高 8.2	◎ 良好 淡黄褐色	外反する薄い口縁部をもつ器台。「八」の字状に開く脚部。透し穴は3孔。脚部内面下半にハケ調整。	1号墳主体部埋土脚部のみ遺存	3
6	器台	脚 9.4 器高 7.8	◎ 良好 赤褐色	直線的に開く脚部。器体外面に横方向の細かいヘラ磨き。	1号墳主体部埋土	3
7	高杯	口径 15.8 器高 13.0	◎ 良好 赤褐色	屈曲して直線的に外上方に開く杯部をもつ。脚部は円筒形の脚柱部と屈曲して開く。脚端からなる。杯部内外面に横方向の細かいヘラ磨き。杯部底部外面にヘラ削り。脚柱部、脚端部外面に横方向の細かいヘラ磨き。脚柱部内面はヘラ削り後ナデ。脚端部内面はナデ。薄手の作りである。	1号墳主体部埋土	13
8	高杯	口径 15.4 器高 12.8	◎ 良好 赤褐色	7とはは同じ。		1
9	高杯	口径 15.8 器高 10.8	○0.1~0.2 良好 淡黄褐色	椀状の杯部とラップ状に開く面をもつ。口縁端部と脚端部に狭い面を作る。杯部内外面と脚部外面にヘラ磨き。脚部内面をヘラ削り後ハケ。		11
10	高杯	口径 16.8 器高 11.5	○0.1~0.2 良好 淡黄褐色	9と同じ。杯部内外面にヘラ磨き。脚部内外面はハケ後ナデ。		12
11	高杯	口径 15.6 器高 11.4	○0.1~0.2 良好 淡黄褐色	9と同じ。		8
12	高杯	残高 11.0 脚端部径 12.5	△0.1~0.2 やや軟 暗赤褐色	円柱状の脚柱部とラップ状に開く脚端部をもつ。杯部は屈曲せず浅い皿状である。口縁部欠損。脚柱部内面にヘラ削り。		
13	高杯	残高 2.2 脚端部径 13.2	△0.1~0.2 やや軟 暗赤褐色	脚端部のみ遺存。		
14	高杯	残高 7.2 脚端部径 10.2	○0.1~0.2 良好 淡黄褐色	脚部のみ遺存。形態・調整・胎土は9~11と類似。		14
15	高杯	残高 6.8 脚端部径 10.2	△0.1~0.2 やや軟 暗赤褐色	脚部のみ遺存。12・13と胎土が類似。		2

※胎度の△、○、◎の記号は、粗密を示す(△=やや粗い、○=良、◎=精良)

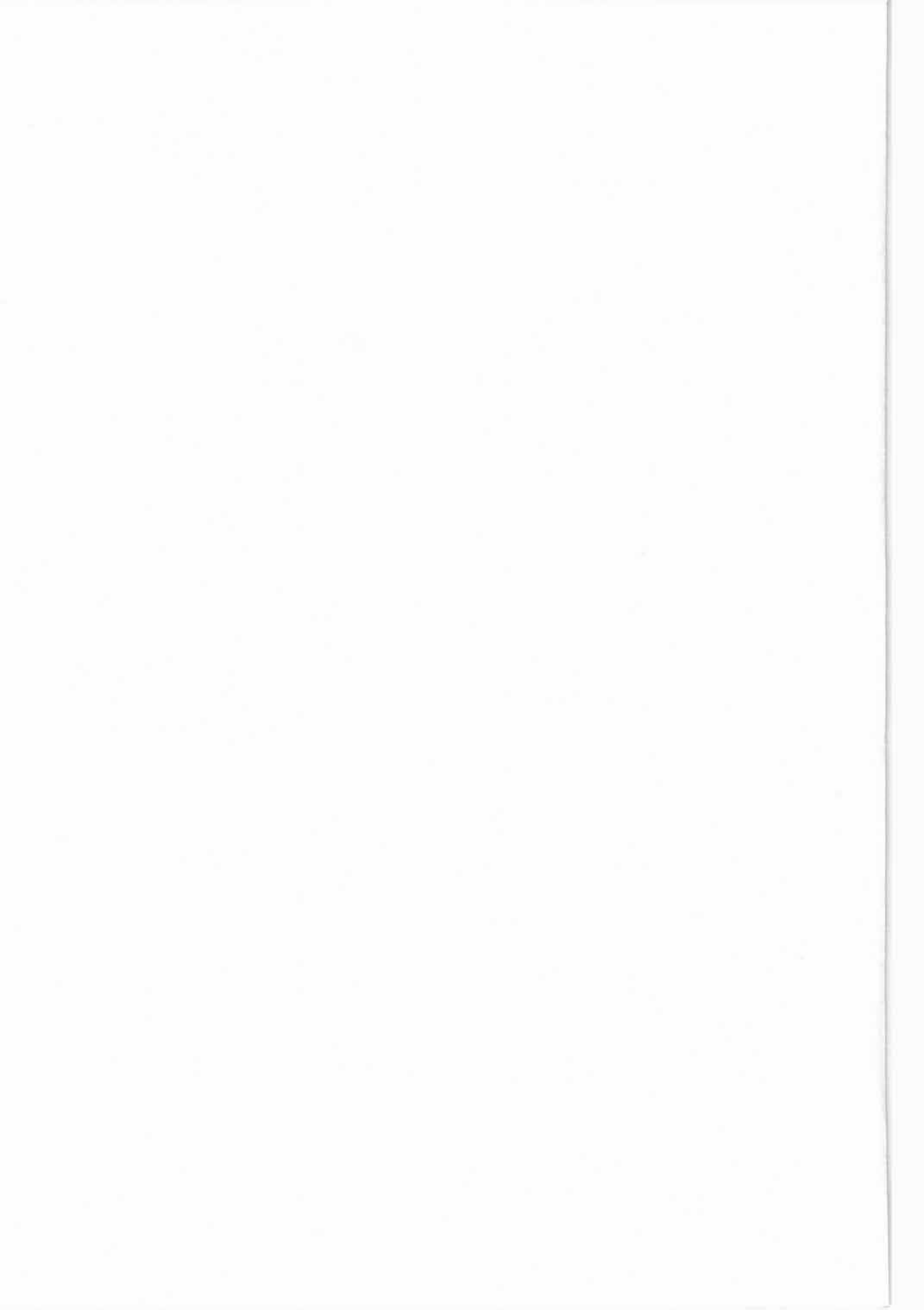
丹後地域の前期古墳出土土器資料としては、現在のところ最も充実した良好な資料といえ、加悦町愛宕山3号墳・同作山古墳・同蛭子山古墳、網野町大將軍遺跡、丹後町神明山古墳出土土器などの前期古墳出土土器との比較を通じて、これらの組列をある程度示しうるものと思われる。

イ) 碧玉製紡錘車形石製品 京都府内では碧玉製紡錘車形石製品は、向日市寺戸大塚古墳1点、八幡市西ノ口古墳3点、京都市深草古墳1点、京都市妙見山古墳4点、京都市百々ヶ池古墳1点の出土が知られており、本例は6遺跡11点目の出土例となる。本例に形態的に近いものとしては奈良県メスリ山古墳があげられる。また、最寄りの出土古墳は兵庫縣城崎町小見塚古墳である。

(田代 弘)

- 注1 梅原末治「湊村函石濱石器時代遺跡」(『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第二冊 京都府) 1920
- 注2 『京都府遺跡地図(第2版) 第1分冊』 京都府教育委員会 1988
- 注3 筒井崇史「(6)女布北遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注4 肥後弘幸「丹後国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要 2. 豊谷墳墓群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992
- 注5 森 正「(3)堤谷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 肥後弘幸「丹後国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要 1. 堤谷古墳群(A支群)」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992
- 注6 注3と同じ。
- 注7 黒坪一樹「(5)薬師古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注8 久美浜町一分所在。本年度、久美浜町教育委員会が調査。
- 注9 肥後弘幸「丹後国営農地開発事業関係遺跡平成3年度発掘調査概要 2. 豊谷墳墓群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1992)』 京都府教育委員会) 1992
- 注10 細川康晴「丹後国営農地開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査概要 3. 北谷1号墳」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1994)』 京都府教育委員会) 1994
- 注11 岩崎卓也「いわゆる碧玉製紡錘車について」(木代修一先生喜寿記念論文集『民族史学の方法』) 1977
- 注12 田上雅則「前期古墳にみられる土師器の『副葬』」(『関西大学考古学研究室開設四十周年記念考古学論叢』 関西大学考古学研究室) 1993
- ※ 現地調査・図版作成にあたって、水野聡哉君に協力を得た。

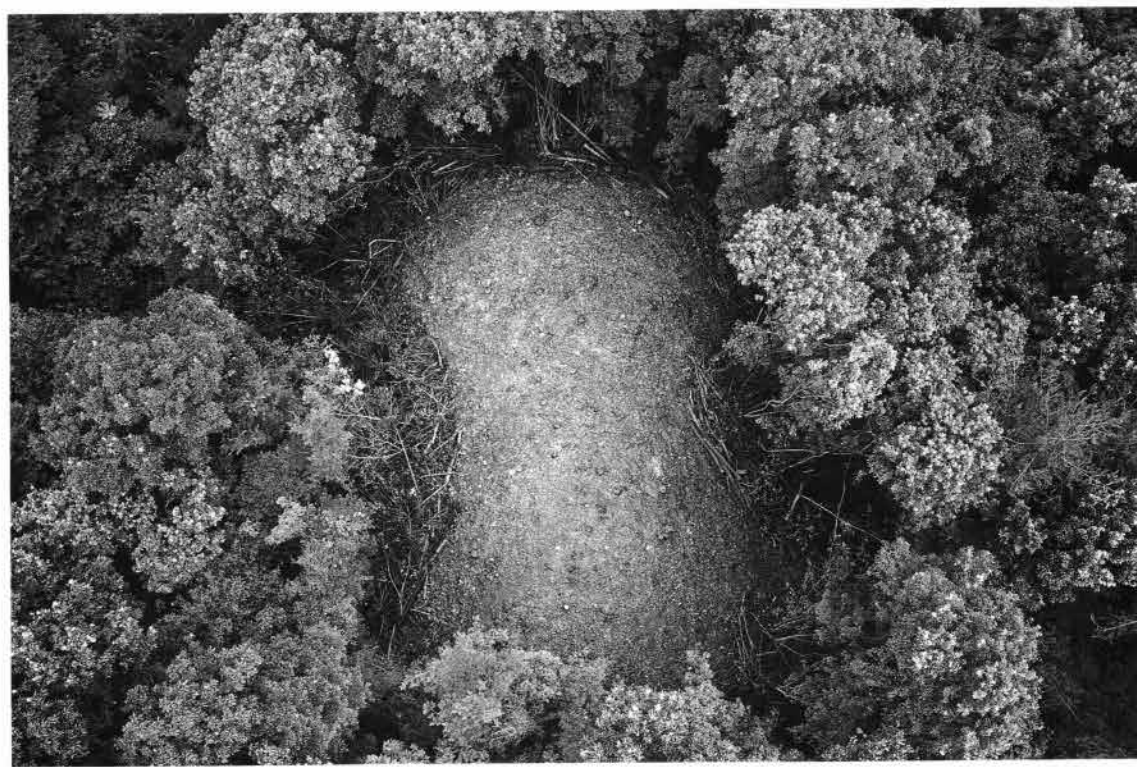
版 圖



図版第1 網野遠所古墳群



(1) 調査地全景（北から）



(2) 17・18号墳全景（上が北）

図版第2 網野遠所古墳群



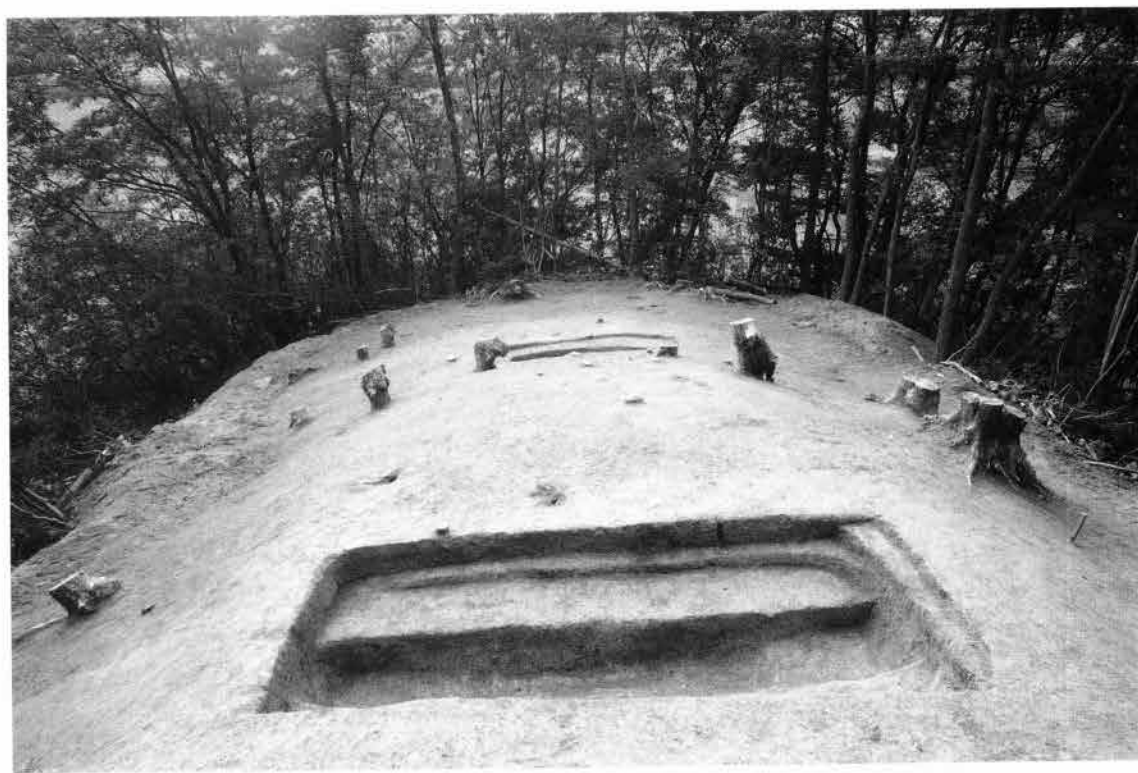
(1) 17号墳主体部（南から）



(2) 17号墳主体部（西から）



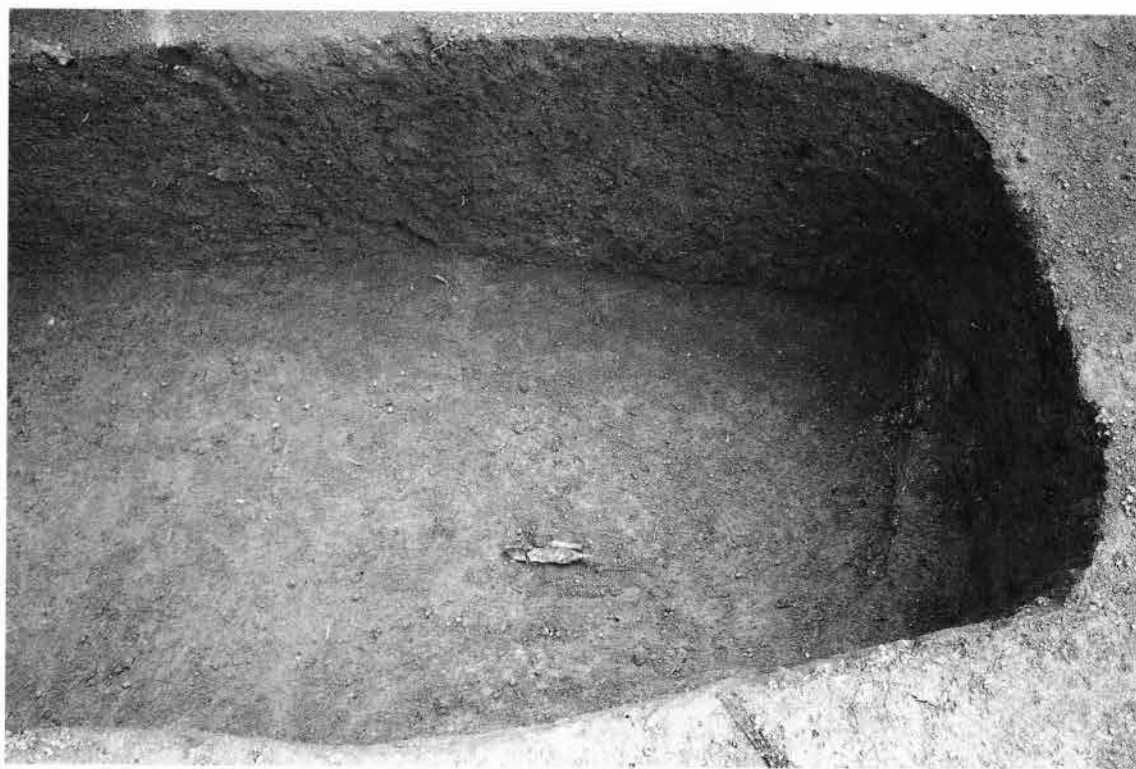
(1) 18号墳主体部（西から）



(2) 17・18号墳完掘状況（南から）



(1) 甕棺完掘状況(17号墳) (東から)



(2) 鉄鏃出土状況(18号墳) (北から)

図版第5 奈具墳墓群・奈具古墳群



(1) 奈具墳墓群全景（南東から）



(2) 奈具墳墓群全景（上が北東）



(1) 奈具1号墓全景（上が南西）

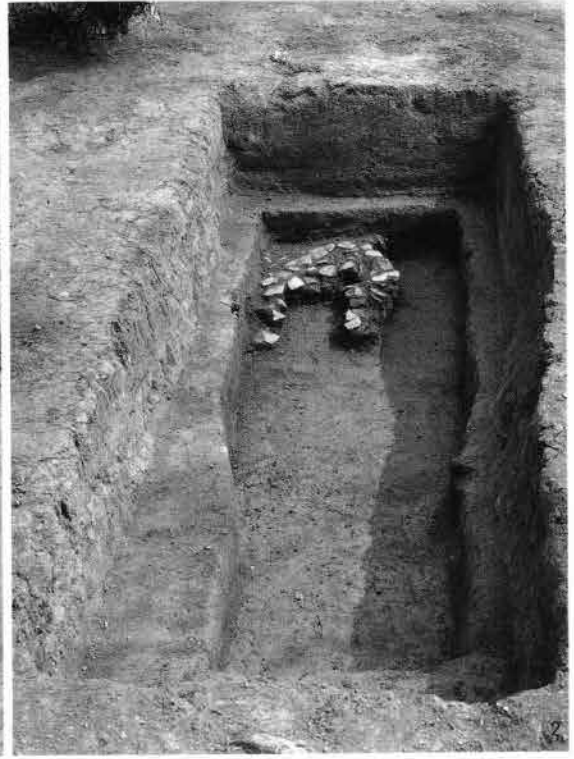


(2) 奈具1号墓第4主体部全景（南東から）

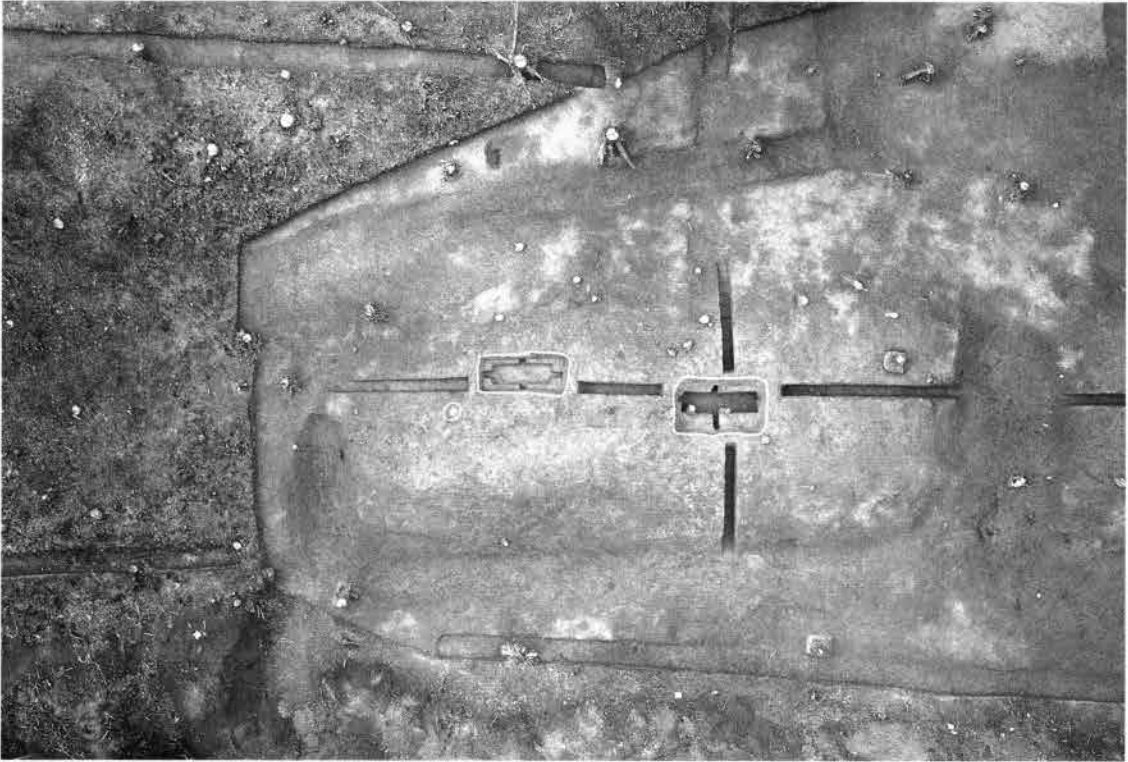
図版第7 奈具墳墓群・奈具古墳群



(1) 奈具2号墓全景（上が南西）



(2) 奈具2号墓の主体部（1：第1主体部（南東から）、2：第3主体部（北西から））



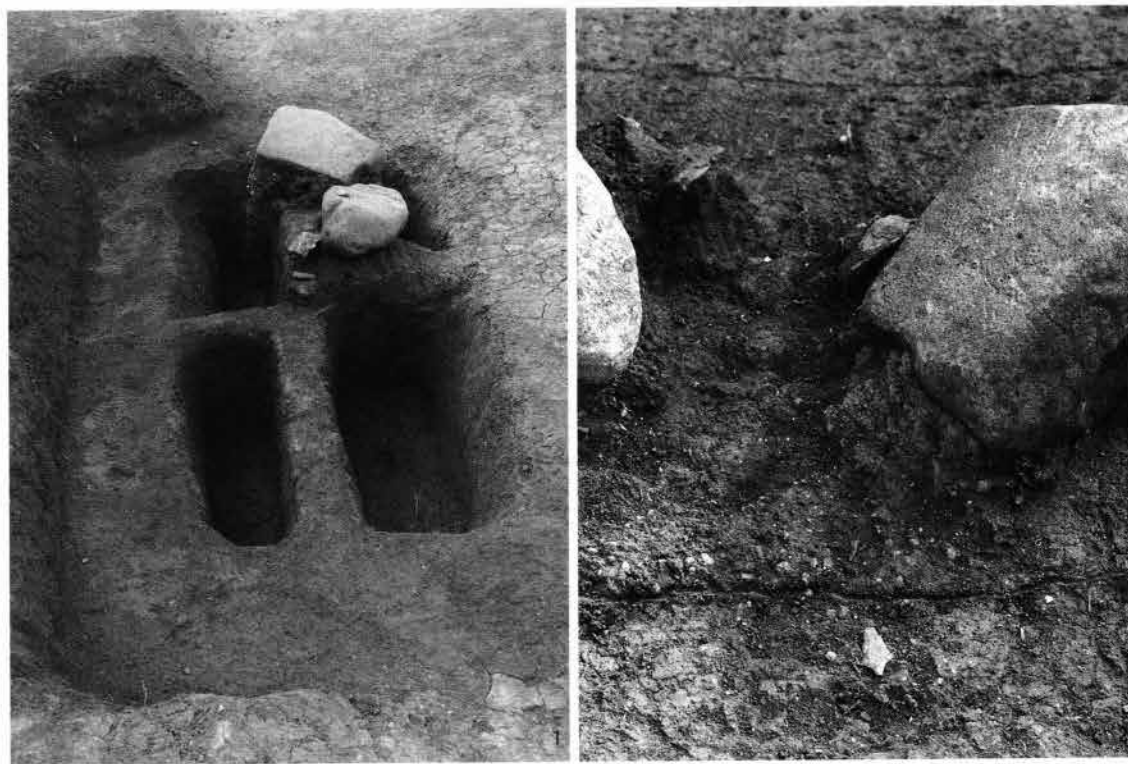
(1) 奈具3号墓全景（上が南西）



(2) 奈具3号墓遺構・遺物検出状況（1：第1主体部（北西から）、2：北東周溝内土器出土状況）



(1) 奈具4・5号墓全景(上が南西)



(2) 奈具6号墓遺構・遺物検出状況(1:6号墓(南東から)、2:石鏃出土状況(北東から))



(1) 奈具墳墓群全景 (南東から)



(2) 奈具墳墓群全景 (北西から)



(1) 奈具13~15号墳全景（西から）



(2) 奈具13~15号墳全景（上が北東）



(1) 奈具13号墳主体部検出状況（西から）



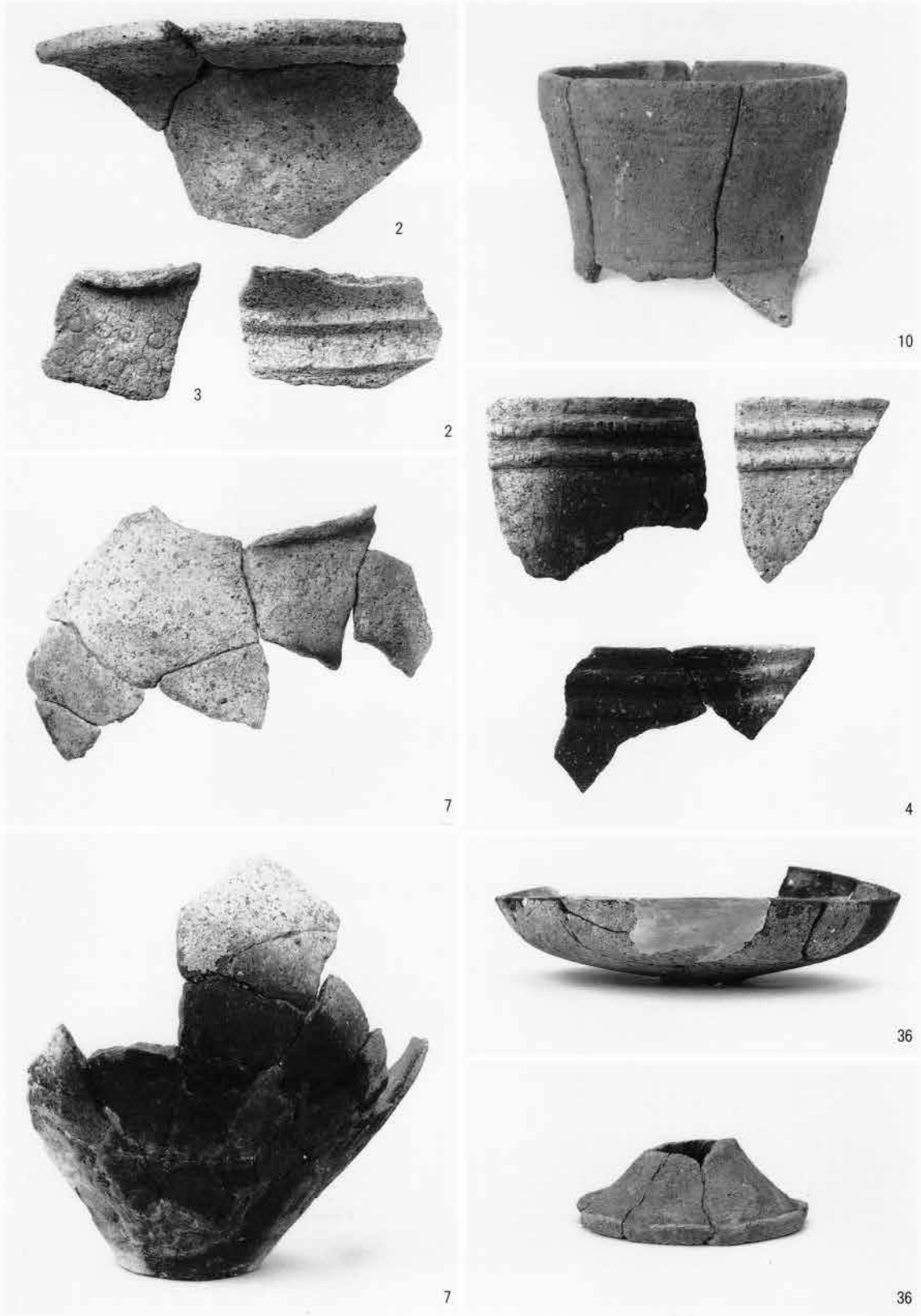
(2) 奈具14号墳主体部配置状況（南から）



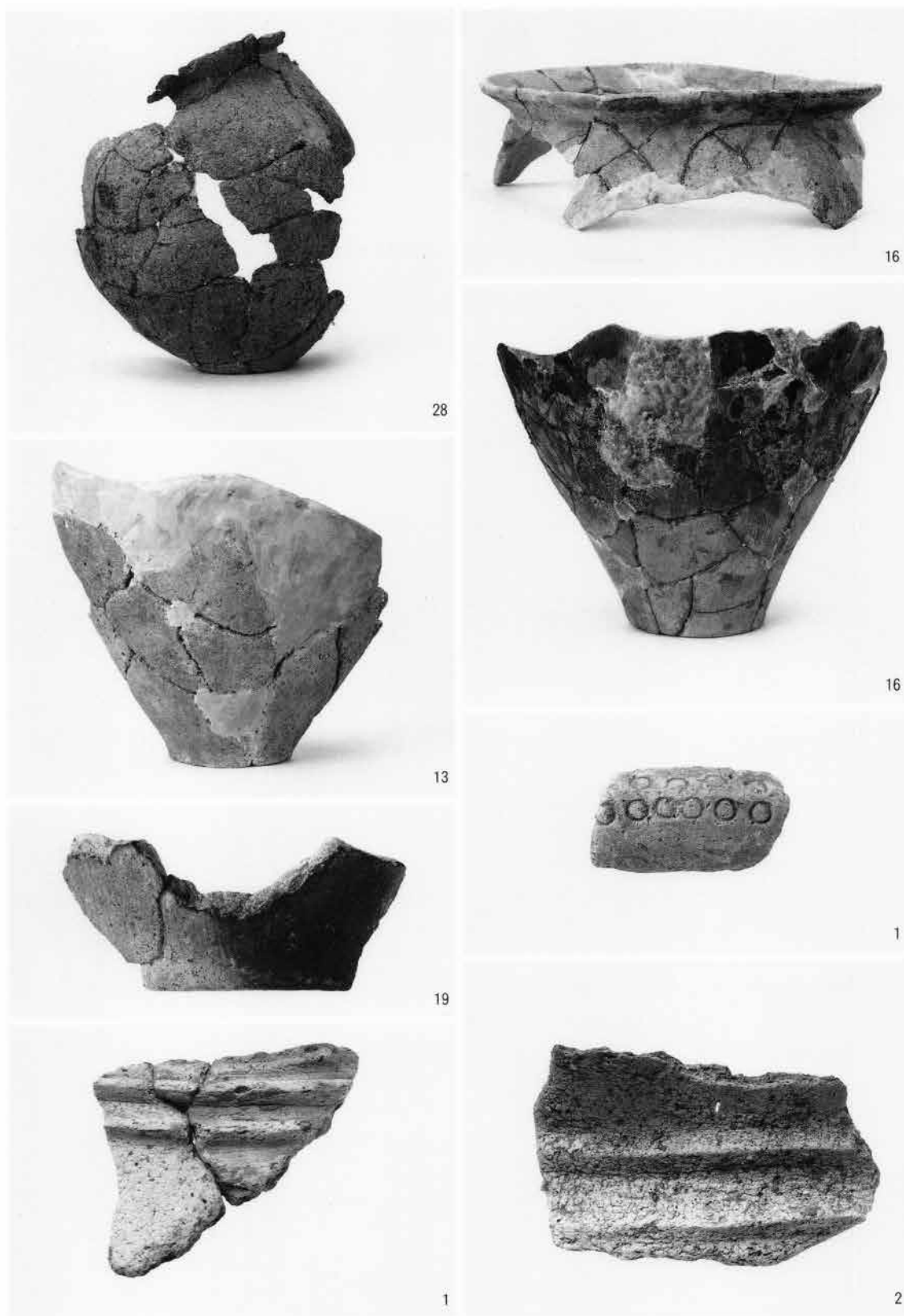
(1) 奈具15号墳主体部検出状況（西から）



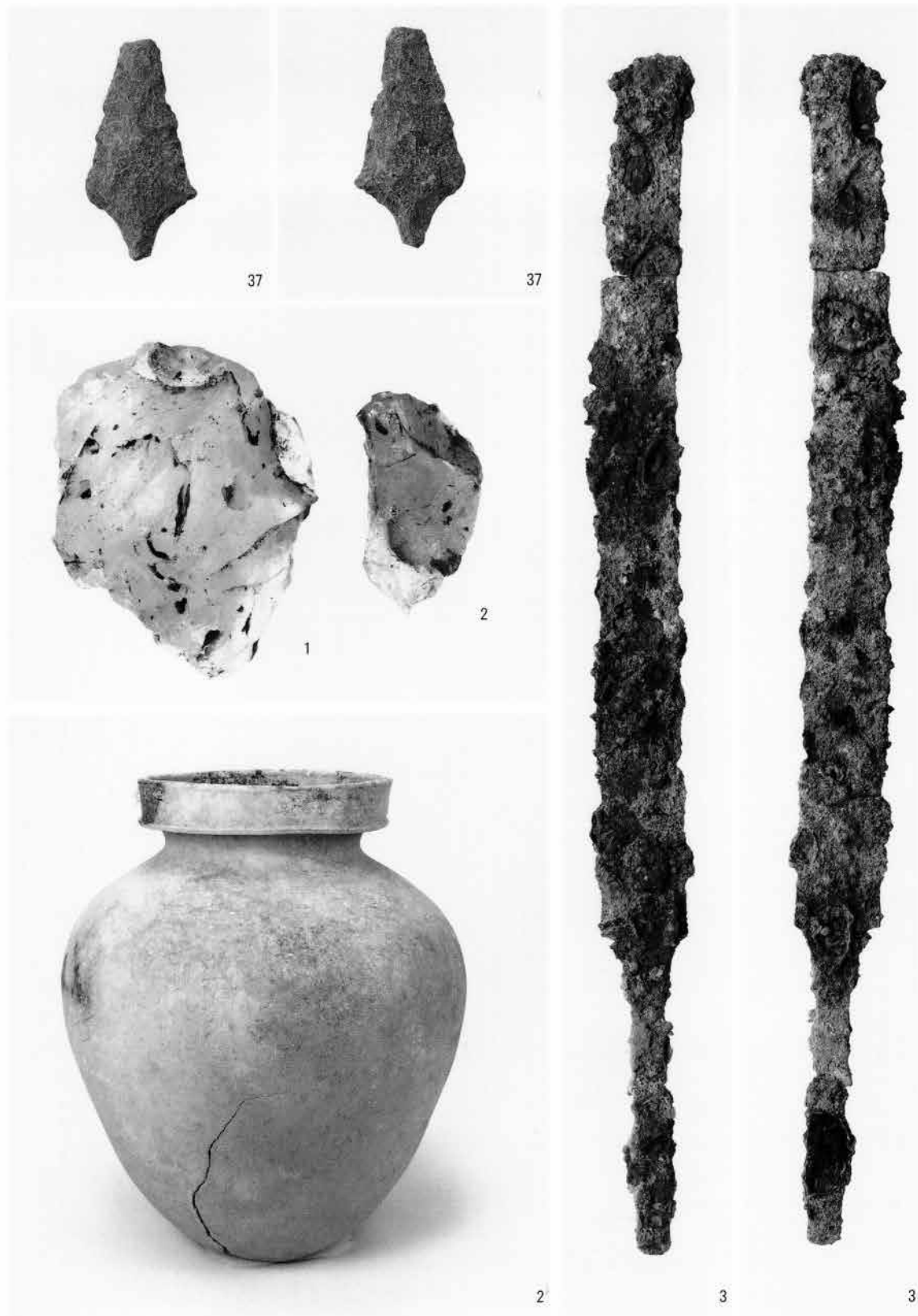
(2) 奈具13～15号墳全景（南から）



奈具墳墓群出土弥生土器(1) (番号は挿図に対応)
広口壺 (2・3)、短頸壺 (7)、水差 (10)、無頸壺 (4)、高杯 (36)



奈具墳墓群出土弥生土器(2) (番号は挿図に対応)
 甕(28・13・16)、甕底部のヨコナデ(19)、竹管文(1)、貼付凸帯 a (2)、貼付凸帯 b (1)



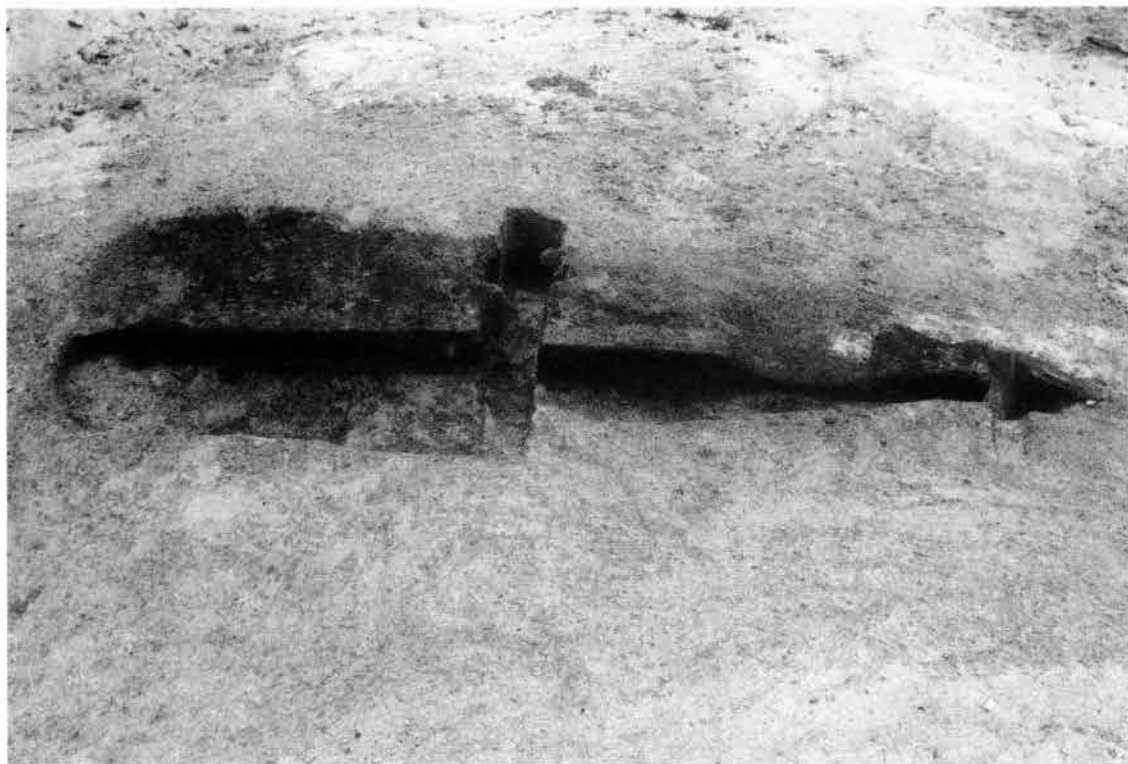
奈具墳墓群出土遺物（石製品）及び奈具古墳群出土遺物（土器棺・鉄劍）
石鏃（37）・石英片（1・2）・土器棺（2）・鉄劍（3）



(1) 石熊1号・2号製鉄炉近景（西から）



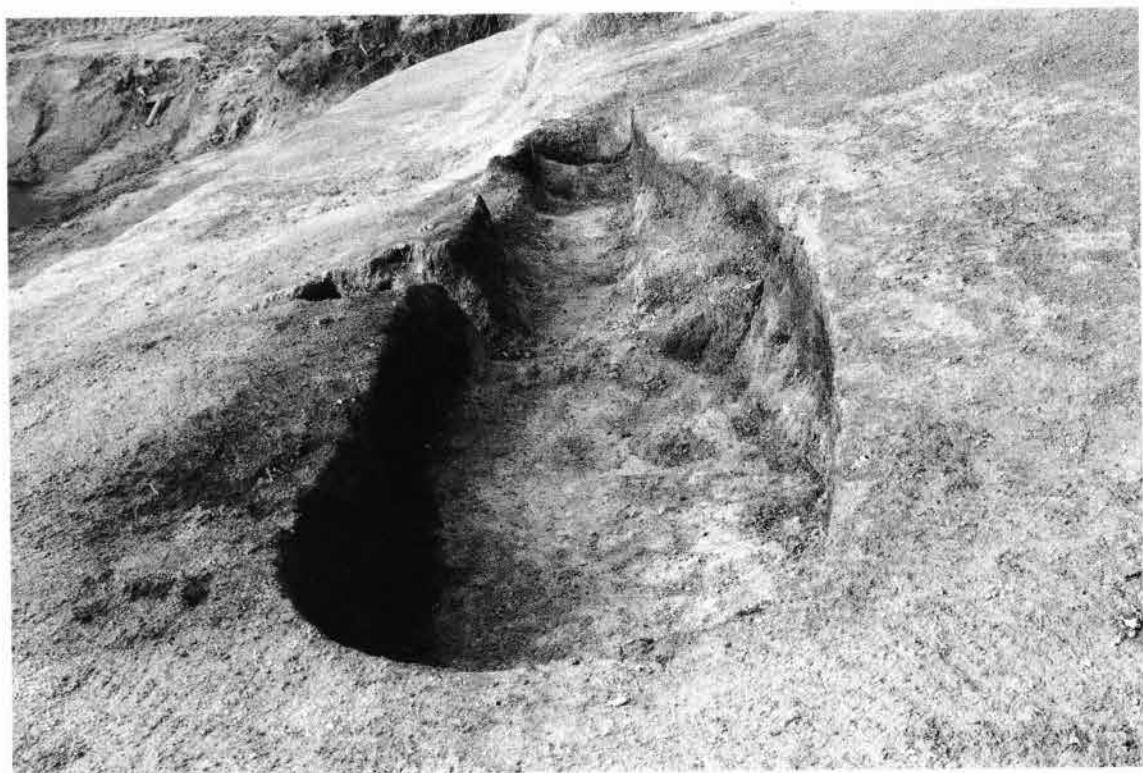
(2) 石熊1号炭窯近景（北西から）



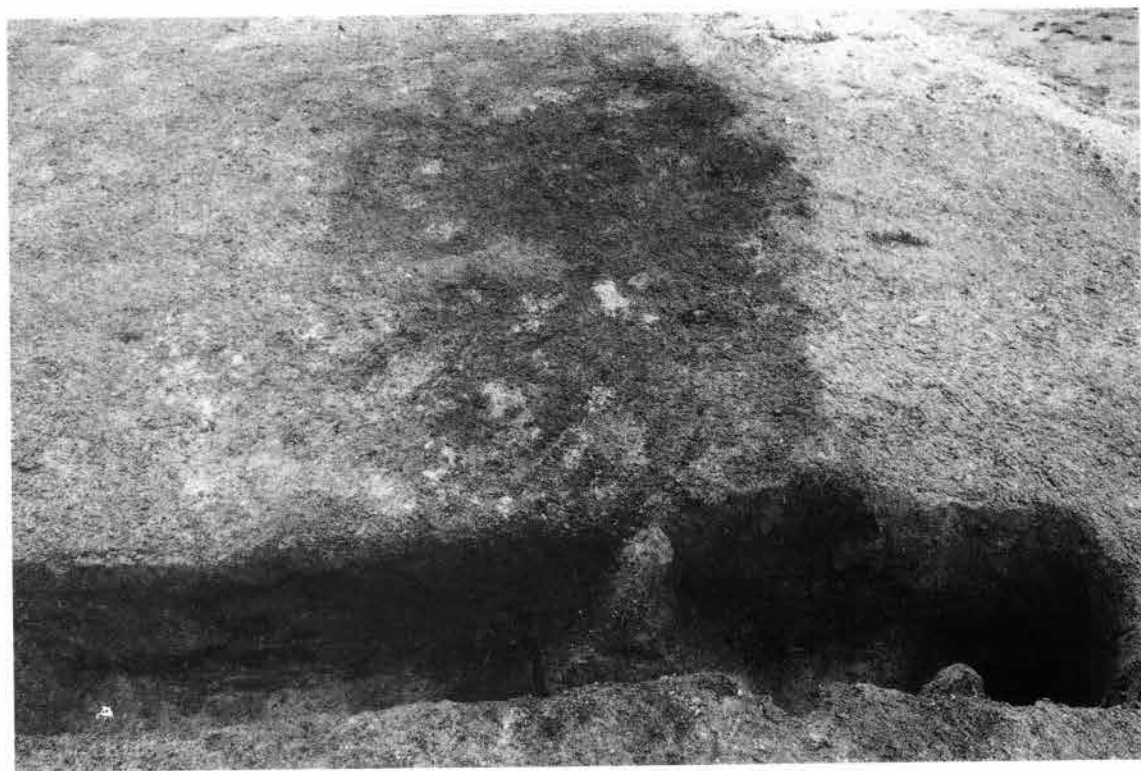
(1) 石熊1号製鉄炉基礎部分断ち割り状況（東から）



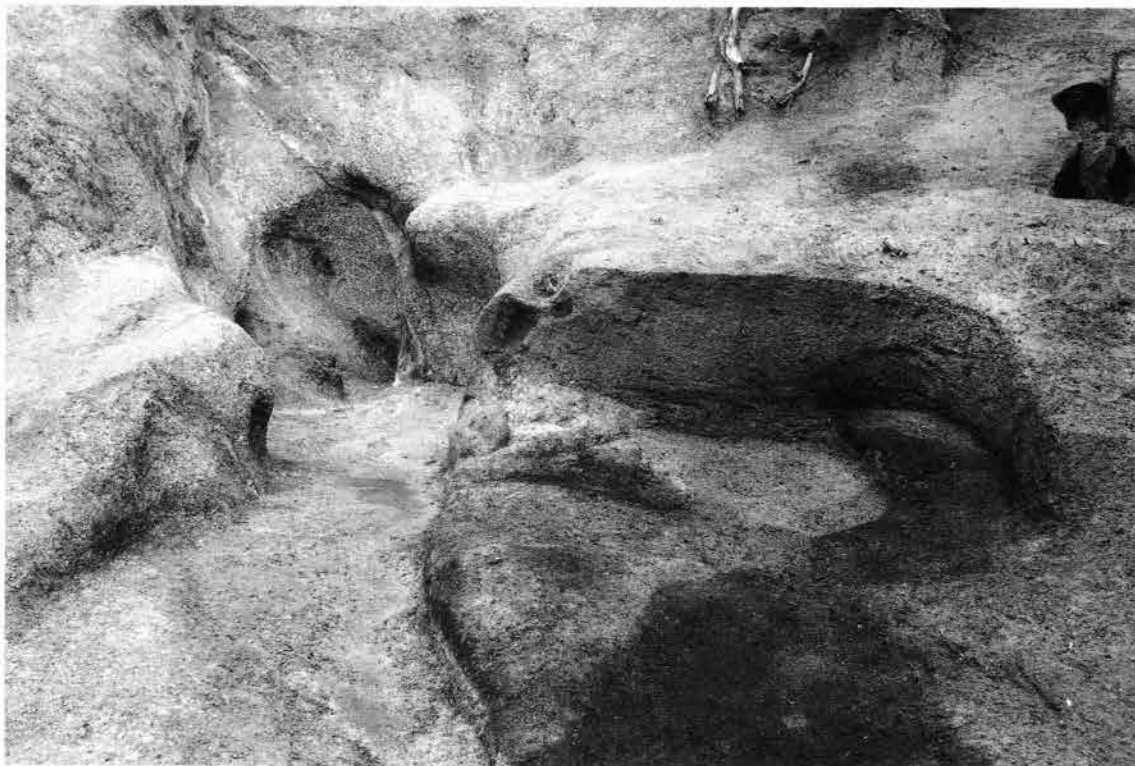
(2) 石熊1号製鉄炉完掘状況（北から）



(1) 石熊1号製鉄炉完掘状況（南から）



(2) 石熊1号製鉄炉基礎部分断ち割り状況（北から）



(1) 石熊1号炭窯完掘状況（北西から）



(2) 石熊3号炭窯埋土堆積状況（北東から）

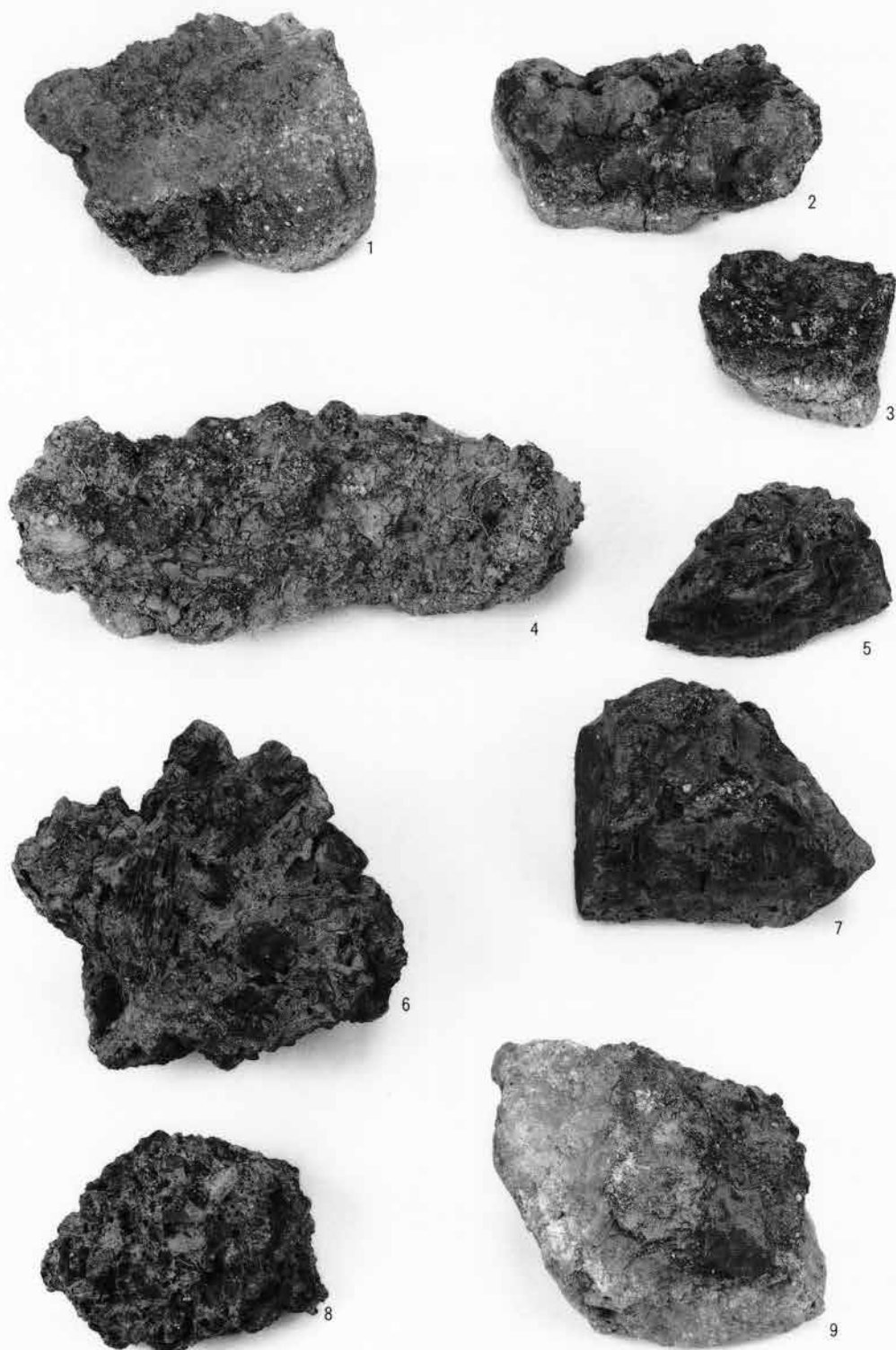


(1) 石熊1号炭窯全景（北西から）

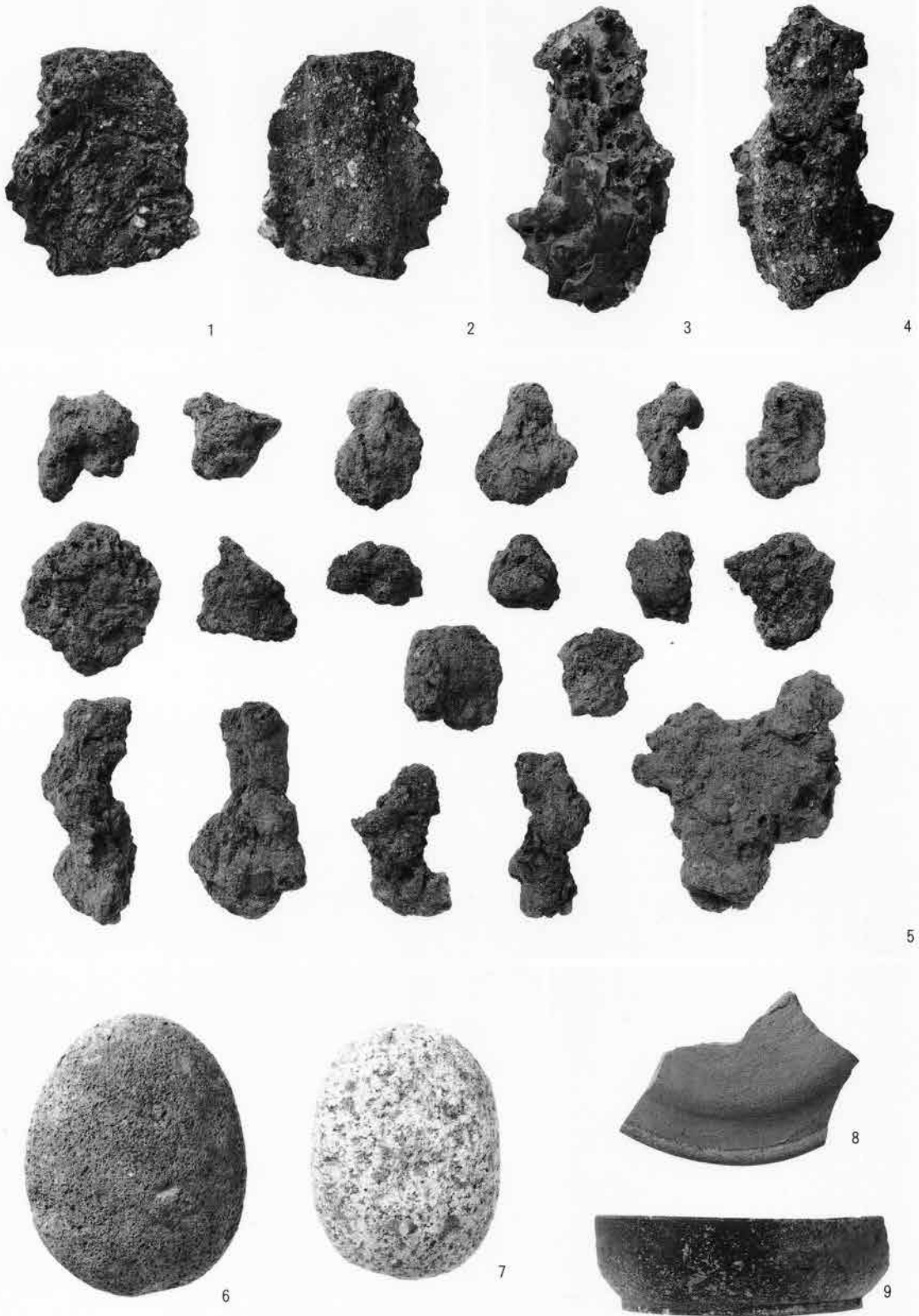


(2) 石熊3号炭窯全景（北東から）

図版第22 黒部製鉄遺跡（石熊地区）



黒部製鉄遺跡出土鉄滓
炉壁（1～4）・炉底滓（5～8）・炉基礎部の石材か？（9）
炭片の付着する鉄滓（6・8）



黒部製鉄遺跡出土遺物（6～8の（ ）は挿図に対応）
（1・3：棒状の鉄滓、2・4：1・3の裏面、5：鉄塊、6：敲石(2)、7：敲石(1)、
8：杯蓋(3)、9：杯身(4)）



(1) 調査地全景 (北西から)



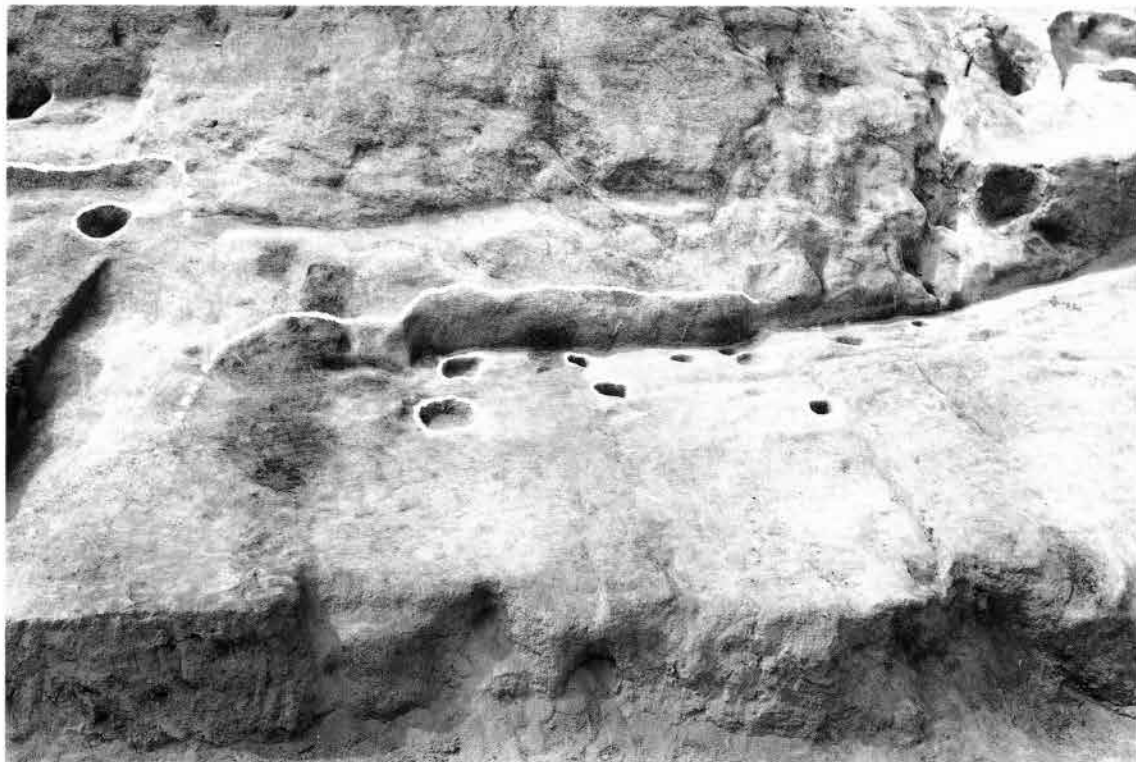
(2) 木炭窯近景 (南から)



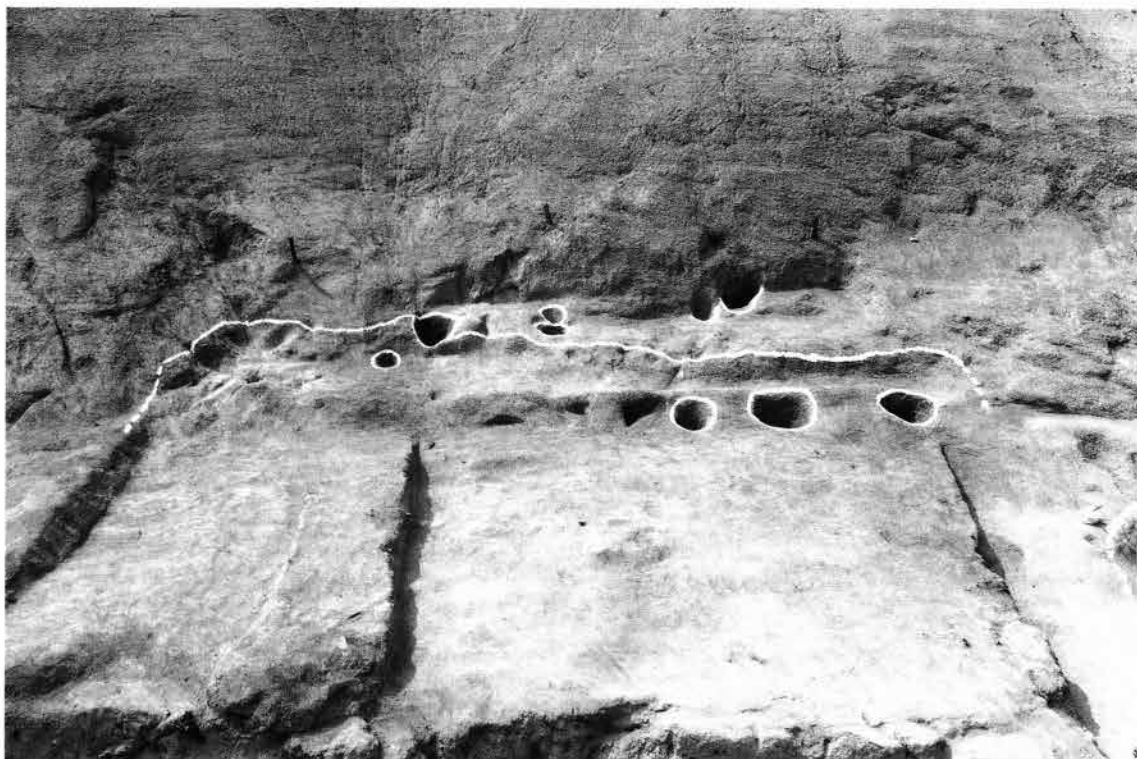
(1) 裾谷横穴全景（北東から）



(2) A地区全景（東から）



(1) SH 02全景 (南東から)



(2) SB 01全景 (南東から)



(1) C地区調査前全景（南東から）



(2) C地区遺構検出状況（上空から）



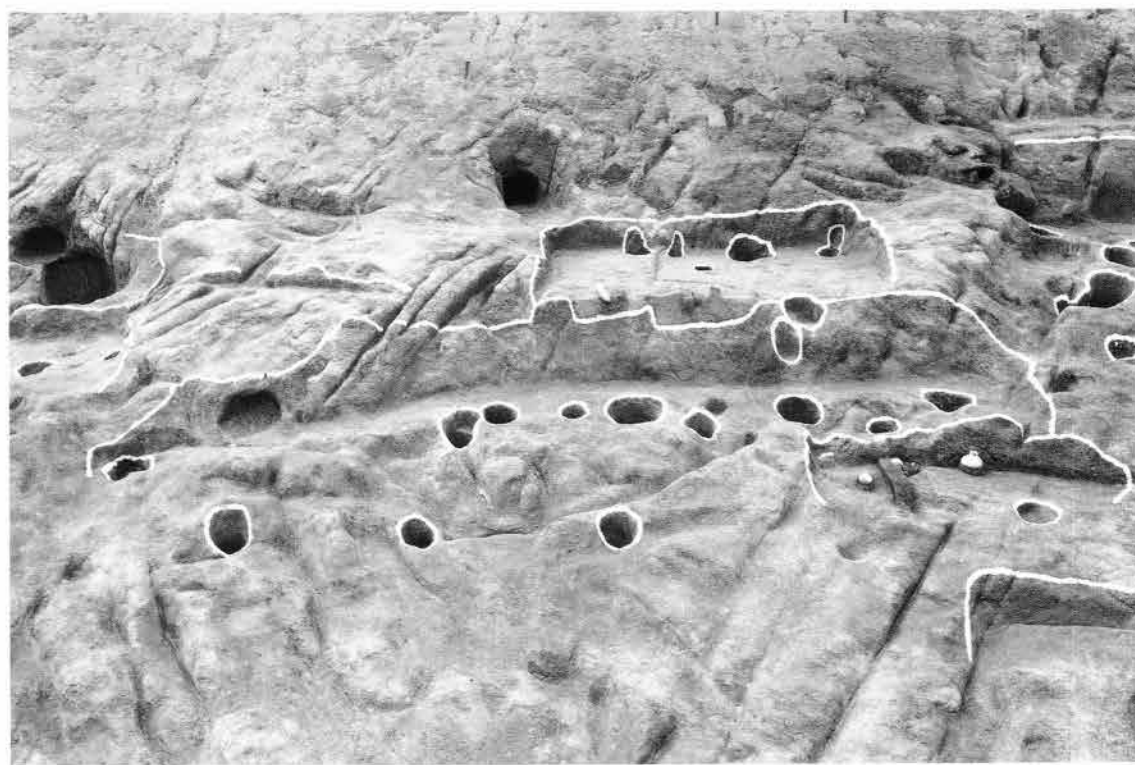
(1) C地区遺構検出状況（北から）



(2) C地区遺構検出状況（南西から）



(1) SH 03全景 (南東から)



(2) SB 04、SH 04・07、1号横穴全景 (南東から)



(1) SB 04土器溜まり検出状況（北西から）



(2) SB 04土器溜まり下層遺物出土状況（北東から）



(1) SB 03、2号横穴全景（東から）



(2) SH 05・06全景（東から）



(1) 1号横穴全景 (南東から)



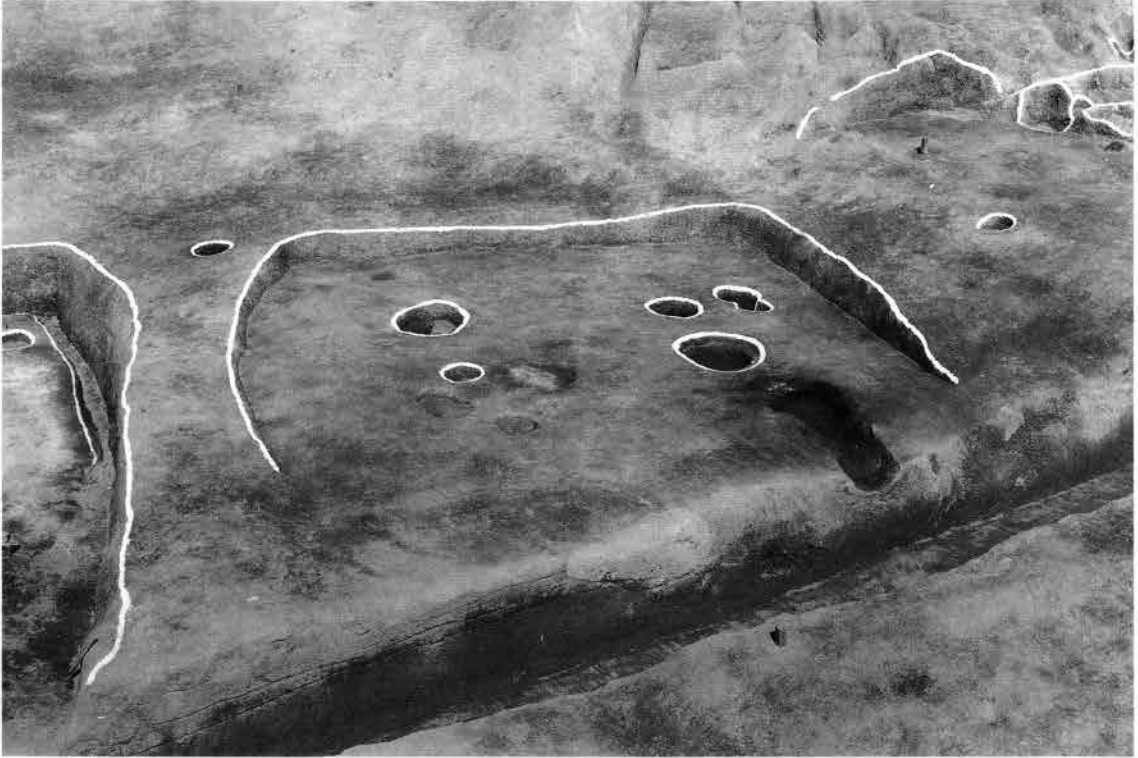
(2) 2号横穴全景 (東から)



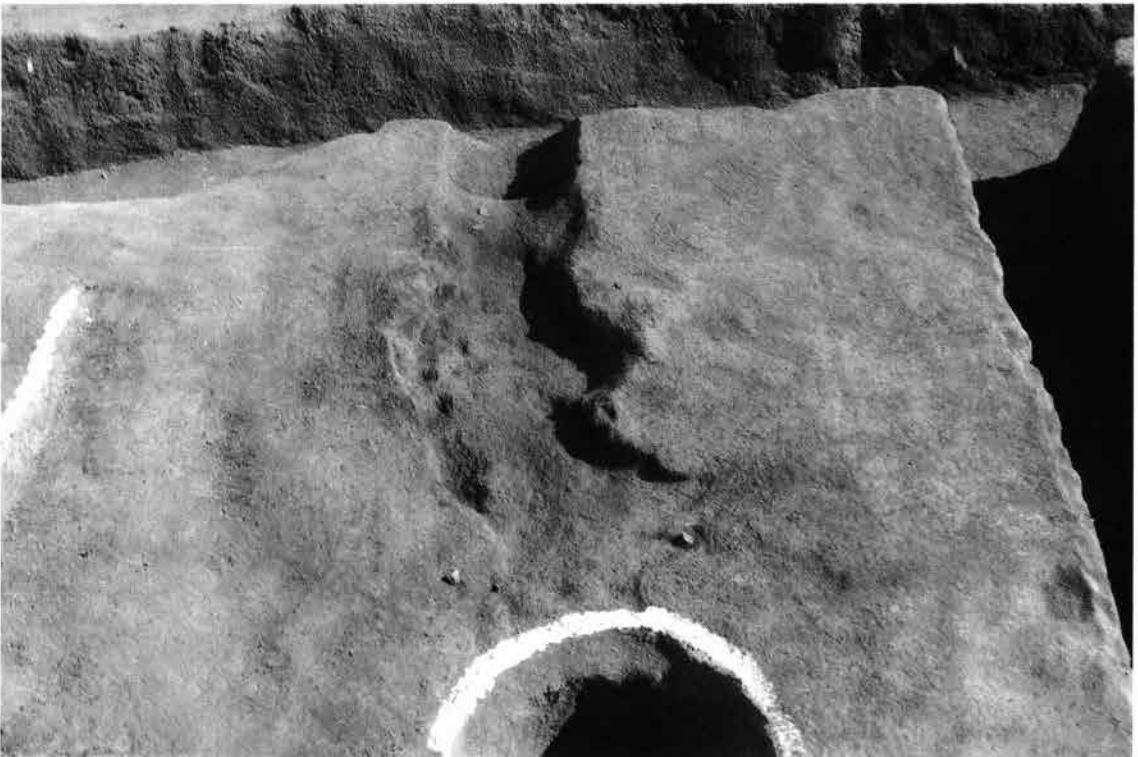
(1) SH 09全景 (南から)



(2) SH 10全景 (南西から)



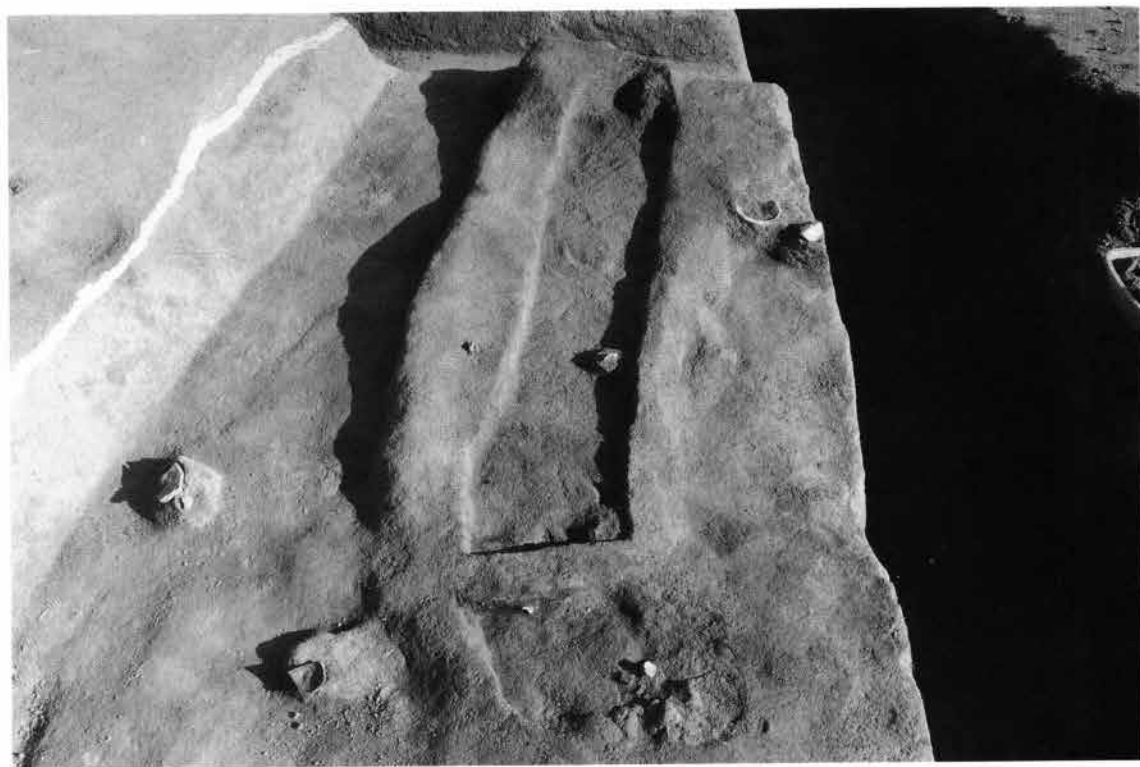
(1) SH11全景（南東から）



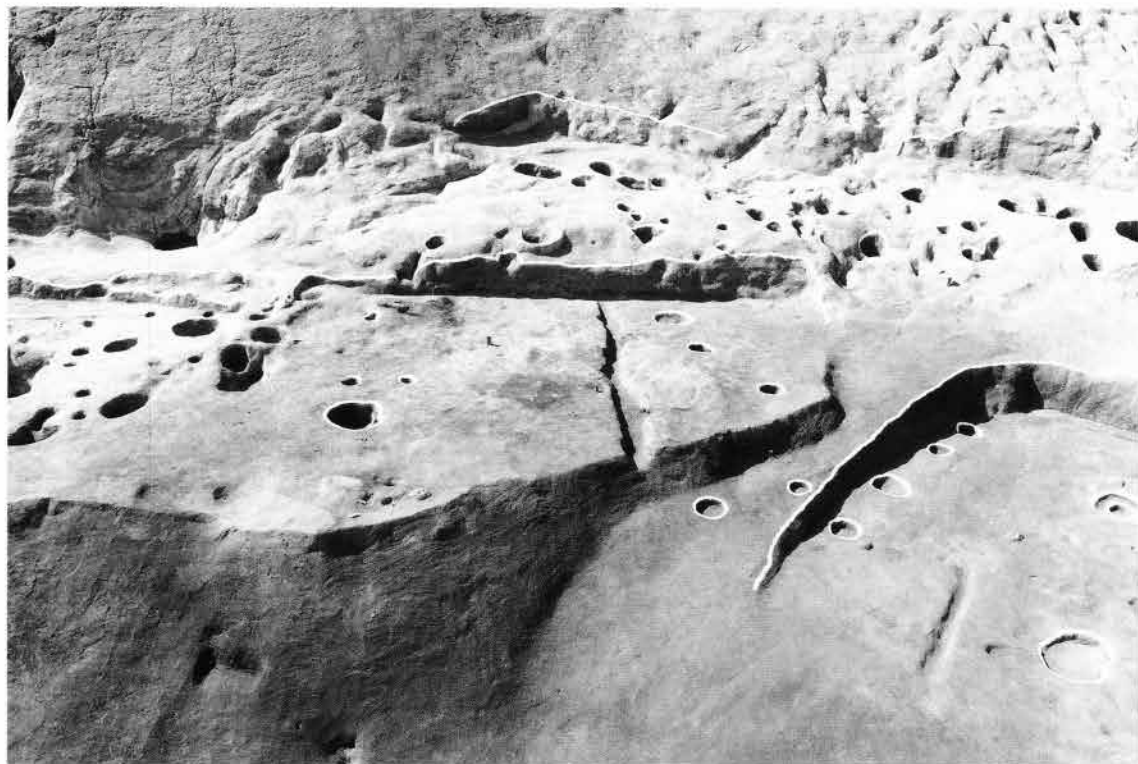
(2) SH11竈検出状況（北西から）



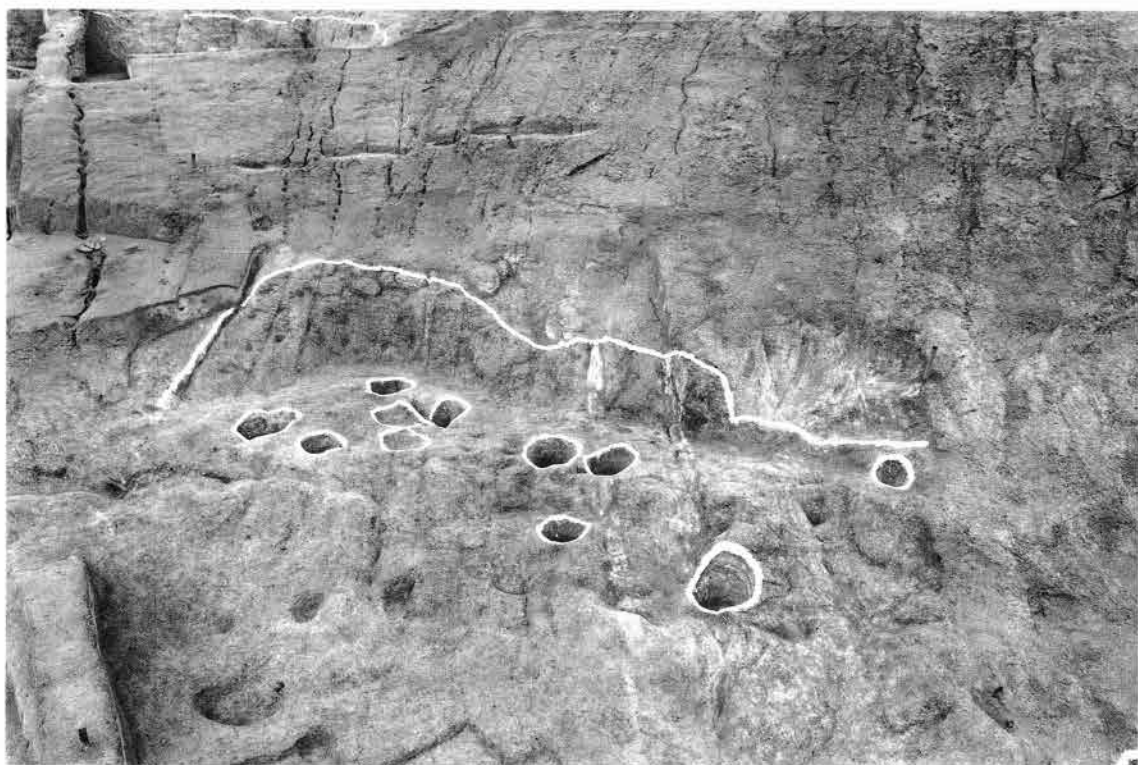
(1) SH 12全景 (南東から)



(2) SH 12竈検出状況 (北西から)



(1) SH 13全景 (東から)



(2) SB 05全景 (南から)



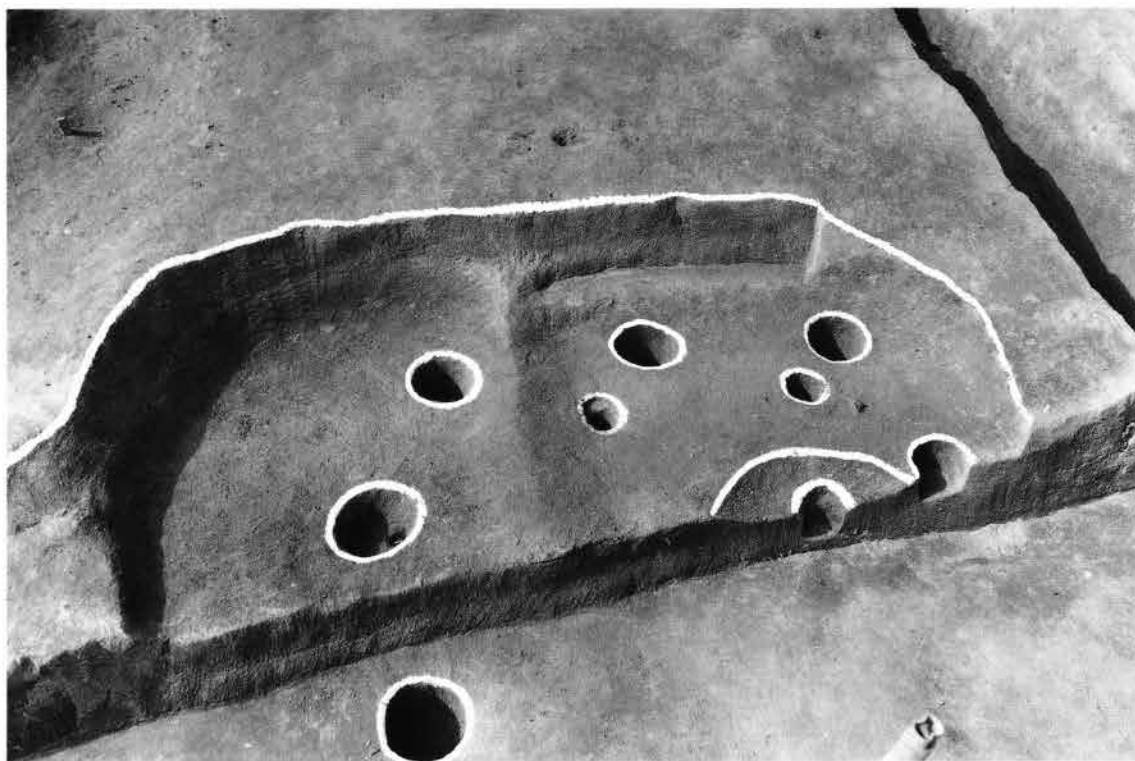
(1) 横穴状遺構全景（東から）



(2) 横穴状遺構後室全景（南から）



(1) SH16全景 (南東から)



(2) SH17全景 (南東から)



42



29



1



63



45



5



54



57

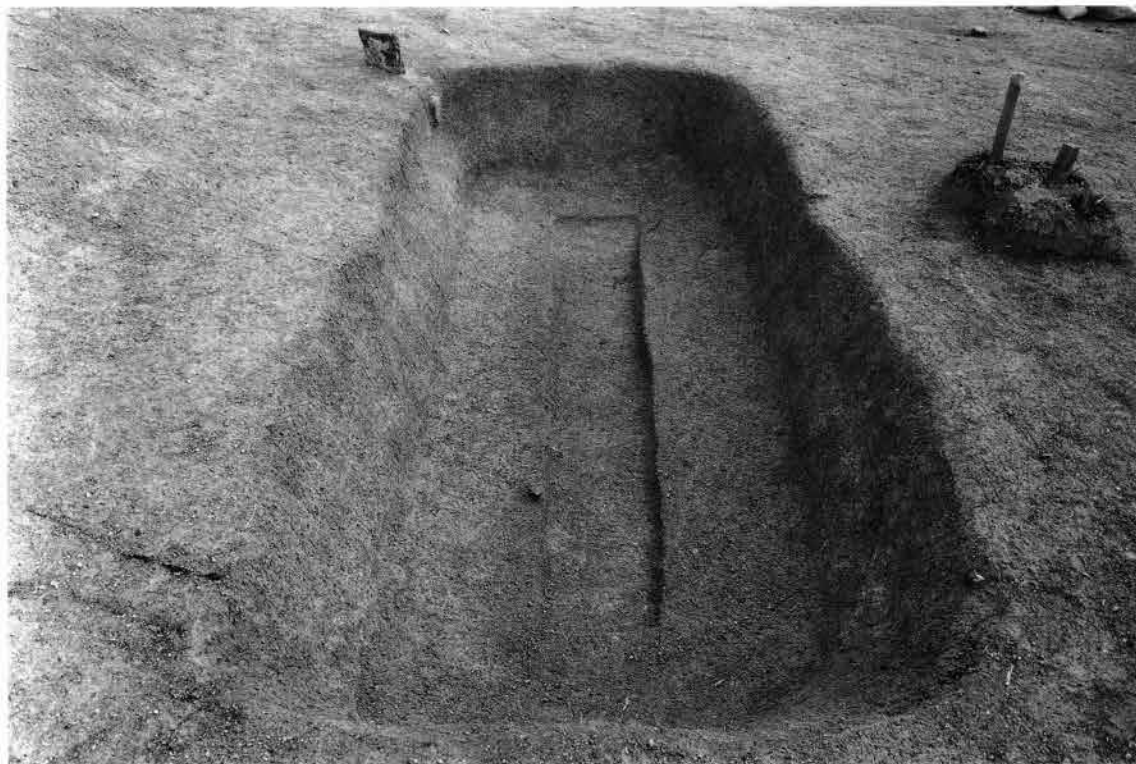




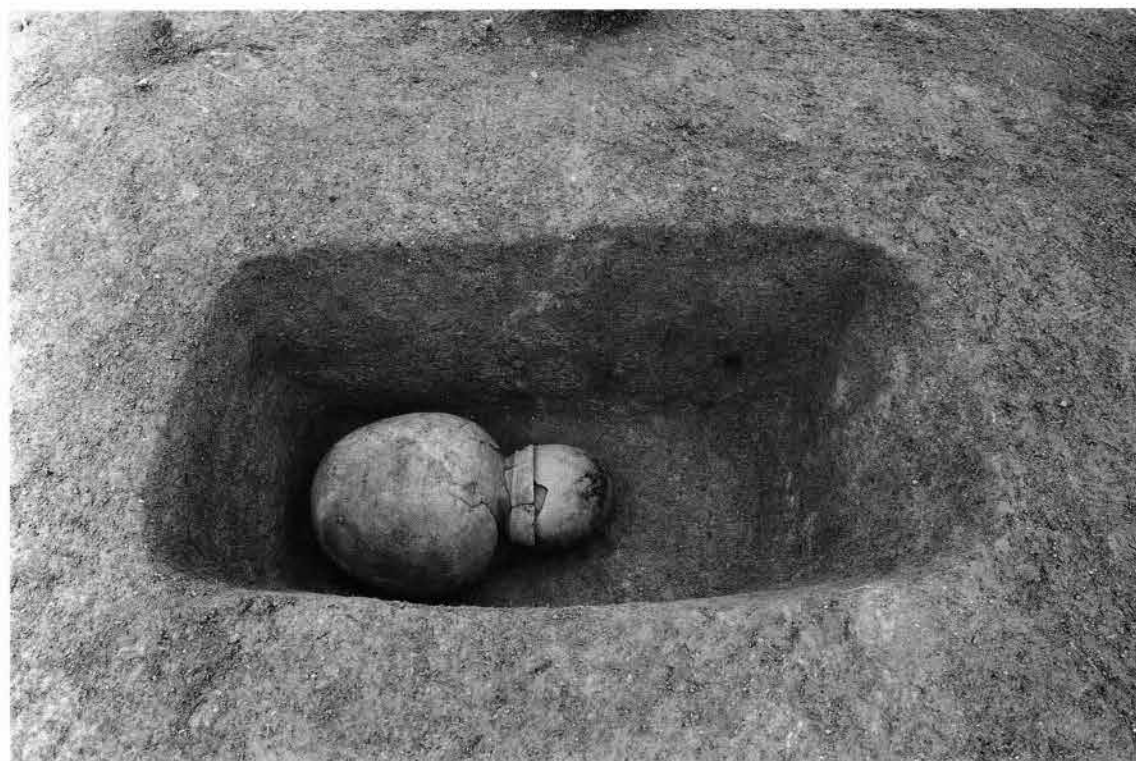
(1) 左坂B10～14号墳全景（東から）



(2) 左坂B10・11号墳主体部全景（西から）



(1) 左坂B12号墳主体部全景（北から）



(2) 左坂B13号墳主体部全景（東から）



(1) 北谷古墳群全景（南西から）



(2) 北谷古墳群全景（上から）



(1) 1号墳全景（東から）



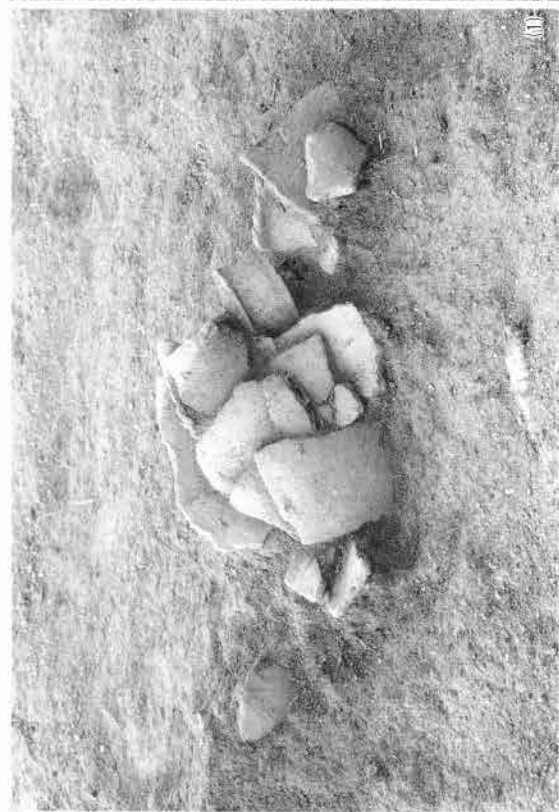
(2) 1号墳全景（上から）



(2) 1号墳主体部完掘状況



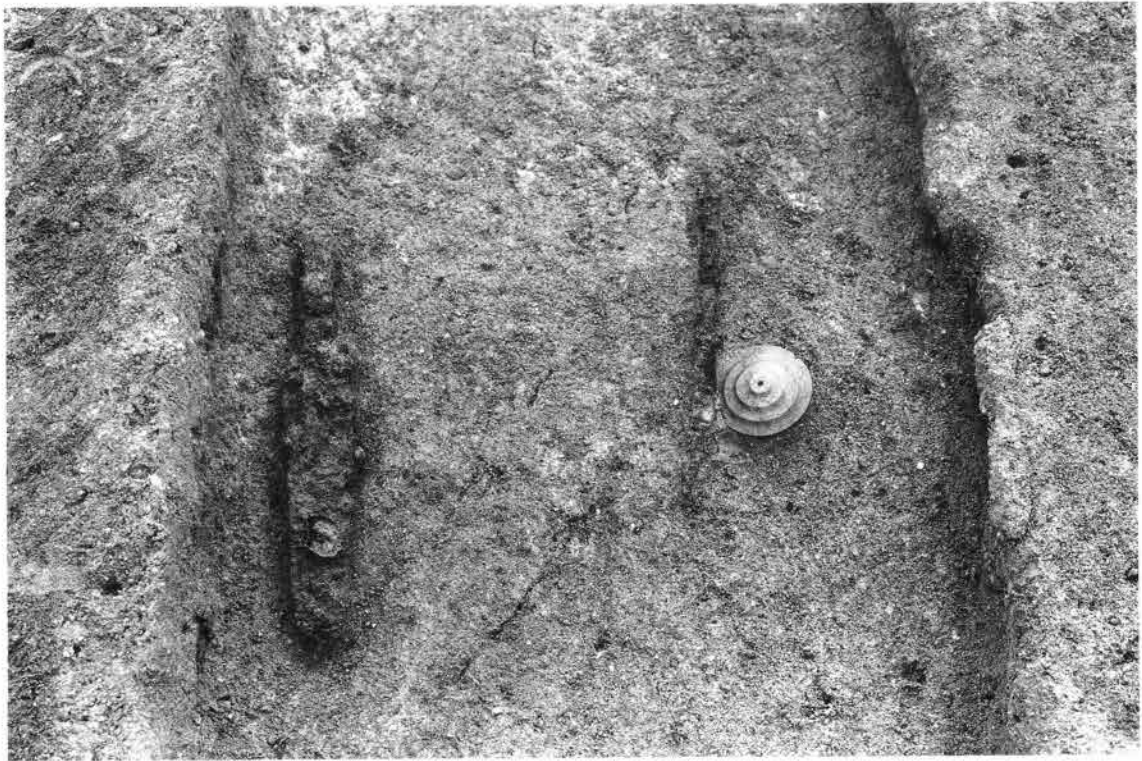
(1) 1号墳木棺痕跡掘削状況



1号墳主体部埋土上面出土土器 (1) 広口壺 (2) 高杯 (3) 器台・丸底壺 (4) 高杯



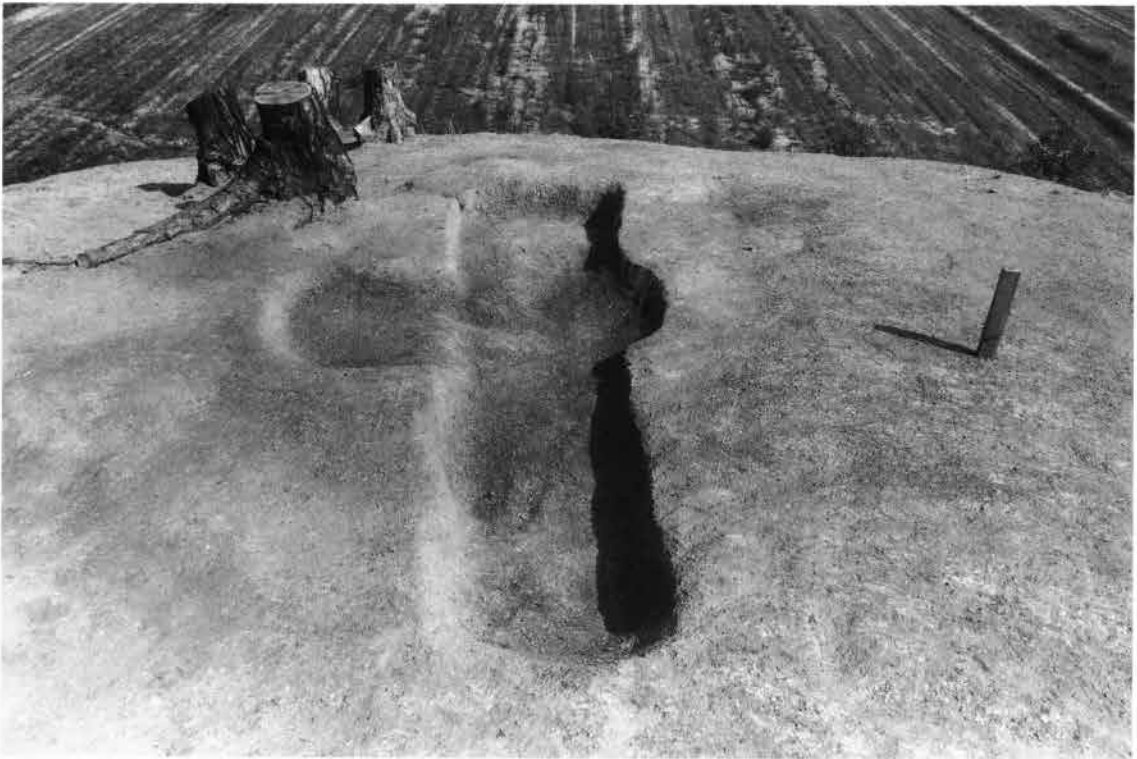
(1) 1号墳木棺内遺物出土状況 (南から)



(2) 1号墳木棺内遺物出土状況 (東から)



(1) 3号墳主体部検出状況（北から）



(2) 4号墳主体部検出状況（北から）

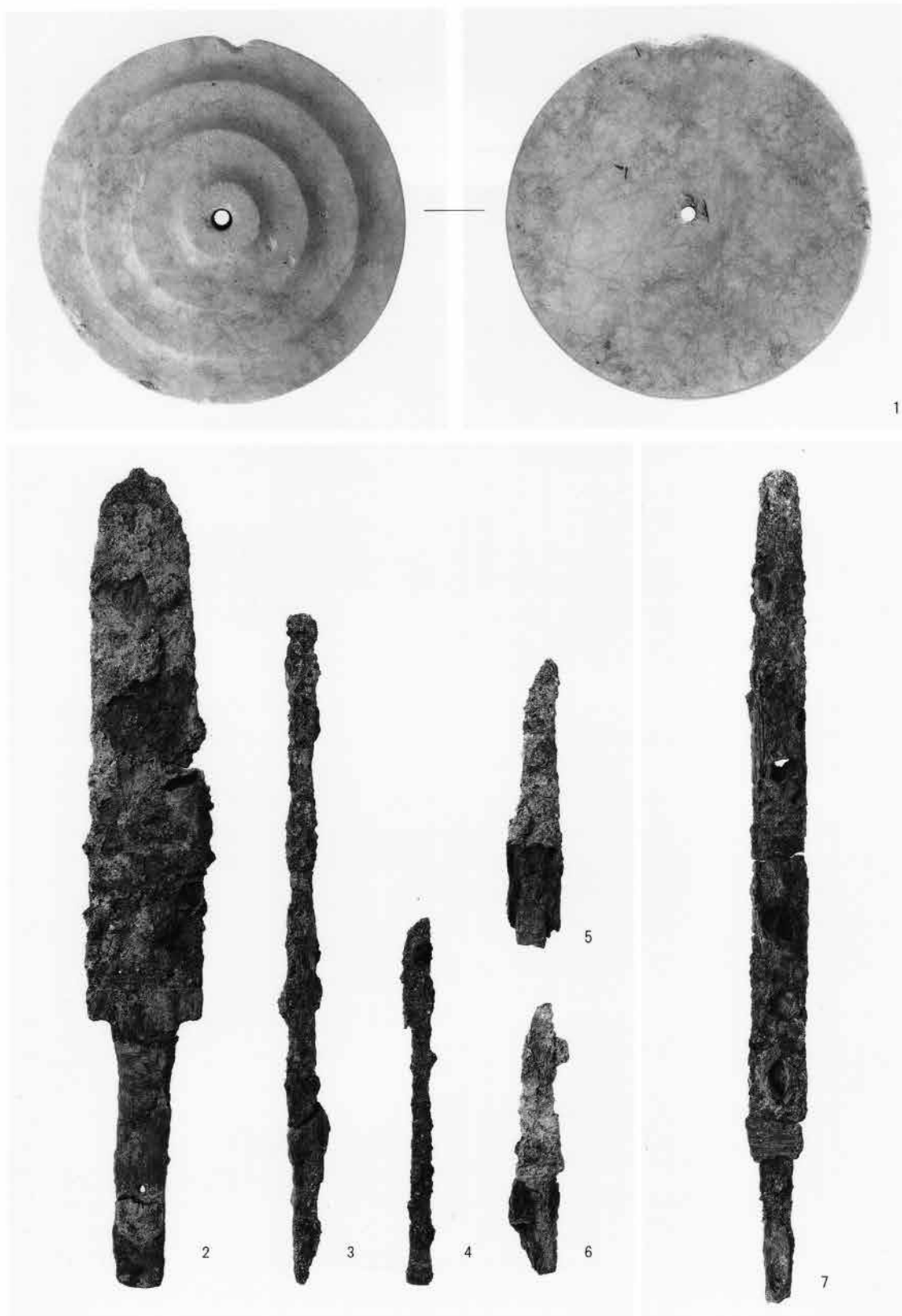


(2) 3号墳第1主体部完掘状況(南から)



(1) 3号墳第1主体部遺物出土状況(北から)

図版第50 北谷古墳群



1・3号墳出土遺物
1号墳出土遺物：1・2・3 3号墳出土遺物：4・5・7 (第1主体部)、6 (第2主体部)

報告書抄録

ふりがな	こくえいのうち(たんごとうぶ・せいぶちく)かんけいいせき							
書名	国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	65							
編著者名	増田孝彦・黒坪一樹・田代 弘・石崎善久・河野一隆・筒井崇史							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617 向日市寺戸町南垣内40-3 TEL 075(933)3877							
発行年月日	西暦 1995 年 3 月 27 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 “ ”	東経 “ ”	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あみのえん じょこふんぐん 網野遠所古墳群	たかのぐんあみの のちょうあざし まづこあざえん じょ 竹野郡網野町字 島津小字遠所	501	265、 010、66			19930820 ～ 19930920	1,000	国営農地造成
なぐふんぼぐん、 なぐこふんぐん 奈具墳墓群・ 奈具古墳群	たかのぐんやさ かちょうあざく ろべこあざな ぐ、あざみぞた にこあざなくお か 竹野郡弥栄町字 黒部小字奈具、 字溝谷小字奈具 岡	503	265、 030、31			19940513 ～ 19941013	3,050	国営農地造成
なぐおかみな みこふんぐん 奈具岡南古墳群	たかのぐんやさ かちょうあざみ ぞたにこあざな ぐおか 竹野郡弥栄町字 溝谷小字奈具岡	503	265、 031、09			19940909 ～ 19941222	500	国営農地造成
くろべせいて ついせき(い しぐまちく) 黒部製鉄遺跡 (石熊地区)	たかのぐんやさ かちょうあざく ろべこあざいし ぐま 竹野郡弥栄町字 黒部小字石熊	503				19931124 ～ 19940209	1,000	国営農地造成

くろべせいて ついせき(な かたにちく) 黒部製鉄遺跡 (仲谷地区)	たかのぐんやさ かちょうあざく ろべこあざなか たに 竹野郡弥栄町字 黒部小字仲谷	503				19940418 ～ 19950303	8,000	国営農地造 成
すくもだに じょうあと 糖谷城跡	たかのぐんやさ かちょうあざく ろべこあざすく もだに 竹野郡弥栄町字 黒部小字糖谷	503				19940913 ～ 19941221	200	国営農地造 成
すそたにおう けつ・いせき 裾谷横穴・遺 跡	なかぐんおおみ やちょうあざく ちおおのこあざ すそたに 中郡大宮町字口 大野小字裾谷	482				19940517 ～ 19941013	3,800	国営農地造 成
ささかこふん ぐん 左坂古墳群	なかぐんおおみ やちょうあざす きこあざささか 中郡大宮町字周 枳小字左坂ほか	482	107			19940725 ～ 19950303	1,200	国営農地造 成
きただにこふ んぐん 北谷古墳群	くまのぐんくみ はまちょうあざ によこあざきた ただに 熊野郡久美浜町 字女布小字北谷	521	186			19940425 ～ 19941021		国営農地造 成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
網野遠所古墳 群	古墳	古墳	古墳(木棺直葬)	土師器(甕棺)、鉄 鏃2	
奈具墳墓群・ 奈具古墳群	弥生墓・古墳	弥生～古墳	弥生墓・古墳	弥生土器、石鏃、 土師器、剣	
奈具岡南古墳 群	古墳	古墳	横穴式石室	土器(須恵器・土師 器)・耳環	
黒部製鉄遺跡 (石熊地区)	生産遺跡	平安	製鉄炉2、炭窯3	石器・須恵器・鉄 滓	
黒部製鉄遺跡 (仲谷地区)	生産遺跡	奈良～平安	製鉄炉8、炭窯28	土器(土師器・須恵 器)・鉄滓	
糖谷城跡	城館跡・生産遺 跡	?・奈良	炭窯1	須恵器片1	

裾谷横穴・遺跡	横穴・集落	縄文～奈良	竪穴住居・掘立柱建物・小横穴・横穴状遺構	須恵器・土師器・縄文土器・弥生土器・鉄滓	
左坂古墳群	古墳	古墳	古墳時代墳墓(木棺直葬墓・土器棺墓)	土師器・鉄器	
北谷古墳群	古墳	古墳	古墳	土器(土師器)、鉄製品(剣・刀子・鏃・のみ)、石製品(碧玉製紡錘車)	

京都府遺跡調査概報 第65冊

平成7年3月27日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)